バチェラー・オブ・アーツ
ドクトル・オブ・フィロソフイ 杉浦貞二郎譯

# 舊約外典

全

改造社版

# 凡例

本書の翻譯に用ひた原書は、有名なるチッセンドルフの出版にかゝる七十士譯の舊約聖書、*H Παλαια Διαθηκη κατα τους Εβδομηκοντα* (Vetus Testamentum iuxta LXX Interpretes) と、及びスウィート博士出版の希臘語舊約聖書、The Old Testament in Greek according to the Septuagint とである。前者は近世舊約研究の一標準本であり、後者は現代の嚴密なる原本批判を以て出版されたものである。

しかし本書の譯者は、たゞ單に此等の七十士譯希臘本によつて舊約外典を邦語に譯出する積りではない。讀者は卷尾に附錄とする外典概論によりても了解し得る如く、外典諸書の原書はその大多數は希臘語で書かれたものではない。否な、明かに所々誤譯をしてその最古の譯本に向ふのみである。かるが故に、本譯者はこれらの外典の原書を得る能はざるが故に、已を得ずしてその最古の譯本に向く原書に近きものと思はるゝ所を邦語にして本書を提供するのである。而して此等の研究をなすに當りて、歐米先輩の著書を少なからず參考にしたが、牛津大學のチャールス博士 (Dr. R. H. Charles) 監修出版の The Apocrypha and Pseudepigrapha of the Old Testament. に大なる便宜を得た。而しこの書は外典研究に多大の參考材料を供しまたその研究指針として古今に冠たるものである。特に記してこれに負ふ所多きを感謝する。Kautzsch 出版の Die Apocryphen und Pseudepigraphen des Alten Testaments. は獨逸學者たちの研究の結果を示して少なからず暗示を與ふるものがある。尙ほ本書の出版に至るまでに援助を賜はつた方々に厚く御禮を申して置く。

讀者にお斷りして置くことは、普通外典の一とする第二エスドラス書を本書に入れは、チャールスの本にはこれを僞典のうちに入れてゐるのと、また殊に希臘語の本には古來この書がないのとが主なる理由である。他日また僞典を譯する場合があれば、その方へ編入する積りである。次にまた外典中の歷史書類は全譯しなかつた。蓋し原文は甚だ冗長で無用の言が多いのと、人名などを數十行に亘りて列擧などしてあるから、それらの部を略したのである。しかし史實は苟もせず、また史上の必要文書は少しも省いてはない。

書中、角括弧〔 〕を施せる箇所は、希伯來語原本に見ずして、現希臘語譯本に存する文句、若くは後の人が加へたと思はれる文である。かくの如きもの殊に「ベン・シラー」に多い。また本譯文に用ゆる固有名詞は、普通の地理歷史書に慣用されて居るものと、及び現行舊約聖書にあるものは、みなそれ等に從つた。その然らざるものは、或は希伯來語、或は希臘語、或はアラム語、各場合に應じて、舊約書の發音法に準じてこれを片假名で書いて置いた。尙ほ各書中の章別は現行七十士譯本に從つてこれを示して置いたが、節別は煩を恐れて本書には入れなかつた。大なる不便もなからうと思ふ。

大正十一年十月

譯者識

# 舊約外典


卷頭

凡例……（一―二）

目次……（一―三）


## 目次


エスドラス第一書……（一）

第一マカビー書……（一七）

第二マカビー書……（五七）

ベンーシラーの智慧……（八七）

ソロモンの智慧……（一五七）

トービー……（一八三）
イウデト……（二〇三）
バールーク書……（二三三）
エレミヤの書簡……（二四一）
マナセの祈禱……（二四六）
アザリアの祈禱並に三童兒の詠歌……（二四八）
スサンナ物語……（二五三）
ベルと龍……（二五七）
以士帖書追加……（二六〇）

附錄

舊約外典概論
總論……（二六八）
各論……（二七二）

# 舊約外典

## エスドラス第一書

〔一〕ヨシヤはエルサレムに於て主に踰越祭を行はんとて正月の十四日に踰越を供へたり。イスラエルの王ダギデの定めたるところと、その子ソロモンの行へる莊嚴比びなき式典に則りて準備せるものとて、預言者サムエルの日以來イスラエルにこの時の如くに踰越祭を行へることなく、またイスラエル諸王のうちに、ヨシヤ、祭司、レギ人、及びユダヤ人が、エルサレムに住める總てのイスラエル人と偕に行ひたるかくの如き踰越祭を行へるもの一人もあらず。こはヨシヤ王の治世の十八年に行へるなり。ヨシヤの行へる所は主の御前に正しかりき。〇是等の事の後、エジプトの王パロはユフラテ河の邊なるカルケミシを攻めんとて上り來りけるに、ヨシヤこれを禦がんとて出でゆけり。パロ乃ち使者を遣はして曰ふ、『ユダヤの王よ、われ汝と何を爲すべきや、我は主なる神よりつかはされて汝を攻めんとするにあらず、そは我が戰はユフラテ河の邊にあればなり。神我と偕にいまして我を急がしむ。汝我より去るべし。汝神に逆ふことを止めよ。』と。然るにヨシヤは彼の車に歸ることを肯はず、預言者エレミヤの言を顧みずしてメギドの平野にて戰ひけるが、武運拙なく、次の車に乘りエルサレムに伴ひ歸ら

れて死し、その先祖の墓に葬らる。人々は王のために悲しみ、預言者エレミヤ、彼の爲に哭き、婦たち彼のために哀歌を作りぬ。是等の事はユダの王たちの歴史の書に記さる。〇こゝに於て民はその子ヨアカズを取り父に代りて王とならしむ。彼はユダとエルサレムにて三月のあひだ治めたるが、エジプトの王彼を廢し、その兄弟ヨアキムを王となせり。ヨアキムの行へる所は主の目に悪しかりき。バビロンの王ネブカデネザル彼を攻めんとて上り、鎖をもて彼を縛しめ、バビロンにひき行きたり。又主の聖なる什器を掠めて携へ歸り、これをバビロンにある偶像の宮に納めたり。その子ヨアキム代りて王となり、エルサレムにて三月と十日世を治めたるが、彼も主の前に悪を行へり。ネブカデネザルは人をつかはし、主の聖なる什器と偕に、彼をバビロンにひき來らしめ、ゼデキヤをユダ及びエルサレムの王となしたるが、彼は十一年の間世を治めたり。彼も亦主の前に悪を行ひ、預言者エレミヤの語れる言を聽かざりき。ネブカデネザル王は、彼をして主の名によりて誓はしめたるにその先祖の神はなして叛き、心を頑にし、神の律法を犯し、惡むべき事を行ひ、エルサレムを汚したり。然るに主は十一年の間世を治めたり。彼も亦主の前に悪を行ひ、預言者民とその住む所とを憐むが故に、頻りに使者を遣はして彼を諭し給ひしも、彼は反つて神の使者たちを嘲り、預言者を罵りたればなり。神はカルデヤ人の王たちをして攻め上らしめ、男と女また老ひたると若きとを問はず、凡て彼等の手に渡し給ひ、彼等は主の契約の櫃と偕に、大小の聖なる什器、及び王の財寶を取りてバビロンに携へ去れり。又彼等は主の家を燒き、エルサレムの石垣を毀ち、その塔を燒き、エルサレムの榮あるもの悉く絶やされ劍を免かれたる者等は、バビロンに捕はれゆき、その臣僕となりてペルシャの國が支配するまでかくてありき。これ預言者エレミヤの口によりて語られたる主の言の應ぜんがためなりき。かくこの地終に安息をうけたり。地はその荒れをるあひだ安息して、終に七十年滿ちたり。

〔一〕ペルシャ王クロスの元年に當り、エレミヤの口によりて傳へ給ひし主の御言を成さんとて、主はペルシヤの王クロスの心を感動したまひたれば、王遍ねく國中に布令して曰く、『ペルシヤの王クロスかく曰ふ、「いと高きイスラエルの主、我を全世界の王となし、主の家をエルサレムに建ることを我に命ず。凡そ汝等のうち、彼の民たるものあらば、願くは主偕に在れかし。而してそのひとエルサレムに上りゆき、イスラエルの主の家を建ることをせよ。各地に寓りをる人々は、金銀貨財家畜を與へて助くべし。」』と。かくてユダの宗家と、ベニヤミンの支族の長、また祭司、レギ人、その他總て主が心を感動させたまひし者は、エルサレムにある主の家を建るために起ちあがれり。周圍の人々もその事の爲に心を感動されしものは、金銀家畜その他各種の物をもて力を添へたり。クロス王また、先きにネブカデネザルが、エルサレムの宮に納めたる主の什器を取り出して、これをユダの總督サチバゼルに交付したり。〇然るにペルシヤの王アルタシヤスタの時にベレム、ミトラダテ、その他、彼等と偕に命を受けてサマリヤ及び他の所に住める者共、ユダ及びエルサレムより携へ出して已が偶像の宮に納めたる主の什器を取就きて次の如き書を送れり。『我等の主なる王よ、知り給へ。汝の所より上り來りしユダヤ人、エルサレムに到り市街を建て直し、石垣を築き、宮の基礎を置きたり。彼等もしこの市を建て、その石垣を築きあげなば、必らず貢を納るゝを拒み、王に叛くに至らん。さればこれを等閑にするは宜からず。願くは列祖の書をさぐり給はんことを。さればこの事に就きて記されたることを記錄の中に見たまふべし。而してこの市は背き悖るものにして往昔常に戰を起せしを知りたまはん。この市の滅されしはこの爲なり。故に我等の王に奏聞す、この市にして再建され、石垣築きあげられなば、王はその爲にケレスリヤとペニケとに通路なきに至るべし。』と。王乃ち彼等に回答の書を送りたり。『我は汝等が我に書き送りし書を讀みたり。かるが故に我は命じて取調べさせたるに、この

市は古來起りて諸王に叛きしこと又エルサレムには往昔大なる君たちありて治め、且つケレスリヤとペニケとに貢を納めしめたること等あり。されば我はその人々の市を建るを止めしめ、又何事に限らず、この命令に悖ることのなきやう愼しむべきを以てしたり。』と。かくてアルタシャスタ王の書を讀みあげければ、彼等乃ち騎兵及び武裝せる民の多くと偕にエルサレムに奔せゆきて、建る者共を止めたり。これを以て宮の工事は、ペルシャの王ダリヨスの治世の第二年まで止みたりき。

〔三〕　玆にダリヨス王はその總ての臣下、彼の家に生れし總ての者、メデヤ及びペルシャの君等、インドよりエテオピヤに至る彼の治めたる百二十七州の總ての高官のために、大なる宴會を開きたり。一同飲食し歡を盡して家路に就きたる後、ダリヨス王は臥戸に入りぬ。〇時に近侍の三人の青年、互に語りあひけるは、『いざ我等互に何人が最も强きものなるかを言ひ當てん。而してその答の超れたるものは、ダリヨス王の大なる賞與にあづかり、優勝の大なる名譽として、紫を着、金の酒盃にて酒を賜はり、王の次席に坐すべし。』と。かくて彼等は各自に筆をとり、これを封し、ダリヨス王の枕の下に置きたり。而して言へらく、『王の目醒めたまへるときこの書き物を王に呈し、これぞ最も卓れたるものなりと定められたるをもて、優勝者となすべし。』と。第一の者は『女こそ然れ、されど眞理は最後の勝利を占むべし。』と記したり。かくて王の醒むるや、彼等はこれを王に呈したれば、王はペルシャ及びメデヤの總ての君たち、その他歷々の司等を招かしめ、王自ら審判の席に着き、書き物はいよ〳〵披露されたり。而して各自その說明を求められぬ。〇第一の者は酒の力を說きてかく言へり。『君たちよ、酒こそ如何に强きものならずや。これを飲む者は、凡て迷はさるゝなり。王と孤兒、奴隷と自主の民、貧者と富者の心を

一となすなり。又總ての思を歡樂に換へ、悲みを忘れ、負債を忘れしめ、各自の心を富ましめて千萬長者の如く語らしめ、王も貴人も忘れ果てしむ。人酒盃を取るときには、友に盡し兄弟に盡すべき愛を忘れ、暫くしては劍を拔きはなつに至る。されど酒より醒むるや、己が行へるところを記憶せず。酒こそ最も强きものならずや。』と。かく云ひて彼は口を閉ぢたり。

〔四〕 次に王の力に就きて第二の者語り始めたり。『君たちよ、人が海陸及びこれにある一切の上にもてる力は大なるものなり。されど、王はさらに力あり。彼は人々の主にして、彼等の上に支配を行ふ。彼等に命ずる所彼等は何事にても從ふなり。相互の間に戰を命ずれば彼等戰ひ、敵にむかはしむれば彼等むかひ、山も石垣も塔も崩さる。勝を獲れば、彼等掠物一切を王に携へ來る。兵士ならざる者共につきても同じく、これに地を耕やし作物を刈らしめて王に携へ來らしめ、貢を王に納めざるを得ざらしむ。彼は一天萬乘なり。殺すも、助くるも、植ゆるも、その命のまゝなり。總ての民、總ての軍勢は、彼に從ふなり。彼は凭れよりて飲食し、者共は傍にありて守護し、誰も去りゆきて己が務を執ることなく、又何事もその命に違ふことなし。君たちよ、かく服從さるゝ王こそいと强きものならずや。』 〇こゝに於て女と眞理とに就きて第三の者語り始めたり。こはゾロベバルといふ名のものなりき。『君たちよ、王も大なり、酒も强し、されど、彼等を支配し、彼等に主たるものは誰ぞや。女は王を產み、萬民を產む。彼等は又男のために衣をつくり、男に榮を與ふ。女なくしては、男あるを得ず。げに男は劍を取り、耕作し、その總てを拋ち、口をあけて見惚るゝなり。人は妻と同棲して、父母又は鄕土を憶えず。又知らざるべからず、汝の妻は汝を支配するものなるを。汝は努めて勞し、一切を女に與へざるか。げに男は劍を取り、奪はんとし、盜まんとして出で行き、海を航し

河を渡り、獅子を裂き、暗きなかを往く。而して掠め奪ひ來れるものを、その愛する者に携へ來る。男はその父母よりも妻を愛するなり。女のために心狂はしくなり、彼等のために奴隷となるもの多くあり。女のために亡びたるもの、躓けるもの、罪を行へるもの亦多し。王はその力に於て大なり、總てのレギオンもこれに觸るゝを恐る。されど我は世に知らるゝバルタカスの女、王の妾なるアバムが王の右に坐し、冕冠を王の頭上より取りて、己が頭上に載せたるを見しことあり。アバムはまたその左の手にて王を撻ち、王は口をあけて目を彼女にとめ、彼女笑へば王も笑ひ、不興ずれば王は心を直さんとて阿諛追從す。君たちよ、かゝる事をなすを見ては女こそ世にも最も強きものならずや。』　〇かくと聞ける王と貴顯とは、互に顏見合せ居たるが、彼は尙ほ眞理につき語りぬ。『君たちよ、女は强からざるか、地は大にして天は高く、太陽の歩みの速かなる一日にしてその出でし所に歸る。是等は神の御心によりて動くなり。彼は眞(まこと)にして義(ただ)し。是等をつくれる者は大ならざるか。かるが故に眞理は偉なり、何者よりも强きなり。全地はこれをたゝへ、天はこれを崇め、萬物は戰き震ふ。彼には不義なし。酒は不義なり、王は不義なり、女は不義なり、人の子は凡て不義なり、彼等はその不義によりて亡ぶべし。されど眞理は永存す。眞理は依怙なく義を行ひ、凡ての不義不善を戒しめ、そのわざは萬人の喜ぶ所なり。眞理は萬世の力なり、王國なり、勢なり、眞理の神は讃むべきかな。』かく云ひて彼は口を閉ぢたり。人々も皆呼ばはり言ふ、『偉なるかな眞理。何ものもこれより强きはなし。』と。〇王乃ち彼に言ふ、『汝の求むる所を告げよ、汝は最も賢明なるものを見出したり。我汝の求むるものを汝に與へん。汝は我が次席に坐すべし。』と。彼こゝに於て王に申しけるは、『王よ、汝が位を嗣げるときにエルサレムを建つべしと誓ひたまひし言を憶え給へ。王よ、これぞ我が汝に願ふところのものなれ。これぞ汝より出づべき王者の賜な

れ。願くは汝が自らの口をもて在天の王に誓ひたる所を行ひたまはんことを。』と。かくと聞きたるダリヨス王は起ち上り、彼に接吻し、彼とエルサレムを建るため彼と偕に上るべき者との途中を安全ならしめんとして、庫官、總督、將軍、牧伯の總てに宛てし書を彼のために作り、またケレスリヤ及びペニケの凡ての總督、なほレバノンに在る者共に書を送り、レバノンより切り出せる杉をエルサレムに仕送りて、彼等が協力して市を建てんことを命じたり。且つ王はその領國を出でゝユダヤに上らんとする凡てのユダヤ人の邑々の引渡を布達され、宮を造營するためその成るまでは年々に貢を免じ、エドム人はその占領せるユダヤ人の邑々の引渡を布達され、宮を造營するためその成るまでは年々二十タラントと、また指定せる所に從ひ、日々壇に供ふる燔祭の爲に更に年々十タラントを給與すべきを命じたり。王は又宮に奉仕する祭司の費用と、彼等の衣裝につき、尙ほレヰ人にエルサレムの落成する日までその費用の支辨さるべき指令を與へ、市を守る者に勞銀と宅地を供すべきことを命じ、クロス王が他の公捕品と別ち置きたる諸の什器と、その命じて與へたるものを總てエルサレムに送れり。　○却說、この青年の立ち去れるとき、彼はエルサレムの方角に向き直り、顏を天にむけ、在天の王を崇めいひけるは、『捷利は汝より來る、榮光は汝より來る、智慧は汝に感謝し奉るなり。』と。かくて彼は書を取りて出でゆき、その同胞の總てにこれを語りしが、彼等は上りて汝の僕なり、我に智慧を賜ひし汝は讃むべきかな、我らの先祖の主よ、我エルサレムを建て御名を唱ふべき宮を築く自由を與へられたるによりて、先祖の神を讃美し、七日の間、鳴物と歡喜とをもて祝會をあげたり。

〔五〕　この事の後、宗家の重なる人々、その妻子と僕婢家畜と偕に上るために、その支族に從ひて選ばれたり。ダリヨス王は、彼等がエルサレムに安着するために、騎兵一千をこれと偕に送れり。七月近くなり、イスラエル

の子等、凡てのもの、心を一にして、東面せる第一の門の前なる廣場に集まりけるが、
の兄弟なる祭司等、及びサラチエルの子ゾロバベルとその兄弟等、神の人モーセの書に明かに命ぜられたる所に
從ひて燔祭を供ふるために、イスラエルの神の祭壇を整へんとせしが、その地の他の國人のうちよりも集まり來り
て、壇を其處に建てたり。そはその地の凡ての國人は、彼等に敵し、彼等を虐げたるを以てなり。彼等は定めの時に
犧牲を献げ、燔祭を朝と夕とに供へ、又律法に命ぜられたる攝廬節の祝典を守り、日々正しく犧牲をなし、
後にはつねの供物、安息日と新月と、凡ての聖なる祝祭の犧牲を供へたり。又神に何がな誓をなせる者は、未
だ神の宮は建てられざるも、七月の新月のときより犧牲を神にさゝげ始めたり。彼等は石工及び木工に勞銀と飲
食とを供し、シドンとツロの人々は、クロス王が彼等の爲に記したる命令に從ひ、レバノンより杉を運搬し、海
上ヨツパに送るために車を供したり。〇エルサレムに在る神の宮に來れる第二年の二月の新月にサラチエルの
子ゾロバベル、ヨセデクの子イエス、彼等の兄弟、レギ人なる祭司、及び俘囚より歸りエルサレムに上れる總ての
者共、玆に神の宮の礎石を置きたり。彼等はレギ人を二十歳より主の役務に立て、イエス及びその子等と兄弟、
又カドミエル、その他、彼等の子孫及び兄弟たち、凡てのレギ人、心を一にして工事を捗らすために働き、而し
て祭司は鳴物と喇叭とを携へ、衣を着けて立ち列び、アサフの子孫なるレギ人は樂器を取り、イスラエルの王ダ
ビデの則に遵ひて感謝の歌を謳ひ主を讃美したり。主の憐憫と榮光、凡てのイスラエル人のうちに永久なるを以
てなり。民皆喇叭を吹き鳴し、大なる聲をあげ、主の家の落成のために主に感謝の歌を謳ひたり。レギ人なる祭
司、彼等の宗家の長、及び以前の主の家を見し古老は、大なる歎きをもてこの建物に來りしも、多くの者は喇叭を吹
き鳴し、大なる歡喜をなして叫び、喧囂の聲は遠く聞えたり。ユダとベニヤミンの支族の敵たるもの、喇叭の聲

を聞き傳へてその何事なるかを知らんとて來り、俘囚の人々神の宮を建てたるを知りゾロバベルとイエスと宗家の重だちたるもの共に到りて、『我等も汝等と等しく汝等の主に從ひ、又我等を此處に捕へ來りしアツスリヤの王アスバサラレテの日以來犧牲をこれに獻ぐるものなれば、我等も汝等と偕に建つべし。』と曰ふ。こゝに於て彼等に曰ひけるは、『汝等は然すべからず。ペルシヤの王クロスの我等に命ぜし如く、唯我等のみイスラエルの主の爲に建つべきなり。』と。然るにその他の異邦人はさまざまの陰謀と、民の稅を重くなどして、クロス王の生きながらう間工事を妨げたれば、ダリヨス王の治世まで二年のほどは工事妨げられたり。

〔六〕 ダリヨス王の治世の第二年に、アガオ及びアドの子なるザカリヤ、イスラエルの神の名によりて、ユダとエルサレムに在るユダヤ人に預言をなせり。こゝに於て、ゾロバベルとイエス起ちあがり、エルサレムに主の家を建て始めたり。主の預言者、彼等と偕に在りて彼等を助けしが、玆にスリヤ及びペニケの總督シシネ、その同僚と偕に來り、彼等に誰の指圖によりて汝等この工事をなすやと詰りたるも、主彼等を顧みたまひたれば、ダリヨス王に通じて王の回答の來る時までも工事は妨げらるゝことなかりき。〇スリヤ及びペニケの總督シシネ、ダリヨス王に贈れる書の寫はこれなり。『ダリヨス王に贈れる書の寫はこれなり。エルサレムの市に入りしに、俘囚となりをりしユダヤの萬事を知召し給はんことを願ふ。微臣等ユダヤに來り、エルサレムの市に入りしに、俘囚となりをりしユダヤ人等が、切り出したる價高き石材を用ひて神の家を建て、工事急速に捗れるを見たり。微臣等乃ち誰の命令によりて汝等この工事の礎石を置きたるやと詰り、重だちたる人々の名を書面にて差出さんことを求めたるに、彼等は下の回答を與へたり。「我等は天地を創造したまへる主の僕なり。抑もこの家は久しき昔に大なるイスラエルの王により一たび建てられて落成したりしが、我等の先祖の犯せる罪により、神これをバビロンの王ネブカデネ

ザルの手に渡し給ひしかば、彼等は宮を毀ち、民を捕へてバビロンに引きゆきたり。然るにバビロンの王クロスの第一年、王は曩きにネブカデネザル王がエルサレムより携へ歸りて己の宮に置きたる金銀の聖なる什器を、ゾロバベルと總督シャナバサラとに交附し、主の宮をエルサレムに建つべきことを命じたり。こゝに於てシャナバサラは此方に到りて主の家の礎を置き、爾來工事を進めて未だ成るにいたらず。」と。王よ、願くはバビロンの王室記錄所に就きて探り、もしこれがクロス王の允許ありしと知れ、又王の善しとせらるゝならんには、然か微臣等に告示したまはんことを。』

○こゝに於てダリヨス王はバビロンに在る記錄所と、又メデヤ及びエクバタナに在るものとに就きて捜索を命じて、終に一の卷物を得たり。卽ちクロス王の元年、王詔して犧牲をさゝぐべき神の家をエルサレムに建てしむ。その宮の高は六十キュビット、濶六十キュビット、巨石三行、その國の新材一行をもてせよ。費用は、王家より賜はるべし。又ネブカデネザル王が、バビロンに携へ歸れる宮の聖なる金銀の器皿は再びエルサレムに返還し、以前の所に備へしむべし。又スリヤ及びペニケの總督及び他の官吏は、心して干渉がましき事をせず、主の家の僕ゾロバベルと長老共に、神の家の再建を命ず。主の家の成る迄は、俘囚の者を懲ろに助け、必要なるものを給與し、又供物をさゝげて王とその子女の生命のために、至上神に祈をあげしめよ。何人にもせよ、こゝに記したる所に違ひ、若くは等閑にするものは、その家の梁を抜き取りてこれに釘たるべし、且つその產は王に沒收せらるべし。凡てエルサレムの神の宮を毀ち、又は工事を妨げんとする君あり、民あらば、彼處にて御名を唱へらるゝ神、これを全く亡ぼしたまはん。我ダリヨス王の命を畏み、ユダヤ人の長老等及び宮の司等をして果さんことを命ず。

〔七〕こゝに於てケレスリヤとペニケの總督以下、ダリヨス王の命を畏み、ユダヤ人の長老等及び宮の司等を

助けて工事を怠なく監督せしかば、ダリョス王の治世の第六年、アダルの月の二十三日に落成し、イスラエルの子孫、祭司、レギ人、及び他の俘囚人たち、モーセの書にかきしるしたるが如く行へり。即ち神のこの宮の奉献式に於て、牡牛一百、牡羊二百、羔羊四百を献げ、又イスラエルの支族の數にしたがひ、凡ての民の罪のために牡羊を供へ、祭司とレギ人とはその別により、主イスラエルの神に仕ふるために立ち列び、門を守る者は各門を守りたり。かくて俘囚より歸り來れるイスラエルの子孫は、正月の十四日に踰越節を行へり。祭司、レギ人、又總ての俘囚人も倘に身を潔めて皆潔くなり、總ての俘囚人と、又その兄弟たる祭司等、及び己等のために踰越をさゝげたり。俘囚より歸り來りしイスラエルの子孫、又その國の異邦人の汚れを棄てゝ主を求むる者は皆これを食し、主の御前に喜びて、七日の間無酵の節會を行へり。これはアッスリヤの王の心を彼等にむかはせ、彼をしてイスラエルの神にてましますの家の工事を助けさせ給ひしが故なり。

〔八〕是等の事の後、ペルシヤの王アルタシャスタの治世に、バビロンより上り來れるエスドラスといふものあり。イスラエルの神の授けたまひしモーセの律法に精しき學士なりき。王彼を尊び、その求むる所を悉く彼に許せり。王の治世第七年の五月に、イスラエルの子孫の或る者、祭司、レギ人、唱歌者、門を守る者、宮の隷僕も、彼と倘にエルサレムに上れり。即ち正月の一日にバビロンを出で、主の保護の下に首尾よくエルサレムに上りぬ。エスドラスは、甚だ慧巧にして、主の律法と戒命を何一つもらすことなく、總てのイスラエル人に教へたり。

○茲に王の告諭、祭司及び主の律法の寫下の如し。『アルタシャスタ王、祭司にて主の律法の朗讀士たるエスドラスに來れり。その寫下の如し。『アルタシャスタ王、祭司にて主の律法の朗讀士たるエスドラスに來れり。その寫下の如し。

も善しとしたれば、エルサレムに往ん志ある者は皆汝と偕に往くべし。且つ汝はバビロン全州にて得る一切の金銀を集めて、エルサレムなる主の宮のために民の献ぐる所のものと偕に携ふるなり。されば汝その金をもて牡牛、牡羊、羔羊及びこれに關する品を買整へ、エルサレムにある彼等の神なる主の壇の上に主の犧牲を供へよ。又汝とその兄弟たち、金銀をもて成さんと欲する所あらば、汝等の神の御旨に從ひてこれを爲せ。汝の神の宮の奉事のために、汝に與へられたる主の聖なる什器、その他使用の爲に汝の記憶する所のものは、何にても汝悉く王の府庫より與へらるべし。又我アルタシャスタ王、スリヤ及びペニケの一切の庫官に命じていふ、祭司にしていと高き神の律法の朗讀士たるエスドラスの汝等に求むる所のものは、何にてもその求むるがまゝに給し、王とその子等の國に震怒の臨まざらんがために、總ての事、神の律法に遵ひ謹みて行ふべし。且つ我汝等に命ず、祭司、レギ人、唱歌者、門を守る者、宮の隷僕、及び宮の用務に與かる者には、稅を課すべからず。何人も彼等に何をも課する權なし。汝エスドラス、神の智慧によりて、有司及び裁判人を立て、スリヤ及びペニケの凡て神の律法を知る者を盡く審判せよ。汝の神の律法と、王の律法とを犯す者は、誰にても死或は他の刑に、又は罰金又は禁錮の刑に處すべし。』○こゝに於て學士エスドラス曰へらく、『我等の先祖の神は讃むべきかな。エルサレムなる主の家をかざる意を王に起させ、又王とその議官、及び貴き人々の前にて我を崇めさせ給へり。かるが故にわれ主の助によりて力を獲、イスラエルのうちより我と偕に往くべき人々を集めたり。』我等彼らをテラといふ河の邊に集め、三日のあひだ天幕を張り、彼等を閲せしに、祭司及びレギ人一人も居らざりければ、われ人を遣りて重立ちたる人々、及び學者を招き、命じて彼等を司財官の位置にありし長官サデオの許に赴かしめ、彼とその兄弟及びその所の出納官に告げて、主の家にて祭司の役務を行ふべき者を我等に遣らんことを以てせるが、主の全

能の御手によりて、彼等終にイスラエルの子レギの子モリの子等、アセベビヤ及びその子ビヤとアンヌオ併にその兄弟オサイヤ、及びカヌネオの子等、その數二十人、またダギデ及び人の奉仕の爲に設けたる宮の隷僕のうちより二百二十人を携へ來れり。かくてわれ、我等のために斷食を誓ひ、我等一同の旅路の無事息災を祈れり。こは我は敵を防ぐべき護衛の兵卒を王に請ふを恥ぢたればなり。我等は王に告げて、『神偕にいまして我等をその到る所に助けたまふべし』と、言へるなり。かくてこのことを我等再び主に求めけるに、神は我等に聽きたまへり。我乃ち祭司の長十二人、即ちエセレビヤ、アサミヤ及びその兄弟十人を選び、王とその議官、その牧伯、凡てのイスラエル人とが献げたる金銀、及び主の家の什器とを量りて付せり。その量りて彼等に付せしものは銀六百五十タラント、百タラントの器、金百タラント、金の器二十箇、又金の如く光り輝く青銅の器十二箇なり。而してわれ、彼等に、汝等は主に聖なるものなり。この器も亦聖なり。また此金銀は、主我等の先祖の主になせる誓約なり。汝等これをエルサレムなる我等の主の家に於て祭司長及びレギ人併にイスラエルの全家の長等に付すまでは守護すべしと告ぐ。彼等乃ちこれを主の宮に携へゆけり。○我等正月の十二日にテラの河邊よりエルサレムに赴きたるが、主の全能の御手我等の上にありて、途中も無事にエルサレムに達し、三日彼處に居りしが、四日目に我等の主の家にてその金銀を量りて、ウリヤの子祭司マルモテに付せり。ピネスの子エレアザル彼に副ふ。またイエスの子ヨサバド及びサバヌオの子モエテなる二人のレギ人彼等に副ふ。その一々の重さと數とによりて付され、總ての重さは書き留められたり。俘囚より救されて歸り來りし者、主なるイスラエルの神に犧牲をさゝげたり。即ち總てのイスラエル人のために牡牛十二、牡羊九十六、羔羊七十二、罪祭の牡山羊十二、これ皆主にさゝげられたる犧牲なり。彼等王の勅諭を

王の代官及びケレスリヤとペニクの總督等に付したれば彼等は民と主の宮とを敬ひたり。
後、牧伯たち我等に來りて曰ふ、『イスラエルの國人、君たち、祭司及びレギ人はこの地の異邦人と離れず、彼
等もその子等も異邦人の女を娶り、聖なる種苗、諸國の民と相混れり。牧伯及び長たる者先だちてこの愆を犯せ
り。』と。我この事を聞き、衣と袍を裂き、頭髪と鬚を抜き、悲みうなだれて坐したり。神の御言を畏るゝ者は、
皆我許に集まりたるが、我は晩の犧牲の時までかくてありき。我終に衣と袍を裂きたるまゝ起ちて膝を屈め、主
に向ひ手をのべて曰ひけるは、『主よ、我は主の御顔のまへに恥ぢて赧らむ。そは我等の先祖の日より、我等の
罪は積りて頭のうへに出で、我等の愆は天にまで達すればなり。今日に至るまで、我等は大なる罪を犯せり。こ
れに因りて我等は地の王たちの手に付され、劍にかけられ、捕はれ往き、面に恥を蒙れり。されども神は我等の奴
隷たる時にも我等を棄て給はず、反つてペルシヤの王等の前に憐憫を我等に施し給ひしにより、彼等食を我等
に給し、我等の神の家を尊び、毀たれたるシオンを建て、ユダ町とエルサレムにて我等に堅固なる住家を得させ
たまへり。然るに我等は汝の僕なる預言者の手により、この地の汚れたる異邦
人と交りて汝の律法を破れり。汝我等を怒りて根も種苗も名も遺らぬまでに我等を滅し盡し給はざらんや。イス
ラエルの王よ、汝は眞なり。今我等罪にまとはれて汝の御前に立ち
得るものなきなり。』　○エスドラス宮の前にて泣き伏し、祈りて懺悔をなしをる時、多くの男と女、兒童、エル
サレムより集ひ來り、總ての民いたく歎き悲しみたり。時にイスラエルの子孫の一人エコニヤ呼ばはり曰ひけ
るは、『エスドラスよ、我等は主なる神にむかひて罪を犯し、この地に住む異人の女を娶れり。而して今總ての
イスラエルは高くせられたり。されば我等かゝる妻をその生みたる者と偕に盡く出すべしとの契約を主に立つべ

し。起てよ、この事を行はん。是等は汝のつかさどる所なり。我等は勇ましく行はんがために、汝と偕にあるべし。』と。こゝに於てエスドラス起ち上り、總てのイスラエルの祭司の長及びレギ人をしてこの言の如くなさんと誓はしむ。彼等乃ちかく行へり。

〔九〕かくてエスドラスは宮の庭より起ち出で、エリヤシブの子ヨナの室に入りて宿り、人々の大罪を憂ひ悲みて食せず、また水をも飲まざりき。而してユダ町とエルサレムとに遍ねく布令して、俘囚の人々に悉く示して曰ふ、『汝等皆エルサレムに集るべし。凡そ治をなす長老たちの立てたる所に從ひて二三日以内に集まらざるものあらば、その家畜は宮の使用のために差押へられ、俘囚人の會より斷けらるべし。』〇こゝに於てかユダとベニヤミンの支族の人々、凡て三日のうちにエルサレムに集れり。こは九月の二十日なりき。民はその時の大雨のために、皆宮の前なる廣場に震ひ慄きつゝ坐せり。時に祭司エスドラス起ちあがり彼等に曰ひけるは、『汝等は異邦人の女を娶り、これによりてイスラエルの罪を增せり。されば今汝等の先祖の神なる主に懺悔して榮光をこれに歸し、その御心を行ひ、この地の民共及び異邦人の女と離るべし。』と。會衆みな聲をあげて答へて曰ふ、『汝が諭せる如く我等爲すべし。然るに民は多く、且つ今は大雨のときなれば我等外に立つこと能はず。且つこれは一日二日の事業にあらず、我等のこの事につきて犯せる罪はひろく擴がりたればなり。されば我等の牧伯等は止まり、異人の女を娶りし者あらば皆定むる時に來るべし。且つその時その各の邑の長老及び裁判人これに伴ふべし。かくして我等この事のために我等の主の怒を離れしむることもやあらん。』と。〇かくて祭司エスドラスは宗家の長を凡て名指して選び、十月の一日よりこの事を調ぶるために集りしが、正月の一日になりて異人の女を娶りたる人々を悉く調べ畢れり。〇こゝに總ての民、皆一人の如くなりて、東に向へる宮の廊

の前なる廣場に集まり、祭司及び朗讀士たるエスドラスに曰ひけるは、『願くはイスラエルの神、主の與へ給ひしモーセの律法の書を携へ來れ。』と。エスドラス乃ち七月の一日に、凡ての男と女及び祭司等の集りし所に律法の書を携へ來り、これを宮廊の前なる廣場にて朝より日中まで總ての前にて讀みぬ。民みな律法の書に耳を傾けり。エスドラスは、これがために設けたる木造の壇上に立ちしが、その側には、右にマッタテヤ、シマ、アナニヤ、アザリヤ、ウリヤ、エゼキヤ、バアルサム立ち、その左には、パルデオ、ミサエル、メルキヤ、ロタスポ、ナバリヤ、ザカリヤ立ちたり。エスドラス總ての民の前にてその書を開けり。彼が律法の書を開きたるときに民は皆起立せり。エスドラス乃ち全能なる萬軍の大神を祝しければ、民は皆手をあげ、應へてアーメーンと曰ひ、地に俯伏して主を拜したり。民は律法を聽けるときに、皆泣きたり。時にエスドラス及び民を教ふるレギ人等民にむかひて曰ひけるは、『汝等ゆきて肥えたるものを食ひ、甘きものを飲め。その備をなし得ざる者には、これを頒ち贈るべし。この日は主の聖なる日なり。汝等憂ふることを爲さざれ。主汝等に譽を與へたまふべければなり。』と。民乃ちゆき、飲食して喜びをなし、備をなし得ざる者には頒ち與へて大なる喜びをなせり。こは彼等が集りて教へられたる言をさとりしが故なり。

# 第一マカビー書

〔一〕キッテムの地より出でたるピリポの子マケドニヤ人アレキサンドルは、ペルシャ人及びメデヤ人の王ダリヨスを破りたるのち、代りてギリシヤに王たりき。彼は連戦連捷して地の極にまでいたり、諸國諸民諸州は貢を彼に納むるものとなりぬ。これ等の後偶々病みて臨終の近きを見、その臣どもを招き、尚ほ彼の生前に王國を分ち與へたり。彼は十二年の間、世を治めて死せり。　〇茲にアンテオカス王の子にてローマに人質たりしアンテオカス・エヒフハネスなる惡しき萌蘖彼等のうちより生えいで、ギリシヤ王國の第百三十七年に支配をなしけるが、そのころイスラエル人のうちより律法を犯す者出で多くの者を勸めて、『いざ我等往きて我が周圍の異邦人と契約をむすばん、そは彼等とわかれし以來多くの惡我等に臨みたればなり。』と曰ひけるに、この言彼等の目にかなひ、民のうち或るもの共進みいでて王の許に到り、許可を獲て異邦人の條規に遵ひ、祭儀場をエルサレムに建て、自から己を割禮なきものにし、聖なる契約を棄て、異邦人に附き、身を惡に委ねたり。　〇彼は國の堅くたつに及びてエジプトに攻め入り、その地の堅固なる市邑を占領したり。かくて百四十三年本國に還り、再び大軍を催ふしてイスラエル及びエルサレムに攻め上りて聖所に闖入し、金の壇、燈臺、その凡ての附屬品、貴重なる什器、又隱匿されたる財の見出されたる

ものを取り、大殺戮を行ひ、大言壯語して本國に引きあげたり。これをもてイスラエルに大なる悲ありき。○滿二年の後、王はユダヤの邑々に收稅官長を遣はせしが、彼は大軍を率ひてエルサレムに來り、平和の言を民に告けて欺き、突然市を襲ふて多くの民を滅ぼし、火を市に放ち、婦女老若を虜にし、家畜を奪ひ、かくて堅固なる石垣と戍樓とを以てダギデの市を改築し、要害の城砦となせり。彼等は異邦人をこれに住ましめて堅固にし、又武器糧食を貯へ、エルサレムより分捕せる物を積み、網の如く、住民は逃れて、エルサレムは外國人の居住する所となり、絶へず聖所とイスラエル人とを威嚇する敵となれり。○かく彼等は聖所の周圍に罪なき血を流して汚したれば、聖所は荒れて贖野の如く、その榮の大なるによりて恥もまた大なりき。アンテオカス王は全國に詔りして總て一の民となるべきことを以てし、又エルサレムとユダの邑々に使者をもて書を送り、彼等をして外國の律法に遵ひ、獸を供へしめ、子に割禮を受けしめず、あらゆる不淨と汚濱をもて彼等の心を惡むべきものとなし、王の言に從はざる者は死に處せらるべしと告ぐ。王は全國にこの言を布令しめ、監督官を立て、ユダヤの邑々に犧牲を供へしむ。こゝに於て多くの民は彼等に集まり、律法を棄てゝ惡を行ひ、イスラエル人は身をひそかに隱さゞるを得ざりき。百四十五年のキスリウ月の十五日に、彼等は壇の上に荒す惡むべきものを立て、ユダヤの邑々の到る所に偶像の壇を築き、家々の入口及び街路にて香を焼き、律法の書の見出されたるを盡く裂きて焼き棄て、何處何人たりとも契約の書に遵ひ律法を守るあらば、直ちに王の命によりて死に處せられたり。彼等はその月毎にかくイスラエル人に行ひたり。○その月の二十五日に神の壇の上に築きたる偶像の壇に犧牲を供へ、その子に割禮させたる婦たちを命じて死刑に行ひ、嬰兒を縊り殺し、割禮を彼等に行へる者共を殺し、その家を

絶ちたり。これにも關はらず、潔からぬものを食すまじと自ら堅く心を決し、又聖なる契約を辱かしめざらんとしたるイスラエル人も少なからざりしかば、大なる怒はイスラエル人の上に臨みたり。

〔二〕そのころマッテヤはエルサレムより起り、モヂンに住めり。彼に五人の子あり。ガヂスと稱へられたるヨハネ、タシと稱へられたるシモン、マッカバイオと稱へられたるユダ、アバランと稱へられたるエレアザル、アフスと稱へられたるヨナタンこれなり。マッテヤはユダヤ及びエルサレムに行はるゝ不虔を目撃して曰へらく、『禍ひなるかな、何故に我は我が民と聖都の滅亡を見んとて生れしぞや、何故に我は聖所が異人の手に渡されしと き此處に住むために生れしや。その宮は榮なき人の如くなりぬ。その榮ある什器は携へ去られ、幼兒は街路にて殺され、若き人は敵の劍にて殺さる。その殿に手を加へ又その掠物を獲ざりし國人の何處に在りや。その飾りは凡て取り去られ、自主の婦は奴隷となれり。看よ、聖なる物及び我らの美と榮とは荒れすたれ、異邦人はこれを汚せり。我らは何故に尙ほ生き存らへざるべからざるか。』〇マッテヤ及びその子等は衣を裂き、麻布を着ていたく哭き悲めり。こゝに背教を勵行せる王の役人、犠牲を供へんとて、モヂンの市に到りしに、多くのイスラエル人彼等に來り、マッテヤ及びその子等も偕に集れり。王の役人等マッテヤに曰ひけるは、『汝はこの市に於ける尊ぶべき大なる人なり。されば汝まづ來りて凡ての國人、ユダヤの人々及びエルサレムに留まるものゝ如く、王の命令を行へ。さすれば汝と汝の家とは王の友のうちに數へられ、金銀及び多くの物を賜ひて尊まるべし。』と。マッテヤ答へて大聲に曰ひけるは、『王の領地の國人悉く王に聽き、各その先祖の禮拜より離れて王の命令を奉ずるとも、我と我が子、我が兄弟は父祖の契約に歩むべし。我らは律法と誡を棄てじ。我らは王の言に從はず、我らの禮拜より右にも左にも曲らざるべし。』と。〇彼の語り終へしとき、王の命令に從ひモヂンにあ

ろ壇に犧牲を供へんとして、凡ての見るが前にて一人のユダヤ人の來れるをマッテヤ見て怒を發し、走りゆきて彼を壇の上に殺したり。又犧牲を强ひたる王の役人を殺し、壇を毀ちたり。彼はピネハスがサロムの子ジムリになせる如く律法に熱心なりき。マッテヤ大聲にて市に呼はりて曰ふ、『誰にてもあれ、律法と契約を支持することに熱心なるものは我に從ひ來れ。』と。彼とその子等は市にありし一切を棄て山に逃れ入れり。〇かくて義と審判を求むる多くのものは曠野に下り、その妻子家畜は彼處に住めり。そは患難は彼等の上に增し加はりたればなり。王の命令を破りて曠野の人知れぬ所に下りしものありとのこと、王の代官及びエルサレムに在りし軍勢に告げられたれば、多くのもの後を付け彼等に追ひしき、營を張り、安息日に彼等を攻めたり。彼等曰ふ、『既に足れり、出で來りて王の言に遵ひて行へ、汝等生命を得べし。』と。されど彼等曰ひけるは、『我らは出でず、我らは安息日を汚さず、王の言を行はざるべし。』と。彼等は急ぎ攻めたてけるが、彼等は應ぜず、石をも投げず、曰ひけるは、『我らみな罪なくして死せん、天地は我らの證をなすべし、汝等は我らを不法に死に處するなり。』と。かくて彼等は安息日に武器を取りて起ちしが、その殺されたるもの數千にのぼれり。マッテヤとその友これを知り、いたく彼等を悲しみ、互ひに曰ひけるは、『我ら凡て我らの兄弟の爲せし如くし、我らの生命と律法とのために異邦人と戰はざれば、彼等は直ちに我らを亡ぼして地より絶ん。』と。その日彼等は布令して曰ふ、『凡そ安息日に我らを攻むる者には我等も應戰すべし。』と。かくてイスラエルの有力家にて律法のために甘んじて己を獻げんとする敬虔黨の一團は彼のもとに集まり、迫害より逃れたる凡てのものも加はりて、彼等は莫大なる數となり、罪人及び律法に背けるものを擊ち殺し、免かれたる者は異邦人のうちに逃れたり。マッテヤ及びその友は壇を毀ち廻はり、子に割禮を勵行し、異邦人を逐ひ散らし、律法を異邦人と王との手より救ひいだし、罪人をして勝を遂げ

しめざりき。

〇マッテヤ死ぬる日近づきければ、その子等に曰ひけるは、『汝ら律法に熱心なれ。汝らの先祖の契約のために與へよ。我らの先祖の行蹟を回想し、大なる榮と不朽の名を受けよ。アブラハムは試みられて忠信を顯はし義とされざりしや。ヨセフは艱難のとき誡を守り、エジプトの主となれり。我等の父ピネハスはいと熱心なりしために代々永く祭司たるべき契約を獲たり。ヨシヤは言に背かで、イスラエルに士師となれり。カルブは正直なる報告をなして、約束の地に於て嗣業を獲たり。ダギデは恩憐ありしをもて、天にあげられたり。エリヤは律法に熱心なりしをもて、天にあげられたり。ハナニヤ、アザリヤ、ミサエルは信仰によりて、炎より救はれたり。ダニエルは義しくして、獅子の口より救はれたり。かくのごとく彼を信ぜしものは、誰も力乏しきことなきを汝ら絶へず考ふべし。罪人の言を恐るゝ勿れ。彼の榮は塵堆となり、蛆となるべし。今日高く上げらるゝも、明日はまた彼を見ざるべし。汝ら我が子よ、強かれ、律法のために丈夫の如くあるべし。汝らかくて榮を得べし。看よ、汝の兄弟シモン、われ彼が善謀の人なるを知る。常に彼に聞け、彼は汝らに父たるべし。ユダ・マッカバイオは若き時より強く力あるものなりき、彼は汝らの將帥となり民の軍をなすべし。民の蒙れる不義に報ひよ、心ゆくばかりに異邦人に報ひよ、而して律法の誡を忘る勿れ。』〇かくて彼等を祝福し、彼はその先祖に加はれり。即ち百四十六年にして、彼の子等はこれをモヂンにある先祖の墓に葬り、全イスラエルは彼のために大なる哭きをなせり。

〔三〕マッカバイオと稱へられしその子ユダ、彼に代りて起ち、彼の兄弟は皆彼を援け、彼の父に附き從へる者も皆かくなし、喜びてイスラエルの戰をなせり。彼はその民の名聲を四方に弘め、巨人の如く胸當を着け、劍を提げて戰場に臨みぬ。彼陣頭に立ち、劍を以てその軍を護り、その爲すところ獅子のごとし。獲物にむかひて

吼え哮る若獅子のごとく、彼は律法を蔑みする者を探ね出し、民を惱ます者を燒き殺したり。救は彼の手により て榮えたれば、惡を行ふ者は彼を恐れて戰慄(おのの)きたり。多くの王たちは心を惱まし、ヤコブは喜び、彼は世々限りなく紀念されて讃め崇められる。彼はユダヤの邑々を往き巡り、不虔の者を地より亡ぼし、怒をイスラエルより取去り、その名聲は地の極にまで及びたり。　○アポロニオはイスラエルを攻めんとして異邦人とサマリヤ人の大軍を集めたり。ユダこれを知り、直ちに軍を進めて彼を邀へ擊ちて殺し、敵の掠物を取り、ユダはアポロニオの劍を取りしが、彼は生命終るまでこれを用ひて戰ひたり。　○スリヤ軍の指揮官セロンはユダが烏合の衆を集め得たりと聞き曰へらく、『いでや我名を揚げ功を成さん、我等王の言を蔑みするユダ及び彼と偕にある人々と戰ふべし。』と。不虔者の大軍は彼と偕にイスラエルの子等に仇を報ひんとして行きたり。　○彼はベテホロンの坂路の近くに來れり。ユダは少人數をもて彼と會戰せんとて出でゆきしが、敵軍の來れるを見て、彼等ユダに曰ひける は、『我らは今日斷食をなし疲勞しをるに、この少人數にて如何でかゝる大兵と戰ひ得べけんや。』と。ユダ答へけるは、『彼等はわが少人數の手に付すは易々たることなり、天に於ては多くの人をもて救ふも少なき人をもて救ふも凡て一なり、勝利は兵の多きによるに非ず、力は天より來るなり。彼等は我らと妻子を亡ぼし、我らを掠めんとて憍慢と不義とに滿ちて來る。されど我らは我が生命と律法のために戰ふなり。されば主は我らの面前に彼等を倒し給はん、汝等敢て彼らを恐る勿れ。』と。　○語り終りてユダは急に彼等と會戰しけるが、セロンとその軍勢は散々に擊ち破られて、ベテホロンの降坂より平原に追擊され、八百人ばかりは戰死し、殘れる者はペリシテ人の地に逃れたり。こゝに於て人々はユダ及びその兄弟を恐るゝに至り、大なる驚懼その周圍の國人の間に起れり。彼の名は王の耳にも達し、何れの國人もユダの戰につき詰らざるものなきに至りぬ。　○アンテオカス

王は是等の言を聞きて激怒し、國の全軍を召集し、またその金庫をひらきて兵士に與ふるに年給を以てし、命ずるに必要生ずれば何時なりとも應ずべきを以てす。されども彼が昔よりの律法を棄てしめんとしたるより生じたる分裂と、且つ疫病とのために財力の缺乏と國貢の減少を見て、いたく心を苦しめ、意を決してペルシヤに赴き、國々の貢稅を收め多くの金を集めんとし、著名の人にて王の血族の一人ルシヤスにユウフラテ河よりエジプトの端にいたるまでの國務を管理せしめ、又不在中その子アンテオカスの傅となしたり。彼はなほ我が兵力の半と凡ての象とをこれに與へ、彼をしてイスラエルの力またエルサレムの人の殘りてその地にをるものを斷滅し、彼等の記憶をその所より一掃し、彼等の凡ての所に外國人を住ましめ、彼等の地を鬮にて分たしむるために彼等に軍勢を差しむけしめたり。かくて王は百四十七年に殘る一半の兵士を率ひてアンテオケを進發し、ユウフラテ河を渡り、山國を上りゆけり。○茲にルシヤスはドリメネスの子プトレマイオ、王の友の有力なるニカノル及びゴルギヤを選び、王の命ぜしごとくユダヤの地に入り、これを亡ぼさんが爲に歩兵四萬 騎兵七千をこれと偕に遣る。彼らは全力を擧げて進發し、平地の國なるエマオの附近に到りて陣を張りたり。その國の商人は彼等の威風をきゝ、足枷と莫大の金銀を懷中して、イスラエルの子等を奴隷とせんとして陣營に來れり。スリヤ及びペリシテ人の地の軍勢も彼等に加はりたり。○さて茲にユダとその兄弟は國難せまり、敵軍國境に屯するを見、また王が民を亡ぼすべしと命じたる言を知り、互ひに曰ひけるは、『我が民の崩れたるを興さん、いざ我等の民と聖所とのために戰はん。』と。乃ち戰意を決し、祈を爲し恩惠と憐憫を求めんがために集會は開かれたり。エルサレムは曠野のごとくして住む人なく、その子等の一人として出入りするものなし。聖所は蹂躙され、外國人はこれに住むなり。喜はヤコブより奪はれ、管絃の音は絶えたり。こゝに於てイスラエル人はミヅ

パに集まり來れり。ミズパは先きにイスラエル人の祈禱所のありしところなり。彼らはその日斷食をなし、麻布を著け、頭に灰を被り、衣を裂き、異邦人がその偶像に似たるものをこれに探せし律法の書を展げ置けり。又祭司の服、初穗及び什分一をもち來り、滿願の日終りしナザレ人を勵まし、大聲に天に呼ばはりて曰ふ、『我ら如何にしてこの人々の誓言を果たさしむべき、何處に彼等を伴ふべき。汝の聖所は蹂躙されて汚され、彼の祭司は愁ひ、異邦人は我らを亡ぼさんとて集まれり。汝は彼等が我らに逆ひて心に何事を思ふやを知り給ふ。汝わが助となり給はずば我ら如何で彼等に抗ふを得ん。』と。祈り終りて彼等は喇叭を吹鳴らし大聲に呼ばはれり。

〇この事の後ユダは民を率ゐる千卒長、百卒長、五十卒長、十卒長を立てたり、家を建てをるもの、婚姻の約束をなせるもの、葡萄園を耕しをるもの、或は臆する者は律法によりて各その家に歸らしめ、かくて陣營をエマオの南側に移しぬ。ユダ曰ひけるは、『汝ら腰に帶して勇ましかれ。我らと聖所を亡ぼさんとて集まれる異邦人と戰はんため朝まだき迄に用意をせよ。戰に死するは我らと聖所の災禍を見るよりも遙かに優れり。されど御心の善しと見るところを爲させ給へ。』と。

〔四〕　茲にゴルギヤは歩兵五千騎兵一千を引率し、夜陰に乘じて陣營を出で、突然ユダヤ人の軍に押寄せたり。ユダは直ちに出動し、エマオにある王の軍の散りをるうちに襲ひ擊たんとす。ゴルギヤはユダの陣營に來りしに一人をも見ず、乃ちこれを山に探して曰ふ、『彼等は逃げ匿れたるなり。』と。夜明となるや、ユダは、兵器も持たざる三千人のものと偕に野に現はれたり。彼らは異邦人の陣備堅固にして、且つ騎兵のこれを巡視するを見たり。ユダ偕に居る人々に曰ふ、『彼等の多數なるを恐るゝなかれ、彼等を攻むることをも恐るる勿れ、我らの先祖がパロの大軍に追擊せられたるとき、紅海にて救はれしことを記憶せよ。今我らは天に呼ばはらん。もし我ら、

を憐み、先祖の契約を憶え給ひ、今日我らの前にてこの大軍を亡ぼし給はんには、
救ひ給ふ者のゐますを知るべし。』と。その時宛かも異邦人は眼をあげて攻め來る者あるを見、應戰せんとして陣
營を出で來りしかば、ユダ及び偕に在りし者は喇叭を吹き鳴して戰を交へたりしに、異邦人は潰走して野に逃れ、
後れたる者は劍に斃れ、尚ほ追擊を蒙り死する者殆んど三千なりき。軍より歸り來るやユダは民に告げて曰ふ、
『なほ戰あるべければ掠物を貪る勿れ。ゴルギヤとその軍勢は我らに近く山に在り。汝ら堅く立ち、彼等と戰へ、
而して後に汝ら思ふまゝに掠物を取れ。』と。ユダの未だ語り終らざるに敵軍の一部、さがし出して山より現はれ
たり。彼等はその軍勢が逃げ、陣營は燒き拂はれたるを見たり。彼らは甚だしく恐れ、且つ平野にあるユダの軍
が攻勢に出でんとするを見るに及びて、終に皆ペリシテ人の地に逃る。こゝに於てユダは引返し、掠物を取りて
後、感謝の歌を謳ひ、天を榮めたり。その恩は深く、イスラエルはその日大なる救を得たり。　○ルシヤスはそ
の翌年重ねて彼らを征服せんとし、歩兵六萬騎兵五千を引率し、イヅミヤに到り、ベデヅルに陣を張れり。ユダ
は一萬人を以て、これに應戰す。かれ敵の大軍を見るや、祈りて曰ふ、『イスラエルを救ひ給ふ者よ、汝は勇士の來襲を汝の僕ダギデの手によりて鎭め、ペリシテの軍勢をサウロの子、またその武器を執
べきかな、汝は勇士の來襲を汝の僕ダギデの手によりて鎭め、ペリシテの軍勢をサウロの子、またその武器を執
るものたりしヨナタンの手に渡し給へり。願くは汝を愛する者の劍にて彼等を斃し、汝の御名を知るものをして
總て感謝をもて汝を讃めたゝへさせ給へ。』と。かくて戰は始まり、ルシヤスの軍勢斃るゝもの凡そ五千人。ルシ
ヤスその軍勢の逃るゝと、又ユダの兵が勇敢死をも辭せざるを見るや、アンテオケに引き上げ、雇兵を募り集め
たり。ユダ及びその兄弟曰ふ、『看よ、我らの敵は打破られたり。いざ上りて聖所をきよめてこれを献げん。』と。
かくて全軍を集めてシオンの山に上れり。彼ら聖所は荒れ果て、壇は汚され、門は燒かれ、庭には木生ひ茂り、

祭司の室は毀たれをるを見るや、衣を裂きて大なる哭きをなし、灰を首に被むり、顏を地に擲りつけて俯伏し相圖の喇叭を吹き鳴らし天に呼ばはれり。聖所のきよめらるゝまで、ユダは城砦にある者を攻むるために陣備をなせり。また彼は律法を喜びて責むべきところなき祭司を選び、聖所を淨め、汚れる石を不淨の所に運び去り異邦人によりて瀆されたる燔祭の壇を毀ち、預言者の興りて如何にすべきかを示すまで石を宮の山の便宜なる所に積み累ね、律法に循ひし前どほりの新しき壇を築き、聖所及び內部を建て、庭を聖成したり。また新たに聖なる器具をつくり、燭臺と燔祭と香を焚く壇及び案を宮に入れ、香を壇の上に焚き、宮を照らす爲に燭臺にある燈を點し、案の上に菓子を供へ、幔を掛けて、その總ての業を終りたり。

〇百四十八年キスリウの月なる九月の二十五日、彼等は朝早く起き出で、その造りたる燔祭の新しき壇の上に律法に循ひて犧牲をさゝげたり。異邦人がこれを汚したりし宛がもその時と日とに於て、壇は歌と鐃鈸と瑟と琴とをもて獻げられぬ。民は俯伏して拜し禍利を與へたまへる天を讃め頌へたり。彼等は八日の間、壇の捧獻禮を守りて大なる喜をなせり。異邦人の加へたる恥辱は取り除かれたればなり。且つユダとその兄弟及びイスラエルの全會衆は年々キスリウの月の二十五日より八日間、歡喜をもて壇の告成祭を守るべきことを定めたり。

〔五〕　茲に周圍の異邦人は、壇が築かれ聖所の告成されたりと聞き及びて甚だしく怒り、彼等のうちにありしヤコブの裔を殺し民を亡ぼさんと相圖れり。而してユダはイズミヤに於けるエソウの子等がイスラエルを圍み攻めたるにより、アクラビムにて彼らと戰ひて大にこれを破り、また通路に待受けて妨害せしベアンの裔等の惡を憶

えてこれを攻め、またテモテオを將としたるアムモン人の大軍と幾度か合戰してこれを破り、ヤゼルとその邑々とを占領して再びユダヤに引揚げたり。　○次にギレアデにありしイスラエル人を亡ぼさんとして集まりしかば、ダテマの城砦に逃れて、ユダとその兄弟に書を送りて曰ふ、『我らの周圍の異邦人は我らを亡ぼさんとして集まり、我らが逃場とせる城砦を畧取せんとし、テモテオこれを率ひたり。願くは來りて我らを彼らの手より救へ。トビヤの地にある我らの同胞は殺され、妻子は捕虜とされ、資財は奪はれたり。殺されたるは千人にも上るべし。』と。この書の讀まれをる時、看よ、裂けたる衣を纏へる他の使者ガリラヤより更に來たりて、プトレマイスとツロとシドンと異邦人のガリラヤの者共相集まりて我らを亡ぼさんとす。』と。　○ユダ及びその民これらの言を聞くや、大なる集會を開き、ユダその兄弟シモンに曰ふ、『汝人を選び、往きてガリラヤにある汝の同胞を救へ。我と兄弟ヨナタンとはギレアデの國に往くべし。』と。彼乃ちザカリヤの子ヨセフ及びアザリヤを殘し、自餘の軍勢と偕にこれにユダヤを護らしめ、これに命じて曰ふ、『汝等この民を護り、我等の再來するまでは異邦人と戰を爲すべからず。』と。かくてシモンにはガリラヤに赴くために兵三千を分ち與へ、ユダにはギレアデに赴くために兵八千を與へたり。　○かくてシモンはガリラヤに往き、異邦人と幾合戰をなし、彼らを擊ち破りてプトレマイスの門まで追擊して、三千人ほどを殺し、その掠物を獲、またガリラヤ及びアルバタにありし者共をその妻子と總ての所有物と偕に、大なる喜をもてユダヤに携へ歸れり。　○ユダ及び兄弟ヨナタンはヨルダンを渡り三日路曠野を旅し、ナバテ人に逢ひてギレアデの地に在るイスラエル人の情況を探知し、曠野の路を突然ボソラに一轉してこれを占領し、その凡ての男子を殺し、掠物を取りて市を燒き拂ひ、夜に乘じて其處より移りて城砦に到れり。朝となり目をあけて見しに、攻道具を携へたる無

數の人々が城砦を乘り取らんとするを見たり。ユダは戰始まり、喇叭の大なる響と共に市の叫喚が天にのぼれるを見るや、我が軍にむかひて曰ふ、『今日こそ汝の同胞のために戰へ。』と。彼は三隊にて喇叭を吹き鳴らし、祈のさけびを揚げて敵の背後を進みたり。　○テモテオの軍そのマッカバイオなるを知りて逃げ去る。殺さるゝもの凡そ八千人。　○また彼はミツバに一轉し、これを攻めて占領し、その凡ての男子を殺し、掠物を取り、火を放てり。其處より移りてカスホル、メケド、ボソル及びギレアデの地の他の邑々を占領したり。　○是等のことありし後、テモテオは新たに軍を集め、流の向ひなるラホンに對して陣を張りぬ。ユダの斥候は、周圍の異邦人彼等に附加して雲霞のごとき大軍なりとの報を齎せしが、ユダは彼等と會戰せんとして進軍したり。テモテオはユダとその軍勢が水流に近づけるとき、我が軍の將に曰ふ、『彼にしてもし流を涉らば、我らは敵し得ざるべし。されど彼もし河畔に野營せば、我ら河を涉りて彼を破るべし。』と。さるほどにユダは河の近くに來るや、民の學者に誰をも留まらしむべからず、總員をして戰に出でしめよと命じおきて、先づ河を涉りしかば、全軍これに隨ひゆけり。凡ての異邦人はその前に破られ、兵器を遺棄してカマナイムの宮に奔る。ユダの軍は市を占領して火を放ち、宮とそのうちなる凡てのものを燒けり。カマナイムは征服されて一刻もユダの前に支ふるを得ざりき。　○ユダはギレアデの地にあるイスラエル人をユダヤの地に歸へらしむるために、その全てを集めたり。彼らのうちには遠くはエフロンより來れるものあり。この大なる市は甚だ强くして彼等の行路に當り右にも左にも曲る道あらずして宛かもその中央を通らざるべからず。市のものは市を閉ぢたり。ユダは平和の言をもて彼らに告げて曰ふ、『我らは本國にゆかんとして汝の地を通るべし、誰にも害を加へず、唯徒歩にて通りゆかんのみ。』と。然るに彼らは許さず。ユダ乃ち命じて市を攻めしめてこれを陷れ、凡ての男子を亡ぼし、市を毀ち、掠物を取り、累々た

る屍を踏みて市を通り、ヨルダンを過ぎてベッシャンの向ふなる大なる野に出つ。ユダは後れたる者を集め、途々民を勵まし、終にユダヤの地に到れり。彼らは喜をもてシオンの山にのぼり、全き燔祭を供へたり。そは安らかに歸り來るまで彼等の一人も殺されしものなかりければなり。　〇ユダ及びヨナタンのギレアデの地にあり、またその兄弟シモンのプトレマイスの前なるガリラヤに在りし頃、ヨセフとアザリヤは合戰の勇ましき情報をきゝ、『いで我らも周圍の異邦人と戰ひて名を成すべし。』と、曰ひて、偕にありし軍の人々に命じ、ヤムニヤに進みけるが、これに應戰せんとして市より出で來れるゴルギヤとその軍勢のために破られてユダヤの邊境まで追擊せられ、イスラエルの民の斃れたるものその日大凡二千人ありき。彼等はイスラエルに救の與へらるゝ人々の裔にはあらざりき。されどユダ及びその兄弟の名の傳はるところ、凡てのイスラエルと異邦人の前にいたく譽を得て、人々は彼等のもとに集まり來れり。　〇その後ユダとその兄弟は出でて南方の地なるエソウの子孫と戰ひ、ヘブロンとその邑々を攻め、又移りてペリシテ人の地にゆかんとしてサマリヤを經たり。その日或る祭司等其處にて勇を示さんとて輕卒に戰をなして死にたり。ユダはペリシテ人の地にあるアゾトにかへり、その壇を毀ち、刻める神々の像を燒き棄て、邑々の掠物を取り、ユダヤの地に歸れり。

〔六〕アンテオカス王は上方の國々を旅しありき。王ペルシヤのエリマイスに金銀のために著名なる富める市ありて、その宮は非常に富み、初めてギリシヤ人を支配したるマケドニヤの王ピクボの子アレキサンドルの遺せし黃金の楯、胸當、兵器を藏すと聞き、往きて市を占領しこれらを掠めんとせしが、市の者共の知るところとなり、彼等が戰はんとて起てるために意を果さず、大なる失望をもて退却し、終にバビロンに歸れり。　〇さらに情報を彼に携へてペルシヤに來れるものありき。ユダヤの地に攻めゆきたる諸軍勢は擊ち散され、大軍を率ひて初

めに進みたるルシヤスは彼等の軍氣大に振へりと。彼等はまたエルサレムに在りし壇の上に彼が建てたる荒す惡むべきものを毀ち、なほ彼等が以前のごとく、聖所の周圍、またかの市ベラスラにも高き石垣を繞らせりとのことに、王は甚だしく驚き失望のあまりに病となり、友のすべてを招き曰ひけるは、『睡眠は我が目より去れり、我は落膽したり、われわが心に謂へり、我が身に臨める災禍の洪水の如何に大なるかなと。我は我が權勢の日に恩惠ふかくまた愛せられたり。今我エルサレムにて行へる惡しき事を憶ゆ。我はこの惡しき事の爲に災禍を蒙れるなりし凡ての金銀を取り、理由もなくしてユダヤを亡ぼさんとしたり。我はこの一人なるピリポを全國の攝政となし、己が子アンテオカスを將來王とすべきために取りて扶養せしむ。かくて彼、その友の一人なるピリポを全國の攝政となし、己が子アンテオカスを將來王とすべきために取りて扶養せしむ。かくて百四十九年王の死を聞くやルシヤスは、幼きをもて養育しをりしその子アンテオカスを立て代りて支配を爲さしむ、その名はユウパトルとよばれたり。　○この頃城砦にありし者はイスラエル人を聖所の邊に圍み、常に損害を彼等に加へ、異邦人の力を增さんとしたり。ユダは彼らを亡ぼさんとして民を集めて、百五十年これを圍み、攻めるの爲に雲梯をきづき、また戰ひの器具を造れり。包圍より出で來れるものあり、或る不信なるイスラエル人これと合し、王に到りて曰ふ、『王よ、汝は我が同胞に復讐せずして幾許その時を經んとするや、我らは汝の父に仕へ、その命のまゝに從へり。このために我らの民の子等は城砦を圍み多くのものを殺し、我らの嗣業を掠めたり。彼等はたゞ我らにのみならず、彼等のすべての邊境にその手を擴げたり。看よ、今彼等はエルサレムにある城砦を攻め、聖所及びベテスラを堅めたり。汝もし機先を制せざれば彼等は更に大なる事を行ひ、汝は彼等を如何ともし能はざるにいたらん。』と。　○王かくと聞き怒りて大兵を集め、歩兵十萬、騎兵二萬また戰爭のために訓練されたる象三十二あり。彼

らはイヅミヤを經てベテスラに對陣し、日を重ねて戰ひしが、ベテスラのものも出で來り。ユダは城砦より移り、王の陣營に對してベテザカリヤに陣を張れり。王は朝早く起き、喇叭を吹き鳴したり。彼らは將さに戰はんとして象に葡萄及び桑の果汁を示したり。彼等は象を各方面に分ち、戈衣及び眞銅の兜をもて甲ひし兵千人を各これに附し、また象一頭づゝに選抜せる五百の騎兵を附したり。これらは象と進退を偕にして離れず、木造にて堅固に裝甲したる塔は各象の上に据えられ、インド人のほかに二人又は三人の戰士これに在り。殘る騎兵は軍勢の彼方此方に配し、敵を愕かし、方陣によりて保護したり。日は干に反映し、山山は炬火の如く輝けり。王の軍勢の一部は高き山々のうへに展開し、一部は低地に、而して彼等は堅實に秩序をたてゝ進軍し來れり。その軍勢の强大なるを見るもの戰き恐れざるはなし。ユダとその軍はんとて近づき、王の軍勢の六百人は斃れたり。アバランと呼ばれしエレアザルは、象の一が他の凡てよりも高く、王のこれに騎れるがごときを見て、我が民を救ひ不朽の名を博せんとし、決死の覺悟をもて方陣のたゞ中に邁進し、右に左に斬り左に薙ぎ、敵兵の彼方此方にうち散されたるうちに、象の腹下に潛り入り下より刺し殺し、象は彼の上に倒れて彼は其處に敢えなく最後を遂げたり。されど殘れるユダヤ人等は王の力と激戰に怯ぢて退却したり。〇かくて王の軍勢は彼等と戰はんとしてエルサルムに上り、王はユダヤに面しシオンに面して陣を張れり。されどベテスラのものとは平和を結びたり。そは地の安息の年なりしをもて、彼等は包圍に堪ゆる糧食なくして和を乞へるなり。これを以て王はベテスラを取り、兵營を置きてこれを守護せしむ。聖所に對しては彼日を重ねてこれを圍み、さま〴〵の攻道具を造りて攻めけるが、ユダヤ人も亦これに應ずる機械を造りて力戰したり。されど第七年なりしを以て聖所には食物なく、異邦人中よ

り難をユダヤに避けたるものは、貯への殘りを食ひ盡し、聖所に居殘りたる者は唯僅かとなれり。それはさかんにして彼等は散りて各その屬する所に往きたればなり。　○ルシヤスは、アンテオカス王がその未だ存命中に、その子アンテオカスを將來の王とするために扶養を委ねたるピリポが、ペルシヤ及びメデヤより歸り、また王と偕に往きたる王の軍勢も歸りて、王は自ら事を執らんと求むるを聞き、急行し、王と軍勢の將帥及び人々に曰ふ、『我らは日毎に弱り、食物は乏し、我らが圍み攻むる所は堅固にして、王國の事務は我らの肩にかゝれり。されば我等がその以前に爲せる如く彼等の律法に循ひて過させんがために彼等と契約を結ばん。』と。この言、王を始め君たちの心に合ひ、双方の間に平和は取替はされたり。王及び君たちはまた誓を彼等になしたれば、彼等は堅固なる城砦を明渡して出でたり。ここに於て王はシオンの山に入りしが、その要害を見るに及びて誓を破り、命じて周圍の石垣を毀たしめ、急ぎアンテオケに歸り、ピリポが市の主たるを見て、これを攻め、兵力を以て占領したり。

〔七〕　百五十一年、セルウカスの子デメテリオ、ローマより出發し、僅かの人數と偕に海路市に上り、これを治めたり。彼その先祖の王宮に入るや、彼の軍勢はアンテオカスとルシヤスを捕へて彼にひき來れり。彼曰ふ、『彼等の顏を我に見する勿れ。』と。ここに於て彼等は兵卒の手に殺され、デメテリオはその國の王位に卽きぬ。その時イスラエルの破戒不信の凡ての者彼に來りしが、祭司長たらん野心あるアルキムスその首たり。彼等は民を殺し、また我らを我が地より散らしたり。願くは汝の信を王に訴へて曰ふ、『ユダとその兄弟は汝の凡ての友を殺し、また我らのうち又王の國にて行へる諸の損害を視察せしめ、彼等及びこれを援助せる凡ての認する者を遣はし、彼が我らのうち又王の國にて行へる諸の損害を視察せしめ、彼等及びこれを援助せる凡てのものを處罰せしめよ。』と。　○ここに於て王バキデスを選びたり。彼は王の友の一人にてユウフラテ河の向ふを

治め、王國に於る大なる人にて王に忠信なるものなりき。王は祭司長に任命せる惡人アルキムスと偕に彼を遣り、イスラエルの子等に復讐をなすべきことを命じたり。

○彼等は大軍を催ふしてユダヤの地に來り、僞りて平和の言をもてユダとその兄弟に使者を遣ばしけるが、彼が大軍を率ひて來れるを見しかば、彼等はその言を顧みざりき。こゝに重だてる若干のもの正義を求めんとしてアルキムスとバキデスの下に集りたり。彼等曰ふ、『アロンの裔の祭司たるものこの軍勢と偕に來る。彼は我らに害を加へざるべし。』と。彼は彼等に平和を告げ、誓ひて曰ふ、『我らは汝等とその友とを害せんとはせざるべし。』と。こゝをもて彼等は彼を信じたりしに、彼は彼等のうち六十人を捕へて、詩篇記者が、「なんぢの聖徒の肉を地に棄て、その血をエルサレムの周りに流したり、されどこれを葬る人なし」といへる如くなしぬ。民は大なる恐怖をなしたり。眞實もなく公義もなし。』と。バキデスはエルサレムより移り、ベセズに陣を張り、律法を捨たる者の多くと民をとらへて彼等を殺し、大なる穴に投入れたり。かくて彼はアルキムスに國事を委ね、彼を助くるために兵を彼にのこし、自らは王に往きたり。

○アルキムスは已が祭司長の職を有名無實とせざらしめんとして爭ひしが、民を惱ませる凡てのものは彼に集まり來り、ユダヤの地をその權力の下に置くに至りて大なる害をイスラエルに與へたり。ユダはアルキムスとその與黨がイスラエルの子等に與へたる異邦人以上の凡ての災禍を見、ユダヤのまはりの凡ての境にいたり、彼を捨てたる人々を甚く懲らしければ、彼等は國内に入ることを敢て爲ざるに至れり。アルキムスはユダとその一團の隆々たる勢を見て到底敵すべからざるを知るや、王のもとに歸り、彼等を惡しざまに誣ひ告げたり。王はその尊べる君の一人にて彼等を憎みたるニカノルを遣はし民を亡さんことを命じたり。

彼乃ち大軍を率ひてエルサレムに來り、ユダとその兄弟に僞りて平和の言を送りて曰ふ、『我と汝らとの間に戰あらざれ、我は平和に汝と會見せんがため僅かの人數をもて往くべし。』と。かく僞りて彼等は暴力にてユダをへゆかんとの手筈をきめたり。彼が僞りて來れることとユダに知れたれば、彼は恐れて更に彼に會はんとせず。ニカノルは謀の露見せるを知り、ユダを襲はんとて進みけるが、その軍五百人ばかりも戰死し、彼等はダギデの市に逃れたり。〇この事ありし後、ニカノルはシオンの山に上りゆきしが、平和の挨拶をなし、王のために全き燔祭を供へたることを示さんとて祭司等及び民の長老共來りしに、ニカノルは彼等を愚弄し、高ぶりて物言ひ怒りて、われ再び平和に來るとも、われはこの家を燒き亡さんのみと曰ひて出でゆきぬ。祭司等は內に入り、壇と宮の前に起ち、淚を流し曰ふ、『汝は汝の御名をもて稱へらるゝにあらざれば、われらのためにする祈の家とせんとしてこの家を選びたまへり。願くはこの人とその軍勢とに讐を報ひたまへ。彼等をして生きながらへしめ給ふ勿れ。』と。

〇ニカノルはエルサレムより進みいで、ベテホロンに陣し、其處にてスリヤの軍勢と會へり。而してユダは三千人を以てアダサに陣を張り、祈りけるは、『王より來れるもの冒瀆をなせるとき、汝の御使により彼等のうち十八萬五千人擊ち殺されたり。汝今日のその如く我らの前にこの軍勢を破り給ひて、我らに敵する者共、凡て彼が汝の御名に逆ひて惡を行ひしを知らしめ、その惡に準ひて汝が彼を審判したまひしを知らしめ給へ。』と。〇かくて アダルの月の十三日合戰は始まり、ニカノルの軍破られて、彼は戰死を遂げたり。全軍ニカノルの戰死せるを見るや、兵器を棄てゝ去りぬ。彼等乃ち背後より相圖の喇叭を吹鳴らし、アダサよりガザラに一日路を追擊したり。人々はまはりのユダヤの邑々より出で來りて道を遮ぎり、敵をして逆に引き返へさせて皆劍に斃れ、一人も生

きながらふるものなきに至る。彼等は掠物を取り、また
斬り落し、これを携へゆきて宮の門の一に懸けたり。民は甚く喜びをなし、大なる歓喜の日として、その日を守
りたり。彼等は年々この日、即ちアダルの十三日を守ることを定めぬ。かくてユダはローマ人の名聲をきゝ、彼等が勇敢にして彼等と連ならんとするものを凡て喜びて受け、彼等
〔八〕ユダはローマ人の名聲をきゝ、彼等が勇敢にして彼等と連ならんとするものを凡て喜びて受け、彼等に
來る凡てのものと和親をなすと聞きたり。玆にユダはアコスの子なるヨハネの子ユウポレムスとエレアザルの子
ヤソンとを選び、これをローマに派遣し、彼等と和親同盟を結ばんことを圖れり。彼等は長き旅をなしてローマ
に赴き、元老院に入り、答へて曰ふ、『ユダまたマカビーと稱せらるゝ者と、そのの兄弟、およびユダヤ人、汝と
同盟和親を締結し、汝の締盟及び友邦として登錄されんとして我等を汝に遣はせり。』と。〇この事彼等の目に
よしとせられたり。元老院が和親同盟の記念として青銅版に刻し、エルサレムに送り返へせるものゝ寫は次の如
し。『ローマ人とユダヤ人に海陸偕に永へに善き成功あれかし。劍も敵も彼等に及ばざれ。されどもし戰爭まづ
ローマ人又は凡て彼等の領土に於る彼等の同盟者の何れかに起らば、ユダヤ人はローマ人が定めたるところに從
ひ、誠意をもて彼等を援くべし。彼等に戰を起せるものに對しては、援兵、糧食、兵器、金錢又は船舶等何ものを
も供給すべからず。彼等はそのため何ものをも收得せずしてその規定を守るべし。また同樣に、戰爭先づユダヤ
人に臨むに於ては、ローマ人はその機に應じ、同盟者とし全靈をもて彼等を援助すべく、且つ彼等の敵に味方す
るものには糧食、兵器、金錢又は船舶を供給せざるべし。彼等はその契約を守り敢て僞ることなかるべし。是等
の條項に因りローマ人はユダヤ人とかく契約を締結す。されど若し今後一方及び他方が或る增減を爲すを可しと
せば、その欲するところを爲すべく、その增減したるものは是認せらるべし。デメテリオ王の彼等に行へる惡に

つきては、我ら彼に書き送れり、曰く「何故に汝は我らの友邦又同盟者たるユダヤ人に汝の靴を重くするや。若し彼等にして更に汝につきて訴ふることあらば、我等は彼等に對する公義により、海陸により汝らと戰ふべし」。』と。

〔九〕　デメテリオはニカノルが敗軍せるを聞き、再びバキデス及びアルキムスをユダヤの地に派遣し、又彼の軍の右翼を彼等と偕に送れり。彼等はギルガルに往く道を通りて進み、アルベラにあるメサロテの前に陣營を張り、更に移りて步兵二萬、騎兵二千をもてベレヤに赴けり。ユダは三千の選拔兵と偕にエレアサに天幕を張りけるが、彼等は敵軍の優勢を見て甚だしく恐怖し、多くのもの軍中より逃走して留まれるは僅かに八百人を出でず。ユダは兵の逃亡と、戰期の迫まるを見て、心に憂ひしが、殘れるものに、『いざ起ちて我らの敵にむかひて上らん、恐らくは我等彼等と戰ふを得べし。』と、曰ひしに、彼等はユダを諫止して曰ふ、『そは後日の事とすべし、我等は到底敵し難く、我等は僅なる人數に過ぎず。』と。ユダ曰ひけるは、『敵を見て逃ぐることは我が絕てなさざるところなり。時來らば我らは須らく同胞のために丈夫のごとく死せんのみ。我等の名譽を汚す勿れ。』と。バキデスの軍はその營を出で將さに戰を開始せんとして立てり。馬は二隊に分たれ、投石手及び弓射る者は前に往き、凡ての勇士も前線に在り。バキデスは右翼に在り。スリヤ軍の主力は二隊に分れて近づき來りて喇叭を吹き鳴せり。ユダの軍勢もその喇叭を吹き鳴し、諸軍の鬨聲に地は震動し、戰は朝より暮にいたる。ユダはバキデスとその軍の主力が右側にあるを觀、奮戰これを突破してアゾトス山まで追擊したり。右翼の潰走を見たる左翼は回轉し、ユダとその兵を追尾し、戰鬪烈しく兩軍死傷甚だ多し。ユダは遂に斃れ、殘れる者は逃走せり。ヨナタン及びシモ

ンは兄弟ユダを收容してこれをモヂンなるその先祖の墓に葬れり。彼等は彼のために哀しみ、イスラエルも凡て彼のために大なる慟哭をなし、日を重ねて悼みて曰ふ、『嗚呼偉丈夫、イスラエルの救濟者は仆れたるかな。』と。ユダの死せるのち、背教者イスラエルの凡てのもの起りぬ。またそのころ大饑饉あり。ために住民は背き、バキデスは背教者を選びて國の權威の位置に立てたり。彼等はユダの友を搜索してバキデスにひき來れり。イスラエルに臨みたる大なる艱難は、豫言者の彼等に現はれざるに至りし以後無き程のものなりき。ユダの凡ての友は集まりてヨナタンに曰ふ、『汝の兄弟ユダの死してより、我らの敵とバキデス、及び民のうちの我らを惡む者に抗して遘進すべき彼のごとき人あらず。されば我等は今彼に代るべきものとして汝を選びたり。』と。ヨナタン乃ち將帥の任を執りその兄弟ユダに代れり。〇バキデスこれを知りて彼を殺さんと求めたり。ヨナタン、その兄弟シモン、及び倘に在りしもの等かくと聞きてテコアの曠野に逃れ、アスハルの池の畔に野營せり。バキデスはかくと知り、その全軍を以て安息日にヨルダンを渡りて來れり。ヨナタンは野營者の指令官たるその兄弟ヨハネを遣はして彼等のもてる多くの荷物を携へて去らんことを彼等の友たるナバテ人に求めしめたるに、アムブリの子孫メダバより出で來り、ヨハネと彼の所有一切を取りて引上げたり。〇この事のありし後、ヨナタン及びその兄弟に告げたるものあり、『アムブリの子孫、大なる婚姻を行ひ、カナンの大なる貴族の女とて、大なる行列をなしてカダバタより新婦を迎へたり。』と。かくりし程に彼等はその兄弟ヨハネを憶えて窃かに山の僻處に隱れたりしが、やがて目をあげて見しに、看よ、いと〳〵物喧しく、輦々しき荷物は携へられ、新郎は出できたり、その友と兄弟は鼓、琴及び多くの武具とをもて新婦とその侍者に會せんとて來れり。ヨナタン及びこれと偕に在りし者共はその潛伏しをれる所より起ちて彼等を殺し、殘れる者は山に逃れたれ

ば彼等の凡ての掠物を取れり。婚姻は慟哭となり、琴の音は哀歌となれり。ヨナタンはその兄弟の血を思ふまゝに復讐してヨルダンの岸邊に歸れり。　○バキデスかくと聞き安息日に大軍をもてヨルダンの岸に來る。ヨナタンその部下に曰ふ、『我ら今起ちて我が生命のために戰はん。看よ、敵は我らの腹背に在り。又ヨルダンの水は此方彼方にあり。沼澤と樹立と避くべき所とてはあらず。されば汝等敵の手より救ひ出されんがために天に呼はるべし。』と。かくて彼等は戰を交へ、ヨナタンはバキデスを攻めしが、バキデスは戰不利と見て退却したれば、ヨナタン及び彼と偕にありし者はヨルダンに跳り入りて向ふに泳ぎ渡りたるも、スリヤの兵は敢て追はざりき。その日バキデスの軍の失へるもの殆んど一千人なりき。彼はエルサレムに引返へしたるのち、ユダヤにある堅固なる邑々を修理し、エリコ、エマオ、ベテホロン、ベテル、タムナタ、パラトニ、タホン、エルサレムに在る城砦に兵營を置きたり。彼はまたベテスラとガザラの市及び城と門とを以て固め、イスラエル人を苦むるために是等に兵を置き、軍隊を置き、糧食を貯へ、更に國の重立ちたる人々の男子を質となし、堅固にし、軍隊を置き、糧食を貯へ、更に國の重立ちたる人々の男子を質となし、留めたり。百五十三年二月、こゝにアルキムスは命じて聖所の內庭の石垣、また預言者の遺業を毀たしめたるが、これと前後して病に打たれ、事業は阻止されたり。彼は中風に罹りて最早一言も出すを得ず、驚て大なる苦惱のうちに死したり。バキデスはアルキムスの死せしを見て王に歸りしかば、ユダヤは二年の間平安なりき。　○凡てのの背教者相圖り曰ひけるは、『看よ、ヨナタン及びその味方のものは安樂にして平和に暮すなり。我等バキデスを來らしむべし。彼は一夜にその手を凡て彼等の上に置くべし。』と。彼等乃ち行き、彼と謀れり。率ひて來り、ユダヤにあるその凡ての同盟者に書を密送し、ヨナタン及び偕にある者共を擊たんことを以てせしが、謀畧洩れしをもて成すこと能はざりき。ヨナタンはこの惡事に與れる國人の凡そ五千人を捕へて死刑に行へ

り。後にヨナタンとシモン、及び僧にありし者は曠野のベテバシに移り、破損を修理して堅固にしたり。〇バキデスこれを知り、總軍を集め、ユダヤ人のうちにをる與黨に曰ひ遣はし、往きてベテバシを圍み久しきに亘りてこれを攻めたり。ヨナタンはその兄弟シモンを市に留めて自ら地方に入り少數の人々と僧に進みたり。彼はオドメラとその兄弟を殺し、バシロンの子等をその幕屋に殺せり。かくて彼等はバキデスと戰ひ、彼を破りて散々に惱ましたり。彼の謀畧も侵入も益なかりき。ここに於てバキデスは來向を勸めたる背教者を甚だしく怒りてその多くを戮りたり。ヨナタンこれを知り、使節を彼の許に遣はし、和親を結び、捕虜を返さんことを求めしに、バキデスはこれを容れ、ユダヤの地より取りたる捕虜をヨナタンに返してその本國に去り、復た彼等の邊境に來らざりき。劍はイスラエルより止みぬ、ヨナタンはミクマに住み、民をさばき、不虔をイスラエルより亡ぼしたり。

〔一〇〕 玆に百六十年、アンテオカスの子アレキサンドル・エピハネスは上りてプトレマイスを占領し其處に住して治めたり。デメテリオ王これを聞き大兵を集め、彼と戰はんとて軍を進めぬ。〇デメテリオはヨナタンを尊びたるごとき和親の言をもて書を彼に贈りて曰へらく、『汝が我等に敵してアレキサンドルと連合するに先だち、我らまつ汝と和親を結ぶべし。汝は我等が汝とその兄弟、その民とに行へる凡ての惡を憶ゆればなり。われ汝に兵を集め軍器を造る權能を與へ、汝の同盟者たるべく、また城砦に留めたる質を汝に返へすべし。』と。　〇ヨナタン・エルサレムに來りて凡ての民と城砦にある者共に王の書を讀みきかせたるに、彼等は王が彼に兵を召集する權能を賜ひたることを聞きて甚だしく恐れ、城砦にありしものは質をヨナタンに返へし、ヨナタンはこれを彼等の親に渡したり。而してヨナタンはエルサレムに住み、防衛の爲に石垣を造り、シオンの山の周圍に琢石をもてせんこ

とを工人に命じ、彼等はその如く着手しはじめぬ。バキデスの建てたる城砦に在りし異邦人は逃げて各その本國に去れり。たゞベテスラには律法を棄てたる或もの殘りゐたり、そは彼處は彼等の逃れの所なりしを以てなり。

○アレキサンドル王はデメテリオ王がヨナタンに送りたる凡ての約束を聞き、またヨナタンとその兄弟のなせる戰と勇しき行蹟と、彼等の耐へたる勞苦とを聞きて曰ふ、『かゝる者を他に見出すべくもあらず、我等は今彼を我等の友とし同盟者となすべし。』と。乃ち書を認めこれを彼に送りたり。曰く、『アレキサンドル王、兄弟ヨナタンに安(やすき)を問ふ。我等汝が大勇の士にして我等の友たるに適はしきを聞きたり。我等は今日汝をその國人の祭司長に立て、又王の友と稱することに定め、我等の味方となり、我等と友誼を保たんことを汝に求む。』と。ヨナタン乃ち百六十年七月、搆(かりほすまいのいはい)盧節に聖衣を着け、兵を集め、多くの兵器を備へたり。

○デメテリオ是等の事を聞き憂ひ、我等は過ちたり。アレキサンドルは我等に先んじ、己を强くせんとしてユダヤ人と友誼を堅ふせり。我も亦彼等の援助を獲んために彼等に書き送らんとて、『汝等依然我らに眞實を保て。我等は汝等が我等のために盡せる事のため篤く汝等に報ひ、多くの免除をあたへ特典を與ふべし。』と、これを列擧したる長文の書面を送りたり。

○ヨナタン及びその民是等の言を聞けるとき、彼がイスラエルに行へる大なる惡と、彼等を苦しめたる事とを憶ゆるをもてこれを信ぜず、また敢て受けざりき。彼等は和親の言を彼等に告げたる最初のものはアレキサンドルなりしかば、彼を喜び彼と盟約をなしたり。アレキサンドルは大軍を集めてデメテリオと戰ひ、これを潰走せしめて、日沒まで戰を續けたるが、その日デメテリオは戰死せり。

○アレキサンドルはエジプト王プトレマイオに次の言をもて使節を遣れり。曰く、『我は王國に歸り、わが先祖の王位に卽きて君臨し、デメテリオを斃し、國を回復したり。我は彼と戰ひ彼とその軍我がために敗れ、我は彼の王位に坐したり。かるが故に今

我等互に和親を結び、汝の女を我に妻として與へよ。我は汝と姻戚となり、汝よ
し。』と。プトレマイオ王答へて曰ふ、『汝が先祖の地に歸り、その王位に卽きし日は福ひなるかな。我は汝の書
ける如く汝になすべければ、プトレマイスに於て我に會見せよ。』と。王はその女クレオパトラと偕にエジプトを
出で、百六十二年プトレマイスに來りければ、アレキサンドルは彼と會し、彼處にて華やかなる結婚の祝典を擧
げたり。　○アレキサンドルはヨナタンに彼と會すべきために來らんことを書き送れり。かくてヨナタンは威儀
を整へてプトレマイスに往き、二人の王に會ひ、彼等とその友に金銀及び種々の贈物をなして彼等の好意を獲た
り。その時イスラエルのうちより律法に背ける疫病の如き者共集まりて彼を罪したるが、王は之を顧みざりき。
王は命じてヨナタンの衣服を脫がせて紫の衣を着せ、己と偕に坐せしめ、その君たちに曰ふ、『彼と偕に市にゆ
き、何事につきても、誰も彼に逆ひて呟く勿れ、誰も何事に關しても彼を煩はす勿れと布告すべし。』と。王は彼
を尊び、その首たる友のうちに彼を書きしるし、彼を督軍とし州の總督となせり。ヨナタンは平和と喜をもてエル
サレムに歸れり。　○百六十五年デメテリオ王の子なるデメテリオはクレテよりその先祖の地に來りしが、アレ
キサンドル王はこれを聞き、いたく憂ひてアンテオケに歸りたり。デメテリオはケレスリヤを治めたるアポロニ
オを立てて、大軍を集め、ヤムニヤムに陣を張り、使を祭司長ヨナタンにつかはしけるは、『汝は獨り我等に逆ひ
て高ぶるなり、我は汝のために嘲弄せられ侮蔑せらる。汝如何なれば山にありて我等に逆ひ、汝の力を誇るや。汝
若し汝の兵力を信ぜば下りて平野に來れ、其處にて雌雄を決せん。汝等は石もなく礫もなくまた逃ぐる場所もな
き平野に於て馬匹も軍勢も屯在せしむるを得まじ。』と。　○ヨナタンはアポロニオの言を聞きしとき怒りて兵一
萬を選びエルサレムを出で、而して彼の兄弟シモンは彼を助くるために會したり、彼はヨツペに對し陣を張

りしが、アポロニオの兵營其處にありしをもて、市のもの被を入れざりしにより、ヨナタンこれを攻め落して占領したり。アポロニオ聞きて騎兵三千と歩兵の大軍とを集め、經由するものゝ如くにアゾトにゆき、平野にむかひて迂回したり、こは大數の騎兵を頼みとせるためなり。ヨナタンは彼をアゾトに尾し兩軍終に兵を交ゆ。アポロニオは窃かに騎兵一千を背後に伏せ置きたるが、ヨナタンの知るところとなれり、彼等はヨナタンの軍を攻圍し朝より暮に及びしが、衆能くヨナタンの命を守り、敵の騎兵は疲れ果てたり。シモン乃ちその軍を進め、騎兵は力既に盡きたれば敵の歩兵と渡り合ひて、これを破れり。騎兵も平野に於て散々になり、アゾトに逃竄し、救を得んとして、偶像の宮ベテダゴンに入れり。ヨナタンはアゾトと其の周圍の邑々を燒き、掠物を取り、ダゴンの宮とこれに逃竄せるものを火をかけて燒きたり。ヨナタンは其處より軍を移し、アスカロンにむかひて陣しけるが、市のもの威儀を整へて彼に會せんとて出で來り、ヨナタンは多くの掠物を携へエルサレムに歸れり。アレキサンドル王は是等の事を聞き更にヨナタンを尊び、金の帶留を贈與したり。こは王の血族視さるゝものになり。王はまたエクロンとその邊境を領有として彼に贈與したり。

〔一一〕茲にエジプト王は濱の砂子のごとき大軍と大艦隊とを集め、僞計を以てアレキサンドルの王國を併呑せんと企てたり。彼は平和の言をもてスリヤに赴けるが、王が彼は我が岳父なれば彼を迎ふべしと命じたるにより、市々のものは彼を容れ彼を迎へたり、プトレマイオの市々に入るや彼はその各に守備隊を置き、アゾトに近づくや、民は燒かれたるダゴンの宮、市の内外の荒跡、外に投棄てられたる屍、また戰爭にて燒かれたるものを示し、ヨナタンが行へる事共を王に物語りてヨナタンを王へてヨツパにて王と會見し、交歡して其處に宿りたり。ヨナタンはエルテルスと呼ぶ河のあたりまで王と伴ひて

再びエルサレムに歸れり。プトレマイオは海のほとりなるセルキヤに至るまで沿岸の市々の主となりアレキサンドルに對し悪計を目論見たり。彼は使節をデメテリオに遣り曰ひけるは、『來れ、我等互に契約をなさん。我はアレキサンドルの妻とせる我が女を汝に與へん。汝は汝の父の國に王たるべし。彼は我を殺さんとしたれば、我は彼に我が女を與へしを悔ゆるなり。』と。彼乃ちそれを取りかへしてこれをデメテリオに與へ、アレキサンドルを棄て、彼等の敵心公然になりたり。かくてプトレマイオはアンテオケに入り、アジヤとエジプトの二つの王冠を己が頭上に置きぬ。その頃アレキサンドル王は反亂を鎭定せんとてキリキヤに在りしが、かくと聞きて兵を進めしも、プトレマイオの大軍のために破られてアラビヤに逃れ、プトレマイオは全盛となれり。アラビヤ人ザブヂエル、アレキサンドルの首を取りてプトレマイオに送る。プトレマイオも亦三日の後に死し、デメテリオは百六十七年王となれり。

○そのころヨナタンはエルサレムにある城砦を取らんとてユダヤのものを集め、且つこれを攻むる多くの戰器を造れり。王これを聞きて怒り、直ちにプトレマイスに到り、ヨナタンに書きおくりて彼がこれを攻め圍むまじきことと、速かにプトレマイスにて己と會せんことを以てす。ヨナタン乃ち攻圍をそのまゝになしおくべき事を命じ、イスラエルの長老及び祭司の或ものを選び、金銀衣服及びその他種々の贈品を整へ、危きを冒してプトレマイスに於て王と會見し、王の前に恩を得たり、國人の背教せるもの彼を王に訴へたれども、王は以前王の先人等が彼に爲せるが如くし、凡ての友の面前にて彼を尊び、祭司長の職併びに彼が以前有したる諸の榮譽を堅ふし、重立ちたる友のうちにても彼には卓れし位置を與へたり。ヨナタンは王に求むるにユダヤの貢の免除を以てし、また三省及びサマリヤの國も然かせんことを乞ひ、且つ彼に約するに三百タラントを以てし、王の諾するところとなり、王は條約に關する書を作りてこれをヨナタンに與へ、聖なる山の目立つところに揭げ

しめたり。　〇デメテリオ王は國の泰平を見、たゞ彼が異邦人の島々より募りたる外國兵を殘すのみにして、凡ての軍兵を解散したるが、これがため彼の父祖の軍兵の憎むところとなれり。トリホンはこれまでアレキサンドルの味方たりし一人なりしが、凡ての軍兵がデメテリオに對し呟くを見て、アレキサンドルの幼兒なるアンテオカスを養育しをりしアラビア人イマルクの許に往き、彼をアンテオカスに代りて支配をなすべきことを勸め、デメテリオの行へる凡ての事と彼の軍兵が彼を憎むことを語り、幾日か彼處に滯留したり。　〇ヨナタンは同じころ言をデメテリオに致し、城樓にあるものをエルサレムより逐ひ、また他の城砦にある者をも然かせんことを請へり。これ彼等が絶へずイスラエルを攻むるを以てなり。デメテリオは言ひ送りて曰ふ、『我汝とその民のために唯これを行はんのみならず、好き機を見ば汝とその民を大いに尊ばん、さゞれば汝我がために善く戰ふ者を送るべし、凡ての我が軍兵は叛きたればなり。』と。　ヨナタン乃ち三千の勇士をアンテオケに遣はしたれば、王はその來着を喜びたり。然るに市の者共は市のうちに蝟集して騷ぎ立ち、王を殺さんとしたり。王は王宮の庭にのがれ、市の者共は街路を遮斷して戰を始めたり。王は援助をユダヤ人に求めしかば、彼等は直ちに王の許に集まり、市中にわかれてその日に一萬人を殺せり。彼等は市に火をかけ、多くの掠物を得て王を救ひたり。市の者共はユダヤ人が意のごとくに市の主權を握りたるを見て、心を挫き、王に歎願して曰ふ、『汝の右の手を我等に與へよ、願くはユダヤ人をして我等と市を攻むることを止めしよ。』と。彼等は軍器を棄て平和を結びたれば、ユダヤ人は王とその王國の凡てのものゝ前に崇められ、多くの掠物を得てエルサレムに歸れり。デメテリオ王はその王國の位に卽き、國は泰平なりき。然るに彼はその語れる凡ての言を食み、ヨナタンを疎んじ、彼が己に與へたる利益の報ひもなさず、甚だしく彼を苦しめたり。　〇この事の後トリホンは歸り、王となり戴冠した

るアンテオカスも彼と偕に歸れり。デメテリオが解散したる凡ての軍兵は彼の許に集まり、デメテリオはアンテオケの主となれり。若きアンテオカスはヨナタンに書き送りて曰ふ、『我は汝の潰走せしめ、トリホンはアンテオケの主となれり。若きアンテオカスはヨナタンに書き送りて曰ふ、祭司長職を確認し、汝を四省の治者とし、王の友の一人として立つべし。』と。彼は金の酒盃にて飲み、紫衣を着け、金の帶留を用ゆることを許可し、彼の兄弟シモンをツロの岬よりエジプトの邊境にいたる地の將となせり。ヨナタンは出で、河の彼方と邑々を經て旅し、スリヤの軍勢は凡て彼の同盟者たらんとして彼に集まれり。彼アスカロンに來りしに、市の者共は恭々しく彼を迎へぬ。彼は其處よりガザに往きしに、ガザの者共は彼を入れず。彼乃ちこれを攻圍み、その外廓を燒き、掠物を取れり。後ガザの者共ヨナタンに求めしかば、彼はこれと和し、彼等の重立てる者の子を取りて質としてエルサレムに送れり。彼は遠くダマスコにまで往けり。デメテリオの諸將が彼を位より黜けんとし大軍を以てケデシに來れるを聞き、その兄弟シモンを國に留め置き、彼等に會せんとして赴けり。シモンはベテスラに對して陣を構へ、日を重ねて戰ひ、これを封鎖し、終に彼等をして彼に和を乞はしむるに至り、彼等を其處より逐ひ出し、市を占領してこれに守備隊を置きたり。ヨナタンとその軍はゲオサレの湖畔に陣し、其處より早朝ハゾルの野に到れり。玆に外國兵は山に伏兵を置き、自ら戰はんとして來れり。かくて伏兵その所より起りて戰に加はり、ヨナタンの味方は凡て逃れ、僅かに軍の將たりしアブサロムの子マッテヤとカルヒの子ユダとの外、その一人だに殘らず。ヨナタンはその衣を裂き、土を首に載せて祈れり。而して後再び戰に參じて彼等を潰走せしめたれば、さきに逃れたる味方の者共、これを見て彼にかへり、相偕に彼等を追擊してケデシに到れり。外國兵のこの日に斃れたるもの凡そ三千人、ヨナタンはエルサレムに歸れり。

〔一二〕ヨナタンは時の可なるを見て、人を選びローマに遣はして從來の友誼を確ふせしめ、またスパルタ及び他にも書を送れり。使者ローマに往き、元老院に入りて曰ふ、『祭司長ヨナタン及びユダヤ人は前の如く友誼と同盟とを新にせんが爲に我等を派遣したり。』と。ローマ人は彼等をユダヤの地に安着せしむるために各所の人々に宛てたる書を彼等に與へぬ。またヨナタンがスパルタ人に送れる書の寫は下の如し、曰く、『祭司長ヨナタン、民の長老、祭司及びユダヤの民衆、彼等の兄弟なるスパルタ人に安を問ふ。曩きにも、こゝに添へある寫の示す如く、汝等のうちに王たりしダリヨスより我等の兄弟たることをあらはす書簡祭司長オニヤスに送られたり。その時オニヤスは遣はされたる使節を恭々しく待遇し、同盟友誼の結ばれたる宣言の書面を受領したり。我等は我等を助くるため、手に聖書を有てるが故に、敢て同盟又は友誼を要せずと雖ども、汝等が使節を我等に遣はせしより以來日既に久しければ、或は友情の疎ならんことを恐れ、我等も亦た更に兄弟たり友たることを新たにせんとして使者を遣さんと企てたり。我等は祝祭に於ても、他の便宜なる日に於ても、毎時我等の供ふる犧牲とまた我等の祈禱に於て汝等を記憶す。今我等は多くの艱難、多くの戰に圍まれ、我等の周圍の王たちも我等を攻む。是等の戰に於て我等は煩を汝等及び他の友邦に及ぼす意あるなし。そは我等は天祐を有して敵より救はれ、また我等の敵は卑ふせられたればなり。これが爲め我等はアンテオカスの子ヌメニオ及びヤソンの子アンチパテルを選びて、ローマ人と我らが有せし友誼と、以前の同盟を更新せんがため彼地に遣はし、更らに汝等に到りて我等の書を呈すべきを命じたり。これに對する回答を與へられんには甚だ幸なり。』と。而して彼等がオニヤスに送りたる書の寫は左のごとし。『スパルタの王、祭司長オニヤスに安を問ふ。スパルタ人とユダヤ人とにつき或る書に彼等は兄弟にしてアブラハムより出づと見えたり。この事我らに知られたれば、汝等が平安ならんことにつきて

等我に書をかけるは善し。我等も汝等に汝等の家畜と財とは我等のものなり、我等の返書せんとす。是故に我等はこの如くに彼等が汝等に報告せんことを命ず。』と。○さてヨナタンはデメテリオの諸將が以前よりも大軍を以て攻め來れるを聞きエルサレムより移り、ハマテの國に於て彼等に會したり。密偵は情報を齎らし、敵が夜に乘じ來襲すべしとのことに、ヨナタンは日沒と共に人々に警戒を命じ、武裝して夜中何時にても應戰し得るやうになし置き、陣營の周圍には斥候兵を配置したり。敵はヨナタン及びその軍が應戰の準備ありと聞き、心に恐れて火を營中に燒き、窃かに退却せしが、ヨナタンの軍は火の燃やさるゝを見たれば朝に至るまでかくとは知らず、のち追擊せるも終に及ばず。乃ち一轉してザバデ人と稱するアラビヤ人を攻めてこれを破り、其處を發してダマスコに到りぬ。シモンも亦出でゝ遙かにアスカロン及びその附近の城砦にいたり、ヨッパに一轉し、彼等がデメテリオの軍に、その城砦を渡さんとする意ありと聞き、これを占領して守備隊を置きたり。○ヨナタンの歸るや、民の長老を集め、ユダヤにある城砦を築き、エルサレムの石垣を高くし、賣買することと能はずして孤立せしむるやうに城樓と市とを遮斷するために大なる堤をその間に造ることを協議したり。人々は市を築くために集りぬ。東側にある流に面せる石垣の一部は崩れたり。彼等はカペナタと稱するところを修復したり。シモンもまた谷地なるアヂダを堅固にしたり。○トリホン今や冠を戴きてアジヤに王となり、アンテオカス王を殺さんとする意あり。然れども彼はヨナタンが必ず攻め來るべきを恐れ、如何にしてか彼を捕へて殺さんことを圖れり。かくて彼は移りてヨナタンに來り、ヨナタン亦た選拔兵四萬人を率ひてベテサンに來る。トリホンは彼が大軍を以て來れるを見て恐れ、恭々しく彼を迎へ、これに贈物をなし、己に爲すが如く彼に服はんことをその軍に命じたり。彼ヨナタンに曰ふ、『我等の間に戰も無きに汝何とてこの凡ての民を惱ますや。

されば彼等を各その家に歸へし、僅かのものを選びて汝は我と偕にプトレマイスに來れ。我これの城砦も、軍勢も王の役人も凡て渡すべし。我は歸り去らん。我が來れるはこのためなり。』と。タンは彼を信じ、その言の如くになし、兵を歸へしたれば、彼等はユダヤの地に去れり。その殘したる三千人のうち、二千人をガリラヤに停め置き、僅かに一千人彼と同行せり。ヨナタンのプトレマイスに入るや、市のものは諸門を閉ぢ、彼を捕へ、劍をもて彼の同行者を殺したり。而してトリホンは歩兵及び騎兵をガリラヤと大平原とに派遣してヨナタンの凡ての兵を亡ぼさしむ。然るに彼等は

居れり。　○トルホンはユダヤを侵さんとし、その大軍プトレマイスを發したり。ヨナタンは監視されて彼と偕に在りき。シモンは平野に對しアヂダルに陣したるに、トルホンはシモンがその兄弟ヨナタンに代りて起ち、戰はんとするの意あるを知り、使を彼に遣はし曰はしめけるは、『我等が汝の兄弟ヨナタンを捕へたるは彼の職務上、王の歳入に對して負債あるためなり。彼が釋放さるゝも我等に叛かざらんがために銀百タラントと彼の二子を質として送るべし。』と。シモンはその僞なるべきを知りしも、若し肯はざれば、ヨナタンはそのために殺されたりと言はれて民の怨嗟を受くべしとて、トルホンの言ひ寄せたる如くなせしが、果して彼は言を食み、ヨナタンを釋放せざりき。この後トルホンはアドラに通ずる路を迂回して攻め來れり。彼の往くところ、シモンとその軍は何處にも彼に對抗して進軍したり。城内のものは使節をトルホンに遣り、曠野を經て糧食を送らんことを以てす。トルホンはその凡ての騎馬の用意をなせしに、その夜大雪にて出發するを得ず、乃ち轉じてギレアデの國に來り、ビスカマに近づけるときヨナタンを殺したり。彼は其處に葬られ、トルホンはその本國に歸れり。　○シモン人を遣はして、彼の兄弟ヨナタンの骨を取り、彼をその先祖の市モヂンに葬りぬ。全イスラエルは彼のために日を重ねて大なる働きをなせり。シモンは彼の父と兄弟との墓のうへに高き表柱を建て、彼の父母及び彼の四人の兄弟のためには相向きあひて七のピラミッドを建てたり。何れも巧みなる意匠をほどこしたるものにして、種々の武器を浮き彫にし、武器のわきに船舶を刻み、海を往き來する凡てのものに見えたり。こは彼がモヂンにたてたる墓にして、今日に至るまで尚ほ其處に在り。　○さてトルホンは若きアンテオカス王を欺きて殺し、彼に代りて王となり、自らアジヤの王冠を戴き、地に大なる災厄をあたへたり。シモンはユダヤの城砦を築き、高き塔と大なる石垣と門とをもて堅め、城内には糧食を貯へ、人を選びてデメテリオ王に遣はし、凡てトルホン

の行へる事は強奪なりしをもて、免除を國に與へんことを乞はしめたり。王はこれに答へて次の如く書き送れり、
『デメテリオ王、祭司長にして王の友なるシモン及びユダヤ人の長老と國民に安を問ふ。汝の送りし金冠と棕櫚の枝とはこれを受領せり。我等は汝と堅き平和を結び、我等の吏員に書を遣はして汝に免除を與へんとす。我等が汝に定めたる事は、何事にても定めたる如く極めらるべし。汝が築きたる城砦は汝の所有たるべし。今日に至るまでに犯したる何れの失錯も、汝が我等に負ふ王冠税も我等これを免さん。又もしエルサレムに於て徴せらるゝ他の課税あらば以後これを徴せざる可く、又若し汝等の中に我等の親兵に登録すべき適當の者あらば彼等を登録すべし。我等の間には平和あるべし。』と。　○百七十年異邦人の軛はイスラエルより除かれ、民はその書類と契約書とに、『ユダヤ人の大祭司長、首將、引率者シモンの第一年に於て』、と認め始めたり。　○そのころシモンはガザラに對して軍を起し、これを圍み、攻道具を造りて市に携へ來り、塔を攻めて占領したり。攻道具に在りし者は市に躍り入りて大なる喚聲市中に起り、市の者は衣を裂き、妻子と偕に石垣に登り、大聲に叫び、シモンに和を乞ひたり。彼等曰ふ、『我等の惡にしたがひて我等をあしらはで、汝の憐憫にしたがひて、我等をあしらひたまへ。』と。シモンは和を成して市を出でしめ、偶像のありし家々を潔め、歌と感謝とを以て市に入り、律法を守る人々をこれに居らしめ、また其處に自からのために住居を建てたり。　○されど エルサレムの塔に居る者は、出入をなして賣買をなすこと叶はず、飢餓に迫まりて死するもの多し。彼等はシモンに呼はりて和を求めしかば、彼はこれを容れ、彼等を其處より出して城砦の汚れを淨めたり。百七十一年二月二十三日、讃美と棕櫚の枝と鳴物とをもて市に入れり。イスラエルの大なる敵は亡ぼされたるを以てなり。彼は毎年大なる歡喜をもてこの日を守るべきことを彼等に命じ、尚ほ彼は塔の傍にありし宮の丘を以前よりも堅固

にし、其處に彼の部下と偕に居れり。シモンはその子ヨハネが勇士たるを見るや、これを總軍の首將となせり、彼はガザラに住みぬ。

〔一四〕 百七十二年デメテリオ王はその軍をあつめ、トルホンと戰はんがため、援助を得んとしてメデヤに赴けり。ペルシヤ及びメデヤの王アルサケはデメテリオが來れるを聞き、彼を生捕せんとて軍將の一人を遣はせしに、彼ゆきてデメテリオの軍を撃ち、彼を捕虜にしてアルサケの許に率き來れり。〇シモンのながらへし間、彼は國人の幸福を圖り、世は泰平なりき。彼は港とするためにヨッパを取り、これを海の島々の入口となせり。彼は國人の境域を擴げ、國を回復し、捕虜の大數をあつめ、ガザラ、ベテスラ及び城塔を統治し、その不淨を取り去れり。人々は平和に地を耕し、地は豐かなる産物をいだし、野の樹木はその果を結べり。老ひたる者は街路に坐して善き事を語り合ひ、若き者は輝ける軍服を着けて往來す、彼等は邑々のために糧食を備へ、防備を施し、彼の名聲は世擧りて言ひ ひろめたり。凡ての人は安全に葡萄の樹、無花果の樹の下に住めり。彼等を攻むるものとては地にのこりをらず。彼は凡て律法を蔑みする惡しき者を移し去り、聖所を尊崇し、宮の什器を增加せり。

〇ヨナタンの死せしこととローマ及びスパルタにまで聞えたれば彼等はいたく悲しみしが、彼の兄弟シモン代りて祭司長となり、國を治むると聞き、曩きに彼の兄弟ユダ及びヨナタンと堅めたる友誼と同盟を更新せんことを眞鍮の板にしたゝめて彼に送りければ、エルサレムに於る集會に於てこれを讀み上げたり。スパルタ人の送りたる書の寫は下の如し、『スパルタ人の治者、市と偕に汝等に安きを問ふ。我等の民に遣はされたる使者は汝等の榮譽を告げたり。我等は彼等の來れるを喜び、彼等が公けに語れる事を左の如くに記錄したり。アンテオカスの子ヌメニオ、ヤソンの子アンテパトルは彼等が我等と有せし友誼を新たにせんとして我等に來れり。人々を鄭重に歡

待し、且つこれを記憶するために彼等の言の寫を公の記錄に止むることは市民の欣幸とするところなり。』と。なほ彼等は祭司長シモンにこれらのことの寫を書き送れり。この事の後シモンは彼等と同盟を固ふするため一千封度の重量ある大なる黃金の干(たて)を携へしめてヌメニオをローマに遣はせり。　○民この事を聞くや、曰ひけるは、『我等はシモン及びその子等に如何なる謝辭をなすべき。彼と彼の兄弟、彼の先祖の家は强くなり、イスラエルの凡ての敵を擊退し、自由をイスラエルに確立したり。』と。こゝを以て彼等は眞鑄の板にこれを誌し、シオンの山にある柱に嵌めたり、こはその寫なり、『百七十二年エルルの十八日、卽ち祭司長シモンの第三年、アサラメルに於る祭司、民、國人の宰たち及び長老の大集會にて我等告示すること下の如し。戰爭國內に頻りなりしため、ヨアリブの裔(すえ)なるマッテヤの子シモン及びその兄弟たちは、聖所及び律法の確ふせられ、また大なる榮光をもて國人の崇められんがために、身を危地に置きて諸の敵に當り、ヨナタンは國人を集め、祭司長となり、その民に加へられたり。彼等の諸の敵は彼等の國を亡ぼさんとし、聖所に逆ひて手を伸べぬ。そのときシモン起りその國人のために戰ひ、私財を傾け、勇士を武裝し、ユダヤの邑々、又先きに敵軍の居りしベテスラを堅固にし、これにユダヤ人の守備隊を置きぬ。また海岸にあるヨッパ、又ガザラを堅固にしてユダヤ人を居らしめ、これが支持に便宜なる一切のものを供給したり。民はシモンの信仰と、彼がその民に來らしめんとせる榮光とを見たり。異邦人は國外に逐はれ、聖所の周圍を汚したる者も逐はれ、彼はユダヤ人をこれに居らしめ、國と市の安全のためにこれに防備を施し、エルサレムの石垣を高く築きたり。デメテリオ王は是等のことによりて彼の祭司長職を確認し、友、同盟者、兄弟と呼ばれ、シモンの使節を尊びて受けたりといふを聞き及びたればなり。ユダヤ人及び祭司等は忠信なる豫言者の起るまで、

シモンを永へに彼等の嚮導者及び祭司長となすを喜び、且つ彼が、首將となり、聖所の管理をなすべきを望み、人皆彼に服從し、國内の凡ての文書は彼の名を以て書き、彼は紫を着、金をつけ、民また祭司の誰にても、彼の許可なくして國内に集會を召集し、又は紫衣を着、金の帶留をつくるものは處罰さるべし。凡ての民はシモンがこれらのことを實行すべきことに一致し、シモンもこれを容れて、祭司長となり、ユダヤ人及び祭司の首將また統監となり、凡てのもの保護職たるべきことを承諾したり。』彼等はこの書を眞鑄牌に誌し、聖所境域の目につき易き場所に之を嵌め込み、又シモン及びその子等がこれを所有せんがためにこれが復寫を寶藏に納めんことを命じたり。

〔一五〕デメテリオ王の子アンテオカスが海の島よりユダヤ人の祭司兼總督シモンとその國民に送れる書は左の如し。『アンテオカス王、祭司長兼總督シモン及びユダヤの國民に安を問ふ。凶惡なる者共我等の先祖の王國の主となりたるをもて、われこれを元の如く回復せんとす。この目的のためわれ外國兵の多くを起し又戰艦を備へたり。我はわが國を亡ぼし邑々を荒したる者共を罰せんとして上陸せんとす。されば我等は先きの王たちが汝に免除したる凡ての貢を等しく免除し、又慣例となれる贈物もなすに及ばず。且つ汝の印ある貨幣を汝の國にて鑄造することを汝に許可すべし。エルサレム及び聖所は自由なるべく、汝の準備したる凡ての軍兵、汝の築きたる城塞は汝の所有としてその儘なるべし。王に負へる債務一切も亦た今より永久汝に免除さるべし。かつわが王國の確立せる曉には、我等は汝と汝の國民と宮とを大なる榮光をもてあがめしめ、これを全地に彰はすべし。』〇

第一マカビー書

百七十四年アンテオカスはその先祖の地に進みしに、すべての將卒彼に集まり、トルホンは海の岸なるドルに逃れたり。アンテオカスは更にドルに對陣し、十二萬の兵、八千の騎兵これと偕に在りき。かくて彼は市を圍み、

船艦は海より攻撃に參加したれば、市は海陸より惱まされて一人のこれより出入し得るものとてなかりき。○
その頃ヌメニオとその與黨は王たちと國々に書を携へローマより來れり。『ローマ人の議政官ルシウス、プトレマイオ王に安を問ふ、ユダヤ人の使節は舊來の友誼と同盟を更新せんとして祭司シモンとユダヤ人民より遣はされて我等に來れり。且つ彼等は一千封度の金干を携へ來れり。されば我等は王たちと國々とに左の如く書贈るを好しとせり。卽ち彼等を害せんとし又は彼等とその邑々、また彼等の國を侵すことなく、彼等を攻むる者と同盟を結ぶことなかるべし。我等また彼等の贈れる干(たて)を受ることを適當と見たり。されば凶惡なる者共にして彼等の國より逃れて汝に來るあらば、律法に遵ひて彼等を祭司長シモンに引渡すべし。』と。同じことはデメテリオ王と他の諸所に書きおくられ、その寫は祭司長シモンに送られたり。○されどアンテオカス王は再びドルに對陣して絕へず兵を動かしトルホンの出入を封鎖したり。シモンは彼を助くるために二千の選拔兵を送り、また金銀及び多くの兵器を送りたり。然るに彼は是等を受るを好まず、先きに結びたる凡ての契約を無視し、友の一人アテノビオを遣はして曰はしめけるは、『汝はヨッパ及びガザラ、エルサレムにある城樓、わが王國の邑々を占領し、その邊境を荒して大なる損害をなしたれば、汝が得たる諸所の貢を引渡し、さなくば銀五百タラントと、汝が行へる損害と邑々の貢として五百タラントを我に與ふべし。應ぜざらば我等は往きて汝を征服すべし。』と。アテノビオはエルサレムに來りシモンの威容と金銀の器具、又彼の大いなる侍者とを見るに及んで驚き、王の言を彼に告げたり。シモン答へけるは、『我等は他人の地、他人に屬するものを掠めたることなし。是等はわが先祖の嗣業にして、一時我等の敵が不正に占有したるを取りもどせしに過ぎず。汝の求むるヨッパ及びガザラは我が全國の民に大なる災害をなせるものなれども、われ百タラントを與ふべし。』と。アテノビオは佛

然として一言も答へず、王の許に歸り復命したりければ、王もいたく怒れり。トルホンは海路オルトシャに逃れたり。　○かくて王はケンデビオを沿岸の首將に立て、歩騎兵を彼に附し。ケデロンを築き、諸門を固めてユデアを攻めしめ、王は自らトルホンを追擊したり。ケンデビオは王の命に遵ひ、ユダヤ路に沿ふて侵畧せんとし歩騎兵を配置したり。

〔一六〕　爰にヨハネはガザラより上り、ケンデビオの行へるところを父シモンに告げたり。シモンはその二人の長子ユダとシモンとに曰ひけるは、『我及びわが兄弟、わが父の家は、我等の若き時より今日に至るまでイスラエルの敵と戰ひ、我等は屢々イスラエルを救ひたり。今やわれ老ひたれば、汝等わが兄弟に代り、往きて我等の國人のために戰へ。天祐願くは汝等と偕にあれ。』と。彼は國中より二萬の戰士及び騎兵を選び、彼等はケンデビオと戰はんとして發し、モヂンにて寢ね、翌朝起き出でて平原に出でしが、看よ、歩騎の大軍彼等と會せんとして來る。兩軍のあひだに流あり。部下の民これを渡るを恐るゝを見て、彼まつ渡りたれば、彼等從ひて渡りぬ。かくて後、彼は軍を二分し歩兵の間に騎兵を配置したり。これ敵の騎兵がその數非常に多かりしためなり。彼等は喇叭を吹き鳴して進軍し、敵軍當るを得ずして潰走し死傷少なからず。殘れるものは堅固なる城塞に逃け入れり。その時ヨハネの兄弟ユダは負傷したりしが、ヨハネは逃るゝ者を追擊し、ケンデビオの築きたるケデロンにまで軍を進め、敵はアゾトの野にある城樓に遁竄せしかば、彼はこれを燒打し、彼等の死者二千人。かくて彼は平安にユダヤに凱旋せり。　○アブブの子プトレマイオはエリコの野の總督に立てらる。彼は祭司長の養子なりしにより、多くの金銀を有し、心高ぶり、國主とならんとし、シモンとその子等を欺し擊にせんと企てたりしが、百七十七年十一月卽ちセバトの月に自身とその子マ

ツテヤ、及びユダと偕にエリコに下りしに、プトレマイオは彼の築きたるドクといふ小塞に彼等を欺き迎へて盛大なる宴を張り、シモンとその二子及び若干の僕を殺し、善に報ゆるにかゝる大悪を以てしたり。プトレマイオは是等のことを誌して、王に援軍を送り、又國と邑々とを彼に渡すべきことを言ひ送れり。さらに彼はヨハネを殺さんがために一隊をガザラに送り、また千卒長等に書を與へて金銀及び恩賜を得んがために彼に來れと曰へり。又エルサレムと神宮の山を占領せしめんとして他の一隊を遣はせり。早くもこれを知りたるもの、走りてガザラに到り、ヨハネに、彼の父及び兄弟の殺されたると、またかれ汝をも殺さんとすと告げたり。彼聞きて甚だしく愕き、彼を亡きものにせんとて來れるものを捕縛して殺せり。　〇ヨハネのなせる種々なる事蹟また彼の戰爭とその勇ましき行動、彼が石垣を築けること、又彼の行へる他の事業は、看よ、彼が祭司長として父の後を嗣ぎし時より、彼の祭司長職の記錄に書きしるせるが如し。」

# 第二マカビー書

〔一〕エヂプトにある同胞、ユダヤ人に安きを問ふ。『エルサレムとユダヤの全國にある我等同胞は汝等の平安を禱る。願くは神汝等に恩(めぐみ)を賜はり、彼の忠信なる僕アブラハム、イサク、ヤコブとの契約をゆるし災禍の日に汝等を棄てたまはざらんことを。我等は今汝等のために祈るなり。百六十九年デメテリオの王たりしとき、我等はヤソン及びその徒黨が王國に反き、辜なき血を流せし時より、累年我等に臨みたる患難に際し、既に汝等に書を送れるが如し。されど我等は主に求め、その聽き給ふところとなり、今ま我等は犧牲その他定めの供物をなすなり。汝等も亦たキスリウの月の搆廬節(かりほすまい)の祝會を守るやうすべし。百八十八年に誌す。』〇エルサレムとユダヤの國にあるものと議政官及びユダ、プトレマイオ王の師傅にして受膏せる祭司のストブラス及びエヂプトに在るユダヤ人に安を問ふ。『我等は大なる災厄より救ひ出されて深く神に感謝しまつるなり。我等は今キスリウの月の二十五日、宮の潔めを守らんとするをもて、汝等も亦搆廬節の祝日と、ネヘミヤが宮と壇とを築き犧牲を供へたるとき與へられし火の紀念とを守らんために汝等に證しするを必要と思へり。我等の先祖がペルシャに導きゆかれんとしたりしとき、當時の敬虔なる祭司等は壇の火を取り、これを水なき井のうちに窃かに隠し、固く秘めたれば、誰もその所を知るものとてはあらざりき。かくて幾年を經たるのち神の好

しとし給へる時、ネヘミヤはペルシヤの王の命により、これを隠くしたる祭司等の子孫に質すため人を遣はしたるに、彼等は火は無くして唯深き水を見たりと我等に告げたりしかば、彼は命じてこれを汲み來らしめ、犠牲が壇に供へらるゝや、ネヘミヤは祭司等にその水を木とこれに載せたる物とに灑がんことを命じたり。かくて暫らくしけるが、今まで雲隠れせる太陽の輝きいでしとき、大なる火燃えあがりて凡ての人々を驚かしめたり。祭司等は犠牲のやかれをるあひだ祈をなし、他の者も凡て偕にネヘミヤの爲せし如くにす。ヨナタンを始め他の者はこれに應へをなせり。この時さゝげられたる祈は下の如し。『あゝ主、萬物の創造者よ。畏み恐るべく、強く、義憐憫あり、唯一の王にましまして恩惠あつく、イスラエルを凡ての災厄より救ひ、先祖等を汝の選民となしくして、イスラエルのために献ぐる犠牲を受け、汝の分を護りてこれを聖となして聖めたまひし者よ。願くは爾の凡ての民イスラエルを顧み、異邦人をし給へ。願くは我等の散されたる者を集め、奴隷となりなやる者を自由にし、賤しみ憎まるゝ者を愛し給へ。我等を虐ぐる者又たかぶりて我等を辱しむる者を懲し給へ。して汝は我等の神にてましますことを知らしめ給へ。願くはモーセの言へる如く、汝の民を汝の聖處に植え給はんことを。』かくて祭司は歌を謳ひ、犠牲のやかるゝや否や、ネヘミヤは殘りし水を大なる石の上に灑がんことを命じたり。その爲されたるとき焔はもえあがり、壇より輝き映せし光によりて燒けたり。その事のペルシヤ王に告げらるゝや、王は實否を確めてその處を圍み、聖域となし、王の厚意を人に示さんとする時、この水を與へたり。ネヘミヤ及び偕に在りし者共これをネフタルと云へり、潔むるの義なり。

〔二〕又記錄に見ゆる事は豫言者エレミヤ虜はれゆける者共に上に誌されたるごとく火を取らんことを命じ、且つ彼等に律法を與へ、主の誡規を忘れず、又金銀の像を見て彼等の心の迷ひいでざらんことを勸戒したり。尚

ほ同じ書中に、モーセが登りゆきて神の嗣業を觀望したる山に、神の告を蒙りて豫言者の往きたるとき、幕屋と契約の櫃、彼の後に從ひゆくべきことを命じたり。而してエレミヤ來りて巖にある洞窟を見て、彼は幕屋と香を焚く壇とをその處に安置して戸を閉ぢたり。彼につきては神その民を見出すあたはざりきに、エレミヤこれを知りしとき、彼等を咎めて曰ひけるは、『かの場處に隨ひ行けるもの道しるべせんとせしに、彼等はこれを再び集めて恩を施したまふ時までは知られずにあるべし。その時、主は是等のものを彼等に示し、モーセに示されたる如く、またソロモンのその處を大に聖別されんことを求めたる時の如く、主の榮光と雲と現はるべし。』と。

又彼、その智慧に從ひて宮の奉獻と落成の犧牲を供へ、モーセ、主に祈りしとき天より火降りて犧牲を焼き、ソロモンの祈りしときにも火降りて燔祭を焼きたるが如しと記さる。

所と記錄とに誌され、尚ほ彼が圖書館を建て王及び豫言者の書、ダギデの書、聖なる奉納物に關はる公けの記錄翰を集めたる事も誌さるゝなり。同じくユダも亦戰爭によりて散逸したる總ての文書を我等のために集めて、其等は今も我等と偕にあるなり。もし何にても所要あらばそを得んために使者を送り來るべし。○我等は潔めを守らんとするに因り汝等に書き送る、汝等同じ日を守らば誠に宜し。總て彼の民を救ひ嗣業と王國と祭司職と聖することとを律法によりて約束し給ひし如く總てに回復したまへるものは神なり。我等は久しからずして恩を我等に降し、天下の凡ての地より我等を聖なる所に集め給はんことを神によりて望む。彼は我等を大なる災厄より救ひ又所を潔めたまひたればなり。

今我等は、ユダ・マッカバイオとその兄弟等、大なる宮潔め、壇の奉獻、アンテオカス・エピファネス、その子ユウバトルとの戰爭、ユダヤ人の宗教のために勇ましかりし者共に天よりの兆の明かに見えしこと、小人數にて能

く全國を救へること、天が下に名高き神宮の再興、市の解放、律法の支持されたること等、凡てクレネのヤソンが五巻の書冊に書きしるしたる事柄を玆に一巻のうちに約めんとするなり。

〔三〕 祭司長オニヤス神を敬ひ惡を憎みしにより、律法は能く守られ、平和は聖都にやどり、王たち宮を崇めたり。アジヤのセルコス王のごときも自ら犧牲の祭に屬する費を總て負擔したり。然るに玆に宮の監察官とされたるベンヤミンの支族のシモンなるもの、都の賣場を管理することにつき祭司長と爭ひて不利となるや、當時ケレスリヤとペニケの總督たるアポロニオにゆきて、大凡幾許なるやすら知るべからず、且つこの巨額は犧牲の用途にはかゝはりなくして、王の手中に收めんと欲して能はざるにあらざるを告ぐ。アポロニオは王と會したるとき、己が聞き及びたる金子につきて物語れり。而して王はその會計官ヘリオドラスにその金子の移管を命じたれば、彼はケレスリヤとペニケの邑々を巡視する態を粧ふて、實は王の意圖を遂行せんとして出發し、エルサレムに著するや、恭々しく出迎ひし祭司長に告ぐるに、彼が聞き及びたる事柄と、且つこれがために來れるよしを以てし、實否如何を質したれば、祭司長は寡婦と孤兒の救濟のために積み蓄はへられたる金子あり、又貴き人トビヤの子ヒルカナサスのものなる若干の金子あり。事實はシモンの僞り告げたるが如きにあらず、又これが總額は銀四百タラント、金二百タラントなりと云ひ、場所の神聖と世こぞつて崇むる宮の犯し難き威嚴とに信託せられたるそれらのものに對して不義を敢て爲すあたはざるよしを答へけるが、ヘリオドラスは王の命令なりと强ひて言ひ張れり。〇かくて日を定め審判を行ふことゝなりたれば、市の驚愕は一方ならず、祭司は祭司服を着けて壇のまへに身をひれ伏し、天を仰ぎ、宮の貯蓄にかゝはる律法を與へ給ひしものに呼ばはり、それらの金子のたくはへられたる者等のために安全ならんことを祈れり。祭司長の樣子を目覩し

たるものは、諮詢にても心に悼みたり。そは彼の顔の相も色も心の憂きを現はせばなり。かく宮の今にも辱しめられんとするより、民擧つて頌求をなさんとして、家に在りし者は馳せいでて群がりたり。婦は膚に麻の衣をつけて衢路に集まり、室に籠りし處女は或は門に或は垣のところに共に走りゆき、或ものは窓を開けて外を眺めたり。みな手を天にのべ嚴かなる頌求をなしたり。〇さてヘリオドラスは、命ぜられたる所を行はんとて、兵士と偕にまさに府庫に踏込まんとせしとき、彼等は諸の靈及び諸の權能の主の大顯現によりて、いとど懼れあへり。人々は美裝の馬に跨れる異形の騎者、猛然走りきたりて馬の前脚にてヘリオドラスを蹶殺すを見たり。馬上の者は金の甲を著けたるがごとく見ゆ。なほ二人のもの騎者の前にあらはれしが、孰れも青年にして力飽まで超れ、服裝優雅にして騎者の左右に立竝び、絕えず彼を笞ちたり。彼忽ち地に倒れ、大なる闇黑その上に來れり。彼と偕にありし者共、彼を抱きあげ、輿中に入れて運び去りぬ。多くの供人と總ての衛兵を引率して、將に府庫に闖入せんとせし彼は、今は全く無援のものとなりて、一同神の主の顯はれたまへる後に歡喜に充つるところとなりぬ。〇へり。驚慌畏懼にみたされたる宮は、今や全能なる主の顯はれたりと王の考ふるに至らんかと窃かに恐れて、彼の救はるるために犧牲をもち來れり。かくて祭司長が挽回の祭を行へるときに、同じ二青年は同じ服裝にて再びヘリオドラスに現はれ、曰ひけるは、『主汝に生命を賜へるによりて、汝祭司長オニヤスに大なる感謝をなすべし。汝は天より笞うたれたるものなれば、汝神の稜威を總ての人々に告げ知らすべし。』と。かく云ひて二青年は掻き消すごとく失せたり。ヘリオドラス乃ち主に犧牲をさゝげオニヤスと親しく語らひて王の許に歸り、己が見

たる神の大なる御業を總ての人々に證したり。〇王が、『エルサレムに再び遣はすに適したるは如何なる人ぞ。』と問ひけるとき、彼曰ふ、『汝にもし敵又は陰謀者あらばこれを彼處に遣はさるべし。萬一生命冥加に歸り來るとも、いたく笞うたれて戻り來るべし。天をその御住居となし給ふもの彼處に在す。害をなさんとて來る者を彼は擊ち亡したまふなり。』と。こはヘリオドラスとエルサレムの府庫の守護されたる歷史なり。

〔四〕　さきに金子のことを告げ、國を賣りたるシモンは、オニヤスを讒誣して曰ふ、『ヘリオドラスを唆かしたて是等の惡事を行はしめたるはオニヤスなり。』と。彼は敢て市の恩惠者、同胞の守護者、律法の熱心者を國賊と呼べり。かくて不和益々募りて終にシモンの信認せる者の一人によりて血を見るまでに至るや、オニヤスは成行の險惡と、總督アポロニオがシモンの憎念を益々煽ると見、民の利福を望みて王の許に赴けり。そは王の賢慮なくば國の平和を得るとも、シモンがその狂愚を棄つべきを冀待すべからざるを以てなり。されどセルコス死し、エピファネスと云はれたるアンテオカス新たに王位に卽くや、オニヤスの兄弟ヤソン彼を押除けて祭司長の職に就き、王に謁して銀三百六十タラントと他の歲入より八十タラントを王に約し、もし王にしてその權威により、彼にギリシヤ式の體育館と遊勤場を建て、是に於て教練さるべき青年團を起し、又エルサレムの民をアンテオケ市民として登錄する事を許さるゝに於ては、更に百五十タラントを出すべしと約し、王のこれを諾ふや、彼は機を失はず直ちに律法の禁じたる慣行を入れて、國民の風俗を覆さんとせり。かく神を敬はず、祭司長にもあらぬヤソンのただならぬ冒瀆のためにギリシヤの風俗は大に高まり、外國の宗教は弘まり、祭司等は壇に事ふる熱心なく、聖所を厭ひ、犧牲を忘り、律法にかなはざる觀覽物を樂まんとして體育館に急ぎ、最早彼等の先祖の名を汚すを何とも思はざるに至りぬ。このため痛ましき災厄は彼等に臨みたり。そはかくも彼等が熱心にその慣行に遵ひ、事毎に同

じからんと冀ひたる當の人々こそ、反て彼等の敵とならんとするものなれ。神の律法に背きて不虔を行ふは輕からぬ事なり。時來りて是等の事を示すべし。　○玆に五年毎に行はるゝ競技、ツロにて行はれ、王の臨席しける時、奸惡なるヤソンはエルサレムのアンテオケ人にして宗教に熱きものを使とし、ヘラクロスの供物にとて銀三百ドラクマを携へしめたり。　○三年の後ヤソンは、王に金子を携へ、且つ或る必要の件につき報告をなすために、シモンの兄弟メネラオを遣はしたり。されど彼は王に取りいり銀三百タラントを以てヤソンよりも高價にて祭司長職を買收し、王の授職令を受けてエルサレムに到りしが祭司長の職にふさはしき何一つも携へ來らず、唯殘酷不仁なる專制者の情慾と、野獸の猛々しさとあるのみ。己が兄弟を押除けたるヤソンは、等しく亦他のものにより押除けられて、アンモン人の國に追はれ、メネラオその職位を獲たりしが、王に約束せし金子は正しく納めず、このため王の前に召喚さるゝに至る。されど玆にタルソ及びマロスが、王の寵嬖アンテオキスに贈與されしより、彼處の者共王に叛きしかば、王は顯官アンドロニカスを代理とし殘し置き、事件鎭定のためキリキヤに急行したり。メネラオは好き機會なりと、宮より盜みとれる金の器具をアンドロニカスに贈り、又その或るものをツロ及び附近の市邑に賣りたり。オニヤスこれを確め知るや、烈しく彼を詰責して、アンテオケの附近なるダフンに在る聖所に退引したりしかば、メネラオはアンドロニカスにオニヤスを殺さんことを願ひしに、アンドロニカスは僞りてオニヤスに到り、友として迎へ、誓をなして右の手を與へたり。彼は疑はれたるも、切りに勸めてオニヤスを聖所の外に出でしめ、信義を無視してこれを害したり。　○王のキリキヤより還るや市のユダヤ人はアンドロニカスを王の前に訴へ、ギリシヤ人も惡をにくみて亦これに加はり、オニヤスの殺されたる不義を鳴らしたり。王は被害者の方正なる爲、人を思ふて眞情より哀悼して流涕し、憤りてアンドロニカスの紫衣を

剝ぎ、市中を引廻して、オニヤスの不義を加へられたる所に引きゆきてこれを死刑に行へり。主罰を彼に報ひたまへることかくの如し。　○さてルシマコスは、メネラオの同意を得て多くの冒瀆を市中に行ひ、その風聲の廣く外にひろまるや、民はルシマコスに集まれり。宮の金の器具は、多く既に取り去られしなり。群衆暴動を起すや、彼は怒氣にみち、三千人を武裝せしめ、暴行を以てこれに對應し、年邁ぎし狂愚なるアウラヌスなるものこれを率ひたり。民はルシマコスの來襲を知るや、或は石を取り或は木材を取り、或は近くにある灰を握り、ルシマコスの上に投げつけたりしかば、これがため多くのもの傷けられ、或は地に仆れ、他の者は逃れ、冒瀆の巨魁は府庫の傍にて殺されたり。　○されどこの事につき罪はメネラオに及ばんとし、王の三人のもの王の前に陳情したる三人のものを知り、王の意を解くを得ば、多くの金子を以てすべしとドルメネスの子プトレマイオに約したり。プトレマイオ乃ち巧みに王の心を變へしめ、メネラオを訴より釋放し、彼の訴人は反つて死刑を言ひ渡されたり。このためツロの人々は惡を憎む心より手厚く彼等を葬りたり。メネラオは權勢を占めたる者の貪婪に乘じ、依然その職に在りて同胞を賣り惡事を肆にしたり。

〔五〕　當時アンテオカスは第二回のエジプト侵入を行へるが、玆に凡そ四十日のあひだ、金を織込みたる衣を着、槍を提げたる騎士一隊の兵士の如く全市の上空に現れて馳せまはり、陣を布きたる一隊の騎士と入り交りて合戰したり。これを見たる者はこの異象が吉事のために與へられたるものならんことを祈れり。○玆にアンテオカス死去の虛報傳はり、ヤソンは千人許の兵をもて突然市を襲ひ、市はまさに陷らんとしてメネラオは城內に逃る。ヤソンは同胞に勝つことは自己の最も大なる損失なるを思はず、無抵抗なるわが市民を容捨なく屠り殺せる

が、到底權を得るあたはずして、終に反逆の報をうけ末路哀れに、再びアムモン人の國に出奔し、アラビヤの王アレタの前に罪せられ、市邑より市邑へと追ひまはされ、律法に背ける者として憎まれ、祖國を賣り同胞を賣りたる公敵として忌まれ、エジプトに追ひ込まれたり。かく祖國より多くのものを追ひ出せる彼は、血族たるの故を以て救助を得べしと思ひてラケデモ人のうちに難を避けて異境に客死し、多くの者を曝りて葬りもせざりし報ひに、歎くもの無く、葬りを行ふものなく、先祖の墓に身を横たふることも得ざりき。　〇さてこの事の王のもとに傳へらるゝや、王はユダヤが叛けるなりと思ひ、甚だしく怒りてエジプトを出發し、武力にて市を畧取し、その兵士に命じ途上にて會ふほどのものを悉く殺し、屋の上にのぼりたるものをも殺さしめければ、老若男女を問はず、嬰兒すらも荒々しく殺されたり。かくて三日の間に八萬のものは落命し、賣られし者また殆んど同數なり。彼は尚ほこれに飽き足らずして、國を賣り律法を賣りたるメネラオを案内となして、此上なく神聖視さるゝ神宮に闖入し、不淨の手にて聖なる什器、又他の王等が恭々しく奉納したるものなどを引き下ろして兵士に携へゆかしめたり。アンテオカスは市に住む諸人の罪のために主たる神の怒りて暫らく市を顧み給はざるものなるを思はざるまでに心慢りたりき。げにこの市が諸の罪にて包まれをらざりしならば、先きに府庫を監査するためセルコス王に遣はされたるヘリオドラスの如く、この人も笞うたれて歸りしならん。されど神は場所のために民を選ばず、民のために場所を選びたまへり。こゝをもて場所も民に臨みたる災厄にあひたれば、後その益をも頒ち、全能者の御怒によりて棄てられたる場所は、大なる主の復和をなし給ひしによりて、再び總ての榮光に回復したり。

〇さて宮より一千八百タラントを掠めたるアンテオカスは陸上を航し海上を徒歩にて渡らんとすることアンテオケに急ぎたり。彼はフルギヤ人にて彼をかしこに立てたる者よりも品性の更に野蠻的なるピリポにエ

ルサレムを治めしめ、又アンドロニカスをゲリジムに立て、なほ惡逆並びなきメネラオをして民を窮しましむるにまかせたり。且つ彼はその市民となせるユダヤ人に惡意を懷き、かの憎むべきアポロニオに二萬二千の兵を授け、命じて丁年となれる總てのものを殺し、又婦女と若者とを奴隷に賣らしめたり。彼乃ちエルサレムに來り、平和をよそほひ、安息日にユダヤ人の業を休むを俟ちて、わが率ひたる者共を武裝せしめて、安息日を祝はんとてなら

〔六〕　この後久しからず、王は一人の老アテネ人を遣し、ユダヤ人をして強ひてその先祖の律法を離れ神の法度に背かせ、又エルサレムの聖所を汚しこれをゼウス・オリムプス大神宮とよび、ゲリジムにある聖所は外國人の守護者ゼウス・クセニオスの宮と名つけしめたり。この災の臨みたるは民にはいと歎はしきものなりき。そは神宮は異邦人が遊女を聖なる境内にまで引き入れて酒色に耽るところとなり、犧牲の壇は律法の禁止する惡むべきものをもて盛られたればなり。人々安息日を守るを得ず、ユダヤ人たりと告白するさへ能はざるなり。王の誕生日に彼等は月毎に强ひて犧牲を食はせられ、バッカス神の祭日には常綠藤の環形の冠をつけて行列を作りつゝ赴かざるを得ざりき。玆にプトレマイオの入智慧にて、附近のギリシャの市邑に布令してユダヤ人に同一風俗を守らせ、犧牲を食せしめ、ギリシャの儀式に往かざらんとする者を死刑に行ふべきことを以てせり。子に割禮を受けしめたる二人の婦を彼等は市中を引き廻りて後、乳兒諸共石垣より眞逆さまに突き落し、ひそかに附近の洞窟に集まりて安息日を守らんとせし他の者はピリポの知るところとなりて一同燒き殺されたり。われこの書を讀む者が災厄のために失望することなく、是等の罰は彼等を滅さんがためにはあらずして我等同胞を矯正せんとするも

のなるを悟らんことを勸む。そは惡を行ふ者共永く苦しまずして立どころに報ひらるゝは大なる恩惠の徴證なればなり。他の國人にありてはその罪の斗目の滿されたる時に及びて罰せらるゝも、我等にはかくはなし給はざるなり。彼はその憐憫を我等より取り給はず、縱令災厄をもて懲し給ふとも彼はその民を棄て給はざるなり。我等は再び本文の物語に戻らざるべからず。さて重だりし事が汝等總てに警告となるに充分ならんことを望む。我等は再び本文の物語に戻らざるべからず。さて重だちたる學士の一人エレアザルは無理に口をあけられ豚肉を食はしめられたり。されど彼は汚をうけて生命をせんよりも榮光ある死を選び、自ら進みて刑に行はれんとして肉を吐き出したり。彼と知りあひなりし犧牲の祭を司る者共これを見て、彼を傍に伴ひゆき、彼の用ゆるも差支なき自身の食用肉を携ち來りて王の命じたる如く犧牲の肉を食せしが如くせんことを內密に彼に求めたり。されど彼は堅き決心をなし曰ひけるは、『かゝることをなさば年若き多くの者共、エレアザルは九十の老年にもなりて異邦人の教に入れりと言ひ囃さんなり。彼の生命をながらふべき願よりわが行へる僞によりて我に欺かれ、我は又我にてわが老ひし齡に汚點をのこすべし。たとひこの世にて人の罰より救はるゝとも、全能者の手を免るゝこと能はず。この故に今わが生命と勇ましく別れて、我は老ひしわが年甲斐を示し、わが後に貴き模範を弱年者にのこさん。』と。彼は是等の言をかたりて直ちに刑に就きたり。彼を引きゆける者共は、先に有ちたる好意を今や惡意に一變したり。彼は鞭うたれて將さに絶命せんとするとき、大聲に曰ひけるは、『聖なる知識をもちたまふ者よ、主は死よりわが救はるべきを知召し給ふ。我はわが體の笞うたるゝ烈しき痛苦を耐えたり。我は彼を敬ひ畏こむために喜びて是等の事を耐え忍ぶなり。』と。かくこの人もかゝるさまにて死し、その死をもて唯に弱年者にのみならず、多くの國人に貴き模範と德との紀念を遺したり。

〔七〕　茲に又七人の兄弟あり、母と共に王の命により捕へられ、笞うたれ、辱められ、豚の肉を食はせられたるが、その一人凡ての代言者となり曰ひけるは、『汝如何なる事を我等に問ふて學ばんとするか。我等は先祖の律法を犯さんよりも、寧ろ死を願ふなり。』と。王は怒ること甚だしく、命じて鍋と釜とを熱せしめ、その熱するを俟ち、命じて彼の舌を抜き、頭皮を剝ぎ、手足を切斷し、他の兄弟等及び母をしてこれを見せしむ。その全く不具とせらるゝや、王は命じて、半死半生の彼を鍋中にて燒かしむ。その臭氣遠くまで傳はるや、母と兄弟等は、立派なる往生を遂げさせんとて、互にかく云ひて勵ましあひぬ。『主なる神は照覽ましますなり、げに我等を憐み給ふなり、モーセがその歌にのべたるごとく彼はその民を憐み給ふべし。』と。次に彼等は、第二のものを嘲弄せんとして引き出し、頭皮を毛髪と共に引き剝ぎ、問ひ曰ひけるは、『汝の五體一々が罰せられざるうちに食ふや否や。』と。然るに彼はその母語（くにことば）にて彼等に曰ひけるは、『否』。　また死に臨みて曰ふ、『匪徒よ、汝は我等のこの世の生命を奪ふ、されど世界の王は彼の聖なる律法のために死する我等を永遠の生命に甦らせ給ふべし。』と。次に第三のものに及びしが、彼は急ぎて舌を出し、勇ましく手をさしのべ、曰ひけるは、『我は天より是等のものを受けたり、彼の律法のためならんにはわれ是等のものを彼より受けんことを望むなり。』と。王も王と偕に在りし者も若者が苦痛をものともせざる勇氣に驚きたり。彼等は第四のものをも同樣になせり。かれ將に死んとするや、かく曰へり、『我等は人の手によりて死するも、神によりて再び甦へらさるべしとの神により興へられたる希望を有す。汝等は生命に甦へらざるべき望をもたざるべし。』と。次に彼等第五のものを引き來りて同樣に取扱ひたり。彼は王にむかひ曰ひけるは、『汝は朽ち果つべき者ながら、人々の上に權をもてるものなるが故に欲する所を行ふといへども、汝暫らく俟ち、かの大能が如何に汝とその後裔と

を苦しめ給ふべきかを見よ。』と。その次に彼等は第六のものを引き來れり。彼その臨終に曰ひけるは、『誤まり欺かるゝ勿れ、我等は神に罪を犯したるが故に是等の患難にあへるなり。されど神に逆ひて戰ひ、しかも罰せられずにあるべしと汝考ふる勿れ。』と。就中驚嘆すべきは母なりき。その七人の子が同じ日のうちに殺されたるを見つゝも、主を望み勇ましく耐えたればなり。彼女は彼等の父祖の言にて彼等の一人々々を勵まし、優しき婦人の思を丈夫の熱情こめて鼓舞し彼等に曰ひけるは、『我は如何にして汝等がわが胎に來りしやを知らず、また汝等の靈と生命とを汝等に與へ、汝等一人々々の肢體を造りしも我にはあらず。げに世の創造主、人と萬物の起原を造り給ひしものは、汝等が今かの律法のために苦しめらるゝをもて汝等を憐み、靈と生命とを再び汝等に賜はるべし。』と。茲にアンテオカスは彼女の言づかひにより蔑すまれ咎められたりしと疑ひ、末子の未だ息あるうちに當に言にて彼に勸めしのみならず、誓ひて彼に約するに、彼にして若しその先祖の遺風を棄てだにせば富貴も思ひのまゝなり、取りたてゝ國務をまかすべしと曰ふ。然るに若者の敢て顧みざるより、王は彼の母を呼び出して若者の助命を勸めしめたるに、殘忍なる壓制者を蔑すみ笑ひつゝその國語にてかく語れり、『わが子よ。汝を九ケ月わが胎にやどし、三年乳を吸はしめこの年輩になるまで汝を養ひそだてたる我を憐め。わが子よ。汝目を天と地にむけ、萬物を見、神の無より是等を造り、人間も亦た同じくして存在するに至りしことを認めよ。この暴殺者を恐るゝ勿れ。汝の兄弟を辱めずして一死を選べ。神の憐憫によりて我は汝の兄弟たちと偕に再び汝を受くべし。』と。彼女のいまだ曰ひ終らぬうち、若者曰ひけるは、『我は王の命令には從はじ。我はモーセによりて我等の先祖に授けられたる律法の命ずるところに聽くべし。ヘブル人を苦しむるため惡しきあらゆる事を工夫しいだせる汝は、決して神の御手を免かれざるべし。我等は自らの罪の故によりて、か

くは苦しむなり。活ける神は、我等、懲し矯すために、暫らく我等を怒り給ふとも、再びその僕等と和らぎたまふべし。されど汝、鳴呼汚れたる極惡の者よ。その手をあげて天の子等に逆らひ、頼みなき望をもて慢心する勿れ。暫らくの苦痛を耐ゆる我等兄弟は、神の永遠の生命の契約の下に今死するなり。されど汝等は全能の神の審判によりて正しき罰を蒙るべし。』と。王はこれを聞きて甚だしく怒り、彼を他の者にも過ぎて虐遇しけるが、彼は全く主に倚頼し、汚れなくして死せり。凡ての子等の後に母も死したり。犧牲の祭の厲行と王の蠻行とに就きては、こゝに記せるところにて足れりとすべし。

〔八〕 ユダ・マッカバイオ及び彼と倶にありし者等は、窃かに邑々を往來して血族共を語らひ、教を遵奉する者を集めて六千人ほどを獲たり。彼等主に呼ばり、虐げらるゝ民を顧み、不虔なる人々に汚されたる聖所を憐み、彼に呼ばる血に耳を傾け、罪なき幼兒を殺せる無法者、かの御名を汚したる者を心に憶えて惡を憎み給ふことを示さん事を願ひ求めたり。かくてマッカバイオがその部下を訓練するを見しとき、異邦人は直ちに彼が抵抗しがたきものなるを知りたり。そは主の怒は今や憐憫に變りたればなり。彼は突然來りて市々邑々に火を放ち、多くの敵を逃げ去らしめ、要所を占領し、特に夜襲に奇功を奏し、彼の勇敢は到る處の人口に噂炙したり。 ○ピリポはこの者が地を蠶畧し、且つ次第に榮えゆくを見てケレスリヤとペニケの總督プトレマイオに書を送り、王の為に盡力を求めたり。プトレマイオは直ちに王の友の一人パトロクラスの子ニカノルを立てこれに二萬を下らざる兵を率ひユダヤの民を全滅せんとして急派したり。彼と倶に又ゴルギッスを加へたり、彼は軍事に巧みなる首將なり。ニカノルはユダヤ人の捕虜を賣りて日ローマ人に拂はざるを得ざる二千タラントの貢を王のためにつくらんと決心したり。かくて直ちに沿海地の市場にユダヤ人奴隷の賣買を布令し、一タンラトにつき九十人の奴隷

を以てすべしと約し、全能者の審判が彼に臨むべき事を敢て豫期せざりき。○ニカノルの攻め來れりとの報、ユダの耳に入るや、彼は偕にありし者共にこれを告げたるが、神の審判を信ぜざる臆病者は逃れ去りたれども、他のものは彼等が殘せる一切を賣り、これを以て姦惡なるニカノルが奴隷に賣りたる者を彼が買受人と相會せざるに先だち救ひたまはんことを主に求めたり。マッカバイオ乃ち部下六十人を集め、聖所に行はれたる不義、又市に加へられし凌辱、先祖傳來の遺風の覆へされたること等を目前に示して曰ひけるは、『彼等は武器と血氣とを信頼すれども我等は全能の神に信頼するなり。神は我等に刃向ふ者共、又全世界にても一擧手にてこれを薙き倒すを難しとし給はざるなり。』と。かく語りて尙ほ細々と先祖のときの事蹟を擧げ、セナケリブの時にアッスリヤ人の陣營の者十八萬五千人の擊ち殺されたること、又バビロンに於てゴテ人との合戰のときも天祐のために大なる分捕物を獲たりしことを以てしたり。是等の言をもて大ひに彼等に授くるに神祐といふこの戰詰を以てし、シモン、ヨセフ、ヨナタンに各一萬五千人の兵を授け、又エレアザルをも立て、彼等が律法と祖國とのために死も敢て辭せずとの覺悟を示すやマッカバイオは軍を四分し、ニカノルと戰を交へたり。全能者彼等の味方となりて戰ひたまひしかば、彼等は敵兵九千人以上を斃して潰走せしめたり。而して彼等は奴隷商の金子を取り且つ逃ぐる者共を遠くまで追擊せしが、宛かも安息日の前日なりしをもて追擊を中止して軍を還へしたり。彼等は敵の遺せる兵器を拾集し、分捕物を取りて後安息日を守り、主が今日に至るまで彼等を保ち、彼等のために恩の魁をあたへたまへることのために、未曾有の讃美と感謝とをさゝげたり。安息日を終りて彼等は分捕物を不具者、寡婦、孤兒に分ちあたへ、殘餘を己と子等のあひだに分ちて後、共々祈をなし、憐憫ある主がその僕等と全く和らぎたまはんことを求めたり。○なほ彼等はチモテヤス及びバッキデスの軍勢と

の戰に於て二萬人以上を殺し、多くの城砦を占領し、捕獲せる敵の兵器を總ては要所に貯藏し、その殘餘をエルサレムに携へゆけり。彼等は戰捷の祝ひを先祖の市にて營み、聖なる門に火をかけたる者を燒き殺したり。その中には外庭に逃れ出でたるカリステネもありて何れもその不虔にふさはしき報をうけたり。〇ユダヤ人を奴隷として買取るために來れる一千人の商人を連れたる匪徒ニカノルは、己れが見くびりたる者共のために卑ふせられ、單身喪家の狗の如くにしてアンテオケに着し、世間に言ひふらして曰ふ、『ユダヤ人は彼等のために戰ふものをもてるなり、彼等は彼によりて命ぜられたる律法に服ふが故に破りがたし。』と。

〔九〕 そのころアンテオカスはペルシヤの地方より敗衂して還りたり。彼はペルセポリスと呼ばるゝ市に入りてこれを占領し、宮を掠めんとして、反つて民のために擊ち敗らるゝの不面目を見たりき。ニカノル及びテモテヤスの軍勢にかゝはれる報知が彼のもとに達したるはエクバタナにありし時にて、彼は如何にしてかユダヤ人に報ひんと欲し、兵車を駛する者に晝夜兼行を命じ、懽語して曰ふ、『われ到らんときエルサレムをユダヤ人の共同墓地となすべし。』と。然るに一切を照覽し給ふイスラエルの主は、烈しき病をもて彼を打ち給ひ、彼自らこの語をかたり終らぬうちに不治の腹痛を發したり。彼は數知れぬ人々の腎腸を夥たゞしく苦しめたるものなれば、かゝる報も當然のことなりとす。さるにても彼は尚ほ剛腹に益々ユダヤ人にむかひて殺氣を吐き、命じて旅を急がせけるが、兵車の疾走する際墜落して總身に痛傷を負ひ、今まで海の波も己が命のまゝなり、高き山も秤にて量べしと思ひし彼も、憐れ乘物に昇れて、總ての者に神の明かなる能を示しぬ。彼の體よりは蛆這ひいで、全軀は其の堪へがたき臭氣に面を背け、誰れも、これを昇がんとするものなく、痛は刻々に募りて神罰の下にあるを知るに至り、懲慢の心も挫けて曰へり、『神に服ふは正しきことなり、死ぬべき者は心懲るべきにあらざるなり。』

と。又かく曰ひて主に誓へり、『踏み躙りて共同墓地となすべしとて急行せし聖なる市にも足らず外に投出して鳥の餌食とせしユダヤ人の凡てをアテネの市民と同等になさん。前に掠めたる聖所は最高の供物をもて飾り、幾倍にもして凡ての聖なる什器を回復し、又己が歳入より犠牲に要する費用を支辨すべし。且つユダヤ人となりて人の住める總ての所を行き巡り神の力を言ひ弘むべし、』と。されど神の審判は正しく彼の上に臨みたるものなれば彼の苦痛は依然として止まず。彼は絶望し、左の如き歎願の書をユダヤ人に書き送れり。『王たり總督たるアンテオカス、その同胞市民たる貴きユダヤ人に書を贈る、願くは多くの歡喜と健康と繁榮のあらんことを。我はペルシヤより歸り、歎はしき疾に罹りたりと雖も、尚ほ癒ゆべき望をもてり。されど我が父はスリヤ沿海の遠き地方に軍を起せし時に際し、彼の後繼者を立てたり。こは何事かの違算を生じ、或は好ましからざる凶報の來らんには、國に留まる者誰の繼ぐべきかを知り得て面倒の生ぜざらんためなり。かつ我が王國に隣接する君等が機會を窺ひ、又前途の異變を俟てるを思ひ我はわが子アンテオカスを王に立てたり。彼は上部地方にわが急行せるとき屢々汝等の多くに託したるものにて、我は左の如く彼に書き送りたり、「我は汝に求む、我とわが子とに依然忠信ならんことを」、そは我は彼がわが目的に添ひて汝等を好遇すべきことを勸めたればなり。』と。　○かく殺人者たり冒瀆者たる彼は他の人々を苦しめたる如く己も亦常ならざる痛苦にあひて最も憐むべき運命にて異境の山地に死したり。その乳兄弟たるピリポは骸を本國に携へしが、アンテオカスの子を恐れ、エジプトのプトレマイオス・フィロメトルの許に赴けり。

## 〔一〇〕　マッカバイオとその部下は、主の導きにより宮及び市を回復し、異邦人が市場に築きたる壇と聖なる境内の石垣とを毀ち、聖所を潔め、犠牲の壇を別に造り、石を打ちて火をつくり、二年の間絶へし犠牲を献げ、香

を焚き、燈を點し、パンを供へたり。これを終りてのち俯伏し主に願ひて、かかる災厄に再び會はせ給はざらんことと、もし罪を犯すとも、主忍びて懲罰を行ひ神を汚す野蠻なる異邦人の手に渡したまはざらんことを以てしたり。聖所が潔められしは同じ月キスリウの二十五日にて異邦人が聖所を汚せるその當日なり。彼等は遠からぬ以前搆廬節（かりほずまいのいはひ）の祝祭のあひだ獸の如く山々を轉々し洞穴をさすらひしことを追回しつゝ、その祝祭日に於る如く歡喜のうちに八ケ日を守り、感謝の歌をさゝげ、又この日を年毎に守るべきことを全てのユダヤ人に命じたり。

○エピファネスと稱へられしアンテオカスの治世はかくの如くに終れり。今我等はこの不虔なる人の眞の子たるを示したるユウパトルと名づけられしアンテオカスの事を記し、簡單に戰爭の災禍を書きあつむべし。彼は王國を嗣ぎたる時にリシヤスなるものを尚書職に任命し又彼をケレスリヤとペニケの總監に任命したり。玆にマクロンと云はれたるプトレマイオは戰爭政策の誤れるを知り、寧ろ彼等に義を行はんとて彼等と平和を繼續せんことを努めたりしが、王の友等によりユウパトルの前に糾彈せられ、フィロメトルによりて委任されたるクプロを放棄したるより、國賊と二言ごとに呼ばるゝを聞き、アンテオカス・エピファネスのもとに去りけるが、重く用ひられざるを見るに及び毒を仰ぎて自殺を遂げたり。

○然るにゴルギヤスはその地方の總督とせらるゝや、傭兵を用ひて絶えずユダヤ人と戰を交へ、イヅミヤ人もまた彼と偕にユダヤ人を惱ませたり。マッカバイオ及びその部下は嚴かなる歎願をさゝげ、神に祐助を祈り、イヅミヤ人の城砦に突進し、彼等に猛烈なる攻撃を加へてその處を占領し、敵にして殺されしもの二萬を超えたり。さはれど玆に九千人計のもの、用心堅固なる城砦の二に遁れ、且つ重圍を支持する設備の遺漏なきを知りたるマッカバイオは、シモンとヨセフ、又他にザカリヤ及びこれと偕に在りし者共に彼等を圍むに足る兵力を殘し置きて、自からは最も必要なる戰線に就きたり。然るにシモンの一隊は

貪心を生じ、城内の者に賄賂を食まされ、彼等の或る者を遁走せしむるために七萬ドラクマを受領したり。この事マッカバイオの聞く所となるや、彼は民を率ゐる者を召集し、金のために彼等の兄弟を賣りたるを詰り、反逆者を死刑に行ひ、かくて立所に城砦を占領して事毎に功を樹てたり。○先きにユダヤ人に破られたるテモテヤスは、大數の外國兵と、アジヤに屬する少なからざる騎兵とを集めて、兵力によりユダヤを攻畧せんとするものゝ如くに迫り來れり。然るに彼の近づくやマッカバイオとその部下は頭に灰を被り、麻布を腰に纏ひ、神に數願し壇の前の段に俯伏し、律法の告ぐる如く、敵には敵となり、仇には仇となりて、彼等に恩を施し給はんことを祈り、終りて彼等は武器を取り、進みて敵の近くに來りて乃ち止まれり。日上るや兩軍兵を交へけるが、一方はその力以外に主を成功と捷利の保證とし、他方は單にその武力を賴みとしたり。果せるかな、戰方さに酣にして、玆に天より琦羅びやかに甲ひ、金の鬱を著けたる騎士五人顯はれ、二人はユダヤ人を先導し、マッカバイオを彼等の中間にし、武器を以て周圍より安全に守護し、敵にむかひて矢と雷電とを放ちかけたれば、敵軍これがために眼眩みて潰裂し、殺さるもの騎兵六百歩兵二萬五百人なりき。マッカバイオとその部下は心に喜びて二十四日間城を圍みたり。城内のものは要害堅固なる城に逃げ落ちけるが、妓に二十五日目の朝となり、マッカバイオの隊の或る者共の憤慨はその極に達して豪膽なる突貫を强行したれば、他の者共われ劣らずと等しく登りゆき、ために城内の軍擾れたるところに、火は放たれ、冒瀆者は炎々たる火焰の裡に生きながら燒かれたり。同時に他のものは城門を毀ち殘留の軍勢を進み入らしめしかば、市は終に占領されぬ。身を穴に匿せしテモテヤス、その兄弟ケレヤ及びアポロファネスは皆殺されたり。於是マッカバイオの軍はイスラエルに大なる恩を施し捷利を與へ給ひし主を歌と感謝とをもて讃めたゝへたり。

〔一一〕この後久しからず、王の守護者、血族にして又尚書職たるルシヤスはマッカバイオの成す所を喜ばず、歩兵八萬及び總ての騎兵を召集してユダヤ人の居住地となし、宮に貢を課し、且つ年々祭司職を競賣に附せんと望みたるなり。彼は神の力を眼中に置かず、單に己が軍勢と象とを頼みて心高ぶり、エルサレムより五里ばかり距りたるベテスラの附近まで來り、勢を鼓して押し迫りたり。マッカバイオとその部下は、彼が城砦を攻め圍みしを知るや、一同主に歎願をなし、イスラエルを救はんがために御使を遣はし給はんことを涙をもて求めたり。かくてマッカバイオは先づ自から武器をとりて他を鼓舞し、衆彼と偕に進み出でしが、エルサレムの近所にありし時しも、金の武器を打ち振れる白衣の一騎士彼等の先頭に立つを見たれば、一同諸共に憐憫ある神を讃美し、益々心を強められ、猛き野の獸と闘ひ、鐵壁をも崩さんほどの勢をもて進軍したり。そは主彼等に憐恤を賜ひたればなり。げに彼等は獅子の如く敵を擊ち、歩兵一萬一千、騎兵一千六百を戮り、殘る總員を潰走せしめ、ルシヤスも亦僅かに身を以て逃るゝを得たり。彼は今回の軍にかくも慘々に擊ち破られたるを熟慮し、ヘブル人は全能の神を味方となして戰ふが故に捷つべからずと考へ、再び人を遣はし凡て彼等の權利を承認すべきを條件として和親を申入れ、且つ王を勸めて彼等の友たらしむべしと約したり。マッカバイオは一般の幸福を冀ふより、ルシヤスの提議を諾し、ユダヤ人に關してマッカバイオがルシヤスに文書を以てしたる凡ての要求は王の容るゝ所となれり。ルシヤスよりユダヤ人に書き送れるものは下の如し。〇『ルシヤス、ユダヤの民に安を問ふ。汝より遣はされたるヨハネ及びアブサロムは以下に記せる願書を予に渡せり。王はその許可すべきものを凡て許可したり。されば汝等國家に好意を表するに於ては、予も亦今後心掛けて汝等の利福に寄與するやう盡力すべし。委細の事に至りては予は汝の使

者と予より派遣せる者をして汝と交渉するやう命じ置きたり。汝等健在なれ。百四十八年デオスコリンテオの月二十四日記す。』　○王の書に曰く、『アンテオカス王、その兄弟ルシャスに安を問ふ、我等の父は神にされたるが故に、我等は彼の王國の臣民安穩に日を送り各の業務に服すべき事を定めたり。汝この故に使節を彼等に遣り、友たる右の手を與へ、彼等をして能く我等の心を知りて喜びてその許可を求めたりと聞き及び、我等は彼等の宮を彼等に回復し、彼等の先祖の遺風に從ひて生涯すべきものなる事を知らしめんとせる我等の父の意を喜ばずして、寧ろ在來の生活を選び、その律法の慣行に從ふべき業務に服さしむべし。』と。○こはユダヤ人に與へられし王の書なり。アンテオカス王、ユダヤ人の議政官、及び他のユダヤ人に安を問ふ、『汝等健かならんことを願ふよし。我等も健在なり。メネラオ我等に申告するに、汝等は家に歸りて業務に服せんことを願ふよし。されば ザ 許可を與へらるべし。而してユダヤ人は彼等の法に合へる肉を用ひ、彼等の律法を守りて從前のごとくなるべく、知らずして行へる事につきては、何等の處分をも蒙らざるべし。且つわれ汝等を慰籍せんがためにメネラオを汝等に遣はしたり。健かなれ。百四十八年ザンチカスの三十日までに家に歸らんとする者は、そのままにて彼等に書を贈れり。『ローマ人の大使クインツス・メムミッス及びテトゥス・マンリッス安をユダヤ人に問ふ。王の血族リシャスが汝等に許可せる事柄につきては我等も同意せり。されど彼が王に照會すべしとせる事柄につきては我等汝等の事情に適合するやう訓令を發するを得べきため、意見を添へて直ちに送附さるべし。こは我等アンテオケに赴く途にあればなり。故に汝等の欲するところを我等知り得るため、折返しその或るものを送附さるべし。百四十八年ザンチカスの十五日に書す。』

ニマカビー書

〔一二〕是等の契約の作成せらるゝや、リシヤスは王にゆき、ユダヤ人はその農事に服したり。然るに諸地方の總督テモテヤス及びアポロニオ、又ヒエロニムス、デモフオン、この外クプロのニカノル等安穩なる日を彼等に送らしめんとするの意なく、且つヨッパ人は彼等のうちに住めるユダヤ人の妻子諸共に彼等が用意したる船に招待したり。ユダヤ人は何事も疑はず、市の共同の布令なるに安じて招待を受諾したりしかば、ヨッパ人はこれを海につれて溺らしめたり。ユダその同胞の蒙れる慘事を聞き、部下に命じ、正しき審判者たる神に顏はりて、彼は同胞の殺害者にむかひ夜陰に乘じて港に火を放ち船舶を燒き、逃げ出でたる者共を屠りたり。邑の門の閉さるゝや彼は一人殘さずヨッパ人を剿滅せんとするを知り、彼は又夜に乘じてヤムニヤ人を突擊して港と艦隊に火を放ちしが、ヤムニヤ人が彼等のうちなるユダヤ人をも同じやうにせんとするを知り、彼は又夜に乘じて退却したりしが、その光の輝き二百四十フアロングの距離にあるエルサレムよりも遙に眺められしと云ふ。〇さてテモテヤスを攻めんとて彼等が其處より發して九フアロング進軍せるときしも、五千人ばかりの歩兵と五百人の騎兵とより成るアラビヤ人の一軍彼等を襲ひて烈しき接戰となりしが、天祐ユダとその部下にありて捷を奏するや、アラビヤの遊牧民はユダに和親を求めて彼に家畜を與へ凡ての援助を約したり。さればユダは彼等の申出を諾し、彼等はその天幕に還へり、彼も亦堅固なる石垣にて圍まれ、雜多の國人の住めるカスピンといふ名の市邑に赴かんとしたるに、住民石垣と糧食を賴みとしてユダとその部下を好遇せず、或は罵り或は甚しき瀆す言を曰ひあへり。彼等乃ちヨシュアの時に一兵を用ひずして堅固なる石垣を壞崩し給へる大なる主に顏はりつゝ猛烈なる攻擊を住民に加へて市邑を占領し、附近にありし周圍二フアロングの湖水が血を湛へたりしかと見えたるほどの殺戮を行へり。〇かくて彼等は其處より七百五十フアロングの所に引きあけ、カラックスに向ひ、トブ人と呼ばれたるユダヤ人に到りしが、テモ

テヤスはその地方に居らず。されどマッカバイオの軍將たるドシテオ及びソシパテルは二萬人以上を亡ぼしたり。而してマッカバイオは自ら率ひたる軍勢の隊伍を整へ、これをドシテオ及びソシパテルに授けてテモテヤスを擊たんとて急ぎ行きぬ。彼ユダの侵入を聞くや、直ちにカルニオンといふ城砦に女子供と荷物を送りぬ。こは彼處が圍むに難く路亦狹く近づきがたきによるなり。然るに先陣を率ひたるユダの隊伍の見ゆるや、萬事を照覽し給ふものゝ顯現に敵軍恐れて總崩れとなり、ユダの追擊益々烈しくして三萬人を斃せり。別動隊の手に捕はれたるテモテヤスは助命を得んとして彼等の多くの兩親と或る者の兄弟等は捕虜となりてわが權内にあるものなりと言巧みに、もし我を死せしむれば是我のものは顧みる能はざるに至らんといひ、切りに歸疏して確き約束をなしければ、彼等は同胞を助けんとする心よりテモテヤスを放免したり。　○ユダはカルニオン及びギナスの宮を攻めて又エフロンに向ひたり。然るに彼等は敵を粉碎し給へる主に縋びてこれを占領し、居民二萬五千人を屠り、更に急行してエルサレムを距る六百フアロングなるスクトポリスを攻めしが、其處に居るユダヤ人が居民の示せる好情を證言せるをもて、彼等は感謝をなし、尙ほ將來の友愛を堅ふし、七週の節會の近きにあるをもつてエルサレムに上りぬ。　○ペンテコステと稱せられたる節會の後に、彼等はイヅミヤの總督ゴルギアスを攻めんとて急ぎ進軍しけるが、この合戰にユダヤ人の死傷せるは少なく、その時バケノルの隊に屬するドシテオといふ騎士、ゴルギアスに肉薄し、强力を以て彼の衣を捉へて咒ふべき彼を生捕りにせんとせしが、トラキヤ人なる一騎兵はドシテオに打つてかゝり、彼の肩骨を外したりしかば、その隙にゴルギヤスはメリサに逃れゆきたり。而してゴルギヤと偕にありし者共、戰久しきに亘りて疲るゝや、

ユダは主に祈り、大聲に呼ばり、聖歌をうたひてゴルギヤの隊伍に不意打をなして彼等を潰走せしめたり。〇ユダはわが軍を集めアダラムの市に來りしが、第七日の來らんとするにより、身を潔めて安息日を其處にて守りたり。次の日彼等は、戰死者の屍を取りあつめて、これを父祖の墓に葬らんがために來れり。然るに戰死者の膚着の下に、ヤムニヤ人の宮の偶像に聖別したるものあるを見出すにいたり、皆義なる審判者たる主を讃め、犯したる罪を全く拭ひ去り給はんことを祈り、且つ目前にかく罪の罰せらるゝを見るにつけ、人々皆罪より遠ざかるべきことを諭し、一人一人より集めたる銀二百ドラクマを罪のために犧牲を供ふるため、エルサレムに送りたり。彼がかく行へるは復活を信じたるが故にて、死者の復活を望みをらざりせば、死者のために祈るは無益の沙汰なればなり。

〔一三〕 玆に百四十九年、ユダはアンテオカス・ユウパトルが大兵に將として來らんとするを聞き込みたり。彼と偕に彼の守護者又事務統率者たるルシヤスも來れり。メネラオも亦彼等に合し總督に立てられんことを心に考へて愛國を虚粧し、切りにアンテオカスを激勵したり。されど王の王は匪徒に對してアンテオカスの憤情を刺戰したれば、ルシヤスが諸の災害の目はこの者なりと告ぐるや、王は彼をベルシヤに牽き來り、彼を彼所の風俗にて死刑に行はしめたり。其處には五十キユビットの高さの塔ありて灰を充したり。塔には一種の車輪ありて人をこれに乘せ、回轉半ばにして人を灰中に落す仕掛なり。凡て冒瀆の罪又は他の大罪を犯せる者はかくして殺さるゝなり。律法を破れるメネラオに臨みたる運命は當然かゝるものなりき。彼はその上なる火と灰とを聖なるのとする壇に對して罪を重ねたるものなれば、彼の死せるも亦灰の中なりき。〇さて王の怒は甚だしく、彼の父の時にユダヤ人に臨みたるよりも遙かに大なる苦みを與へんとして來れり。ユダ是等の事を聞くや、日夜主に

頒ばんことを衆に命じ、律法と、國土と、聖なる神宮とを奪ひ取られんとする彼等に、他の敵に於けるごとく今も助を與へ給はんことと、僅かの間生き返へらしめられたる民を再び異教徒の手に渡し給はざらんことを祈らしめたり。彼等は悲みと斷食をもて三日の間休まず引續きて主に願ひ求めて共々この命ぜられし事を行ふや、ユダは彼等を鼓舞し、王の軍勢が未だユダヤに足を踏みいれずこれを占領せざるに先だち、天祐のもとに進んで戰はんと一決し、一切を天地の創造主にまかせ奉りて陣をモジンの傍に張りたり。彼は撓利は神のものなりとの合語を部下に與へ、最も敢爲なる青年の選拔隊と偕に夜に乘じて窃かに王の天幕に突擊し、二千人計を殺し、塔にありし巨象をその上にありし物とゝもに連れ下れり。彼等は總軍に恐怖をあたへて嚇々たる成功を收めて歸れり。主の祐、ユダに與へられしが故に未だ夜のあけやらぬうちにかく成し遂げられたるなり。〇王はユダヤ人の常ならざる大膽に、さらば軍署によりて功を奏すべしとて、ベテスラにあるユダヤ人の堅固なる城砦に軍を進めたるが、擊退されて失敗に終れり。而してユダは城内にある者に必要品を輸入したり。ユダヤ人に平和を申入れて、彼等は當惑し、ユダは城内にある者に必要品を輸入したり。ユダヤ人に平和を申入れて、彼等の凡ての權利を承認すべきを誓ひ、犧牲を供へ、意慕りしと聞き王はバイオを懇ろに迎へ、ヘゲモニダスをプトレマイスより ゲゼリ人の地までの總督に任じ、プトレマイスに來りしがプトレマイス人は條約を喜ばず、彼等はいたくユダヤを憤りるたれば、これを無效にせんと望みしも、リシヤは講臺に上りて極力回護に努めて慰撫し、而してアンテオケに去れり。以上は王の侵入とその退却の經緯なり。

〔一四〕三年の後ユダとその部下のものは、セルコスの子デメテリオ堂々たる軍勢と艦隊とを率ひてトリポリス の港より侵入し來り、國を占領し、アンテオカスと彼の守護者リシヤスを殺せりとの報に接せり。〇これより先き祭司長たりしものにて未だ異邦人との雜婚行はれざりし時、自ら好みて己を汚したるアルキムスなる者、如何にしても免かれ難く、又再び壇に近づく術なきを思ひて、百五十一年デメテリオ王に往きて金の冕と棧櫚の枝とを呈し、その日に彼の平和を獲たりしが、會議の席に招かれてユダヤ人の內このほか祭に用ゆる宮の橄欖の枝とを呈し、その日に彼の平和を獲たりしが、會議の席に招かれてユダヤ人の內情を問はれて、好き機會とばかりに彼はかく答へたり。『ユダ・マッカバイオを將とせるアシデヤンと稱するユダヤ人は戰爭を焚きつけ、動亂を起し、國をして平和なるを得ざらしむるなり。我は祭司長たる祖先よりの榮譽を剝がれて今此處に在り。わが總ての民は彼等のために大なる不幸にあり。ユダの生きながらふる限り國泰平を見るあたはざるなり。』と。かく聞きて王は甚しく怒り、直ちに象の指揮官たりしニカノルをユダヤを遣し、これにユダを殺し、徒黨を撲滅しアルキムスを宮の祭司長となさんことを命じたり。ユダより避難せし異邦人は、ユダヤ人の災厄損害は彼等の繁榮利福なるべしと思ひ、ニカノルに蝟集し來りぬ。〇ユダヤ人にニカノルの來襲と異邦人のこれに參加せるを聞くや、土を被りて嚴かなる歎願を、永へにその民を堅ふし、倘に在まし給ふことを願はして常に援助をあたへ給ふ主にささげ、ユダの命を下すと共に、彼等は直ちに其處より出發してデッソウとよばるる市邑にて彼等に近づき、ユダの兄弟シモンはニカノルと戰を交へたるも、俄かに怖氣づきて一軍言無く、軍氣聊か沮喪せるも、かねてニカノルはユダと倘に在るものの豪勇と、彼等が祖國のために戰ふ義勇とを聞き及べることとて、劍にて最後の決定をなすを畏懼し、ポシドニオ、セオドタス及びマッテヤを和議のために遣はしたり。かくて双方の議熟し日も定まりたれば、當日ユダは武裝せるものを便宜の場

所に配置して敵の僞計あらん時の萬一に備へて會議に臨みたり。ニカノルはエルサレムに滯留したりしが、騷擾を釀すが如きこともなく、却つて集りたる民衆を解散せしめ、又ユダを常にわが前より去らしめず、彼は心より彼を愛したり。尙ほ彼はこれに結婚を勸めたれば、彼はその如くして平和なる一市民となれり。〇然るにアルキムスは彼等の間に存する和親と、取りかはされたる契約とを見てデメテリオの許に到り、ニカノルが國のためを思はず、彼はかの陰謀者ユダを彼の後繼者として立てたりと告ぐ。王はいたく怒りて書をニカノルに送り、條約を喜ばざる事と、且つ命ずるに直ちにマッカバイオをアンテオカスに囚人として護送すべきを以てす。この通知のニカノルに達するや、彼は互に合意して取結びたる條約を破棄し、罪なき者を囚人とするを心苦しく思ひ、甚く當惑したりしが、王の命に背く心なくして、彼は策畧によりてこの事を成就せんと只管機會を窺ひたり。マッカバイオは已を遇するニカノルの急に荒々しくなりしを見て彼の意中を忖度し、部下のものを集めて身を匿したり。〇ニカノルはユダに裏をかゝれたるを知りて、祭司等が常の如く犧牲をささぐるとき宮にゆき、當人を引渡さんことを命じたり。然るに彼等は彼の求むる者の何處に居るやを誓ひて知らざるを答ふるや、彼は右の手を聖所の方にのばして下の誓をなせり。『もし汝等ユダを囚人として我に引渡さずば我はこの神の宮を毀ちてバッカスの神宮を此處に建つべし。』と。彼はかく言ひて去れり。祭司等乃ち手を天にあげ、その國人のために常に戰ひたまふものにかく曰ひて祈れり、『天地の主、何をも必要とし給はざる神よ。主はその住み給ふべき聖所を我等のうちに建てんことを嘉しとしたまへり。願くは、潔めて未だ久しくもあらぬこの宮を、永へに潔く保たしめたまはんことを。』〇玆にラジスなるものをニカノルに惡しざまに罪したるものあり。彼はエルサレムの長老の一人にして、國人を愛して令聞あり。親切なるためユダヤ人の父といはれ、敎のために身も生命も惜まざ

りしものなり。ニカノルはユダヤ人を如何に憎むかを示して五百人餘の兵士を遣はし彼を拉し來らしめんとしたり。これもし彼を牽き來るを得ば、ユダヤ人には大損害ならんと考へしがためなり。然るに軍勢、外の門を毀ち、火を放ち、將さに塔を乘取らんとするや、ラジスは重圍に陷りて惡人の手に落ちんよりも潔く一死わが高き身分を汚さじと、自ら刃に伏して果てしが、傷は急所を外れ、而して敵兵既に戸内に闖入したれば、彼は石垣に走りのぼりて、群集の中央目蒐けて飛び下りたるが、寃かも彼等が急に後に退きて空地の生じたる所に墜ちたり。なほ息ありし彼は怒にもえて起ちあがり、傷は重く血は流れて湧き出でしも、群集の間を走りぬけて峻しき岩頭に立ち、我とわが五腸を傷口より摑みいだして兩手に握り、群集目蒐けて投げつけ、再び生命と靈とを回復したまふ主によばはりつゝ死せり。

〔一一五〕ニカノルはユダとその部下とがサマリヤの地にありと聞き、危險なき安息日を期して襲ふべしと決したるが、參加を强ひられたるユダヤ人は彼に曰へり、『かゝる殘酷と暴虐とを爲さざれ。願くは萬事を照覽ましますの日以上に尊ばせ給ふこの日に對しては適はしき榮を歸したまへ。』と。ニカノルは『安息日を守るべきことを命じたまへる全能者天にありや。』と問へるに、彼等は曰ふ、『七日目を守らんことを命じたまへる主は天に在し活きて能あり。』ニカノルまた曰ふ、『我も地上の王なり、命じて軍を起し、王の職務を行はんとするなり。』と。されども彼はその殘酷非道の目的を遂げ行ふことと能はざりき。

〇彌がうへにも心高ぶれるニカノルはユダとその部下を鏖殺して戰捷碑を建てんと決心したりしが、マッカバイオは聊か恐るゝこともなく、從來再三天より賜りたる援助を心に留め、又律法と豫言者の書より讀みて部下の志氣を鼓舞し、なほ異邦人の不信を擧げ、又一の夢物語をなして一同を喜びに充たしめたり。彼は夢にオニヤスを見たり。彼は人も知る祭司長にして、超れて善

き人なり。ユダヤ人全體のために恩を顧び求めたるが、茲に白髪の一老翁の現はるるを見て、オニヤス曰ひけるは、『こは兄弟等を最も愛するものなり、民と聖なる市とのために多くの祈を爲す神の豫言者エレミヤなり。』と。エレミヤ乃ちその右の手をのばしてユダに黄金づくりの劍を授け、かく彼に告げたり、『神より賜りたる聖なる劍を執れ、汝これを以て敵を倒すべし。』と。

るを見て渾身の勇を鼓し、進んで一大決戰をなさんと覺悟したり。敵はと見れば歩騎兵の軍勢と象隊とを配置し軍容堂々として近づき來れり。マッカバイオは、捷利は武具によるものにあらずとして、その手を天に伸べ異能を行ひ給ふものに顧はれり。『王なる主よ。主はユダの王ヒゼキヤの時に、天の使を遣りてセナケリブの大軍を殺したまへり。諸の天の王よ。願くは今も亦我等の前に天の使を遣りて彼等を怖ぢ恐れしめ給へ。主の聖なる民を攻めこれを汚さんとてここに來れるものを恐怖をもて擊ち据ゑ給へ。』と。ニカノルとその大軍は旗皷堂々進み來りしが、マッカバイオとその部下とは祈を以て敵と戰へり。かく手にて戰ひ、心にて神に祈りつゝ、彼等は敵兵三萬五千人を斃し、神の顯現によりて全軍いたく喜びたり。

○戰終りて彼等再び喜をもて引上げんとする時、ニカノルの武裝せるまゝ死せるを見出して、躍りあがり叫びあひて、全能の主を讃美したり。かくて國人のために終生盡したる同胞市民の勇士はニカノルの首を斬り、手を肩より切斷し、エルサレムに携へたり。エルサレムに着するや、國人を集め、祭司等を壇の前に列せしめて、彼は城砦にある者に使者を送り、忌まはしきニカノルの首と、全能者の聖なる宮にむかひて高ぶり伸ばしたる汚れたる彼の手とを示し、舌を抜出し、命じてこれを寸斷して空の鳥に與へ、又彼の右の手を宮の前に懸けしめたり。而して彼等凡て天を仰ぎ自らを啓示し給へる主を讃めて曰ひけるは、『そのところを汚さしめず保ちたまへる主は讃むべきかな。』と。かくて彼はニカノルの首を塔の上に

かけたり。主の助は凡ての者に示されて著るし。而してモルデカイの日の前日、スリヤの語にてアダルといふ月、即ち十二月の十三日を嚴かに記念することは凡てに命ぜられたり。〇ニカノルの末路はかくの如く、爾來市はヘブル人により て保たれたり。我亦こゝにて本書を終るべし。佳く出來たりとせばこは我が望みしものにて、不手際なりしとするも我はこれ以上には達し得ず。葡萄酒若くは水のみを飲むは害あり。水を和したる葡萄酒の味佳き如く、物語の次第整然たるは讀者に心地好し。

# ベンシラーの智慧

律法と豫言者及びこれに從ひたる者等によりて、多くのまた大なるもの、我等に傳へられしが故に、「而して此等のために我等は敎訓と智慧に關してイスラエルを讃むべきものなるが」、且つまた當に讀者自ら熟達を要するのみならず、好學の士は人の語りまた記せしものによりて外にあるものをも益し得べきが故に、予が祖父イエスは、多年律法と豫言の書を讀みて、これに熟達する所あり、遂に自らもまた敎訓と智慧に關する事を書き、學を好み此等の事に從ふ者をして益々律法に從ひて世を渡ることを得せしめむとせり。この故に汝等これを熟讀玩味し、而してもし我等がこれを譯解せんと努めたる所のものに缺く處あらば、幸に寬容せられんことを願ふ。蓋し原とヘブル語にて語られたる所のもの、これを他の語に譯すれば既に同一の力を保有せず。しかのみならず律法も豫言も、またその他の書も、その原形にて言はるゝ時は少からざる違ひあるなり。わがユーエルゲテース王の第三十八年に埃及に來りてよりこの地に住し、多くの場合にこの書より少からざる敎訓を得たり。故にわれ自らこれが飜譯に任じて精を盡し力を致すの要あるを思ひ、遂に不眠の辛苦と技巧のうちにこの業を終り、今や異境に在りてその身を修め、律法に從つて道を歩まんと志す者の爲に、この書を公刊するものなり。

「一」　夫れ智慧は神より來り、永遠に彼と倶に在り。海の砂、雨の滴、永遠の日數、誰かよくこれを數へ得んや。天の高さと地の廣さとまた深さ、誰かよくこれを測り得んや。智慧は總て此等のものより先に造られ、思慮ある達觀は久遠の昔より存す。聰も智慧の根は何人に示されしぞ、誰かその銳敏なる分別を知る者ぞ。こゝに一の大に畏るべきものあり、卽ちその寶座に坐し給ふ主なり。主は智慧を造り、これを視、これを數へ、凡て己が作業にこれを注ぎ給へり。凡ての肉はその量によりてこれを受くれど、主を愛する者には無限に授け給ふなり。

主を畏るゝは榮光、歡喜、欣抃、また滿悅の極なり。主を畏るゝは心を喜ばしめ、滿悅を與へ、福と壽を授く。主を畏る者は最後に幸を受け、死する時は祝福さるべし。主を畏るゝは智慧の始なり、智慧は胎内より信神者と共に造られ、久遠の昔より立てられて信神者と倶に存し、またその裔と倶に在らん。主を畏るゝは智慧の冠なり、智慧は平和を來たし健康を生み、强き杖また榮光ある柱にして、强くこれにすがる者に久遠の名譽を與ふ。主を畏るゝは智慧の根なり、その榮ゆる枝の日長し。

不義の怒は辯護し得べからず、破滅はその忿怒の結果たるべし。忍耐ある者は適當の時期の至るまで自を制し遂に喜びあらん。彼等の來るまでその言を扣へ、かくて衆くの唇はその分別を讃へん。聰き格言は智慧の庫に在り、されど敬神は罪人の憎惡する所なり。もし汝智慧を得んと欲せば、誡を守れ、されば主惜む所なくこれを汝に賜ふべし。そは主を畏るゝは智慧と教訓にして、信仰と柔和は主の喜び給ふところなり。我兒よ。主の畏に背くなかれ、貳心を以てこれに近づくなかれ。人々の前に僞善なる勿れ、落ちて自ら恥を招くことなからん爲なり。主は汝の前に僞善なる勿れ、また汝の唇を愼むべし。汝自ら高うする勿れ、落ちて自ら恥を招くことなからん爲なり。主は汝の隱れたるを發きて汝を集會の中央に投げん、そは汝主の

畏に來たらず、汝の心は僞に充てばなり。

〔二〕 わが兒よ、汝主に仕へんとて來る時、汝の心を誘惑に備へよ。汝の心を正しくして堅く耐へ、苦みの時に恐る勿れ。主にすがりて放す勿れ、これ汝の道に賢からんためなり。何にても汝に來るものを受け、病める時も貧しき時も耐へ忍ぶべし。そは黄金は火にて證明せられ、嘉せらるべき人は苦惱の爐にて試錬せらる。汝神に信任せよ、されば彼汝を助け給はん、彼に依り賴めば彼汝の道を直くし給はん。

〔三〕 わが兒等よ、汝の父なる我に聽きてこれに從へ、汝等主を畏るゝ者よ、彼に信任すべし。彼、汝の酬をやめ給はざるべし。汝等主を畏るゝ者よ、彼の恩惠を望み、また永久の歡喜と慈悲を望むべし。古き昔の時代を看よ、誰か主に信任して而かも耻辱を受けたる者ありや。誰か恒に彼を敬畏して而かも彼に見捨てられたる者ありや。誰か彼を呼びて而かも聞かれざりし者ありや。そは主は情けふかく惠みに富み給ひ、人の罪を赦し惱める時に救ひ給ふべければなり。

その心懼れその手弱き者、また二途を歩む罪人は禍なるかな。心の弱き者は禍なるかな。彼は信ずることをせず從つて庇護せらるゝことなければなり。汝等耐忍力を失ひたる者は禍なるかな。汝等主の汝等に來り給ふ時、何をなさんとするか。主を畏るゝ者はその言に背かず、彼を愛する者はその道を守る。主を畏るゝ者はその好意を求め、彼を愛する者は己が心を準備し、彼の前にその魂を卑くす。我等をして主の御手に入り、人の手中に陷ることなからしめよ。そはその慈悲はその威嚴に等しく、その業はその名に等しければばなり。

〔三〕 わが兒等よ、汝の父なる我に聽きてこれに從へ、これ汝等が救はれんが爲なり。そは主、兒等に感ずる

如く父に光榮を與へ、兒等に感ずる如く母の分別を立て給へばなり。その父を敬ふ者は罪の贖を得、母を敬ふは寶を積むが如し。父に光榮を來す者の日は永く母に休息を與ふる者は神よりその報を受けん。父を敬ふ者はその兒等の喜を得、その禱ることみな聽かるべし。主を畏るゝ者はその父をも敬ひ、その兩親に奉じて主人に仕ふる如かるべし。わが兒よ、言行共に汝の父を敬へ、これ各種の幸福汝に來らんがためなり。父の祝福はその家を建つるも、母の咒詛はその礎を覆へす。汝が父の不名譽もて汝自らの光榮をつくる勿れ、母の不名譽はその兒の恥辱なり。凡そ人の光榮はその父の名譽より來り、母の不名譽はその兒の恥辱なり。

我兒よ、寄る年波に於ける汝の父を助け、その生のあらん限り彼を憂へしむ勿れ。彼或はその理解を失ふともこれを忍び、その死に至るまで彼を辱かしむる勿れ。父に對する慰藉は忘れらるることなく、罪を消して汝を築き上ぐべく、惱みの日にこれを記憶せられ、熱の霜を消す如く汝の罪障を滅さん。その母を怒らする者は主に咒はるべきなり。わが兒よ、汝景氣よき時には謙遜なるべし。その父を侮る者は神を瀆すに等しく、そは謙遜なるべし。されば人に物を與ふるよりも敬愛さるべし。汝出世するに從つて益々謙遜なるべし。されば汝神より恵みを受けん。そは神の恩恵は豐かにして、彼謙遜なる者にその秘密を示し給ふ。餘りに不思議なるものを知らんとする勿れ、汝の力の及ばざるものを索めんとする勿れ。汝が會得せざるべからざるものを考察し、汝に秘せられたるものに從事すべからず。一切汝以上のものに關與する勿れ。汝が了解し得るより以上のものの既に汝に示されたり。そは多くの人の子等は自負心大に、また惡き想像彼等を迷はせり。眼に瞳孔なき處には光もなく、知識なき處には智慧もなければなり。

心の頑なる者は遂には災あらん、危險を好む者は危險にて亡びん。心の頑なる者には悲哀加はり、不信神者は

罪に罪を重ね、嘲る者の傷は治するに術なく、悪き樹かれにその根を下せり。

智き人の心は智き人の言を解し、智慧に耳を傾くる者は喜びあらん。水は燃ゆる火を消し、救恤は罪を贖ふ。

善を爲す者は善に邂逅し、その倒れんとする時に、支持を見出すべし。

〔四〕 わが兒よ、貧き者の活計を奪ふ勿れ、また惱める者の眼を痛ましむる勿れ。乏き者の魂を賤しみ、虐げられたる者の心を惱ましむる勿れ。悲める者の感情を害し、貧き者の受くる賜物を遮る勿れ。貧き者の祈願に賤み、悲む魂を捨つる勿れ。悲める者より汝の眼を去り、汝を詛ふ機會を彼に得せしむ勿れ。斷腸の感ある者も汝を求むる者より汝の眼を去り、汝を詛ふ機會を彼に得せしむ勿れ。孤兒には父となり、寡婦には夫の如くせよ、しその心の悶に於て叫ばば、汝を造りしものはその歎聲に聞くべければなり。集會に於て人より敬愛せらる如くなせ、また市の司には汝の首を下げよ。惱める者に汝の耳を傾け、その挨拶に對して溫和に應へよ。虐待者の手より虐げらる者を救ひ、汝の靈をして正しき裁判を嫌はしむる勿れ。孤兒には父となり、寡婦には夫の如くせよ、されば神汝を兒と呼び給ひ、汝に恩惠を下し地獄より汝を救ひ給はん。

智慧はその兒等を訓育し、彼を求むる者に光明を與ふ。彼を愛する者は生を愛し、彼を求むる者は主より惠みを得べし。彼を保持する者は聖者に仕ふる者は聖者に仕ふるものにして、神は彼を愛する者を愛し給ふ。我に聽く者はその截斷あやまらず、我に耳を傾くる者は迷ふことなし。我に信賴する者は我を受け、その子孫に至るまで我を保有すべし。されどわれ假裝にてその人と共に歩み、先づ誘惑を以て彼を試み、これに恐怖と憂懼を來たし、膺懲を以てこれを責め、その心智慧に信賴するまでに至らしめ、律命を以てこれを試みん。かくてわれ再びその人を指導し、これにその秘密を示さん。されど彼もし我に背けば、われ直にこれを棄て、その淪落に任かすべし。

我兒よ、時と場合を失ふことなく、惡きを注意し、汝の魂に關して恥あるべからず。
あり、また名譽と恩惠を來たすあり。己の利害に反して人を敬する勿れ、また己の顯と
ず。適當なる時期に於て言論を愼み、汝の智慧を匿すなかれ。そは智慧は言說によりて
よりて知らる。眞に反して言ふ勿れ、また神に對して謙遜なれ。汝の罪を告白するを恥
反して立つ勿れ。愚なる者の前に汝の魂を屈する勿れ、また强き者の人格を信ずる勿れ
めに戰へ、主また汝のために戰ひ給ふべし。死に至るまで正義のた
汝の辯舌を以て誇とする勿れ、汝の作業に怠り、また汝の婢
僕に對し苛酷にして彼等を恐嚇すべからず。物を取るに手を延ばし、返す時に閉づべか
〔五〕汝の富に信賴し、われ力ありと、言ふ勿れ。汝の魂の慾を恣にせんがために、汝
〔汝の魂の欲するまゝに歩まんがため、汝の心と汝の眼の慾を恣にする勿れ〕。誰か我よりも力あるものぞと、言
ふ勿れ。そはヤーエー虐げらるゝもの〻仇を報ひ給へばなり。
言ふ勿れ、我れ罪を犯せり、されど我に何事かあらんや、と。ヤーエーは只だ永く忍び給ふなり。赦免を打算
して罪に罪を重ぬること勿れ。彼の慈悲は大にして、我が多くの衍を赦し給ふべし、と。言ふ勿れ。そは彼には
慈悲もあり又た憤怒もありて、その憤りは不信の者の上に在り。彼に歸順することを遲延し、日一日とこれを後
らすべからず。そは彼の怒は俄に來り、汝は懲罰の時に亡ぶべければなり。不正の收得を賴む勿れ、これ怒りの
日に何の益もあらざればなり。
風と共に飛び廻り、路あるまゝに彷徨ふ勿れ。汝の知る處のものに關して節を守り、汝の言ふ所を一ならしめ

よ。聞くことに速かなれ、されど氣長に答ふべし。もし能ふべくむば汝の隣人に答へよ、もし能はざれば手もて口を蓋ふべし、光榮も不名譽も口より來る、人の破滅はその口に在り、人に「二枚舌」と呼ばるゝ勿れ、また汝の口にて人を誹謗する勿れ、そは恥は盜人のために作られ、痛き非難は二枚舌のために作られたればなり、小事にも大事にも不正を働く勿れ。

〔六〕 人の味方たるべき時にその敵となる勿れ、そは惡名と非難と恥辱とを受けん、二枚舌を使ふ惡き人またかくの如し。

情慾の奴隷と成る勿れ、これ汝の精力を牡牛の如くに消耗せざらんためなり。汝の葉は食はれ、實は破られ、かくて汝は枯れたる木の如くに成らん。そは烈しき情慾ある者はそのために滅び、汝の敵の嘲笑の的となるべければなり。

柔和なる言は多くの友を作り、親切なる語は美しき挨拶を受く。汝と交際するもの多からんも、汝の腹心のものは千に一なるべし。汝友人を得んとせば先づこれを試みよ、遽にこれを信ずべからず。己のためにする處ありて交る友あり、かゝる者は患難の日に持續せず。また仇敵と變ずる友あり、かゝる者は汝の恥辱に對して爭論を起す。また食卓にて酒の伴侶たる友あり、かゝる者は汝の盛んなる時は汝自身の如くに汝の婢僕を使役し、汝一朝逆境に陷らば彼は汝に反きて汝に己を見せざるべし。汝敵に近づくことなく、また友に對しても油斷あるべからず。信義ある友は城壁の如し、これを發見し得たる者は寶を得たるものゝ如し。信友は金錢を以て買ふべからず、その價値は計量すべからず。信友は「生命の包袋（つゝみ）」なり、神を畏るゝ者はこれを得べし。主を畏る者はその友誼を正しくす。己にする如くその友にもすべければなり。

わが兒よ、汝若き時より教を受けよ。されば白髪を戴くに迨びて智慧を得べし。耕作し種蒔く者の如く智慧に近よりそのよき實をまくべし。そはこれを養ふに汝の勞苦は大ならず、明日その實を食ふことを得べければなり。されど智慧は愚なる者に對して如何に酷なる哉。悟了なきものは智慧これに宿るを得ず。かゝる者には重き石の如く、かれ速にこれを投げ去るべし。そは智慧はその名の示すが如く、多くの人に現れざるなり。

我兒よ、我に聞きて我が判斷を受け、我が勸告を拒む勿れ。汝の足をその桎に入れ、汝の首をその鎖に繫げよ。汝の肩を屈してこれを擔ぎ、その羈絆の下にありて悶躁する勿れ。汝の全心を以てこれに近づき、汝の道を守るべし。尋ね求めよ、索めてこれを獲、これを保持して放つ勿れ。そは汝遂にその安息を得、汝の喜悅となるべし。その桎は汝の强き支柱となり、その鞆は黄金の飾り、その桎は瑠璃の綬、汝これを榮光の衣として着け、その羈絆は榮光の衣となるべし。

わが兒よ、汝もし欲せば賢者たり得べし、また汝の心だにあらば智慮あり得べし。善き說話を聽聞することを心く、耳を傾けば賢明なるべし。汝長者の間に立ち、賢明なる者には附き纏ふべし。汝もし聞かんと欲せば受くべがけ、賢者の箴言を逃すべからず。賢明なる人を尋ねて熱心にこれを求め、その人の家の敷居が汝の足にて摩り耗るまでに至らしめよ。至上者を敬畏することを考へ、常にその誡を思ふべし。されば彼汝の心に教へ、汝の願ふ如く汝を賢明ならしめ給ふべし。

〔七〕 惡を爲す勿れ、されば惡は汝に及ばざるべし。不正を遠けよ、されば不正は汝に向はざるべし。不義なる者の畦に蒔くべからず。これ汝七倍の收穫を得ざらんためなり。

神に主權を請ひ、また王に名譽の座を求むること勿れ。神の前に自らを義とし、王の前に己の智慧を衒ふ勿

れ。裁判官たることを求むること勿れ、これ汝慠慢（たかぶり）を壓ゆる能はざることなきため、また力ある人の前に出でて怖るゝことなからんため、また汝正しき人の路に躓く物を置かざらんためなり。門にある群衆に對して罪を犯す勿れ、また自を衆人のうちに投げ入るゝ勿れ。

罪に罪を重ぬる勿れ、そは一つの罪にても罰せられざることなければなり。言ふ勿れ、彼わが多くの供物を視給ふべく、われ是等を至上者に捧げん時これを受け給ふべし、と。汝禱る時に短氣なる勿れ。また施しをなすに期を失する勿れ。

心を痛むる人を笑ふ勿れ、そは高くしまた卑くする者一人あり。兄弟に對して惡しきをたくむ勿れ、また友人或は隣人に對してもなす勿れ、如何なる事にも人を欺きて樂む勿れ、そはその結果は不快なるべければなり。長者の前にて壯言する勿れ、また汝の祈禱に言葉を繰返す勿れ、勞働を嫌ひ農業を忌ふ勿れ、これ神の定め給ひし所なればなり。罪ある人の仲間に入る勿れ、神怒の來ること遲からざるを記憶せよ。汝の心を大に卑くすべし、そは人の應報は腐敗なればなり。

金錢のために友を棄て、オフルの黄金（こがね）のために兄弟を賣るなかれ、良妻を去るなかれ、愛顧すべきものは眞珠に優る。忠實に仕ふる婢僕、また汝のために命を捧ぐる傭人を虐ぐるなかれ。賢き奴隷を己れの如く愛し、これにその自由を拒むべからず。

汝家畜あらば自らこれを飼ひ、利あらば保存すべし。汝息子あらばこれを矯正し、その若きうちに妻を娶らすべし。汝娘あらばその身邊に注意し、これに笑顔を示すべからず、娘を嫁に遣せば災厄去る。されどこれを分別ある男に遣はすべし。

汝妻あらばこれを嫌ふ勿れ、されど汝を厭ふ妻は信頼すべからず。汝の全心を盡くし汝の父を敬へ、また陣痛を以て汝を産みし母を忘るべからず。彼なかりせば汝は生れざりしことを記憶せよ、彼が汝に爲したることに對し、如何にして汝はその恩に報ゆることを得んや。

汝の全心を盡くして神を畏れ、またその祭司を敬ふべし。汝の全力を盡くして汝を造り給ひしものを愛し、またその役者(つかさびと)を斥く勿れ。神を頌榮し、祭司を尊びて汝に命ぜられし如く彼等の分をとらすべし。即ち愆祭の食物と手の擧祭、正義の犧牲と聖物の供物なり。また汝の手を貧民に伸ばし、祝福を完からしむべし。禮物は活ける人のみな喜ぶ所なり、また死人にも親切を控ゆる勿れ。歎き悲む者を忌避することなく、喪にある者を哀悼せよ。病者を見舞ふことを忘るゝ勿れ、汝そのために愛せらるべし。萬事に汝の終局を記憶すべし、されば決して愆ち

なかるべし。

〔八〕力ある人と爭ふ勿れ、汝その手中に陷るべし。富める人と競ふ勿れ、かれ汝の價を抑壓して汝は亡ぶべし、そは黄金は屢々人を暗まし、富は王侯の心を迷はしたればなり。口の人と爭ひ、また火の上に薪を積む勿れ。愚なる人と交る勿れ、かれ汝の正しき言をも蔑むべし。悔ゆる人を責むる勿れ、我等みな惡あることを記憶せよ。老人を賤む勿れ、我等また老人のうちに數へらるべければなり。人の死するを喜ぶ勿れ、我等みな死すべきことを記憶すべし。

賢者の言を等閑(なほざり)にすることなく、その箴言を萬唱すべし。汝それより學ぶ所多く、王侯の前に立ち得べければなり。老ひたる者がその父祖より聞きたる傳說を斥くること勿れ、汝それより學ぶ所多く、必要の場合に答辭し得ることあるべし。惡き人の炭に火を點(つ)くる勿れ、汝その火の焰にて燒かるべし。人に侮辱せられて怒る勿れ、

の失言を捕へんとすべければなり。

汝よりも有力なる者に貸す勿れ、もし貸せば汝は損失すべし。汝よりも身分高き者の保證人となる勿れ、然かせば汝は支拂人となさるべし。

裁判官と法に關與する勿れ、彼恣に裁判すべければなり。無慈悲なる人と事にあづかる勿れ、汝不幸に陷るべし、そは彼思ふまゝに爲して汝は彼の愚かなることにより て亡ぶべければなり。怒り易き人と强く爭論し、彼と荒野を行く勿れ、救助者なき所にてかれ汝を殺さん。愚かなる者と事を謀る勿れ、かれ汝の秘密をなす勿れ、かれ何事を爲すべきや知れざればなり。汝の心中を萬人の前にて秘密を保ち得ざるべし。面識なき人の明かし、汝の繁榮を除かしむる勿れ。

〔九〕 汝の懷の妻に關して恪氣する勿れ、かれ汝に對して惡事をなすを習ふに至るべし。女を して汝の男性を蹂躙せしむる程に汝の魂魄を入るべからず。面識なき女と會合する勿れ、汝その網にかゝるべし。歌女と談話すべからず、汝その羈に陷るべし。遊女に耽る勿れ、その女の故によりて罰を蒙ることあるべし。汝乙女を凝視する勿れ、汝の產業を失ふに至るべし。市の街頭にて周りを眺め、またその廣場に徘徊すべからず。愛らしき婦よりの視線を避け、汝の者にあらざる美人を凝視する勿れ、女の色香によりて多くの者破滅に陷り、またかくなして情慾の焰は火の如くに上る。既婚の婦と卓につき、これと俱に酒を混ずること勿れ、汝の心情かれに傾き、汝の血は地獄に流込まん。

舊き友を捨つる勿れ、新しき者はこれに比ぶべくもあらず。新酒は新しき友の如く、古くなりて汝これを飲まん。不信者の榮華を羨む勿れ、汝その終局の如何なるべきかを知らざればなり。尊大なる者の榮ゆるを喜ぶべ

からず、彼必ず早晩死せざるうちに罰せらるべきを記憶せよ。人を殺すの權能ある人に近づくべからず。されば汝は死の恐怖を恐るの要なかるべし。されどもし彼に近づく時は汝の命のとられざるやう過失をなす勿れ。汝は穽の間を進み網の上を歩むものたるを忘るべからず。汝の能ふ限り汝の隣人と交り賢者と語るべし。智者と交りて汝の言ふ所恒に至上者の法に合はしめよ。正直なる人と食を共にし、神を畏るを以て汝の誇りとなすべし。

器用なる者が巧みに物を作る如く、人民を支配する者はその辯識愚鈍なるべからず。多言の人は都會にて危險なるべく、淺慮の辯者は嫌惡せらる。

〔一〇〕智慧ある治者はよくその民を教へ、辯識ある者の政事はよく整頓す。有司は王侯に倣ひ、民はその長に準ず。無謀なる國王はその民を亡ぼすも、思慮ある侯伯の都は榮ゆ。世界の統治は神の御手に在り、適當なる時期至らば彼その上に適當なる者を立て給ふべし。

汝の隣人の惡に報ゆるに惡を以てする勿れ。また驕傲の途に歩む勿れ。驕傲は神人共にこれを憎む所なり。

制もまた神人の怒を招く。宗主權の一國より他國に移るは、これ驕傲よりする暴戻の故なり。元來塵と灰に過ぎざるもの、如何でか自ら誇るを得ん、彼未だ死せざるにその腸は腐りて〔虫を生ずるに非ずや〕。病氣の疑あるも、醫者の未だ手を下だし得ざるうちに、今日の王者も明日は逝きて在らざるべし。而して人は死する時に、蠕と蛆と虱と　虫とを相續すなり。人自ら恥を知らずその心また造物者より離れ行く時に驕傲は始まる。そは罪は倨傲の集る處、その源には邪惡溢る。かるが故に神はかゝる者に不思議に罰を加へ、これに極度の打擊を與へ給ふ。

神は驕る者の王位を亡ぼし、その代りに自ら卑ふする者を据へ給ふ。神は驕る者を根柢より覆へし、地の極（はて）ま

でこれを剿滅し給ふ。神これを地より打ちはらひ、これを根絶し、人々の間にこれを記憶する者すら無きに至らしめ給ふ。倨傲は親より讓りしものに非ず、忿怒は人の分にもあらざるなり。

名譽ある種族は如何なるものぞ。これ人の族(やから)なり。名譽ある種族とは如何なるものぞ。神を畏るゝ者こそその族なれ。賤むべき種族は如何なるものぞ。人の族なり。賤むべき種族とは誡を破る者こそその族なれ。同胞の間にありてその頭の尊ばる者、神を畏るゝ者こそその民のうちにて崇めらるべし。寄寓者と異國人、在留外人と貧困者、此等の者の光榮は神を畏るゝの畏れなり。貧しき者も悟りある者は賤むべからず、亂暴なる人は如何なる者も尊敬すべきに非ず。王侯、統治者、また支配者は皆な崇むべきものなり。されど神を畏るゝ者は更に偉なるものなり。貴人も悟りある奴僕に奉仕すべし、而かも賢者はこれを看て囁かず。

汝業務をなす時智者を氣取る勿れ。また汝が何物をか需むる時に自讃する勿れ。自ら働きて豐かに富める者は自ら讃揚するのみにてその食に缺乏する者に勝ること萬々なり。我兒よ、謙遜もて汝の魂を讃め、それに適ふ如く顧慮すべし。誰か己を非難する如き者を義とせんや、誰か自を汚辱する如き者を尊敬する者あらんや。

人その智慧の故に崇敬せらるゝ貧者あり、またその富の故に尊敬せらる者あり。貧しき時に崇めらる者、その人富を得ば他人の尊敬や如何。富めるも尙ほ賤めらる者、その人貧しければ如何に。

〔一一〕 貧者の智慧はその頭を扶け起し、その人をして王侯の間に坐せしむべし。

美貌の故に人を讃め、またその外貌によりて何人をも憎惡する勿れ。飛ぶものゝうちにて蜂は數ふるに足らぬものなれど、その產する物は諸物に優れり。敝衣を纏へるを嘲ける勿れ、また不運のものを賤む勿れ。そはヤーエーの爲し給ふことは妙(たへ)にして、その動作は人に顯はれず。曾て踏みつけられたる者にして後ち王位に卽ける者

少からず。また豫想せざりし者の王冠を戴けるあり。位高き者の貶黜せられたる者多く、名譽ある者の罪に交付されたる者あり。汝自らよく檢せざるうちに人を責むる勿れ。先づ調査して而して後に譴責すべし。汝のかざるうちに一語も答ふる勿れ。また論議の最中に語る勿れ、また傲慢なる者の爭論に干渉する勿れ。我兒よ、何とて汝の業務を增さんとするや。多くの事に干渉し、罰せられずして終ることなし。汝これを追ふも獲ることなく、索むるもこれを見出すことなし。勞苦し勞作し急ぎて而かも益々後る者あり。また纖弱にして難澁し、力なく缺點多きものあり。ヤーエーの眼つねに彼を善に導き、遂に穢き塵のうちより彼を搖ひ起し給ふ。彼その首を上げて彼を讃揚し、多くの者これを見て驚くべし。

善と惡、生と死、貧と富、みなヤーエーより來る。愚と暗は罪人のために作られぬ、而して惡人には、惡彼等と俱に永存す。」ヤーエーの賜物は永く義人と俱にしてその善意は恒に榮ゆ。

「智慧と眼識と法の分別はヤーエーより來る。」

われ休息を得て今や我が美味をとらん、と。自制によりて增す富あり、これ彼が報酬たるべし。その時彼謂ふ、殘して死去すべし。我兒よ、汝の爲すべき務を確く守りてこれを念ひ、汝の業に老熟すべし。不正をなす者を見て驚くなく、汝はヤーエーに信賴しその光明を待望せよ。そは俄然貧しき者を急速に富ましむ如きはヤーエーの眼にいと易きことなればなり。神の祝福は義人の受くべき報酬にして、彼の望は適當なる時期に耀くべし。言ふ勿れ、わが願とは何ぞや、今より後わがために殘されたるものは何ぞや、と。また言ふ勿れ、われ既に足れり、如何なる不幸の我に來り得んや、と。一日の幸福は人をして不幸を忘れしむるに足り、一日の不幸は人をして幸福を忘れしむるに足る。そは終りの日にその人の業に從ひてこれに報ゆるはヤーエーの眼に易きことなればなり。

悪き日は人の喜悦を忘れ易からしめ、人の最後はその人の眞價を語る。人の未だ死せざるにその人を以て幸福なりと爲す勿れ、人はその晩年にて知らるべければなり。

如何なる者にても悉く汝の家庭に入るべきに非ず、如何に多くのものが誹謗の痛手を受くるかを想へ。籠中にある囮の鸚鵡の如く、倨傲なる者の心また然り、間諜の如くにかれ汝の裸なる狀を視んとす。陰謗を言ふ者は善きことを悪しざまに言ひなし、汝の美德を汚辱す。火花散つて堆炭燃へ、悪漢は血に渇きて待てり。悪人に注意せよ、彼悪事を惹き起せばなり。汝何んぞそのために拭ふべからざる汚名を蒙るの要あらんや。異人を汝の家に迎へば、彼等の生の途を疎くし、汝の家より汝を遠ざくべし。

〔一二〕 汝もし慈善を施すには善人に施してその酬を得よ、よしその人より慈善を施さんとせば、何人に施すかを明かにし、汝の慈善に對する期待を有し得る如くすべし。善からざる者に滿足を與ふるともその酬は來ることなし、またこれ何等の慈善を爲したるにも非ざるなり。糧(かて)の武器を彼に與ふる勿れ、彼これを以て汝を攻撃すべし。汝は汝がその人に對して爲したる善行に對してその二倍の悪きを得べし。そは神もまた悪をなす者を憎み給ひ、彼必ず悪人に悪き酬を與へ給ふべし。善人に與へて悪人には控へ、遯(へりくだ)る者に與ふること勿れ。

人の榮ゆる時には眞の友を知る能はず、また敵は逆境にて隱くるものに非ず。人榮ゆる時は敵と雖も友の如くし、逆境に在りては友人すら尙ほ疎し。決して敵を信賴することと勿れ、その悪は眞鍮の如くに錆びつくべし。鏡を磨く者の如くして彼に對し、注意すべし。鏡を磨く者の如くして彼に對し、如何にせよ錆の生ぜざるやを知れ。彼をして汝の傍に立たしむる勿れ、かれ汝を押し除けて汝に代りて立つべし。汝の

右席に彼を坐せしむる勿れ、かれ汝の座を覬覦すべし。かくて汝その時に至りて我が言を領會し我が忠告を回想して嘆息するとも既に遅し。蛇遣が蛇に咬まれ、或は餓へたる獣に近づく者あるとも、誰かこれを憐むものあらんや。

不敬虔なる者と交りてその罪業に感染する者もまたかくの如し。汝が確乎として立てる間は彼もその本性を露はさず、されど汝一たび彼に許せば彼また少しも控制する所なし。敵はその口邊に甘言を湛ふれど、その心中に深き陷穽を計畫す。然り、彼の目には涙を流すと雖、機會だに發見せば血を見るも尚ほ滿足せざるべし。汝もし不幸に遇はば彼は直ちに來り、恰かも汝を援助する如くして汝の踵を攫まん。かれその首を振り、その手を動かし、また密談など多くして、その態度を一變す。

〔一三〕　誰にても瀝青を弄べば、その手に粘着し、不信の徒に交ればその道に染まる。壺と鐵瓶とに如何なる連結の共通點ありや。これ彼を撃ち、かれ破壊したる時、富める者惡を爲すとも彼これを誇りとし、貧しき者も汝より富める者と交際する勿れ。壺と鐵瓶とに如何なる連結の共通點ありや。これ彼を撃ち、かれ破壊したる時、富める者惡を爲すとも彼これを誇りとし、貧しき者も汝の力に餘る重きものを持上げんとする勿れ。また汝よりも

押し返さん。また餘りに遠ざかる勿れ、汝或は忘れられん。彼に對して餘りに自由なる勿れ、信ずる勿れ、そはかれその會話にて一般に汝を試めし、その笑顏にて汝を探りつゝあるなり。注意に注意をなし、決して無法なる者と交るべからず。

凡ての肉はその類を愛し、人々その友を好む。凡ての肉あるもの皆なその種に從ひて交り、人はその類と結ぶ、豺狼如何にして綿羊と交るを得んや、不信神者また如何にして義人と結ぶことを得んや。蠻狗と家犬の間に何の平和あらんや、富者と貧民の間に何の平和あらんや。荒野の野馬は獅子の餌なり。かく貧民もまた富者の秣の如し。傲慢なる者は謙讓を嫌ふ、かく貧民は富者の蛇蝎視する所なり。

富者動搖せばその友に支援せらるゝも、貧者動搖せばその友に捨てらる。富者口を開けば援助者多く、その言ふ所拙劣なりとも優秀と稱せられ、貧者口を開けば衆人これを嘲笑ひ、金言を發すとも決して顧られざるなり。富者の言には萬人謹聽し、その言ふ所を雲上までも賞揚す。貧者言はば彼等曰ふ、これ何人ぞ、と。而してかれもし躓かば彼等更にこれを助けて顚倒せしめん。

罪惡を伴なはざれば富は善きものなり、自惚より來る者は惡なり。人の心は善にまれ惡にまれその容貌を變ゆ。快活なる顏色は幸福なる心より出づるも、隱遁と默想は勞苦多き思をなさしむ。

〔一四〕 失言なき人またその心に憂苦なき人は福なる哉。その魂の責めなき人、またその期望の未だ停まらざる人は福なる哉。

富は心の小さき者に不適當なるものなり、また猜み深き者が黃金をもちて何をなすべきぞ。自ら控ゆる者は他

人のために集め、その財寶は他人の使用する所となるべし。自らの魂を害する者果して何人のために善を爲すべきや、そはかれ自己の利益に興味を有(も)たざるなり。自己の魂に害を爲す者より惡きはなし、これその惡業の報ひなり。よしかれ善を爲すことありとするもこれを爲すに忘れ易し。その面を他向(そむ)けて人を蔑視し、その眼にて嫉む者は不良なり。貪婪なる者の眼にはかの分は過少なり、されど隣人の分をも奪ふ者は實は己の分を滅ぼすものなり。嫉む者の眼はその飯を索むるに急ぐ、しかもその膳に上る物なし。〔善良なる者の眼は飯を殖えしめ、乾ける泉もその膳に水を送るべし。〕わが兒よ、汝もし何物かを有せば自らこれを善用し、能ふ限り繁榮を計れ。死は汝のために躊躇せず、また墓(セオル)の判決汝に告げられざるを記憶せよ。汝死せざるうちに汝を愛する者に善をなし、汝の所有に從ひてこれに施せ。現在の歡樂を控ゆることなく、善き願望の運を看過する勿れ。汝己の富を他人に遺すことを欲せざるや、また汝の產が鬮(くじ)にて分配さることを好まざるや、與へよ而して取れ、然り汝の魂の欲する儘にせよ、そは墓には何の樂もなければなり。凡て肉體は衣の如くに古び、汝は必ず死すべきものなりとは恒久の宣言なれ。大木に生ずる葉の如く、或ものは枯れてまた他のもの生ず、肉と血の人生もまたかくの如く、或ものは死し他のもの榮ゆ。凡て人の工作は亡びざるものなく、その手の勞作またその後を追ふ。

智慧を懷ふ者、またそを會得せんと欲する者、己が心をその道に向け、その路に注目する者、間者の如くにその後を追ひ、その入來を窺ふ者は福なり、その窓を覘き、その門戸に耳を傾く者、その家の傍に幕營し、その壁に釘うつ者、その附近に天幕を張り、佳き住家に住ふ者、その葉の間に巢を構へ、その枝の間に宿る者、その蔭に熱を避け、その邸に住ふ者は福なり。

〔一五〕 主を畏るる者はこれを爲し、律法を保つ者は智慧を見出さん。智慧母の如くに彼に會ひ、若き妻の如くに彼を受けん。悟得の糧を以て彼を養ひ、智識の水を彼に飲ましむ。智慧と共なるものは落つることなく、これに信賴する者は辱めらるることなし。智慧は彼を上げてその隣人よりも高くし、集會の中に於て彼が口を開かん。

歡樂と喜悅は彼がものたるべく、彼は不朽の名を繼承すべし。不信の徒は智慧を得ることなく、倨傲者は智慧を記憶せず。讃美は罪人の口にあらず、これを見ることすら得ざるべし。智慧は嘲笑者より遠く、虚僞者は智慧を記憶せず。讃美は罪人の口にあらず、そはこれ神より與へられざればなり。賢き人の口には讃美の聲あがり、力を有ち給ふものこれに教へ給はん。

言ふなかれ、我罪は神に歸因す、と。神は自ら憎むものを造り給はざるなり。言ふなかれ、神われを惑はしめ給ふ。そは惡人の要は決してあること無し。主は罪咎とともにこれを惡み給ひ、これをして彼を畏るゝ者に近づかざらしめ給ふ。神は初より人を造り給ふて、彼の傾向に任せ給へり。汝もし欲せば訓戒を守るを得べく、また神意を行ふは賢きことなり。火も水も等しく汝の前に置かる、汝の好む方に汝の手をのべよ。生死ともに人の前に在り、その欲するがまゝに彼に與へ給ふべし。主の智慧は缺くる所なく、その力は强大にして萬事を看給ふ。その作業は神の目前に在り、彼は人の行爲を知らざるなし。神は人に惡を命じ給はず、また僞をいふ人に力を與へ給はざるなり。

〔一六〕 益なき兒等を見ることを欲し、また不良なる悴を得たるを喜ぶ勿れ。然り、彼等增加すとも、もし彼等主を畏るにあらざれば悦ぶ勿れ。彼等の生に信賴しまたその境遇に依賴する勿れ。一人の正しきは千人に優り、また不信なる多くの兒あるよりも寧ろ兒なきに如かざればなり。一人の神を畏る者より一都會興り、不誠實なる人々の一族によりて都會も荒れはつべし。かくの如き實例はわが眼多くこれを看たり。われこれより更に甚しき

事を耳にせり。

悪人の集團に點火せられ、邪曲なる國民に憤怒もゆ。彼は古への王侯のその力を恃みて叛きたる者を宥し給はず。彼は自ら誇りて傲慢なるロトの寄寓したる所を見のがさず、またその罪の故に逐はれ且つ呪はれたる民を容赦し給はざりき。かくて六十萬の徒士その心の誇りによりて亡ぼされたり。然り、一人の頸の硬きものありとも、そのもの罰せられざれば驚くべきことなり。そはかれ慈悲憤怒兩つながら有し給ひ、人を赦しまた宥し給ふとも、悪人にはその憤怒を以て臨み給ふ。その慈悲の大なる如くその懲罰も重く、各人その業に從ひてこれを審判き給ふ。罪人その掠奪を擁して逃ぐることなく、義人の願望遂に無益に終ることなからしめ給ふ。各人正義をなす者に從ひて神の前に受くる所あらん。〔主己を知らざりしパラオの心をかたくなにしに從ひて、そのなせし事は天下に顯かなり。主の恩惠は凡て被造物の見る所、その光明暗黒、主はこれを人の子等に分配し給ふなり。〕

言ふ勿れ、我は神より隱れたるもの、誰か天にて我を記憶するものあらんや。我は顯著なる多くの人々のうちにて注目さるべきに非ず、また全人類の無數の靈魂の中にて我が一靈魂の如き何かあらん、と。天とまた天の天を見よ。深淵とまた大地を見よ、神これに到り給へば彼等震駭す。然り、山嶽の根柢も世界の基礎も、神これを一瞥し給へば彼等顫動す。誠に神は我が如きに留意し給はず、またわが所業を誰か注目するものあらんや。われ罪を犯すもこれを視るものなく、われ密かに不正をなすも誰かこれを知らんや。また誰かこれを顯會なき者の考ふ所、愚なる人の思ふ所なりとす。

汝等我に聽きわが智慧を受け、汝の心をわが言に致せ。われわが靈を重く注ぎ出し、大にわが智識を發表せん。
神太初よりその工作を造り給ひし時、彼等を造りて各これにその分を定め給へり。かれ永久にその作業に秩序を
與へ、末代に到るまで彼等の權威を立て給ひ、彼等は餓えず、疲勞れず、またその作業を停めざるなり。私等一
人だにその隣人を擊つものなく、神の言に背くものなし。これより主この地をみそなはし、これを充たすに善き
ものを以てし給へり。神すなはち萬づの生ける物を以て地上を充たし給ひ、而して彼等復た土に歸る。
〔一七〕 神は人を塵より造り、また塵に復し給ふ。人に許すに一定の日數を以てし、地に在りて萬物の上に權
威をもたしめ給ひ。己に似たる力を以て彼等を裝ひ、己の像に從ひて彼等を造り給ひぬ。神よろづのものに人を
畏るゝの念をもたしめ、また人をして獸と鳥の上に權能をもたしめ給ひぬ。洞察と理解を以てその心をみたし、
善と惡とを教へ、彼等のために舌と目と耳とを造り、これに與ふるに悟覺するの心を以てし給へり。これ彼が作業
の威嚴を彼等に示し、彼等その驚くべき動作に於て頌榮し、その聖き名を
讃め奉らんがためなり。神彼等の前に契約を置き、產業として命の律法を與へ給ひぬ。彼等と永久の契約をなし、
彼等にその審判を示し給ひぬ。彼等眼にその榮光ある威嚴を看、耳にその榮光ある聲を聞けり。かくてかれ彼等
に言ひ給ひけるは、凡て不義を愼めよ、と。彼また各人その隣人に關する誡を彼等に與へ給へり。

彼等の道は恒に彼の前に在り、彼等はその眼より匿るべからず。〔かれ各國民に支配者を立て給ひたれど、イ
スラエルは主の配下にあり。〕彼等の作業は凡て彼の前に日の如く明かにして、彼の眼は斷へず彼等の道に在り。
彼等の愆は彼より匿るべからず、彼等の罪は凡て主の前に錄されあり、人の正義は彼には印の如く、人の慈善は
彼の瞳の如くに保存し給ふ。後日に至りてかれ立ちて彼等に酬ひ給ひ、その酬ひ彼等の頭上に下らん。されど悔

恨する者には應へ給ひ、望を失ふ者をば慰め給ふ。

汝等主に歸りて罪業を捨て、その面前に哀願して神怒を和らぐべし。至上者に歸りて不義の道を離れ、忌むべき事を憎むべし。そは神墓に滅ぶべきものを見、これを活きて彼を頌榮するものに比して、何の嘉すべきものかあらん。感謝は存在せざるものよりなき如く死人より消ゆ。されど活きて健かなる者は主を讃美するなり。主に歸する者に對するその恩惠とその赦宥は如何に大なるかな。そは人に在りてはかくの如くならず、また神の思想は人の子等の思想の如きに非ず。何物か日輪よりも輝くもののあらんや、而かもこれなほ滅却す。況んや肉と血の傾きある人間をや。神は天の萬軍を眺め給ひ、また塵と灰なる人を眺め給ふ。

〔一八〕　久遠に活き給ふかれ萬物を造り給ひぬ。唯だ主のみ義とせらるべきなり。誰かかの作業を宣ぶるに足る者ぞ、誰かかの偉業を叙し得んや。何人もこれを增減する能はず。何人も主の驚くべき業を叙述する能はず。人の終りたる時かれ僅かに初めたるに過ぎず、かれ停むる時は困迷に在り。人とは何ぞや、人生の益は如何なるものぞ、その善は何ぞ。その惡は何ぞ、人の歳月百年に達すれば大なるものなり。而かも海の水の一滴の如く、沙漠の沙の一粒の如く、無限の時にありて人生の數年もまたかくの如し。この故に主は人に對して永く忍び給ひ、またその慈悲を下し給ふ。かれ人の終りの惡きを觀てこれを知り益々その寛容を增し給へり。人の慈善はその隣人に及ぶのみ、されど神の慈悲は總ての肉に及ぶ。これを譴責し、懲膺し、教訓し、これをその舊態に返して牧ふこと恰も牧者の群羊に於けるが如し。彼はその懲膺を受くる者、その審判を索めて倦まざる者に恩惠をたれ給ふなり。

我兒よ、汝の善き業に瑕瑾を來たす勿れ、また慈善を施すに當り汝の用語より悲痛を起さしむる如きことあるなかれ。

べからず。雨の燃ゆる熱を冷す如く、一語よく恩物の性質を變ゆ。そは善き言語は恩物よりも善し、而かもこれ共に善良なる人に屬するものなり。愚かなる者は不愉快に人を譴責し、猜み深き人の慈善は人目を消耗す。

汝闘ふ前に援助者を求め、病まざるうちに醫者を求め、審判の前に自ら審査し、災禍到來の日に赦免を見るべし。汝の倒る前に自ら謙遜し、犯罪の時に悔悛の狀を示すべし。適當なる時期に誓をなして遲延する勿れ、また義とせらるべく死の到るまで待つ勿れ。汝誓言をなす前にその誓を準備し、神を試みる者の如くなるべからず。後日來るべき神怒のことを考へ、神その顏をそむけ給ふ報復の時を想へ。滿腹の時に饑餓の時を記憶し、富める時に貧しき時を記憶せよ。朝より夕に至るまで時は移り、萬物主の前に急ぐ。賢き人は萬事に謹み、罪を犯さんとする時に自ら罪科を避く。賢き人はみな智慧を知り、これを見出したる者に感謝す。言葉に賢きことを示す、即ち彼等は格言の適切なるものを連發す。

我兒よ、汝の魂の邪慾に從ふなく、その慾望を制すべし。もし汝魂の慾を滿たさば、これ汝の敵の願を實行するに等し。過大の榮華を得て自ら喜ぶ勿れ、これより來る貧困は更に二倍すべし。物を浪費する勿れ、また酒に酔ふ勿れ、然らざれば汝の囊中無一物となるべし。〔一九〕これを爲す者は富むことなく、些細なるものを輕んずる者は全く裸となるべし。酒と女は人の心を淫し、娼婦に恥る者は滅亡す、黴と蛆は彼を占有し、無謀なる魂はその持主を亡ぼさん。

輕卒に人を信任する者は賢明ならず。錯誤をなす者は自らの魂に對して罪を犯すものなり。惡を樂む者は滅亡に到るべし。空談を嫌ふ者は罪少なし。人の言を反覆する勿れ、されば何人も汝を責めざるべし。敵にも同志にもこれを言ふ勿れ、汝に對する罪惡にあらざればこれを告ぐる勿れ、然らざればこれを聞く者汝を憎み汝を惡人

とせん。汝何事を聞くともこれを默殺せよ、それ等の事は汝を破らざるべし。愚かなる者は人の言を苦にし、恰も女が産兒の故に勞するが如し。肥へたる股に矢を刺すが如く愚人の内部に入りたる言また然り。

友に忠告して惡をなさざらしめよ、もし彼既に何事かを爲さば、これを再びせざらしめよ。もし彼既に言ひたれば、これを再びせざらしめよ。友に忠告せよ、そは世に讒多く、人言悉くは信ずべからず。己の意圖ならずして失脚し、またその舌もて罪を犯す者の多いかな。汝の友を脅威する前に先づ彼に忠告せよ、而して至上者の律法を行はれしめよ。

凡て智慧は主を畏るるの畏なり、而かもその同じことが罪惡たることあり。世に愚かなる者あり、而かもその人にして罪なき者あり。多大の怜悧なる思慮ありて律法を犯さんよりも、少しの會得ありて神を畏るるに如かず。怜悧にして狡猾なるものあり、これ不正なり、また審判を得んとて曲りたることをなすものあり。腰を曲げ哀む如く歩むものあり、されどかれ内心詐僞に充つ。伏目になりて聾者の如くする者あり、かれ機會だにあらば、人を害せん。人目なき所にてはかれ汝を凌駕す。力足らずして罪を犯し得ざる者あり、かれ機會だにあらば、人を害せん。人は容貌によりて知られ、智慧ある人は人の顏色にてこれを認識す。人の服裝はその職業を示し、その歩みはその人の何ものたるかを示す。

〔二一〇〕　忠告も歡迎せられざることあり、かくの如き時寧ろ沈默するは賢明なり。罪人に忠告するとも感謝せられざることなし、されど自白する者には更に屈辱を加ふべからず。處女を姦せんとする寺人の如く、暴行を以て正義を行はんとするも無益なり。沈默を守り而かも賢明なりとせらるる者あり。また多辯にして人に嫌はるゝ者あ

り。何事も言ふことなきを以て默する者あり。また言ふべき時にあらざるを以て默する者あり。賢き人は適當なる時まで言はず、さされど自ら尊大にして人を輕侮する者は時機を見ることなし。多辯なる者は嫌はれ、自ら權威を潛する者は憎まるべし。

逆運は時としてその人に利あり、幸運は時としてその人に害を來たす。人に物を送りて何の益なきことあり、また時としてこ倍の酬を獲ることあり。名譽より損失の來ることあり、損失より名譽の來ることあり。或は僅かのものを以て多大のものを購ひ、或はこれに七倍の支拂をなす。賢き人は寡言にして人に愛せられ、愚かなる者の愛敬は無益に終る。愚者の贈物は汝に益する所なし、それはかれ汝より七倍の返禮を期待すればなり。彼は僅少なるものを人に與へて多大なる叱言を言ひ、廣告人の如くにその口を開く、かれ今日貸與して明日これが返濟を求む、かくの如きはこれ神にも人にも嫌はるべき者なり。愚かなる者は言ふ、我に友人なし、わが善業は何等の感謝を受けず、わが麵麭を食する者は惡舌者なり、と。如何にその口を開く、愚かなる者の墜落は速かに來る。羊の肥尾が顧なくして食せらる如く、時期を誤れる言また然り。愚者の口より出でたる言は何等の價値なし、これ適當なる時機に發せられざればなり。

人乏しきが故に罪を犯すを得ざるものあり。彼息ふ時煩ひなし。或ものは廉恥心あるが故に自殺し、敵ふて亡ぶ。また或ものは恥しきが故に漫りにその友に約束し、不必要にその敵をつくる。

虚言は人の汚點なり、恒に愚人の口に在り。絶へず僞る者は盜む者にも劣る、但し兩者共に滅亡すべきものなり。詐僞者の終局は不名譽にして、恥辱恒に彼と偕に在り。

賢き人は己の言葉にて進み、智者は大なる者を左右す。己の土地を鋤く者はその堆を高く積み、大なる者を嘉ばす者はその惡事をも贖ふ。進物と禮物は賢き者の眼をもくらまし、口籠を嵌むる如くに人の非難を遏む。隱れたる智慧と秘したる寶、共に何の益あらんや。己れの愚かなることを人に知らざる者はその智慧を自ら蔽ふ者に勝る。

〔二一〕我兒よ、汝既に罪を犯せばこれを再びすることなく、前科のために懺れ。蛇の面前より逃ぐる如く罪より逃れよ、そはもし汝これに近づきなば汝を咬まん。その齒は獅子の齒の如く、人の魂を屠る。凡ての惡は兩刃の劍の如く、その傷の癒ゆることなし。恐怖と橫暴は住居を荒廢に歸せしめ、傲慢なる者の邸宅は廢頽すべし。貧しき人の祈願は神の耳に達し、その擁護立どころに到る。忠言を嫌ふ者は罪人の途を步めど、神を畏るゝ者は赤心彼に歸る。賢者はその前に在る者を辨別し、一目して惡人を知る。他人の金にて家を建つる者は、己の墓のために自ら土石を集むる者の如し。惡き人の集團は束ねたる麻の如く、その終末は火の焰なり。罪ある人の道は瓦石なくして平かにせられ、その末端は地獄の穴に連なる。

律法を守る者はその自然の傾向を支配し、神を畏るゝは智慧の究極なり。智あらざる者は教へられず、また苦を增す智慧あり。賢者の智識は水の泉の如くに豐かに、その分別は命の水の如し。愚者の心は壞れたる器の如く、その內に智識を容れず。悟ある者至言を聞かばこれを推讃して尙ほ附言する所あるも、愚かなるものこれを聞かば、嘲笑してこれを背後に擲つ。愚人の談論は旅行の荷物の如く、賢者の唇には常に美德たゆ。思慮ある人は集會の席上にて說話を求められ、その言は人これをその胸中に反省玩味すべし。

智慧の愚かなる者に於けるは獄舍の如く、賢き者の智識は熱火の如し。訓言は愚者に對して足桎の如く、その右

手に嵌めたる手錠の如し、而かもこれ賢者に對しては黄金の飾の如く、その右手に嵌めたる飾環の如し。愚人は聲をあげて笑ふも、賢者は默して微笑す。愚人の足は屋内に急ぐも、禮ある者は戸外に立つ。愚人は内を窺へど、諛ある者は自らを卑下す。入口にて聞くは作法にあらず、賢者は恥づべき行爲をなすを憂ふ。饒舌者の唇は只だ他人の言を反復し、賢者の言は計量せらる。愚者の心はその口中に在り、賢者の口はその心中にあり。愚者その敵を呪ふは、これ己が魂を呪ふなり。私語する者は己の魂を汚し、その到る所にて人に嫌はるゝなり。

〔二一二〕 怠惰なる人は不淨なる石の如く、人みなその惡臭より遁走す。怠惰なる人は糞堆の汚穢の如く、これを取る者はその手を振ふ。

不肖の子を生むは父の恥辱、女子の産まるはその損失なるも、その恥辱となるも、如き女はこれを生みたる者の憂苦なり。大膽なる女はその父と夫の恥辱となり、かれ又た兩者に賤めらる。得ざる談話は葬式に於ける音樂の如く、されど鞭韃と矯正は常に賢明なり。愚人を教ゆるは碎けたる土器を膠するが如く、熟睡せる者を覺ますが如し。愚人に談ずるは眠れる者に語るが如く、語り終りて後ちかれ、何事ぞや、と問はん。死者のために弔せよ、その光明滅たればなり。愚人のために嘆け、その悟覺乏しければなり。愚人の生は死に劣る。死者に對する哀悼は七日にて足れど、愚人に對する哀悼はその終生に亘る。愚人と多く語る勿れ、また厥と交る勿れ。煩ひを受けざるやう彼に注意せよ、彼その身を振ふ時に汚されざらんためなり。彼を避けなば汝安息を得ん、かくて汝彼のなす愚なる事の煩ひを受けざるべし。何物が鉛よりも重きもののありや、その名は「愚人」にあらずして何ぞや。砂と鹽また鐵の重さも尙ほ常識なき人よりも堪へ易し。家の周圍に材木を

入れてこれを纏めなば、地震のために壞れざる如く、熟慮ある忠言に基く心は、危機に莅むで恐るゝ所なし。考へ深き悟覺に安定する心は磨ける壁に刻みたる飾の如きものに非ず。高所に置かれたる小石は風に堪へず、かく愚かなる妄想をなす臆病なる心は如何なる恐怖にも堪へ得ざるべし。

眼を損へば涙流れ、心を傷めば友を失ふ。鳥に石を投ぜばこれを追ひ、友を非難せば友情を滅す。汝友人に對して劍を拔くことあるとも憂ふる勿れ、尙ほ調和の途なきに非ず。汝友人に對して口を開くことあるとも憂ふる勿れ、尙ほ和解の法なきに非ず。されど、非難と憍慢、秘密の曝露と詐僞の打擊、これ等のものゝ前には如何なる友人も逃げ去るべし。隣人の貧しき時にこれを支持すべし、汝彼が榮ゆる時に喜ぶことを得べ ければなり。彼が憂悶ある時に誠實を失ふ勿れ、されば汝彼と偕にその產業を受くることあるべし。〔火の燃ゆる前に爐中は煙に充つるが如く、血を見る前に先づ罵詈あり。〕貧しく成りたる友を友として恥づる勿れ、その面前より自らを匿すこと勿れ、そはもし汝の故によりて不幸彼に起らば、これを聞く者みな汝に對して警戒すべし。

嗚呼誰か我口に守衛を置き、我唇に怜悧の封印をなさんかな、庶幾くはわれこれによりて仆れず、わが舌われを亡ぼすこと無きを得んか。〔二三〕於乎、我命の君にして父なる主よ、仰ぎ冀くば彼等の計謀に我を委ね給はず、我をしてそのために墮落せしめ給ふこと勿れ。嗚呼誰か我念に苔を加へ、我心に矯正の鞭を下し、その愆を恕すことなく、その罪を見逃がすことなからんかな。庶幾くはわれ愚なる行爲を重ぬることなく、また我罪業を增すことなきを得んか。かくてわれ敵の眼前にて沒落し、我敵またこれを見て喜ぶ如きことの無きを得んか。

わが心より淫慾を去らしめ給へ、貧婪と邪淫の神にして父なる主よ、仰ぎ冀くは我に白眼を向け給ふことなく、わが心より淫慾を去らしめ給へ、貧婪と邪淫われを襲ふことなからしめ、また廉恥なき心に我を委ね給ふこと勿れ。

わが兒等よ、口の訓戒を聽け。これを守る者は捕虜となることなし。罪人はその唇にて係蹄にかゝり、愚人はその口にて失脚す。そは不斷に主の名を言ふを常とする勿れ。汝の口をして誓言に慣れしむ勿れ、また至聖者の名を言ふを常とする勿れ。せらるゝ奴僕は罰に充ち、責めその家より離れず。もしかれ罪を犯せば、その罪かれに在り、もしかれ罪を犯せば、その罪かれに在り、もしかれ無頓着屢々誓言する者は罪に充ち、責めその家より離れず。もしかれ罪を犯せば、その罪かれに在り、もしかれ無頓着なれば重ねて罪を犯すなり。もしかれ要なきに誓へば義とせらるべからず、その家不幸に充つべければなり。死に準ふべき語法あり、かくの如きものをしてヤコブの家に存せしむべからず、己が魂をこれに近づけざる者は活き、罪のうちに輾轉することなかるべし。汝の口を不淨なる語法に慣れしむる勿れ、これ罪惡なればなり。人を誹謗するを常とする者は終生智慧を得ることなかるべし。汝權勢ある者の間に坐して審議に臨む時汝の父と母を記憶せよ。或は汝その席上にて失錯し、汝の語法にて己が愚昧なることを露はし、かくて寧ろ自らこの世に生れざりしことを希ひ、第三種のものは怒を增す。熱烈なる願望は火の如くに燃え、その燒け盡くるまで滅ゆることなし、私通する者はその肉體を以てし、火かれを燒き盡くすまで止まず。如何なる飯も彼には甘く、その死するまで罷めざるべし。己の寢所を離れて行く者、その心に謂つて言ふ、誰か見る者あらんや、家の壁は我を匿くし、屋根の蔭は我を掩ふ、何人も見るものなし、罪を犯すとも何かあらんや、と。彼は至上者を忘れ、彼の恐るゝ所のは唯だ人目なり。而かもかれ主の眼は日輪よりも十千倍に輝き、凡て人々の行を看、密かなる所を眺めつゝあることを覺らざるなり。そはかれ萬物の造られざる前にこれを知り給ひ、尙ほその完成の後にこれを看たまへり。かくの如き者は市の街頭にて罰せられ、その想はざる所へ引致せられん。己が夫を捨てゝ、他の男によりて嗣子

を設くる妻もまたかくの如し。そは第一かれ至上者の律法に從はず、第二自らの夫に對して洵通によりて有夫姦を犯し他の男によりて子供を設くればなり。かれ集會所に連れ行かれ、その子等は根を張らず、その枝は實を結ばざるべし。かくて後の人は、主を畏るゝことより善きことなし。かくて後の人は、主を畏るゝことより善きことなきを知るべし。

〔二四〕　智者自ら讃揚してその民の間に譽を得、至上者の集會はその口を開きて萬軍の前に尊ばる。曰く、われ至上者の口より來り、霧の如くに全地を蓋へり。われ高き處に居所を定め、わが位は雲の柱にありき。われ獨り天の周圍を遍歷し、深淵のふかみを歩めり。海の波濤も、全地も、諸民諸國みな我權力の下に在り、と。われ此等のものもてわが安息所を索て言ふ、われ何の住家に宿らんや、と。その時萬物の造主われに命じ給ひ、我を造り給ひしかれ我がために住所を定めて言ひ給ふ、汝の作業をイスラエルにつくれ、と。かれ世の前に我を造り、われ永遠に忘れらることなかるべし。われ聖き幕屋にて彼に奉仕し、而してシオンに永設せられたり。彼また我を聖都に息はしめ給ひ、わが權威はエルサレムに在りき。われ名譽ある民の間に居を得、主とその嗣業の分を得たり。レバノンの香柏の如く、シオンの諸山に生ゆる橄欖の木の如く尚められ、われ海岸の棕櫚の如く、エリコの薔薇の如く、平原の橄欖の木の如く、然り、われ水邊の篠懸の木の如くに稱揚せられたり。肉桂やアスパラトの如く薫香を放ち、沒藥の如くに馥郁たる香を發し、阿虞の如くシヘレートの如く、ナタープの如く、またわれ幕屋の薫物の烟の如くありき。われ葡萄の如く恩惠を送り、わが花は榮光と富貴の實なり。我を望まん者は我に來れ、汝等我産物にて充たさるべし。そは我記憶は蜜よりも甘く、我を有せば蜂の蜜房にもいやまされり。我を食せん者は更に我を欲し、

我を飲まん者は尚ほ我を渇望すべし。我に服従する者は恥を受くることなく、
し。凡て此等の事は至上者なる神の契約の書にして、モーセがヤコブの集會に嗣業として命じたる律法なり。即
ちピソンの如く人々に智慧を充たし、またチグリスの收果期に於けるが如し。誡めを以てユーフラテの如くに溢
れ、收穫期に於けるヨルダンの如し。分別を以てナイルの如くに漲り、葡萄期に於けるギホンの如し。最初の人
が完全に彼を知らざりしが如く、また最後の者も彼を見出し得ざるべし。そは彼の分別は海よりも充分にして、彼
の思慮は深淵よりも大なり。而して我は河よりの流れの如く、また田園に注ぐ溝の如くに來れり。われ言へり、
われ我畠に灌ぎ、われ十分に我畑を潤さん。かくて看よ、我流は河となり、我河は海となるを。しかもわれ尚ほ
朝の如くに訓誡に光明を與へ、此等の事を遠くまで輝かさん。しかもわれ尚ほ豫言の如くに教旨を出し、これを
永遠の末代に遺さん。汝等よく視るべし、われ唯だ獨り己のために勞せるに非ず、勵みて彼を索むる者のために
せり。

〔二五〕 わが魂三つのものを願ひぬ、これ神と人の眼に美はしきものなり。即ち兄弟の協和、隣人の友愛、夫
婦の和合これなり。我魂は三種の人を嫌ひ、其等の人の生業を見るだに忌はし。即ち貧しくして倨傲なる者、富
みて欺瞞なる者、及び老ひて思慮なく多淫なる者これなり。
もし汝若き時に智慧を獲ざれば、いかで老年にこれを見るを得んや。白髪によき判斷、また長老によき思慮あ
るは如何に美しきかな。侯伯に智慧、また貴人に考慮あるは如何に美しきかな。年長者の冠はその多大の經驗な
り、その榮光とする處は神を畏るゝことにあり。
九種の人はわれ心に考へて有福者となす。第十種のものは我が舌もて語らん。小兒等の樂みある者、敵の墜落

を觀るまで存命する者、分別ある妻をもてる夫、
なき者、また己の分に足らざる者に仕ふることなき者は福なり。眞の友を得たる者、また己の言を領會し得る聽者
を得たる者は福なり。而して智慧を獲る者は大なる哉。されど彼なほ主を畏るゝ者に若かず。主を畏るゝは全て
のことに優り、これある者は他に比類すべきものなし。

心の傷にあらざれば如何なる傷も、女の惡にあらざれば如何なる惡も、己を憎む者より受けたるに非ざれば如
何たる災殃も、怨敵の復讐にあらざれば如何なる報復も尙ほ可なり。世に蛇の毒より大なるはなく、女の忿怒よ
り甚しきはなし。

惡性の女と世帶を保たんよりも、我は寧ろ獅子や大蛇と同棲せん。女の惡性はその相を變へ、熊のそれの如く
その容姿を暗黑にす。その夫は友人の間に坐するも尙ほ覺へず長歎息す。世に女の惡意の如く甚しきものはなし。
望むらくは惡の應報かれに來らんことを。饒舌なる女が靜肅なる男を倦厭せしむることと、恰も老人が砂の上を步
むが如し。女の美貌の故に失墜する勿れ、また彼が持てる何物によりても誑かさることなかれ。
持せば、そは辛酷なる奴隷にしてまた不名譽なり。下賤なる心と悄然たる容貌と傷める心は惡き婦のそれなり。
夫を幸福ならしめざる婦は、兩手垂れ兩膝痲痺せるが如し。罪惡は女より起り、女の故に我等みな死せざるべか
らず。水に出口を與ふる勿れ、また女に自由を與ふる勿れ、かれもし汝の欲する如く行かざれば、宜しく汝の肉
よりこれを斷つべきなり。

〔二六〕良妻はその夫の祝福なり、彼の壽命は倍加せらる。賢婦はその夫を愛護し、夫は平安にその生涯の事
を完ふすべし。良妻は佳き賜物なり、神を畏るる者にその酬として授けらる。富めるも貧しきもその心いそしみ、

その顔つねに快活なるべし。

わが心三つの事を恐る、第四のものに關してはわれ甚だこれを恐怖す。市中の誹謗、暴徒の集合、無實の處罰、此等はみな死よりも恐るべし。一人の妻を嫉妬する他の妻は心の憂苦と悲哀とす。而して此等のものはみな口舌の禍なり。惡き女は苛き鞄の如く、また彼を捕へんとする者は蠍を摑むが如し。酒に醉へる女は激しき怒を起し、而して自らの恥辱を蓋はざるなり。女の賣淫はその眼を揚ぐる時にあり、かれはその瞼によりて知らるべし。强情なる娘は監督を嚴にすべし、もし自由を與へなば彼れこれを亂用す。恥なき目を監視せよ、而してもし汝に逆ふ如きことあらば容赦する勿れ。渇ける旅人が口を開きて如何なる水にても近きにあるを飲むが如く、彼女も亦た如何なる所にても坐し、その靴を開きて矢を受けん。

妻の美德はその夫の歡喜、その分別は彼が骨を肥やすべし。靜かなる女は主の賜物、教訓ある魂はこれに代ゆべきものなし。恥を知れる女は優雅にもまた優雅、自制ある魂は得て評價すべからず、日輪が主の至高處に昇るが如く、良妻の美はその夫の家の秩序を整ふ。聖燭に燈明の輝く如く、賢婦の顏はその軀體の上に在りて美はし。黃金の柱が白銀の臺上に立つが如く、その美はしき足は健なる踵の上に立てり。

我子よ、汝の力を異人に與ふる勿れ。全地のうちにて良き地を選び、これに汝の種を蒔きて汝の子孫は榮え、その貴き家門に自信を得て彼等は偉大となるべし。かくて汝が己の良き血統に信賴せよ。かくて汝は律法を無視する男に與へられ、篤信の女はこれを用ゆる者に死の如く思惟せらる。不信の女は唖の如し、されど娶れる女はこれを知る娘はその夫の前にも謹愼す。恥を知らざる女は簾恥を意とせず、恥を知る娘はその夫の男に與へられ、篤信の女は神を畏るゝ男に與へらるべし。强情なる女は犬の如く扱はれ、簾恥心ある女は主を畏る。己の夫を敬ふ女は衆目に賢夫人と映じ、

夫を敬せざる女は驕傲して不信神なるものとして知らるべし。良妻を有する夫は幸福なるかな、その壽命は倍加すべし。聲高く多辯なる女は對敵の戰鬪を開始せしむる喇叭の如く、これと同類なる男の魂はその一生を戰爭の騷擾のうちに終るなり。

我心二つの事を悲み憂ふ。第三のものは我に怒を以て臨む。貧困の故に苦む奮鬪の人と、侮辱を蒙り而かも分別ある人。而して正義より罪惡に陷りたる人、われ主がこの種の人ために劍を準備し給はんことを願ふ。

商人は殆んど自ら惡事を避くることなく、小賈は犯罪より放免せらることなし。〔二七〕多くの者利益のために罪を犯し、利益多からんとする者はその目をそむく。釘の石の間に固くさゝるが如く、罪惡賣買の間に行はる。

我子よ、汝主を畏れて愼むにあらざれば、汝の家は速かに滅亡さるべし。

飾ふられて後に廢物の殘る如く、人の屑もまたその推理にて飾はる。熱爐が陶工の器物を證するが如く、人の試驗はその人を審査するにあり。果物の實のるはその樹の培養に依る如く、人の思想もまたその性に依る。親しくその人と語らざる前に何人をも稱讃する勿れ、これ人を檢するの法なり。

汝公義を索めばこれを獲ん、而してこれを榮光の衣の如くに着くべし。鳥はみなその種類に從つて群棲す、眞理もこれを履行する者に來る。獅子その餌食を捕へんとして待つが如く、罪は邪惡を爲す者を狙ふ。

賢人の言論は智慧ありて變らざるも、愚かなる者は月の如く變ず、愚人の間に在りては嚴重に時の浪費を警戒せよ、されど賢人の間に在りては絶へずその交りを持續すべし。愚人の言は煩に堪へず、その笑ふ時は傍若無人なり。不信なる者の宣誓は頭髮を直立せしめ、その爭論は人の耳を掩はしむ。傲慢なる者の爭ふ時は血を流し、その惡口は聞くに堪へず。秘密を發く者は人の信を失ひ、その心中一人の友人なし。先づ友を吟味して而して後

に彼に信を置け、されどもし汝彼の秘密を發きたらば復たその後を追ふ勿れ。そは人その嗣業を失ひたるが如く、
汝は隣人の友情を破壊せり。鳥を汝の手中より逃がしたるが如く、汝は汝の隣人を放ちて再びこれを捕ふべからず。これを追ふ勿れ、彼は既に遠く去り、係蹄を脱したる羚羊の如くに逸し去れり。そは受けたる傷は繃帯もすべく、誹謗者もまた調停し得べし。されど人の秘密を發く者は何等の望なし。

目にて信號する者はその人に近づかず。汝の顔前にては甘言を呈し、汝の言ふ所を稱讃す、されど後にその言を變へ、汝の言を躓跌の材料となさん。われ多くのものを嫌ふと雖彼の如きはなし。主も亦彼を惡み給ひ、彼を呪ひ給はん。

石を上に投ぐる者は自らの頭に投ぐるなり。偽を言ふ者は自ら傷害を招く。穴を堀る者はその中に陥り、蹄を置く者はこれに係る。惡事を爲す者は、惡事その上に落ち、自らその何處より來りたるかを知らざるべし。嘲笑と非難は傲慢なる者の正に受くべき分、膺懲は獅子の如くにその人を待てり。篤信者の落つるを見て喜ぶ者は必ず蹄に係り、その死せざるうちに苦惱彼を啖ひ盡くさん。

忿怒と激憤、これ亦極めて忌むべきことなり。罪ある人は絶へず怒りて止まず。〔二八〕人に復讐する者は主より復讐せらるべく、神は必ずその罪を記憶し給ふべし。汝の受けたる損害を汝の隣人に赦せ、而して汝の禱る時汝の罪も赦さるべし。人、他人に對して憤を抱き、而して神よりその癒せられんことを願ふや。己に等しき他の人に對しては少しも容赦する所なく、而かも己が罪惡のために贖をなすものぞ。汝の最後を記憶して怨恨を罷めよ。腐敗と死あることを記憶して誡めよ。誰かその罪のために憤怒ありとせば、誰かその罪のために贖をなすものぞ。汝の最後を記憶して怨恨を罷めよ。腐敗と死あることを記憶して誡めよ。

爭鬪を避けよ、されば罪惡汝を遠ざからん、そは熱情の人は爭鬪を惹起すべければなり。惡き人は友人の間に爭を煽動し、平和の中に敵愾心を起さしむ。火はその燃料によりて燃へ、爭鬪はその激するに從ひて益々その度を增進し、人の憤はその力に從ひて大となり、貧怒はその人の資產によりて增減す。急激なる爭論は遂に血を見るに至るべく、もし汝火花を吹けば燃へ上り、これに唾すれば忽ち消ゆべし。而かも兩者共に汝の口より出づるなり。

私語する者と二枚舌の者を呪ふべし。平穩なりし者もこれがために亡びたるもの多し。第三舌は多くの者を擒にし、諸國民の間にこれを分布せり。强大なる都市と雖これを亡ぼし、偉大なる者の邸宅を荒廢に歸せしめたり。第三舌は多くの勇婦を追ひ出してその產を奪へり。これに耳を傾くる者は安泰を得ず、また靜穩なる生活を得ざるべし。鞭韃はその痕を殘すも、舌の打擊は骨をも碎く。劍にて殪れたる者多しと雖、尙ほ舌にて殺されたる者の如くに多からず。その害より掩護せられてその怒に觸れず、その軛を輓かずまたその縛に就かざるものは幸福なり。そはその軛は鐵の軛、その縛條は靑銅なり。それよりする死は苦悶の死、寧ろ陰府の休息はこれに勝る。されど信神者はその力の下にあらず、その焰も彼等を燒く能はず。只だ主を棄てたる者のみその中に投入れられ、焰は燃へて滅ゆることなし。焰は獅子の如くに彼等に向ひ、豹の如く彼等を啖はん。故に汝の葡萄園に垣する如く、汝の口に門と閂を作れ。汝の金銀のために閂を作り、汝の言ふ處のものゝ輕重を量るべし。汝失言等なきやう注意して、汝を陷れんとて蹄を置く者の目前に墜落すべからず。

〔二九〕人その隣人に貸すは親切なり、而してその人の手を捕るは誡を守るなり。隣人の必要なる時にはこれに貸し、約束の時には汝の隣人に返却すべし。汝の言を實證し、その信を保つべし、かくて汝は常に汝の要する

ものを獲べし。貸與を以て、風に吹き落されたる果物を拾ふ如く心ふる者多し、また己に貸したる者に煩を及ぼす者多し。かれ物を借り得るまでは汝の手に接吻し、隣人の金錢に關しては阿辭を呈す。されど返濟期の至るもこれを延期し、長き時の後ちこれを返却す。よしこれを返却するとも、貸主は半額をも得る能はず、殆どこれを拾物と思ふべし。若し返却し得ざる時は、貸主はその金を掠められたるものにして、必要なくして怨を作りたるものなり。かれ恩に酬ゆるに呪と罵を以てするもの、尊敬に代ゆるに侮辱を以てするものなり。故に多くは其等の惡事のために貸すことを爲さず、無益に詐取されんことを恐れたり。されど財産なきものに對しては長く忍耐し、彼等をして慈善を待たしむべからず、誡のために貧民を援助し、損失のために不平を言ふべからず。汝の兄弟或は友人のために金錢を失ふとも、石の下や壁の中にてこれを腐らする勿れ。公義と博愛の財寶（たから）を貯へよ、これ汝が所有する全部よりも汝自身のために益あり。汝の金庫に喜捨金を積み置くべし、これ凡ての惡より汝を救ふべし。堅固なる盾や長大なる矛よりもよく敵に對して汝のために戰ふべし。善良なる人はその隣人のために保證人となる。されど簾恥の心を失ひたる者はその保證より逃ぐべし。汝保證人たる善き任務を忘る勿れ、そは彼汝のためにその命を與へたり。惡人はその保證人の親切を無視し、忘恩の人は己を救ひたる者を破産せしむ。多くの繁昌せし者他人の保證によりて敗れ、海の波の如くに流浪せり。富める者その邸宅より追はれて異國に流離（さすら）へり。惡き者は保證人に催促し、契約を履行せんとて、裁判に提出す。汝の力に從ひて隣人に援助を與へ、自ら破滅せざるやうに注意すべし。

人生に重要なるものは水と飯と、裸を被ふ家と衣となり、貧者の生活は、他人の家にて華美なる態にあるよりも、丸木小屋にある方勝れり。多くあるも少くあるも滿足すべし、されば汝自ら彷徨の誹を聞かざるべし。家よ

り家へ彷徨するは惡き生涯なり。汝他國に寄寓せる時に汝の口を開くべからず。汝はその地に異人なり、只だ飲みて滿足せよ、それ以上なれば汝は苦き言を聞くべし。寄寓者よ、來りてわが膳を支度せよ、而して汝何物にても有たば我に食はせよ、と。寄寓者、出で行けよ、我兄弟わが客として來る、われ我家を要す、と。此等のことは分別ある人にとりて堪へ難きことなり、寄寓の難題と金貸の侮辱。

〔三〇〕その子を愛する者はこれに苦(しもと)を加ふ、これ終りに歡喜あらんためなり。その子に訓戒を加ふる者は滿足を得べく、知人の間に在りてはその子のために譽れあらん。その子を教訓する者は敵をして羨ましめ、友人の前にありてはその子のために得意ならん、父死するとも全く死するに非ず、その死後に彼に似たる者を殘し、その存命中にはこれを見て喜び、死に際して哀あるなし、その敵に對しては復讐者を殘す。その子の愛に溺るるものは、その傷を繃帶し、兒の叫ぶ毎にその心戰々競々たり。

野馬の强情なる如く、我儘に育ちし兒は片意地なり。汝の兒の愛に溺ればかれ汝を怖れしめ、これと遊戲すれば汝を憂へしむに至る。これと共に笑談する勿れ、かれ汝をして膵を噛ましむ。その子の時に自由を與ふる勿れ、またその惡戲を看過する勿れ。その少年の時に頭を下げしめ、その幼き時に腰を折るべし。然らざればかれ頑强となりて汝に叛き、その行爲のために汝は魂の煩悶を覺ゆべし。汝の兒の軛を重からしめよ、然らざればかれ愚かなることを爲して蹉跌すべし。

貧しくともその軀體の健全なるは、富みて病身なるに勝る、健康と强壯はわれ純金よりもこれを冀ひ、快活なる精心は眞珠よりも貴し。强壯なる軀體に勝る富はなく、心の爽快なるに勝れる悅びはなし。死は苦しき生に優り、斷へざる苦痛は永久の安息にしかず。開かれざる口邊に美味を供ふるは偶像の前に供物を捧ぐるが如し。味ふ

ことも臭ふことも能はざる異教の偶像にかくの如き供物が何の益あらんや。財寶を擁きてこれを享樂する能はざる者も亦たかくの如し。その眼これを視て嘆息す、恰も美人を抱擁したる寺人の如し。

漫りに汝の魂を憂へしむる勿れ、己の憂慮によりて自らを衰へしむる勿れ。愉快なる心は人の命なり、人の歡喜は壽命を長くす。勉めて汝の心を安泰にし、煩悶を汝の身邊より去るべし。そは憂苦は多くの人を殺し、また煩悶するも何の益あることなし。嫉妬と忿怒は壽命を短かくし、憂慮する人は早く老衰す。快活なる心は美味の如く、如何なる食物もその人には風味あるなり。

〔三一〕 晝夜財寶を懸念すれば肉を消耗し、これが憂慮は安眠を殺滅す。生活の心配は安眠を破り、重病に陷りて眠られざるが如し。富める者は財を蒐めんとして働き、その休むや娯樂を得んがためなり。貧しき人はその家族の必要のために勞し、もし休めば忽ち困窮す。黄金を愛する者は罰を受けざることなく、賃錢を漁るものは誤謬に陷るなり。黄金にその身を任ね、寶玉に信賴する者少なからず。これ愚なる者には躓く石、思慮なき者はその蹄に係るべし。富める者にして咎むべきことなく、拜金宗になりて迷ふ如きことなき者は幸福なり。何人かかくの如き者ぞ、我等その人を祝せんとす、そはかれ人々の間に驚異たればなり。試練を受けて誘惑されず、寧ろ己の榮光を増せるは誰ぞ。墮落することなく、惡をなし得るに、これを爲さざる者は誰ぞや。かるが故にその財産は確實にせられ、會衆は稱揚すべし。

汝貴人の食卓に臨む時は貪食する勿れ。曰ふ勿れ、卓上食物多し、と。惡き目着は惡きものなることを記憶せよ。神の造り給へるものにて目より惡きはなし、故に何事にも涙を流す。汝の同席者を己の如くに顧慮し、凡て汝が嫌ふ人に注意せよ。彼が眺むる所に手を延ばす勿れ、また皿の中にて彼と衝突する勿れ。汝の前に置かれた

る物を食ふに紳士の如くに食ふべし。貪食する勿れ、然らずむば汝嫌はるべし。行儀のために衆に先じて卓を離れ、飽くを知らざる如きこと勿れ、これ無禮なり。また汝多くの人と坐する時は、隣人の前へ汝の手を延ばす勿れ。思慮ある人には僅少にて可なり、その寢臺にて息の詰まる如きことなし。疼痛と不眠と難澁と內臟の異狀は愚人の有なるも、健康なる安眠は便通を良くして汝もし美食を强ひられたる時は、立ちて吐くべし、かくて汝安樂になるべし。聽け、我兒よ、我を嫌ふ勿れ、毎朝起床して心氣爽かなり。而して汝後日わが言を領會すべし。凡て汝の爲す所に度を過す勿れ、されば汝過失なからん。肉に關して寬大なる者は唇の祝福を受け、その寬大なることの證査また去らず。

酒盃に就てまた蠻勇を示す勿れ、新酒を飲むで倒れたるもの少なからず。爐にて鍛冶屋の作物を證する如く、酒もまた下賤なる者の爭鬪に於てこれを證す。もし人適度にこれを用ひなば、酒は人の延命水たるべし。新らしき酒なかりせば人生如何あるべき、これ初より歡樂のために造られたるものならずや。心の歡喜と悅樂と欣怡は適當なる時に滿足して飲みたる酒の結果なり。多量の酒は愚かなる者の係蹄なり。酒その力を奪ひ生傷を與ふ。頭痛と嘲笑と不名譽は强ひて苦みて飲みたる酒の賜なり。酒の席にて友を責め、また彼が喜べる時に愁へしむる勿れ。彼を叱責する勿れ。他人のある所にて彼と爭ふこと勿れ。

〔三二一〕 汝もし莚（ふるまひ）の司（つかさ）に擧げられなば自ら高くすることなく、他の者に對して己をその一人の如くにすべし。彼等に配慮して後ち著席すべく、彼等の要求を供給して後に橫になるべし。これらのことによりて汝は喜ばれ、その禮節を稱せらるべし。

長年者は語れ、これ汝の特權なり。されど良き分別を以てし、また歌を妨ぐべからず。歌の起る時に談話すべ

からず。また時機を顧みずして汝の智慧を披露すべからず。酒宴の歌は黄金に嵌めたる紅玉の印の如し。純金の細工に緑玉の印、かくの如きはこれ酒の歓楽に伴ふ音曲なり。

若年の者は人に強ひられたる時に語れ、二回三回勧められたる時にすべし。汝の言を簡潔にし、数語にして深長なる意味を表示し、博識なるも饒舌ならざる者の如くすべし。長者の間にて自ら何事をも主張することなく、身分ある人を冒すこと勿れ。竈の前に稲妻あり、恥辱の前に眷顧あり、莚を辞するに最後となるなく、直に歸宅して途に低徊する勿れ。汝の心中に浮びたることはこれを語り、神を畏れまた愚ならざる如くすべし。而して凡て此等のために造物主を祝すべし、彼はその善き物を以て汝を飽かしめ給ふなり。

神を索むる者は訓誡を受け、常に彼に赴く者はその恩顧を得ん。律法を索むる者はこれを得ん、されど偽善者はそのために蹄に係らん。ヤーエーを恐るゝ者はその審判を識別し、暗黒の裡にもその指導を得。暴戻なる者は答責を曲解し、律法を己の必要に應じて牽強す。

賢者は分別を隠匿せず、傲慢なる者は他の教を受けず。熟慮なくして事をなす勿れ、されど一たび斷行せる後は後悔する勿れ。係蹄のある路を歩む勿れ、また障碍物に二度躓くの愚をなす勿れ。平かなる途上に注意を怠ることなく、汝の通路に警戒すべし。凡て汝の作業に於て自らを警戒し、ヤーエーに信頼する者は恥を受くることなし。

〔三三〕 ヤーエーを畏る者に禍きたらず、誘惑にあひて救を得べし。律法を嫌ふ者は賢明ならず、船の暴風に遇へるが如くに吹き廻はされん。智ある者は言葉を識り、律法はウリムの如くこれに忠實ならん。

汝の言はんとすることを準備し、これを他に聞ゆる如くし、汝の教を集めて然る後ち答ふべし。愚かなる者の

心は車の輪の如く、その思想は廻る輪鐶の如し。愚かなる者の愛は鞍馬の如く、何人が乗るとも嘶くべし。

何故に一の日が他の日よりも顯著なりや、年中みな等しく明りは日輪より來るにあらずや。それ等の區別せられたるは神の大智によるものにして、かれ季と節をおの〳〵別ち給へり。或節はこれを祝して聖となし、また或ものは平日となし給へり。これと等しく凡ての人は土より造られたり、即ちアダムは泥にて造られぬ。而して神はその大智もて人々を差別しまた彼等の様態を異にし給へり。或ものはこれを祝福宣揚し、或ものはこれを聖別して己に近づけ、又或ものはこれを呪ひて卑くし、且つ其處より覆へし給ひぬ。粘土は陶物師の手中にありて、彼が思ふまゝに造らるゝ如く、人もまた造主の權内にありて、その聖慮のまゝにせらるゝなり。善に對する惡あり、生に對する死あり、かくの如くまた聖者に對する罪人(つみびと)あり。かく凡て神の御業(みわざ)を觀ずれば、二つづつ互に相對して各々異なれり。

われ實(げ)に葡萄摘のあとを拾ひ集むる者の如く凡ての者の後に來り、神の祝福により進みて葡萄摘のあとを索むる者のために働けることを考慮せよ。汝等民の指導者は宜しく我に聽け、汝等會衆の司たちは耳を傾くべし。

妻子兄弟友人に汝が生ける限り汝の上に權力を與ふる勿れ、また汝の所有を他に與へ、再びこれを乞ふ如きことあるべからず。汝尚ほ活きて呼吸(いき)のあらん限り、如何なる者にも汝を任かす勿れ。そは汝が兒に憐を乞はんよりも、汝の兒等が汝に願ふ方よし。凡て汝の生業に於て最高の位置を維持し、汝の名譽に汚點あらしむべからず。汝の一生畢り、記すべき日の來れる時、汝の遺産を分配すべし。

馬には飼と苔と而して荷物、奴僕には飯(めし)と取締と而して作業、奴僕に仕事を命ずれば休息を希望し、その手を

休めしめば次に解放を要求す。靴と革紐は以てその頸を下げしむ、而して悪き奴僕には枷と膺懲あるのみ。汝の奴僕が怠惰ならざらんために、これに作業を與へよ、そは怠惰は多くの悪戯を教ふ。汝の内にて彼に適する如き仕事を受持たしめ、而して彼もし従はざれば膺懲を重くすべし。されども、如何なる者に對してもその堪へざる程のものを課すべからず、また斷じて不正のことを爲すべからず。

汝の召使たゞ一人ならば、これを遇すること己の如くすべし、汝の召使たゞ一人ならば、これを遇すること己の兄弟の如くし、汝自身の生命に對して憂慮を要せず。もし汝彼を悪く遇して彼逃亡せば、汝如何にして彼を見出し得べきや。

〔三四〕 虚榮を追ふ者は幻影を捕へ、愚者は空想を抱きて昂然たり。幻夢に信頼する者は影を捕へんとしまた風を追ふ者の如し。鏡と夢はよく相似たり、顔と顔の寫影と互に相對す。不淨なる物に何の清淨なるものあらんや、虚妄なるものに何の眞實なる處あらんや。卜占、見通、夢判斷は何等の效益なし。みな汝の欲する如くに汝の心を見るなり。彼等は至上者より攝理にて遣されたるものにあらざれば、汝はこれを顧慮すべからず。夢のために迷ひ行き、空望を抱きて遂に倒れたる者少からず。律法は僞りなく行はれ、智慧は誠實なる口に於て完し。

經驗ある人は多くの事を知り、博識の者は分別を宣言す。無經驗の者は何事をも知らず、されど博識の者は多くの心得あり。われ旅行中に多くの事を觀、また多くの事に遭遇せり。われ屢々死するばかりの危險にも遇ひたれど、此等の經驗によりて免れたり。主を畏るゝ者の精神は死せず、そはその望は彼等を救護する主にあればなり。主を畏るゝ者は何物をも恐れず、また勇氣を失はず、そは主その望なればなり。主を畏るゝ者の魂は幸福なり、その信賴する者は誰ぞ、その支持者は何者ぞ。主の眼かれを畏るゝ者の上に在り、强固なる盾、有力なる支

持、焦熱シロコ風の掩護、日中の蔭、蹉跌の防禦、
祝福とを與へ給ふなり。
不正なる人の犧牲は神を愚弄する供物なり、不信者の奉納は受けられず。至上者は不信なる者の供物を喜び給
はず、また供物多きの故を以て人の罪を赦し給はず。貧しき人の物を取りて犧牲を捧ぐるは、父の目前にてその
兒を殺すが如し。貧困なる者の一椀の飯はその命なり、これを奪ふ者は血を好むの人なり。隣人の生計を奪ふ者
はこれを殺すなり、被傭人の傭を取るは血を流すに等し。一人建設すれば他の者これを破壞す、かくして勞苦の
ほかに遂に何の得る所ありや。一人祈禱し他の者呪詛す、かくして主はその孰れに聽くべきぞ。死屍に觸れて手
を洗ふとも、後ち復た觸れなば、手水も何の益あらんや。人その罪のために斷食すとも、後ち復た罪を犯すもま
たかくの如し、誰かその祈禱に耳を傾けんや、彼もまたその屈辱によりて何の利する所あらんや。

〔三五〕 律法を守る者は供物を屢々す。誡を愼む者は酬恩祭の犧牲を捧ぐなり。親切をなす者は感謝祭の犧牲を捧ぐなり。善きを避くることは主の喜び給ふ所、邪まなることは神意の和らぎなり。空手にて主の前に出づる勿れ。そは凡て此等のことは誡によりて爲すべきなり。正しき人の捧ぐる素祭の共物は嘉みせられ、その記念は忘れられず、豐肥ならしめ、その佳き香至上者の前に達す。正しき人の供物は祭壇を輝かし、喜びを以て汝の善き眼にて主を頌榮し汝の擧祭を節約する勿れ。凡て汝の行爲に汝の容姿を輝かし、喜びを以て汝の課稅を納めよ。神が汝に給ひし如くにまた神に捧げ、汝の手の得たる儘に好き眼を以てすべし。そは彼は報償をなす神にして、七倍にして汝に賠償し給ふべし。

賄賂すると考ふる勿れ、彼はこれを受け給はざるべし。また强奪の犧牲に信賴する勿れ。そは彼は正義の神に

ましく〳〵て、彼に不公平なることなければなり。彼は貧民に對して不公平なることなく、
を傾け給ふ。彼は孤兒の叫を默過し、或は寡婦の歎息を無視し給はず。淚はその頰を流れ、彼
る者に對する愁訴の聞ゆるに非ずや。かゝる歎息は神の顧み給ふ痛恨なり、かゝる叫絕は雲上に達す。微賤なる
者の訴は天に上り、上りてこれに達するまでは停まざるべく、神これを臨檢し、公正なる審判者これを審判し
給ふまでは動かざるべし。然り、主は決して躊躇し給ふことなく、力ある者長く忍び給はざるべし。
なる者の腰を撻ち、傲慢なる者に復讐し、驕傲の鼻を挫き、邪惡の權標を折り、各人その歸する所を得せしめ、
彼等のなしたる詭計に應じて賠償せしめ、その民の訴のために論辯して、その救拯を以て彼等を喜ばしめ給ふべ
し。苦しみの時に於けるその聖恩の如何に難有きかな、恰も大旱に雲霓を望むが如し。

〔三六〕萬物の神よ、仰ぎ冀くは憐みを垂れ給ふて我等を救ひ、汝を畏るゝの念を諸民に起さしめ給へ。異國
人に向ひて汝の御手を振り、汝の御力を彼等に示し給へ。彼等の目前に汝自ら我等のうちに聖となり給ひし如く、
また我等の目前にて彼等の間に汝を崇めさせ給へ。即ち我等の知る如く、彼等もまた汝のほかに神なきことを知
らんがためなり。願くは新たに徵兆を示しまた驚異を行ひ、汝の御手と右の腕を崇めしめ給へ。憤を起し怒を發
して仇を服し敵を亡ぼし給へ。終局の時を早め約束の日を定め給へ、そは或は汝に汝何を爲すやと言ふ者あらん。
逃る者を熱火のうちに陷らしめ、汝の民を害する者を亡ぼし給へ。已の他に如何なる者もなしと言ふ如き敵王の
頭を碎き給へ。

古の盛時の如く、嗣業を受けんがためにヤコブの諸族を集め、汝の長子と稱し給ひしイスラエル、即ち汝の聖
名によりて呼ばれたる民に惠みを垂れ給へ。汝の住み給ふエルサレム、即ち汝の聖都に憐みを垂れ給へ。汝の威

嚴を以てシオンを充たし、汝の榮光を以て聖殿を滿たし給へ。汝の最初の作業に證明を與へて、聖名により語られたる異象を實現し、汝を待つ者に酬ひて汝の豫言者の信賴すべきことを證し給へ。主よ、願くは汝が汝の民に與へ給ふ御惠に從ひて汝の僕の禱を聞き給へ、かくて全地のはてに至るまで皆な汝が久遠の神たるを知ることを得んか。

各種の肉類腹に入るも、一の肉は他の肉よりも味ひ佳し。舌は與へられたるものを味ひ、心の辨別力は虛妄の味を別つ。虛僞の心は憂苦に陷るも、經驗ある人はこれを防避す。

女は如何なる男をも受く、されど一人の女は他の女よりもよし。女の美はその容姿を輝かし、如何なるものよりも人の眼を怡ばす。特にその舌輕快なる時は、その夫は他の男の如くならず。妻を娶る者は善き產を獲るなり、己の扶助者また家の大黑柱なり。垣なければ葡萄園の荒廢に歸する如く、妻なければ男は無宿者流浪の人となる。誰か市より市に出沒する盜賊を信賴する者あらんや。一定の宿所なく、日の暮れたる所にて宿る人もまたかくの如し。

〔三七〕　友人みな言ふ、われ彼の友なり、と。されどたゞ名のみの友あり。親愛なる友人が仇となりたる時、其處に死する如き悲みなきや。嗚、賤劣なる自然、如何なればとて汝虛僞もてこの世界を充たすべく造られしぞ。漫りに人の食卓に近づき、しかも災難の日に遠ざかる如きは友の陋醜なるものなり。良友は仇に對しても共に論爭し、敵前に於て共に楯を執る。鬪爭に於て汝の仲間を忘るゝ勿れ、掠奪する時に汝の友を見捨ること勿れ。

相談に與る者みな忠言を與ふ。されど己の便宜に適する如く忠言する者あり。忠告者に警戒し、先づその人の利害が那邊にあるかを調査すべし。そは彼もまた自ら熟考し、如何にしてこの事の彼が欲する如く起るべきやと

思ひ、汝に告げて言はん、汝の方針極めて良し、と。而して汝の不幸に會する時はかれ汝を捨てゝ顧みず。汝に反對する者に相談する勿れ、また汝を猜む者には汝の企圖を秘密にすべし。女にその競爭者に關して相談する勿れ、また敵には汝との戰爭を秘密にすべし、商人に商業上の事に關して、また買手には賣却の事を、惡計ある人に慈善に關して、また無慈悲なる人には人類の幸福を、無能の職工にその作業に關して、また一年傭の者には播種の事を、仕事嫌ひの奴隷に多大の作業に關して――此等の者を信用して如何なる相談をも爲すこと勿れ。寧ろ常に小心なる人に相談せよ、汝が慥かに律法を守る人と知れる者、また汝の心情と一致する者、また汝が失敗に陷る場合に汝のために悲む如き人を信用すべし。汝はまた汝自身の心の思ふ所を知り置くべし、そは自身の如くに己に誠實なる者は他になければなり。樓上に番する七人の見張りよりも、人の心は己の好機會を通報す。されど何事よりも神に議り、汝の歩みの愆らざるやう彼に祈るべし。

動作の初めは言語なり、而して思想は凡ての作業に先だつ。分別の根は心に在りて四本の枝を生ず。善と惡と生と死と、されど舌は悉く此等のものを支配す。多くの人には智ある如きも己には愚なる賢者あり。またその言のために他人には嫌はれ、世に樂なき賢者あり。そは恩惠主より彼に授けられず、智慧彼になければなり。また己のために智あり、その悟の果(み)かれの體にある賢者あり。またその民のために智あり、その悟の果(み)永く失せざる賢者あり。人の生はその日數たゞ僅かなり、されどエシュルンの生は限りあらず。己のために智あるものは自ら享樂し、人また彼を幸福なりとす。その民のために智ある者は名譽を得、その名末代に殘るべし。

わが兒よ、汝の生に於て汝の魂を證し、これに害あるものを爲さざるやう注意すべし。そは全てのもの萬人に益あるにあらず、各人の魂は各種のものを採取せず。如何なる享樂にも耽るなかれ、また如何なる美味をも漫り

に取る勿れ。そは大食は疾病を釀し、過分に暴食すればその物を嫌忌するに至る。不節制のために亡びたる者多し、されど常に愼む者は命ながし。

〔三八〕汝の必要に從ひて醫者を尊敬すべし、そは醫者は神の立て給ひしものなればなり。醫者はその智慧を神より享け、國王よりは賜物を受く。その技能によりて彼はその頭を擡(あ)げて貴人の前に立つを得るなり。神は土より藥を造り給ひたり、聰き人はこれを却くべからず。水の味は木にて甘くなりしに非ずや、これ神の力が總ての者に知られ得んがためなりき。かくて神、辨別力を人に與へ、人をしてその偉大なる工作を欣ばしめ給へり。醫者は此等の物によりて人の痛を鎭め、藥劑師も亦た糖劑を製す、かくて神の作業熄(や)まず、健康その地面を拂らつて去ることなし。わが兒よ、汝疾める時に怠ることなく、神に祈禱すべし、そは神は癒すことを得べければなり。罪より去つて汝の手を潔め、愆より離れて汝の心を淸くすべし。汝記念とともに素祭を供へ、また汝の產業の許す限りの脂の供物を捧ぐべし。而して醫者にその處を與へ、これを遠ざくべからず、彼もまた必要なればなり。彼の力によりて初めて病の怠ることあるべし。そは彼またその診斷の誤らざらんために神に禱り、その治療奏功せんこと願ふなり。己を造りしものゝ前に罪を犯す者は醫者の手に付さるゝべし。

我兒よ、死せる者のために涙をそゝぎ、汝の哀を表して慟哭すべし。その死人の分に從ひてこれを葬り、彼が死する時に直ちに逃げ去るべからず。汝の悲嘆は傷ましく、汝の慟哭は熱切に、哀悼はその人の分に適せしむべし。世評の故を以て一日若くは二日、而して後は汝の健康のために徹諦(あきら)むべし。そは悲痛より死毒起り、心の愁嘆は人の力を屈伏す。死よりも惡きはその後に殘る悲哀にして、貧しき者の一生は心の呪なり。故にその後は汝の心を煩はすことなく、死者の記憶を斷ちて己の終局のことを考ふべし。死せる者を忘れよ、彼は歸るものに非ず、

汝また彼を益することと能はず、却つて汝自身を害するあるのみ。彼の受けたる宣言を記憶すべし、汝自身に對する宣言たるべく、昨は彼の運命たりしもの、今は則ち汝のものたるなり。死者既に息へば、その記憶も休ましむべく、彼の靈魂既に去りたれば汝も諦むべし。

學者の智慧は閑暇より來る、俗事に多忙ならざる者は智慧を得べし。耒耜を手にする者、また鋒を閃めかすを以て誇りとする者、家畜を驅りまた牛を逐ふ者、畜産のほか話題なき者、如何にして智者と成るを得んや。彼は種蒔く畦を作るに細心にして、またその配慮はたゞ牝犢に秣ふに在り。彫刻師や鍛職工の晝夜休みなき者もまた然り。或は印形を刻り、或は諸種の意匠を考案し、肖像を描くに用意周到、ただその作を完成することにのみ心を勞せり。爐の傍に坐して鑢を扱ふ者もまた異ならず。火焰その肉を破り、鎔爐の炎熱かれを灼く、その耳は鐵槌の響にそはだち、その眼は器の型に光る。彼はその工作を完成するに全心を致し、その寸法を精確にすることにのみ心を勞す。回轉器の前に坐してその足にてこれを回轉する陶物師もまた然り。彼は常にその作業に心を勞し、その作品は數多し、その腕は泥にて龜裂し、その腰は未だ老年ならざるに曲りて弓の如し。彼は釉藥を施すに腦を拃り、竈の熱度にその心を勞するなり。

凡て此等の者は皆なその手器用にしてその工作に巧妙なり。此等の人なければ市は住ふべからず、また彼等何處に往くも餓ゆることなし。されど彼等は公けの評議には必要なく、集會所に於てはその席なし。裁判の席に彼等の坐すべき處なく、彼等は法律も正義をも解せざるなり。彼等は智慧の教訓を說かず、智者の箴言を領會せず、ただ彼等の會得するものはその職の作業にして、その心は技能の實施に在るのみなり。

〔三九〕 その身畏神を事とし、その心至上者の律法にある者は則ち然らず。彼は古への智慧を索め、昔時の豫

言を研究す。彼は名ある人の論議を考へ、喩訓の奥義に達せんと欲す。然り、箴言の隠れたる意義を尋ね、喩訓の暗辭に通ず。彼は貴人の間に奉仕し、王侯の前に侍す。彼は諸民の地を遍歴し、善悪を人々のうちに檢す。彼は心して造物主に求め、至上者の前に慈悲を懇る。彼は口を開きて禱り、禱りてその罪のために哀願す。至上神に善と觀らるる時は悟りの靈にて充たされ、彼もまた自ら二倍に智慧の言葉を語り、禱りに神に感謝すべし。彼し評議と智識を指導する時は、その意を彼等の秘密とする處に留め、彼自ら智慧ある教訓を宣べ、主の律法を欣ぶ。多くの人彼の分別を稱讃し、その名末代に消へず、彼は永く人に記憶せられて、その名限なく活きん。會衆はその智慧を語り、集會は公けに彼を稱揚す。彼長らへなば千人にまさりて幸ありとせられ、その終の來らん時われ玆に再び心を定めて十二日の滿月の如くにわが教を輝かさん。汝敬虔なる者、我に聽け、汝の肉は水の邊りに植ゑたる香柏の如くに成長すべし。汝等の馨は レバノンの如く香ばしく、汝等百合の如くに花さかん。汝等聲をあげて合唱し、御業のために主を讃揚せよ。聖名を崇めまつり、琴と糸の歌を以て彼を讃美せよ。されば汝汝大聲に讃美していふべし。

神の御業は善からざるなく、その季節に從ひて各種の需要を供給す。何人も「此は彼に優る」と言ひ得るものなし、そは物おの〳〵その季節に於て有用なればなり。彼その言葉もて秩序を立て給ひ、その口を開き給へばこれその寶なり。凡て善きものみなその命によりて完成し、その救拯の業を妨ぐるものなし。凡て肉なる者のなせることは彼の前にありて、何物もその眼の前に匿くるるものなし。彼は永代より永代に亘りて展望し、如何に細微なるものも皆なこれをみそなはし給ふ。その視界に限定あらんや。またその眼中驚異なるものあらざるなり。

誰も「これ何のためなりや」と言ふことを得ず、そは物みなその用途に從ひて選擇せらる。神の祝福はナイルの如くに溢れ、ユーフラテ河の如く世界に浸潤す。彼の怒りもまた等しく諸民を逐ひ、豐かなる地を鹵の地にかはらせ給ふ。その路は善き者には平かにして惡き者には障碍多し。かれ初めより善き者のために善き物を造り、惡き者のために惡き物を送り給ひぬ。人の生に必要なる主なる物は、水と火と鐵と鹽、麥粉と蜜と乳、葡萄の血と油と衣類なり。凡て此等の物は善き者には善き物にして、而かも惡き人には惡き物となる。刑罰のために起さる風あり、その暴れるや山をも移す。破壞期にその力を出して造主の靈を宥む。火と雹、饑饉と疫病、此等のものは天罰のために造られたるものにして、猛獸と蠍と蝮、また惡きを撲滅する報復の劍、此等はその用ありて造られたるものにして、適當なる時に用ゐられんがために蓄藏せられ、神命令を發し給ふ時は彼等怡び、各その任に從ひてその命に逆はず。

かるが故にわれ初より心を定め、これを考へて書き物に殘したり。神の工作は凡て善からざるなく、各その時に於て各種の要を充たすなり。何人も「此は彼に優る」と言ひ得るものなし。そは物おの〳〵その季節において有用なればなり。汝等赤心誠意聲を擧げて聖なる御名を讃めまつれ。

〔四〇〕 人その母の胎内を出でし日より、萬の活けるものの母に歸らんその日まで、神の與へ給ふ職は大にして、アダムの子等が擔ふ軛は重し。心の煩ひと憂ひ、またその死に至るまで恒に未來に對する警戒。崇められて玉座に即ける者より、埃と塵に塗れたる者に至るまで、冠冕を戴き胸牌を佩べる者より毛の衣を著けたる者に至るまで、恒に忿怒と猜忌と憂慮と恐怖、死の怖れと爭ひと鬪ひのほかあることなし。その寢床に息ふ時、夜間の睡眠もその煩悶を倍大にす。その息も殆どなく、且つ瞬間にして夢のため攪き亂され、その魂の迷ひに詐かれて敵

前に逃ぐる敗北者の如し。かくてかれ遂にその睡眠と幻夢より覺醒するに至る。人も獸も凡て肉なるものは皆なかくの如し、然り、不信なる者はこれに七倍す。疫病と殺戮、虫害と旱魃、荒廢と破壞、饑饉と時疫、此等のもの皆な惡人のために造られ、彼等の故により洪水も來りぬ。凡て土より來りし者は土に歸る、されど天より來りし者は永遠に存すべし。不義の寶は早瀨の如くに去り、雷雨の如くに消ゆ。その激して流るゝや岩をも運ぶべし、劫奪せるものもまたかくの如し。急流の岸に在る芦の如く、何や俄かなり。不法に起りしものは枝を生ぜず、不信の根は薪岩の上にあるが如し。正義は永遠に固定すべし。

酒と強き飲料の一生は佳し、されど財産をつくりし者は此等の兩者に勝る。小供と都市は人の名をのこす、されど智慧を得る者は此等の兩者に優る。若き家畜と苗木は繁榮の元なり、されど愛すべき婦は此等の兩者に優る。酒と歌は人の心を娛ます、されど愛人の情は此等の兩者に優る。笛と琴は歌を美ならしむ、されど誠實なる舌は此等の兩者に優る。愛嬌と美貌は人目を魅す、されど田圃の收穫は此等の兩者に優る。友人と伴侶は時宜に適して救濟に來る、されど正義は此等の兩者に優る。兄弟と援助者は逆境に際して汝を救ふ。金銀は人の足元を固ふす、されど善き分別は此等の兩者に優る。財產と健康は人の心を強ふす、神を畏るゝ心は此等の兩者に優る。ヤーエーを畏るゝことに於て不足なることなく、これに支援を要することなし。神を畏るゝは祝福のエデンなり。凡て榮光あるものを蓋ふ。

我兒よ、乞食の生を送る勿れ、死は寧ろ乞食するに優る。他人の食卓を眺むる者の生は人生と稱すべきものに非ず、與へられたる美食はその人の心を瀆す、分別ある人には內心の苦悶なり。飽くことを知らざる人には乞食

も佳し、されどその心には火の如く燒く。

〔四一〕嗚呼、死よ、汝を想ひ起すことの如何に苦きかな、人その平和なる環境のうちに暮す時、安樂にして萬事に繁昌せる時、而して尙ほ壯んに榮華に恥りつゝあるの時。嗟夫、死よ、汝の宣告の如何に喜ばしきかな。不運にしてまた既に力の衰へたる人に、萬事に蹉跌し失敗したる人に、既に破滅に陷りたる絶望の人に、死は恐るに足らず、これ汝の運命なり。既に往ける者も、また今後來らん者も、皆な汝とこの運命を共にすることを憶へ。死は凡て肉に與へられたる神命なり、汝如何でか至上者の聖意に抗ふことを得んや。汝の壽命或は十年ならんも、或は百年ならんも、はたまた千年なんとも、墓に入りて後は年齡の問題あらざるべし。

蛇蠍視すべきものは罪の子なり。不信の子は惡の家に在り。不義なる者の子はその領有を奪はれ、その子孫は永く乏しかるべし。不信の父はその子これを悵む、そはかれ父の故に非難さるべければなり。禍なる哉、不信の徒、汝等至上神(いとたかきかみ)の律法(おきて)を犯したり。汝等增殖せば不幸の源、汝等子を產まば嘆息の因となならん。汝等死せば呪に入らん。凡て無より來れる者は無に歸る、不信の人もまた然り、虛より虛に往かん。人その體軀に關しては空なり、されど信神者の名は斷絶することなし。汝の名を惜むべし、數千の財寶よりも長く汝のために殘るべければなり。この世の佳きものは永久に殘るべし。

隱れたる智慧と見えざる富、これ等のもの何の用をなさんや。己が愚劣を匿す者はその智慧を匿すものに勝る。

我兒等よ、汝恥辱に關する教訓を聞き、わが悟得に依て恥を知るべし。そは總ての羞恥を羞恥とすべきに非ず、人の貶黜悉くこれを是認すべからず。汝等眞に恥とすべきは、その父と母が賣淫の罪ある者、王侯また治者にして虛僞ある者、僞りある主人と主婦、集合と人民の罪を犯すもの、人の伴侶また朋友にして信ならざる者等なり。

また汝が寄寓する所を誇ることを恥とせよ。誓言と契約を破ること、食事中肘を延ばすこと、請はれたる贈物を與へざること、友人に顏を背向けること、分配を中止せしむること、汝に挨拶する者に對して默すること、娼婦を眺め視ること、夫ある婦人を凝視すること、家婢と共に事に多忙なること、又その寢所を侵すこと、友人に叱責する如き言を放つことを恥ぢ、また人に物を與へて彼を蔑視する勿れ。〔四二〕他より聞きたることを受賣することまた如何なる密議をも發くこと勿れ。かくて汝は眞に廉恥心ありとすべく、萬人の前に愛顧を受けん。されど下の事は恥とするに足らず、また妄りに人を罪科に問ふ勿れ。卽ち至上者の律法と規律を恥とする勿れ、また無辜の罪人に對して正義を行はんとする司法權、僚友また旅伴に對して勘定を爲すこと、また遺業と財產の分配を嚴にすること、天秤と枡の塵を注意し、また尺と量を吟味すること、多少にかゝはらず物を買ふこと、また商人と取引して利益を取ること、また屢々兒女を折檻し惡意ある婢僕の胴を撻つことを恥づる勿れ。良からざる妻あらば締りを嚴にし、多人數の處にては錠を用ゆべし。供託物には目標を附し、凡て授受には書類を以てすべし。無智愚昧なる者を敎へ、若き婦に戲るゝ老人を誡むるに憚る勿れ。かくて汝は熟慮ある者となり、萬人の前に嘉賞せらるべし。

娘はその父の不眠の寶、これが監視はその睡眠を殺減す。その若き時は花の婚期を過ぎざるやう、また嫁して後ちは嫌はれざらん爲に、その童貞時には誘惑せられざるやう、またその夫の家にありては貞淑ならんが爲に、その父の家に在りて姙娠せざるやう、またその夫の家に在りて不姙ならざらんがためなり。汝を市中の笑ひものとなし、人々の間に不祥のものとなし、群集のうちに汝を辱かしむべし。彼の居室には格子を附すべからず、また玄關を見廻し得る如き所なきやうにすべし。そ

の美貌が男子の目に觸れざるやうにし、また既婚婦に交りて雜談せざるやう注意すべし。そはずる如く、女の惡事は女より來る。男子の惡と雖、女子の善に優り、不名譽なる娘は醜聞を放つ。

われ主の作爲を憶ひいで、わが見たる所を述べん。神の言葉によりてその業は作られ、その命に從ひ聖意によりて造られしもの作成せられぬ。旭日萬物の上に現れ、ヤーエーの榮光その作爲を蓋へり。神の聖なる者もその力ある驚異の業を述ぶるの能力なし、その榮光のうちに在りてこれに堪ゆべき力をその萬軍に與へ給ふとも尙ほ且つ然り。かれ深き海と人の心を探り、凡てその秘密を測り給ふ。そはヤーエーは全智にして永遠に來るものを見たまへばなり。かれ過ぎ去りたるものと未來のものを宣べ、また極めて深遠なる秘密をも現し給ふ。彼の知らざることなく、如何なるものも見逃がすことなし。その智慧の力は建てられ、彼は永遠に變ることあらず。何物もこれに增減せしことなく、また彼は何者にも協議するを要し給はず。彼の工作はみな誠に美はしく、これを看るに花の如し。萬物活きて久遠に殘り、凡てのものまた如何なる必要にも應ずべし。彼等互に皆な相異れり、されど神はその一として無用のものを作り給はざりき。一物他物と互にその住きものを交換す。誰かこの美觀に饜きるものあらんや。

〔四三〕 透明（すきとほ）れる蒼穹は九天の美なり、浩然たる天は光明を放射す。日は出でて熱を輝かし、ヤーエーの作爲（わざ）の如何に卓然たるかな。かれ日中に世界を沸熱し給ひ、雄かその酷熱に堪へ得んや。灼けたる鎔爐が鑄鐵を熱する如く、日の放射は山岳を燃やし、焰の舌は下界を燒きて、眼はその火にて焦がさる。これを造り給ひしヤーエーの如何に偉なるかな、その言葉は以てこの力ある僕を造り給ひ、時期を支配して永久の徵（しるし）となし給へり。節會と季節はこれによりて定められ、その光はその運行と共に盈虧す。月また月、

自ら相を新たにし、如何にその變化の驚くべきかな。天上雲の瓶の烽火となり、その輝きもて蒼天に路を拓くなり。星は天上の美觀にしてその榮光、神の高き處に於ける光飾なり。聖き者の言葉によりて各その定められたる位置を占め、その當直に上りて眠ることなし。或はかの虹霓を眺めてその造主を讃美すべし。壯麗にもまた壯麗なり。神の御手これを伸展して誇りとし給へり。神の力また稻妻を擴げ、その審判の閃きを輝かし給ふ。彼その偉なる力にて雲を飛ばし給ふ。鳥の如くに雲を造り給ひ、寶庫を造り給ふ。この故にかれ寶庫より電を散らし給ふ。その雷の轟きはかの地を怒らしめ、彼の力は以て山をも震動せしむるに足る。彼堅くし、以て電を散らし給ふ。その雷の轟きはかの地を怒らしめ、彼の力は以て山をも震動せしむるに足る。彼の震駭は南風を起し、また北よりする旋風、烈風、また暴風雨を起し給ふ。彼は鳥の群の如く雪を散らし、その降るや蝗の飛來するが如し。人目はその皚たる美に眩惑し、心はその降下に驚嘆す。かれまた鹽の如く霜を撒き給ひ、その結晶は碧玉の如くに輝く。かれ北方の冷たき風を造り給ひ、池はこれを胸甲の如くに著く。旱魃の如くに野の產を燒き、焰の如くに牧場の發芽を焦す。て硬き皮を張り給ひ、池はこれを胸甲の如くに著く。旱魃の如くに野の產を燒き、焰の如くに牧場の發芽を焦す。凡てこれを醫する者は雲の蒸溜にして、露滴は熱後の清冷劑なり。神はその深慮によりて海を穩かにし、洋の中に島を建て給ひぬ。海に行く者はその大さを語り、我等の耳はこれを聞きて驚く。神の作業のうちにて最も驚くべき驚異その中にあり、活けるもの〻數多の種類も、ラハブの怪物も、たゞ彼の故にその業さかへ、その一言にて聖意行はるべし。

我等はもはや蛇足を加へざるべし。これを要するに、神は全てなり。我等頌榮を唱はん、そは我等かれを測るを得ず、彼は總てのその作業よりも偉大なればなり。ヤーエーは極めて恐るべく、その偉業は驚くべし。汝等聲をあげてヤーエーを頌榮して汝の能ふ限りを盡くせ、しかも尙ほ十分ならざるべし。汝等更に精力を新たにして彼な

讃揚し、讃揚して倦む勿れ、そはかれ測るべからざればなり。彼を視てその様を語り得るものありや。誰か彼の實相を讃咏し得んや。奇しき物の數は更に多大なり、我は御業のただ僅かを見たるに過ぎず。ヤーエー凡ての物を造り、敬虔なる者にはその智慧を賜ひぬ。

〔四四〕 われ今、名ある人々を讃美すべし、即ちその時代に從ひて我等の列祖たちをたゝえん。至上者彼等に少からざる榮光を與へ給ひ、彼等は初めより卓偉なりき。彼等はその威德を以て地上にその權を振ひ、その勢力に於て有名なりき。その分別を以て策を建て、その先見を以て萬事を洞察せり。その經世の才を以て諸民の王となり、その明察を以て信賴すべき指導者となり、その傳承に於て智慧あることを言へり。諸の則に從ひて詩歌を作り、箴言を作りて卷をなせり。智畧縱橫膂力雄强、その住宅に在りては安逸にその日を送れり。此等の人は皆なその時代に崇められ、一世の譽れを受けぬ。その或ものは名を殘し、人々今は尙ほ彼等を賞讃し、また或者は記念を遺さず、死して後ち聞く所なし。此等は恰も世に生れざりしが如く、またその子孫をも遺さざりしが如し。しかも尙は彼等は篤信の人にして、その播きたる種は必ずあとに殘りて榮え、その遺業はその子孫の子孫に遺らん。その種子は彼等の契約に殘り、その子孫は彼等のために存續せん。彼等の記念は永久に亘り、その正義は忘れらるることなし。彼等の遺骸は葬られて安かなるも、その名は千萬代に生きん。集會は彼等の智慧を語り、會衆はこれを稱讃すべし。

エノクはヤーエーと與に步みて天に擧げられ、後世に智識の奇蹟となれり。正直ノアは咎むべき所なく、破壞期に際して繼續者となり、彼の故を以て殘孽保存せられ、その契約によりて洪水やみぬ。神彼と永遠の誓をなし、再び諸の肉を滅ぼし給はざりき。

## ベン・シラーの智慧

數多(あまた)の國民の父アブラハムはその榮光を失はず。彼は至上者(いとたかきもの)の誡を守り、また彼と契約を結びたり。そのなほ肉體にあるや神かれに命じ給ふ所あり、かれ試みられて信實なりと見られたり。この故に神は誓ひて彼と約束し、彼が裔に於て諸民を祝福し、これを增殖して地の塵の如くにし、海より海までまた大河より地の端(はて)にまで產業を傳へしめ給ひぬ。イサクまた父アブラハムの故によりて同じ約束を賜はり、凡て過ぎし人々の祝福イスラエルの頭上に下りぬ。神かれに與ふるに威嚴ある長子の稱號を以てし、彼にその產業を授け、これを支族に分ちて十二に配し給へり。

神かれより一人の男を出し給ひ、その人すべてのものに愛顧せられたり。〔四五〕神と人とに愛せられてモーセの記憶は幸福なり。彼は殆ど神の如き榮光を賜はり、畏るべきほどの業をなして人々に偉とせられぬ。かれ言を發せば徽兆立どころに停み、神また彼をして國王の面前にて大膽ならしめ、またその民を彼に依託し、その榮光をも示し給へり。神、彼が信篤(あつ)きと柔和なるとにより、凡ての人のうちより彼を選び給ひぬ。また彼をして己が聲を聞かしめ、黒雲のうちにて己に近づかしめ、自らその手に誡を授け給へり、即ち生と智識の法にして、これ彼が神の法典をヤコブに教へ、その證徵(あかし)と審判(さばき)をイスラエルに與へ得んがためなり。

神また彼の如き聖者を一人擧げ給へり、レギの族(やから)のアアロンこれなり。神かれに永久の約束を與へ、またその威嚴を授け給ひ、その榮光を以て彼を祝福し、美なる莊儼を以て彼を裝ひ給ひぬ。即ち完き光彩にて彼を飾り、華麗なる法衣、袴と羽織と外袍を彼に著せ、金の柘榴を捲きつけ、また多くの響く鈴を帶びてその歩む毎に音樂をおこさしめ、以てその内陣に在る時、民の子等彼の響を聞き得て彼を忘れざらしめ給へり。金と青と紫の刺繍ある撚りたる聖衣、審判の胸牌、エフォドと腰衣、織工の織りたる撚りの猩々緋、彫刻師の手に成れる彫刻ある寶石を金に

はめ、イスラエルの支族の數に從ひて記念となるべき刻字あるもの、法帽に附したる「神聖」と刻せる純金の冠冕卽ち最も榮光ある威嚴にして最も威力ある欽仰の表徴、目の視んことを希ふ美の極致を著させ給へり。かれの前にかくの如きものなく、他に決してこれを著けたるものなし、ただ神かれとその子等、またその子等の代々にこれを著けぬ。彼の素祭は全く燔き盡され、毎日二回づつ捧げられたり。モーセ彼を聖別し、聖膏もて彼を淨め、かくて天のあらん限り彼及び彼の子孫の契約となり、神に奉仕し祭司の職を執り神の名によりてこの民を祝福せんためなり。神すべてのもの〻中より彼を選みて、燔祭と脂を供へしめ、馨しき香物をたき、またイスラエルの子等のために贖和をなさしめんとてなり。彼その誡を與へ、法と審判（さばき）の權を彼に授け、これをその民イスラエルの子等に教へしめ給へり。されど異族のもの等彼に反して集り、荒野にて彼を妬み、ダタンとアビラムの徒黨、またコラーの會衆は大に怒りたり。ヤーエーこれを看て怒り給ひ、赫として彼等を亡ぼし給へり。ヤーエーの火祭の供物は彼とその子孫のものとせられたり。たゞ民の土地としては彼その產を有せず、彼人民の間に於て分配に與かる分はイスラエルの子等の間に於けるヤーエーなり。

エレアザルの子ピネハスは榮光を擔ふ第三者にして、彼は篤く萬物の神のために熱心にして、人々の離れゆく時に堅く立ち、その心の衝動によりイスラエルの子等のために贖ひをなせり。この故に神また彼のために命を發し、聖所を維持する平和の契約を立て給へり。卽ち彼とその子孫は永く祭司の職を得べしとなり、神またユダ族エッセの子ダギデとも契約をなし給ひ、王位繼承權はたゞその子孫に限られぬ。卽ちアアロンの後繼がその裔に限らるゝモーシヲーの智慧

るが如し。汝等ヤーエーを頌榮せよ、汝等に譽れの冠を下し賜へり。願くは彼汝等に心の智慧を賜ひ、義をもてその民を審判き給ひて、汝等の子孫絶へず、汝等の力永代に迫ばんことを。

〔四六〕ヌンの子ヨシュアは軍の勇士にして豫言に於てはモーセの後繼者たり。かれその名の示す如く選民の大なる救拯となり、その敵を懲膺してイスラエルに産を與へたり。彼その腕を延べ、槍を擧げてその敵に擬す、何ぞ夫れ壯なるや。誰かこれに敵する者あらん。かれヤーエーの戰を鬪へるなり。日輪も彼のために中天に停り、一日は二日の如くなりしに非ずや。敵軍彼を包圍して周圍に肉迫せる時、かれ至上神に向ひて叫び、至上神は雹と雷を以て彼に應へ給へり。かれ敵兵の上にこれを投下し、降阪にてこれを鏖にし、ヤーエーその戰を監視せることを諸民に知らしめ給へり。これ彼が神の道を歩み、またモーセの日に信仰の行をなし、ヤーエーの子カレブとともに、會衆の縱肆になりたる時堅く立ち、民の罪を犯すを防ぎ、良からざる私語を鎭めたり。この故に彼等は六十萬の徒士のうちより唯二人選ばれ、乳と蜜の流るゝ地なるその産に彼等を導くことゝなりき。かくて神カレブに力を賜ひてその老年にまで迨び、かれその地の高所を歩み、その裔は遺産を相續し、ヤコブの子孫みなの骨はその母の胎内より祈願されし彼はその民に崇められてその造主に愛せられたり。即ち豫言の職にヤーエーに獻身し、師士兼祭司となりしサムエル則ちその人なり。神の言葉によりて王國を建て、民の上に王侯を任命せり。

の信頼すべきものなること知られぬ。加之、かれその敵に包圍せられたる時に神に呼び求め、嘯乳羔を捧げて主に叫びたり。こゝに於てヤーエー天より怒號し給ひ、轟然としてその聲聞へぬ。かれ敵の陣營を討ち平らげ、ペリシテ人の王を亡くしたり。かれ寢床に息へる時にヤーエーとその受膏者を呼びて曰ふ、われ何人より賄賂をとりしや、靴一足にても取りしことありや、と。而して誰も彼を責むる者なかりき。かれ實に終生ヤーエーと凡ての人の前に正直なりき。尙ほかれ死する後のことを尋ねられ、國王にその歩むべき道を示し、地よりその聲を揚げて豫言を以てその民の罪を拭ひ去りぬ。

〔四七〕その後ちナタン出で、ダギデの朝に事へたり。脂が供物より分たるゝが如く、ダギデもまたイスラエルより分たれ、彼は小羊の如く獅子と戯れ、バシャンの犢の如くに熊と遊びたり。その若き時に巨人を殪し、以て民の嘲りを排けぬ。かれ一たび投石索をとりて、その手を振揺すれば、ゴリアテの誇は破れたり。そはかれ至上神に呼びければ神彼が右の手に力を授け給ひ、かれ戰に强き勇者を擊ち仆してその民の角を擧げぬ。この故に娘たち彼を歌ひ、彼を稱揚して萬人の勝者と云へり。かれ王冠を戴きし時、四方の敵を征服し、ペリシテ人の都市を劫奪し、その角を折りてこの日に迨べり。而かも彼その爲したる事に就きては凡て榮光の言葉を以て至上神に感謝し、全心をつくしてその造主を愛し、恒に日々彼を讃美せり。祭壇の前に絃樂を奏せしめ、琴に和して詩を歌ひぬ。かれ祭事を嚴肅にし、一年の季節を整へ、讃美を神の聖名に歸して、夜明け前にその聲聖所に響きわたりぬ。ヤーエーもまた彼が罪を免じ、永久にその角を起し給ひ、また宗王權を彼に與へて、その王位をイスラエルの上に確定し給ひぬ。

彼の故によりて、その後ち賢明なる一子出で、太平にその生を送れり。ソロモンは平和の日に治め、神彼に潤

大なる安息を賜はり、彼は神の御名のために宮を建て、永久に聖所を建設せり。汝
しよ、教訓流るが如く恰もナイルの溢るが如かりき。汝は海の如くに喩訓を集む。汝の
名聲は遠き島々にまで達し、彼等は汝の教にその耳を傾けり。汝の魂はこの世を蓋ひ、汝
し、汝はイスラエルの上に榮光ある名にて呼ばれたり。汝は黄金を錫の如く堆積し、
されど汝は汝の腰を女に與へ、彼等をして汝の體を自由にせしめたり。然り、汝は自ら
の寢所を穢し、神怒を汝の子孫に招き、汝の寢床の故に嘆息あり。かくて國民の宗王權は二つに分れ、
ムより不順の國興りぬ。しかも神は尚ほ慈悲を失はず、またその言の一をも地に棄て給はず、彼はその選みし者
の裔を切り捨てず、また彼を愛せし者の子孫を亡ぼし給はず。ヤコブに殘蘖を殘しダギデの家にその根を保存し
給ひぬ。

ソロモンはエルサレムに眠り、その後に一人の尊大なる者を殘せり。甚だしき痴漢にして分別を缺き、その意
見によりて人民は叛きたり。その後ちまた一人出でたれど、その記憶を殘さざらしめよ。彼罪を犯してイスラエ
ルにも罪を犯さしめ、エフライムの道に躓く石を置きてその地より彼等を追へり。かくてその罪增大し、彼等は
自ら諸の惡を爲すことに身を委ねたり。

〔四八〕かくて遂に火の如き豫言者現はれ、その言は燃える爐の如くありき。
の熱心によりて天を閉ざし、三たび火を呼び降だせり。エリヤよ、
汝は如何に恐るべきかな、汝の如き者は誠に頌榮すべし。誰か死より死人を甦らせ、ヤーエーの聖意によりて
墓より人を起したる者ありや。誰か王たちを穴に入れ、また柬められたる者を牀より下せし者ありや。誰か

イに譴責を聞き、ホレブに懲戒の裁判を聞きしや。
を聖別せしや。誰か旋風にて上げらさ、火の軍勢に連れられて天に往きしや。誰か錄されたる如く、神の恐るべき
怒の前にその怒を鎭撫せんとて用意し、父の心に子を慈はせ、イスラエルの諸族を回復せんとてその時のために
用意せるものありや。汝を見るを得、「愛によりて美化したる者は福なり。そは我等みな復た活くべければなり。」
エリシャは天の室に匿され、エリシャその靈に充されぬ。かれ徴兆をなすこと前者に倍し、その口より出づる
ものみな驚くに堪へたり。かれ終生人のために動かず、また如何なる肉もその靈に對して權威を有たざりき。何
物も彼を驚かすこと能はず、彼の肉はその墓より豫言せり。そのこの世にあるや、奇しき業をなし、その死する
や不思議なる事を爲せり。而かもこれに關はらず民は彼を顧みず、彼等の罪業を止めず、遂にその國より逐はれ
て全地に離散せしめられたり。かくてユダに殘されし者はたゞ僅かなりしが、尙は一人の君ダギデの家に殘れり。
彼等の或者は正しきことをなし、また或者は恐るべき罪惡を犯したり。

ヘゼキアはその市に築城し、その中へ水道を導き入れ、鐵にて岩を斫り、山にて池塘を作りたり。その代にセ
ナケリブ來り、ラブシャケーを遣し、シオンに對してその手を延べ、倨傲にして神を瀆しぬ。この時彼等その心
の誇を挫かれ、產の苦みにある婦の如くに憔悴し、至上神に呼び、その手を差し延べて救を乞へり。こゝに於て
神その禱の聲を聞き、イサヤの手によりて彼等を助け給へり。そはヘゼキアは善事を行ひ、ダギデの道に强く、神託に大且つ忠なる豫言者イサヤが汝に命じたる事を
へり。そはヘゼキアは善事を行ひ、ダギデの道に强く、神託に大且つ忠なる豫言者イサヤの力により未來を
せり。イサヤの生涯中には日輪の逆行したることあり、また曾て國王の命をのべ、かれその靈の力により未來を
洞察してシオンの哀悼者を慰めたり。かれ未來のことを永久に豫言し、未だ起らざる秘れたることを語りぬ。

〔四九〕ヨシアの名は藥劑師のよく調合したる馨しき薫物の如く、その噂は蜜の如く口中に甘く酒宴に於ける音曲の如し。かれ我等の墮落を憂ひ、空しき忌むべき事を廢し、かれ全く神に歸依し、暴戾の日にも神事に奉仕したり。

ダギデ、ヘゼキア、及びヨシアを除き、他は皆な全く腐敗して至上者（いとたかきもの）の律法を捨てたり。ユダの諸王はその終りまで皆な然りき。かくて彼等の權力は他のものに與へられ、その榮光は異邦へ移されぬ。聖都またエレミヤの言によりて燒かれ、これが道路破壞せられたり。そは彼等彼を迫害し、而かも彼はその母の胎内より豫言者たるべく、或は秡き或は毀ち或は滅ぼし、或は建て或は植ゑ或は强かるべかりしなり。

エゼキエルは異象を看、乘物の種々なる生物（いきもの）を叙す。かれまたヨブを豫言者のうちに數へぬ、ヨブは全く正義の道を守りたるものなり。十二豫言者に就ては、彼等の枯骨その所を得て榮えんことを願ふ。彼等はヤコブの健康を恢復し、確信ある冀望を以て彼等を救へり。

我等如何にゼルバベルを讃揚せんや、彼は恰も右の手にせる印の如し。またヨセテクの子イエスを如何。彼はその生涯に宮を建て、高處に聖殿を築き、久遠の榮光のために準備をなせり。ネヘミヤは榮光ある記念あり。かれ我等の廢墟を再興し、我等の創傷を癒やし、門を立て閂を置けり。

地上に造られたるものにしてエノクの如きものは蓋し尠し。かれもまた地上より引取られたり。曾てヨセフの如き人の生れたるありや。その體もまた神臨を受けぬ。シェム、セス、及びエノクは高大なる譽あり。されど萬（よろづ）の生けるものに勝りて美はしきはアダムの榮光なりとす。

同胞のうちにて偉大にまたその民の榮えたるものは〔五〇〕祭司ヨカナンの子シメオンなり。彼の時に宮を

修理し、彼の日に神殿を築城せり。彼の日に壁を築き、王宮の如く防備のために櫓を附けぬ。彼の時に貯水池を堀り、水旺溢して海の如し。かれ盜賊のためにその民を思ひ、また敵國に對して都を築城せり。彼が天幕より外を眺め、また聖所より出でたる時に如何に美はしかりしことよ。雲間に輝く曉星の如く、大祭日の夜の滿月の如く、至上者の聖殿に照る日輪の如く、雲に影ずる虹霓の如く、初穗の日に枝に咲く花の如く、小川の岸の百合の如く、夏の日のレバノンの綠芽の如く、香爐に燃ゆる薫物の火の如く、金の器の美はしく細工して寶石を様々に嵌めたるものゝ如く、滿樹實を結びて繁れる橄欖の如く、枝葉鬱蒼たる胡蘆子の如く然り。かれ榮譽ある禮服を著け、壯麗極まりなき衣裝を纏ひたる時、かれ威嚴ある祭壇に登り、威風聖所を拂ふ時、かれ木の段に立ちて同僚の手より祭物を取れる時、レバノンの若き香柏の如くその子等周りを圍む時、小川の邊りの柳の如く彼等彼を圍繞し、アアロンの子等皆なその榮光を以て、イスラエルの全會衆の前にて彼等の手に主の初供物を捧げん時に。遂にかれ至上者の木の列を並べ、祭壇の禮拜を終りて、その手を延べて杯に達し、葡萄の血を注ぐ、然り、これを祭壇の下に注ぎて萬物の王なる至上者に馨ばしき香りとす。ここに於てアアロンの子等、打物の喇叭を吹奏し、實にこの大吹奏をして至上者の前に記念のため聞かれしむ。この時凡て肉の者急ぎその面を地に伏して共に至上者なるイスラエルの聖者の前に禮拜すなり。而して歌の音聞かれ、群衆の頭上に妙なる調おこる。この地の民みな叫びて慈悲ある主に禱り、かれ祭壇の奉仕を終りて、儀式の彼をして神に近づかしむるまでに至る。ここに於てかれ段を下り、手をイスラエルの全會衆の上に擧げ主の祝福をその口に唱へ、主の名を以て自ら讃揚す。この時彼等再び平伏し、彼より神の赦罪を受く。

汝等萬物の神を頌榮せよ、彼は地に偉業を爲し、母胎のうちより人を擧げ、その御心に從ひて扱ひ給ふ。願く

はかれ汝等に心の智慧を賜ひ、汝等の間に平和あらんことを。神の恩惠シメオンに豐かにして、そのためにピネハスの約を上げ給はんことを。人自らより斷たるゝことなく、その後裔天の日の如くあらんことを。

二箇國の民は我魂これを憎む、然り、而して第三のものは國民にはあらざるなり。セイルとペリスチアの住民、及びシケムに棲む愚かなる民。

シラの子なるエリアザルの子イエシュアの賢明なる教訓と凱切なる箴言。その意のある所を說明し、分別を以て教へたるもの。——此等の教訓を熟考する者は福なり。これをその心に藏め得る者は智慧を得べし。而して人もしこれを實踐せば萬事に當りて强かるべし、そは主を畏るはこれ人生なればなり。

〔五一〕 わが王、ヤーエー、われ汝の名を讃美せん、わが生の力、われ汝に感謝せん、わが救の神よ、わが救の神よ、われ汝を讃美せん、わが生の力、われ汝の名を宣揚せん、そは汝死より我を援護し、他に向ひて僞を曰ふ者の舌の責より我を助け給ひ、汝は誹謗する者の舌の責より我を援護し、他に向ひて僞を曰ふ者の 唇

の日にまた荒れ且つ亡ぶの日に我を捨て給ふ勿れ。わ
ヤーエー我聲を聞き、わが嘆願を顧み給ひて、凡ての
れ讃美を捧げ、ヤーエルの聖名を祝福ひ奉らん。
ヤーエーに感謝せよ、かれは善にましませり、
その愛憐は世々彊なければなり。
讃美の神に感謝せよ。
その愛憐は世々彊なければなり。
イスラエルの保持者に感謝せよ、
その愛憐は世々彊なければなり。
萬物を作り給ひし者に感謝せよ、
その愛憐は世々彊なければなり。
イスラエルの救主に感謝せよ、
その愛憐は世々彊なければなり。
イスラエルの棄てられし者を集め給ふ彼に感謝せよ、
その愛憐は世々彊なければなり。
その都とその聖廟を建て給ひし彼に感謝せよ、
その愛憐は世々彊なければなり。

## ソロモンの智慧

ダギデの家のためにその角を出さしめ給ふ彼に感謝せよ、
その愛憐は世々疆なければなり。
ザドクの子等を祭司に選び給ひし彼に感謝せよ、
その愛憐は世々疆なければなり。
アブラハムの楯に感謝せよ、
その愛憐は世々疆なければなり。
イサクの岩に感謝せよ、
その愛憐は世々疆なければなり。
ヤコブの偉なる者に感謝せよ、
その愛憐は世々疆なければなり。
シオンを選び給ひし者に感謝せよ、
その愛憐は世々疆なければなり。
諸王の王等の王に感謝せよ、
その愛憐は世々疆なければなり。
その民の角を擧げ給ひし彼に感謝せよ、
彼に近き民イスラエルの子等のほまれなり。
「こはそのもろ〳〵の聖徒のほまれ、

我若くして未だ國外に遊ばざりし時、われ智慧を欲してこれを求めたり。われ若き時祈禱に願ひてでもこれを索めんとせり。時にかれ熟したる葡萄の如くに花咲き、わが心これを怡べり。わが足はかの跡に隨ひ、われ若き時より智慧を知り得たり。われ少しくわが耳を下げて彼を受け、多くの知識を得たり。かの輒は我に榮光あり、われわが師に感謝す。われ彼と善を爲さんことを欲して辱められず、そはわれ彼を得たればなり。わが魂は彼に愛著し、われわが面を彼より外向けず。われ天上に向ひてわが手を延べ、決して〳〵永久に彼を離れざるべし。わが手彼の門を開き、われその内に入りて彼を眺めたり。われ我魂を彼の後に定め、われ彼より離れざる見、われ彼の指導により分別を獲たり。故にわれ棄てられざるべし。わが内部は彼を看て籠の如くに悶へ、われ確實に領有したれば、われわが舌にて彼を讃美せん。

汝等無識の者我に來り、わが教の家に寓れ。汝等何時まで此等のものを缺かんとするや、汝等の魂は何時まで渇くべきや。われ口を開きて彼を語る、汝等も自ら價なく智慧を收得せよ、汝の頸を彼が輒の下に致し、汝の魂をして彼の荷を擔はしめよ。蓋し彼はこれを求むる者より遠からず、汝等已の眼にてわが多く勞せざりしを看よ、而かもわれ多大の平和を獲たり。わが教ふる所に耳を傾け、汝僅少なりと雖、これによりて多大の金銀を得べし。願くはわが魂わが學徒を見て怡び得んことを、而して汝等わが譽れを歌ひてその時に到らば汝に酬を賜はるべし。汝の作業を正直になせ、而してかれづることなかるべし。

## ソロモンーシラーの智慧

ヤーエーは福(さいはひ)なる哉、世々その聖名(みな)をあがめまつれ。
以上ベンーシラーと呼ばるゝエシュアの子、シメオンの言。
シラの子なるエリアザルの子(こ)、エシュアの子(こ)、シメオンの智慧。
翼くはヤーエーの聖名今より幾久しく祝ひまつられんことを。

# ソロモンの智慧

〔一〕 地の判官たらん者よ、汝等正義にくみし、良き心を以て主を思ひ、一向彼を索むべし。そは彼を試みざるもの彼を見、彼に信頼する者その現示を受けん。邪なる念は神を離れ、いと高き力は證明に遇ひて愚者を惑はしめ給ふ。智慧は悪を謀る魂に入らず、また罪に約束せられし軀體に宿らず。訓練の聖き靈は偽を去り、悟なき念より離れ、不正の來らん時に驚き逃がるべし。

智慧は人を愛するの靈にして、神を瀆す者を以てその唇に罪なしとせざるなり。そは神彼がその心を監視し、その舌の言ふ處を聽き給ふ。神の靈は世界に充ち萬物を保持する者は凡ての聲を知る。かるが故に正しからざることを言ふ者は一人とて見られざるなく、また正義これを罰する時に彼を逃さざるべし。そは悪き者の評議は尋ねられ、その言の響は悪業の罰せられんために主の前に持來さるべし。總ての事を熱心に聽く耳あり。微音と雖も匿ることなし。益なき呟を戒めよ。神を瀆さざるやうその舌を愼むべし。そは密かに發せられたる言も應報の來らざることなく、偽を言ふ口は魂を亡ぼすものなればなり。

汝の生涯の過失に於て死を索むる勿れ、また己が手の業にて滅亡を來たす勿れ。そは神は死を造り給はず、また活けるものゝ亡ぶことを喜び給はず。萬物を造り給へるはその永らへんがため、世界の生産は健全にして、こ

れに滅亡の毒あることなく、陰府は地上に主權を有つことなし。正義は永遠のものなれば終局は死なり」。惡き人はその手その言を以て己が死を招く、彼を友と思ひてその愛に耽り、また彼と契約を結ぶ、そは彼等はその部分に値するものなればなり。

〔二一〕蓋し彼等その心の裡に誤れる推理をなして言ふ、我等の生涯は短かくして悲し。人その終りの來る時に治療の法なく、また誰も陰府より歸れるを聞きたることなし、知るものなし。そは我等の生れたるは實に偶然のことにして、今後我等は生れざりし如くあるべし。我等の鼻の息は烟の如し、理性は心の動悸より發する火花なり。その消ゆるとき體は灰となり、靈は輕き風となりて散らん。我等の名は遂に忘れられ、行人も我等の事業を記憶するものなけん。我等の生涯は一片の雲の如く過ぎ、日の光に追はれその熱に打たれて霞の如くに消えん。我等に與へられたる壽命は陰の過ぎゆくが如し、その終を引戻すこと能はず、そは固く印せられて誰もこれを逆轉すべからず。かるが故に來れ、我等現にある好きものを享樂し、若き者の如く心を盡くして、萬物を利用すべし。良き酒と香料もて自ら充たし、徒らに春の花を過ごさざらしめよ。薔薇の花の凋まざるうちにその蕾にて花冠を作り、また如何なる〔野邊〕も我等の宴遊せざる處なからしめよ。我等は到る處に歡樂のあとを殘すべし、これ我等の權利にしてまた義務なればなり。正義なるも貧者は我等これを虐げ、寡婦はこれを見逃がすことなく、歲月の故に霜を頂く老人の頭髮に尊敬を拂ふことなからしめよ。我等にとりては我等の力これ正義の法たらしめよ、そは弱きものは何等の用をなさざればなり。我等正しき者を待伏せすべし、そは彼は汝等に對し不實にして、我等の事業に反對し、違法の罪を以て我等を非難し、破戒の名を以て我等を譴責す。彼は神の知識を得たりと稱し、自ら主の僕と呼ぶ。彼は我等の思想の譴責と成れり。彼は見るだに忌々はし。そは彼の生狀は他人のそれと

異なり、その歩む道は異様なればなり。彼は我等を觀て卑しき鉛の如きものとなし、穢れたる道を避けてゆく。彼は正しき者の終を以て幸福なりとし、神を己の父なりと放言す。我等をしてその言の果して眞なりやまたその終の如何なるべきやを看せしめよ。そは正しき人もし果して神の子たらば神彼を支持すべく、その敵の手より彼を救ふべければなり。我等暴行と虐待を加へて彼を試み、以て彼の如何に柔和なるかを見、また如何に無法の下に堪忍するかを證せしめよ。我等彼を恥づべき死に宣すべし、そはその言によれば彼は神顧を受くべければなり。

彼等はかく推理して迷ひ行きぬ。そはその惡性彼等の眼を蓋ふて見えざらしめ、彼等は神の奥義を知らず、聖きことの酬をも達觀せず、責むべき所なき魂に賞あることを辨へざるなり。そは神朽ちざるものに人を造り、己が正しき本體の象に似せ給ひたればなり。されど惡魔の嫉妬によりて死この世に來り、その配下にある者これを經驗す。〔三〕されど正しき者の魂は神の御手にありて、如何なる苦痛も彼等に觸ることなし。愚なる者の眼には彼等死する如く見え、彼等の逝くはその損害、彼等の往生はその破滅とせられたり。されど彼等は安息す。彼等は人の眼には罰せらるが如く見ゆるも、その永生の望は確かなり。彼等は少しく懲を受け而して大なる利益を得べし、そは神彼等を試みて己に適するを見給ひたればなり。鎔爐にある黄金の如くに證査して、完き燔祭の如くに彼等を受け給へり。彼等神顧のあらん時に輝き出でて、刈田に閃めく火花の如く各所に走り出でん。彼等諸國を審判し諸民を治め、主は久遠にその上に支配し給ふべし。彼に信賴する者は眞理を悟り、彼を信ずる者はその愛に在らん、そは恩惠と慈悲は彼が選び給ひし者に在りて、その聖者を顧み給ふべければなり。

されど惡き者は自ら推理せし如く酬ひらるべし、正しき人を輕蔑し、主に叛きし彼等。そは智慧と訓悔とを無

視する者は悲慘なり。その望は空しく、その勞苦は無益、その作業は無用なり。その妻は愚鈍にしてその子は獰惡、その裔は呪はれたるものなり。そは清淨にして產まざる女、罪を犯して姙みたるにあらざる女は幸なり、神その魂を顧み給ふ時にその實を得ん。閹人にしてその手に一の不法を爲さず主に對して惡き事を想はざりし者は幸なり。そはその信實のために特賞を受け、大歡喜の主の聖所に居住を與へらるべし。善き働は大なる聞えの果を結び、智慧の根は過まつ能はず。姦淫の子は成育せず、不義の胤は亡ぶべし。よし長く生くるも人に顧みられず、その老年に迨びて尊ばることなし。その夭死するや後の望なく、判決の日に慰藉あることなし。そは正しからざる代の終局は常に悲慘なるものなればなり。〔四〕寧ろ德ありて子なきにしかず、そは德は永遠に忘れらることなし、神人共にこれを認む。その現存するや人これに倣ひ、その逝きし後はこれを慕ふ。萬世に勝利の冠を頂きて進み、清き褒を獲んために戰ひて勝つ。惡き者の子孫は增殖するも益なく、私生の胤は深く根をおろすことなく、固き據を作ることなし。よし一時枝を張りて繁茂するとも、强き根なきが故に風に搖られ、その暴き力にて拔かるべし。枝は成長せざる前に折られ、その果は益なく、成熟せずして用をなさず。不義の子は神これを探求し給ふ時その親に對する惡業の證査なり。

されど義人は早く死するとも安息に入らん。そは老年の尊ふべきは時の長きが故にあらず、また年數にて計算すべきにもあらず、されど悟覺は人にとりて白き髮、汚點なき生涯は老熟したる齡の如し。神に嘉みされて愛せられ、尙ほ罪人の間に住ふうちに天に擧げられたり。彼捕へられぬ、これ惡その悟覺を變へ、僞その魂を欺かざらんためなり。そは惡の魅力は善き物を昏まし、欲求の狂熱は無垢の心を邪道に導けばなり。彼少時完きものとせられて長き歲月を充たし、その魂神の嘉みし給ふものなりしが故に、神急ぎて惡の中より彼を出だし給へり。さ

れど義人にして既に死せる者は悪にして今生ける者を非難し、青年にして速に完うせられたる者の長壽を非難す。されど見ても悟らざるまたこの事を心に止めざる民、彼等は智慧ある人の終局を見て、主の彼に就て企て給ひしもの、また彼安全に彼を保持し給ひし所以を悟らず、彼等はこれを見て蔑むべし、されど主は彼等を嘲笑ひ給ふべし。かくて彼等不名譽なる屍となり、永遠に死者中の恥づべきものとならん。そは主彼等を地に擲ちて物言ひ得ざらしめ、彼等を根柢より揺り給ひ、彼等は全く廢物となり苦悶に陷り、世に忘れらるに至るべし。

彼等の罪悪の算へらるゝ時に彼等は憂恐を以て來り、その悪業は面のあたり彼等の有罪たるを決すべし。

〔五〕その時正義の人は少しも怯ゆることなく彼を惱ませし者またその業を無視せし者の前に大膽に立ち、彼等これを見んとき恐怖の念もて惑ひ、義人の救拯を見て驚くべし。彼等心中に悔ひて言はん、またその靈の苦悶のために呻めかん、これ前に我等が嘲り、また笑柄とせし人にあらずや。我等は愚かにして彼の生涯を狂へりとし、その最後を名譽なきものとしたり。彼いま如何にして神の子等のうちに數へられしぞ、彼の運は如何にして聖者のうちに入りしぞ。げに我等は眞理の道より離れ、正義の光明は我等のために輝かず、日輪は我等のためにのぼらざりき。我等は不法と滅亡の徑に迷ひ、我等は人跡なき荒野を旅して、主の道を知らざりき。されど我等尊大にして何の利する所ありしぞ、富貴と誇りは我等に何を與へしぞや。其等の物はみな陰の如くに消へ、過ぎ行く消息の如くに去りぬ。波間を航く船の如く、その航きたるのち跡の見るべきなく、波の上にその船底の過ぎし途もなし。或は鳥の空を飛びたる時の如く、その通りたる兆の見るべきなく、その羽根にて搏たれ、翼の動く烈しき羽撃にて破られたる輕き風の過ぐるなく、そのあとに鳥の來りし徴の見るべきものなし。或は矢の的に向ひて射

られたる時の如く、空氣は開きてまた直ちに閉塞し、人はその何處を過ぎしやを知らざるなり。かく我等もまた生れて直ちにまた在らず、德の徴の示すべきものなく、たゞ全く我等の惡業の中に失せたり、と。そは惡き人の希望は風に吹き飛ばさる籾殻の如く、暴風に破るゝ薄き蜘蛛の巢の如く、風に吹き散る煙の如く、またたゞ一日來る客の記憶の如くに消え去らん。

されど義人は永久に活き、その報賞は主に在りて至上者彼等を守り給はん。この故に彼等は主の御手より榮光の國と美はしき王冠とを受けん、そは主その右の手にて彼等を掩ひ、その腕にて護り給はん。彼その妬心を以て甲冑となし、萬有を以て武器としてその敵に報ひん。かれ正義を胸甲となし、嚴正なる憤怒を研きて劍となし給ひ、曲りなき判斷を兜となし、聖きを不可損の楯となし、世界は彼と共に進み出でてその狂暴なる敵と戰はん。電光の煌は飛びてその狙を失はず、よく引かれたる弓よりする如く雲間より出でてその標的に飛ばん。またかの戰機の發射する如く怒に充ちて雹は擲たれ、海の水は彼等に對して猛り、河は容赦なく彼等を壓倒せん。一陣の强風彼等に當たりて破戒は全地を空うし、惡事は王侯の位を顚覆せん。

〔六〕 汝王たち、この故に聽きて悟れ、汝地の極の判官たちよ、學ぶ所あれ。多くの民を支配しまた諸國の間に誇る汝等耳を傾けよ、そは汝等の支配は主より與へられ、汝等の有する王權は最高者より授かりたればなり。かれ汝等の爲す業を穿鑿し汝等の謀議を探究し給ふべければなり。汝等かの國の役人なるにその判決に正しからず、また法を守らず、神の訓戒を履まざりしが故なり。彼恐ろしくまた速かに汝等に臨まん、そは嚴しき審判高位に在る者に落ち、身分低き善は慈悲にて寬怒さるべきも、大なる者は大に詮索さるべし。そは萬物の主たる至尊者は何人のためにも差控ゆることなく、偉大なるものを見てこれを怖ることなし。小なるものも大なるものもみな

これを造りたるは彼にして、總てのものを等しく顧みし給ふなり。されど力ある者に來る探究は特に峻嚴なるべし。
この故に王たちよ、われ汝等に告ぐる所あり、これ汝等智慧を知りて墜落せざらんためなり。そは聖きものを聖く維持たる者はまた自ら聖められらるべく、それ等のものを教へられたる者は如何に答ふべきかを知らん。この故に汝等の願を我言に置き、これを望めば汝等その訓練を受くべし。

智慧は輝きて衰へ去るものに非ず、また彼を愛する者には易く見らるべく、これを索むる者は易く見出さん。かれ先づ自らを示して、彼を知らんとする者を取込むの坐するを見ん。そは彼を考ふるは完き悟にして、彼のために徹夜する者は憂慮なし。そは彼が眞の最初の願望にして、訓戒を望まば彼を愛すべく、彼を愛せばその律法を守るべく、その律法に留意せば不滅を保證せらるべく、不滅は神に近づくの途なり。故に智慧を願はゞ王たるに到る。

故にもし汝民の王侯等玉座と冠冕を好まば、汝等永久に君臨し得んがために智慧をあがめよ。智慧の何たるか、また彼が如何にして我に來れるか、われこれを告げ、その奥義はこれを汝等に秘せざるべし。我また決して我仲間に對して嫉妬を起さゞるべし。我その太初より彼を釋ね、彼の知識を光明に昭し、われ眞理を看過さゞるべし。

そは嫉妬は智慧に伴ふものにあらざればなり。寧ろ智者多ければ世は救はれ、悟りよき王はその民に平和を來たす。故に汝等我言により、教を受けて益する所あれ。

〔七〕 我自らもまた凡てのものゝ如く人なり。創めて造られ地より生れたるものより起り、男精の血と睡眠に來りし快感とにて結ばれ、母の胎内にて十月のうちに肉に像とられたり。また生れたる時に我も亦普通の空氣を吸

ひ、同性の地上に産落され、萬人の如く呱々の聲をあげて悲しき叫を發しぬ。襁褓にて育てられ注意して養はれたり。そは如何なる王たりともその初め異なるに非ず。凡ての人みなこの世に來るに同一の門戸より入り、去るにもまた同樣にして去る。この故にわれ禱りて悟を得、われ神に求めて智慧の靈われに來れり。

われ冠と玉座よりも彼を喜び、彼に比して富貴の如きは我少しもこれを尊重することなし。如何なる寶玉も彼と並ぶべきに非ず、地の全ての黄金もその目にはたゞ小さき瓦石の如く、白銀もその前には土塊に等し。健康と美貌よりもわれ彼を愛し、日光よりもわれ彼のあらんことを願へり、そはその眩しき輝は休むことなければなり。彼ありて總ての善き物みな我に來り、無限の富はその手にて我に集まれり。かくてわれ、智慧が此等の物の母たるを知らざりしが、此等は智慧に附隨して來るが故に我喜べり。われ策略を用ひずして學びたるが故に吝まずしてこれを傳ふ、我は彼の寶を秘すことをせず。そはかれ人には無缺の財寶にして、これを用ゆる者は神と交るを得、訓戒によりて來る賜物により彼に推薦せらるる。

されど神我には智慧もて指導し、また智者を正だす者なればなり。我等も亦我等の言もその御手に在り、總ての工藝等みな然り。彼有らゆる物の正しき智識を我に賜はり、世界の構成と諸原素の作用を知らしめ給へり。時の始と終と中間と、日至の交替と季節の變更と、年の循還と星の位置、生ける物の性質と野獸の猛り、靈物の能力と人の思想、凡て此等の隱れたる物も顯はれたるも、皆なわれこれを知れり、そは萬物の意匠者たるかれ我にこれを示せり、即ち智慧なり。

そは智慧に一の靈ありて、悟るに速く、聖にして、世に類ひなく、多樣、明敏にして、自由に動き、明瞭に言

ひ、純潔にして、明晰、他に害せらることなく、善きを愛し、鋭敏にして、他に妨げらることなく、仁慈あり、人類を愛し、確乎不抜、憂慮絶無、全能、全智にして、聰明純清明敏の諸靈を透視す。そは智慧は如何なる運動よりもよく動き、その純潔のゆゑに萬の物を通徹し透徹すればなり。彼は神の力の息にして、全能者の榮光より分出したるものなるを以て、不淨なるものは何物もこれに入るべからず。彼は久遠の光より出づる光輝にして、神の作業の曇なき鏡、またその善の影像なり。彼は唯一なれど萬の事をなすの力を有し、自らを離れずして萬物を更新し、萬代にわたりて聖き魂に入りてこれを神と豫言者の友となす。そは神は智慧のやどるものに非されば何物も愛し給はざればなり。彼は日よりも美くしく、凡ての星の宿座よりも麗はし。これを光に比ぶるに彼はその前に在り、そは夜は晝の光に繼げど、惡は智慧に勝つことなし。

〔八〕 彼は全力を以て世界の極より極に到り、萬の物を整頓す。

われ彼を愛して若き時よりこれを索め、わが新婦とせんことを求め、われその美に戀著せり。かれ神と倶なることによりて、その出處の崇高なるを示し、萬物の主なる至尊者彼を愛し給へり。かれ神の智慧に入れられて、その爲にその業を選ぶ。されどもし富にして生涯に有つことを願ふべきものたらば、總ての事を爲す智慧よりも勝りて富めるもの果して何ぞや。悟性は諸の事を爲すとするも、智慧よりも勝りて何物かあらゆる物を製作し得んや。人もし正義を愛すとせば、智慧の働きの果は德なり、そは彼は自制と了解、また正義と勇敢を教ふ、而して人生に此等のものに勝りて益あるものあることなし。人もし多くの經驗を得んことを冀ふとせば、智慧は古事を知り、また將來の事を推測し、言葉の細微なるものと暗語の意義を了解し、徵兆と驚異また季節と時期の事件を先見す。かるが故にわれ己と偕に住まはんがために彼を取らんと定めたり。そは協議に良き考を我に與へ、また

憂慮と悲哀の時に我に勇氣を與ふるは彼なるを知ればなり。われ彼の故に衆人のうちに榮光を有し、われ若かれど古老の眼に尊敬せらる。われ裁判する時に裁決流るが如く、王侯の前に賞嘆せらるべし。われ默する時に彼等わが爲に待ち、われ口を開けば彼等我に傾聽し、またわれ言を續けば彼等は手にて己の口を掩ふ。われ彼の故に永生を得、死後にも我後に來る者に永久の記憶を殘す。われ諸民を支配し、諸國我に臣事すべし。恐懼せる王侯等はわが名を聞きて怖れ、わがわが民には自ら善き支配者、また戰爭には勇將たることを示さん。われ家に歸る朝彼と共に休憩す、そは彼と語れば何等の悲哀なく、彼と住めば何等の苦痛なく、ただ喜悦と歡樂あるのみ。われ此等のことを自ら考へ、智慧と緣を結べば如何にして不死となるかを我心に思ひ、彼を友とせば好き樂あり、彼が手の勞作には愆つことなき富あり、斷へず彼と交れば悟了を得、彼の言に接して大なる名聲あるを考へし時、われ如何にして彼を我手に得べきかを尋ねつゝ徘徊せり。抑も我は天性善良なる兒にして、善魂我有に歸したり。否、善良なるが故に我清淨なる肉體に入れり。されど神智慧を我に賜ふにあらざれば、われ彼を有つ能はざるを見、然りまた恩惠は誰より與へらるかを知る、これ亦悟より來るなり。こゝに於て、われ神に祈りて彼を求め、我全心をもて曰へり。

〔九〕列祖たちの神、また慈悲を保有し、その言によりて萬物を造り、また汝の造り給ひし萬物を支配し、聖と義を以て世界を治め、正しき魂にて裁判を行はしめんがため、汝の智慧により人を形造り給ふ勿れ、汝の僕等のうちより我を斥け給ふ勿れ、そはわれ汝の奴、また汝の婢の子、屓弱にして短命の人、審判と律法を悟るに力少なき者なればなり。假令人は人の子等のうちにありて完きものと雖、もし汝より來る智慧にしてその人と俱ならざりせば彼は算ふるに足らざる者たり。汝は我兄

弟たちより先きに我を選びて汝が民の王となし、汝の子女等の審判者となさしめ給へり。汝は汝の聖き山に聖所を建て、汝の住ひ給ふ都に祭壇を作り、世の始より先きに備へ給ひし聖蘆の模型とすべきものを命じ給へり。而して智慧は汝と倶にありて汝の作業を知り、汝の世界を造り給ひし時に其處に臨み、汝の眼に喜ばるべきものと、汝の戒に従ひて正しきものを了解す。願くは聖天より彼を遣はし、汝の榮光の寶座より彼を來らしめ、我と倶にありて我と共に勞作し、汝の前に喜ばるべきものを我が知り得るやうなさしめ給へ、と。そは彼は萬の事を知りまたこれを解し、わが作業を指導して謹直ならしめ、またその榮光にて我を守護すべければなり。かくて我業は聖意にかなひ、我民を審判して正しく、また我父の位に坐するに適する者とならん。誰か神の聖慮を知る者あらんや。誰か主の御心の何たるかを解せんや。そは人の思慮は短かく、わが作業を指導して謹直ならしめ、またその榮光にて我を守護すべければなり。かくて我業は聖意にかなひ、我民を審判して正しく、また我父の位に坐するに適する者とならん。誰か神の聖慮を知る者あらんや。そは人の思慮は短かくして、我等の計畫は敗れ易し。そは朽つべき肉體は重く魂を壓し、土性の軀體は慮多き心に重くかゝる。我等また地上のものをも知り難く、手近き物もこれを見るに苦しむに、誰か天に在るものを繹ね得たる者あらんや。汝智慧を賜ひまた高所より汝の聖き靈を下し給ひしに非されば、誰か汝の聖慮を測り得たる者あらんや。かくして地上のものゝ道は正しくせられ、人は汝に喜ばるべきものを教へられ、智慧によりて救はるゝなり。

〔一〇〕 智慧は創めてたゞ獨り造られたる世界の始祖を終まで護り、その愆より彼を救ひ、また萬物を支配する力を彼に與へぬ。されど正しからざる人怒りて智慧より離れし時、彼は憤怒のあまりその兄弟を殺害して自ら亡びたり。またこの人の故に地は洪水に溺れし時、智慧は微なる一片の木にて正しき人のとるべき方針を示して再びこれを救ひたり。加之、諸の國民あしきを議りて混亂に陷りし時、智慧は義人を知れるを以て彼を守りて神前に責なからしめ、その心小供に憧がれたる時彼を強うせり。智慧は邪惡なる人の亡ぶ時に義人を救ひ出し、天

よりペンタポリスに降りたる火の雨を遁れし時彼を救へり。烟れる荒地なほその惡を證し、樹は實を結ぶも熟するに至らず、然り、不[illegible]の徒そこに記念を殘し鹽の柱いまも尙ほ立てり。そは彼等智慧を顧みざりしが故に、啻に善きものを認むること能はざりしのみならず、人生のためにその後に己の愚劣なることの記標を殘し、かくて彼等がその苦難より救へり。義人その兄弟の怒より逃れし時、智慧は彼を直ぐなる途に導けり。智慧彼に神の國を示し聖きもの丶知識を與へ、その勞作を榮えしめその働きの果を殖やし、人々その貪慾もて彼を苦しめし時に彼を護りてその富をなさしめ、その敵より彼を防ぎ、彼を陷れんとする者より彼を救ひ、その劇しき爭に彼を導きて勝利を獲させ、神慮に適ふことの遂に萬事にまさりて力あることを知らしめぬ。義人の賣られし時に智慧はこれを棄てず、罪より彼を救出せり。智慧彼と共に獄に下り、繰絏に於て彼を離れず、遂に一國の璽を彼に授けて彼を虐げたる者の上に權を得せしめ、彼を非難したる者の僞りなることを世に示して、彼に永久の榮光を與へぬ。智慧は惡逆非道の國民より聖き民と咎なき胤を救出せり。智慧主の僕の魂に入りて、驚異と徴兆とをもて怕るべき王等に對抗したり。勞作の酬を聖民に與へ、彼等を導きて不思議なる道を示し、そのために晝は掩護と成り、夜は星の光と成れり。智慧彼等をして紅海を渡らしめ大水の間を過ぎて彼等を導きしが、その敵はこれを溺れしめて深淵の底より彼等を擲上げたり。義人等邪惡なる者を破り、かくて、おゝ主よ、彼等汝の聖き名を讃揚し、口を一にして彼等の爲に戰ひ給ひし御手を頌美したり、そは智慧唖者の口を開き、嬰兒の舌をも解きて明かに言はしめたればなり。

〔一一一〕　智慧一人の聖き豫言者の手にて彼等の爲すことを榮えしめぬ。彼等村里なき荒野を旅し、徑路なき土地に幕屋を張り、敵に對抗し仇を擊退せり。彼等水に渴きければ汝に呼

び求め、水は燧石岩より流れ出でて彼等に與へられ、彼等の渇は堅き石より治されぬ。そは彼たるものにより、彼等はその必要に應じて惠まれたり。嬰兒殺害の布告を罰せんとて、敵が長へに流るゝ河水に凝血の入りて煩ふ時、汝は彼等に期待以上に多量の水を與へ給ひ、渇により如何に苦しみしかを彼等に示して敵を罰し給へり。なんぢ慈悲にて膺懲されたりと雖彼等が試みられし時、怒もて審判せられて彼等は如何に邪惡なる者の苛責さるべきかを知りぬ。そは此等のことは、父として、彼等を懲らしてこれを證し給ひ、而かも其等のことは、嚴しき王として、彼等を罪してこれを探求し給へり。然り、彼等が正しき者より遠き時も、またこれに近き時も彼等は等しく困窮したり。そは二重の憂苦彼等を捕へ、過ぎにし事の記憶の呻吟ありき。それしその同じ手段にて一方の者が益を受けしを聞きし時、彼等は正に主の現存し給ふを感じたりぬ。彼等は正しき者と異なりて過ぎしが故に、彼等は過ぎし事以前に憎み捨てたる者、彼等は今これを嘲るを休め、彼等はともを驚きぬ。

されども彼等正しからざる心にて思慮なき妄想をめぐらし、踏むべき路を迷ひて愚かなる爬蟲と忌はしき蠕蟲を禮拜せしかば、汝はその膺めの爲に愚劣なる動物を數多遣はし給ふて、人は己が罪を犯すものにて罰せらることを彼等に知らしめ給へり。そは混沌たる物質より世界を創造し給へる汝の全能の御手は、群熊または猛き獅子を彼等に送るの法なしとせず、或はまた新たに造られたる獰猛にして世に類ひ知れざる、その口は火炎の息を吹き、鼻よりは有毒の煙を出し、眼は戰慄すべき火花を發散し、雷にその猛烈なる力は以て彼等を滅亡するに足るのみならず、これを一目したるのみにても彼等はみな惧死すべき如きものを送る能はざるに非ず。然り、此等のものなしとするも彼等は正義に罰せられて一吹にて殪れ、御力の呼氣にて吹飛ばさるべし。されど尺と數と量もて

汝は總ての物の秩序を立て給ふなり。

そは汝の力は萬事に強大なり、誰か汝の腕の力に抗し得んや。汝は總ての事をなすの力を有ち給ふ故に萬人を憐み給ひ、彼等が遂に悔改め終局に到るまでその罪を看過し給ふ。そは汝あらゆる總てのものを愛し給ひ、汝の造りし一物をも憎み給はざればなり。若しこれを嫌ひ給ふ程なれば汝は何物をも作り給はざりしならん。また汝の聖意にあらざれば何物かよく自ら持續し得んや。汝の命にあらざれば何物かよく自ら保存し得んや。されど諸靈を愛し給ふ至尊の主よ、萬物は汝のものなるが故に汝はこれを寛容し給ふ。〔一一一〕そは汝の不朽の靈は萬物の中に存し、その故に汝は正しき路より離れたる者を漸次懲らしめ給ひ、彼等の罪を犯したるものをその心に回想しめて彼等を訓誡し給ふ。かくて、おゝ主よ、彼等はその惡より逃れて汝を信ずるに至るなり。

そは誠に汝の聖地の古き住民、忌むべき妖術と非禮を行ふが故に汝の憎み給ひし民、無慈悲に兒女を殺戮し、人肉と人血を以て祭の宴を張り、不信神なる交を結び、自己の可憐なる嬰兒を殺す者、汝は我等の祖先の手にて彼等を亡ぼすを可とし、汝の眼には世界のうちにていと貴き地が、神の僕等に適はしき殖民地たらんことを欲し給へり。而かも人なるが故に汝はこれを寛容し給ひ先づ汝の軍勢の先驅として前衞を送りて少しづつ彼等を亡ぼし給ひぬ。これ汝が會戰に於て正義者の手にて不淨の徒を征服し得ざるが故にあらず、或は猛獸を以てし或は汝の峻嚴なる一言にて立どころに彼等を滅ぼし得ざるに非ず。されど假令彼等の性惡にしてその惡は性來のもの、また彼等は初より呪はれたる裔にしてその思慮は決して變らざるべきを知り給ふと雖、汝は彼等を少しづつ審判して悔改むるの機を殘し給ひぬ。またその罪を問ひ給はざりしは何ものをも恐れ給ひしが故にも非ず。そは誰か、

汝は何を爲し給ひしやと問ふ者あらんや、また誰か汝の審判に抗る者あらんや、誰か汝の造り給ひし國民を亡ぼし給ひしを責めんや、誰か不正者の仇を報ひんがために來りて汝の前に立つ者あらんや。そは汝の審罰が不正ならざるを示さざるべからざる如き者なく、また王侯の來りて汝の審罰に抗る者もなし。汝は正しくして萬物を治むるに正しく、罪に當らざる者を罰するは汝の權に反するが如き者もなし。そは汝の力は正義の始めにして、汝の萬物統治權はまた萬物を寛恕するの權たり。そは若し汝の力の完きを信ぜざる者あらば汝は汝の强さを示し、またこれを知れりとする者に對しては彼等の大膽を困惑せしめ給ふ。されど汝はその力の主權者にして審罰に優しく、我等を治むるに大なる忍耐を以てし給ふ。そは汝の欲し給ふ時に力は汝のものなればなり。

されど汝は此等の如き業もて汝の民を教へ給へり、即ち正しき者は人を愛せざるべからずとの事なり。且つ人罪を犯せば汝はこれに悔悟を與へ給ふが故に、汝は汝の子等を有望となし給ふ。そは汝の僕等の仇敵にして正に死に當るべき者と雖も尙ほ多大の留意と猶豫を以て罰し、彼等の惡きより逃るべき時と所を與へ給へば、況して汝が好き約束の誓言と契約を與へ給ひし者の子孫たる汝の子等を審判し給ふに大なる配慮を以てし給はざらんや。この故に汝は我等を訓戒し給ふも汝は萬倍も我等の敵を咎ち給ひ、かくて我等汝の善きことを考へて判斷し、また我等が審判せらる時には憐みを期待し得るなり。

故にまた正しからざる者にして愚かにその生涯を過したる者は、汝彼等自身の惡事によりて彼等を苛責し給へり。そは誠に彼等は遠く愆の路に迷ひ行き、無知なる嬰兒の如く欺かれてその敵の間にすら恥づべきものとせる動物を神とせり。この故に汝は沒理の小兒に對する如く彼等を嘲らんために汝の審罰を彼等に下し給へり。そは彼

等自らの煩ひにより、己が神と思ひし其等の動物の故に罰せられたるためこれに對して怒を催せしが故に、彼等は見て己が前に知ることを拒みたる眞の神を認むるに至れり。この故にまた彼等は極刑を加へられたり。

〔一三〕蓋し人は皆な性愚かにして神を見ることなく、見ゆべき善きものより其處に在ます彼を知るの力を有せず、またその作業を注意するもその工作者を認めざるなり。火、風、疾風、回る星、怒れる水、輝く天體、彼等は此等のものを世界を支配する神々と思へり。もし此等の物の美はしきを喜びてこれを神と思へば、至尊の主が如何に此等よりも優れるかを知るべし、そは此等の物を造りたるは美の第一作者なればなり。されどまた此等の物の力と勢力に驚きて之を拜せば、此等を造れる者の如何に偉なるかを悟るべし。そは造られし物の大と美より人は これに應じてその最初の造主の像を作る。さはいへ此等の人も多く咎むべきにあらず、彼等もまた恐らくは神を索めて彼を見んと思ふうちに迷ひて行けるならん。そは神の御業の間に棲ひて索めて倦まず、その見る處の物の美はしきが故にこれを信じたるなり。されど彼等尚ほ宥さるべきに非ず、そはもし彼等物の條理を究め得る程の智力あらば、此等の工作の至尊の主を早く見る能はざるは何ぞや。憫むべきかな彼等、彼等は死物に囑望し、人の手工品を神と呼びぬ、巧なる工作を施せる金や銀、また獸物の像や用なき石、即ち古人の工作品なり。然り、もし或る木匠ありて、適宜の木を伐り、巧にその皮を盡く去り、見事に人生に有用なる器物を作り、彼その殘部を焚きて食事を調へて滿腹す。彼尚ほその殘れる何の用をもなさざる曲りて節多き一片を取り、餘暇にまかせて丹精してそを彫り、無爲の餘り巧妙にそれを刻み、遂に人の像に似たるものとなし、或は卑しき動物の形に似せ、これに朱を塗り繪具にて赤く染め、あらゆる汚點を塗抹し、かくてそれに適はしき室を作り、これを壁上に鎭坐せしめて固く釘打となす。即ちその墜落せざらん爲に注意するなり、これその像自ら衞る能はざるを知るによる。（そは

誠に像たるに過ぎずして他の援助を要せばなり)、かくてその人已が福祉のためまた婚姻と子孫のために祈禱をなす時、彼は生命なき物に言ふて自ら恥ぢさるなり。然り、かれ弱き物に健康を求め、死せる物に生を願ひ、無經驗のものに扶助を願ひ、その足を用ゆることとする能はさるものに旅行の安全を禱り、その手にて何も爲し得ざるものに獲得享有その他手腕の成功を冀ふ。

〔一四〕 荒海を航行せんとして出帆せんと準備する者、已を乘せ行く船よりも纖弱なる木片に呼び需む。そは船は利益に餓えたる者の工夫したるもの、また工匠がその智慧にて造りたるものなり。而してお、父よ、汝の攝理はこれを誘導す、そは海上にてすら汝は道を示し、波間に於て確かなる航路を與へ給ひ、汝は凡ての危難より救助し給ふて、人は技術を有せずとも大海に出で得るを示し給ふ。汝は汝の智慧の作業が閑散ならざるを欲し給ひ、從つて人もその命を木の小片に托し、筏に乘りて大浪の間を過ぎ遂に陸に安著す。そは昔時に於ても誇れる巨人等の滅亡する時世界の期望は筏に乘りて難を避け、汝の御手は梶とりつゝ、來らんとする代々の胤を人の種族に委せり。そは正義の依つて來る木は祝福されてありき。

されど手にて作れる偶像はそれ自體にも、またこれを作りし人にも呪ひなり。そはかれ工作して、朽つべき物神と稱せられぬ。その不敬虔なる人もまたその人の不信も共に神の憎み給ふ所なり。誠にその作られたる物もこれを作りし人と共に罪せらるべし。故に諸國の偶像に天罰あらん、これ神の造り給ひし物より作られたりと雖、蛇蝎視すべきもの、人の魂に對して阻礙物となり、愚かなる者の足に陷穽となれり。

そは偶像の工風は私通の始め、その發明は生の腐敗なり。これ初めよりありしものに非ず、また永久に存すべきものにも非ず。こは人の益なき慾よりこの世に入りしものにして、速かに消ゆべきものと成り居れり。そは時

ならずその兒を失ひて哀み果てたる父、あまりに早く取去られたるその兒の像を作り、既に屍となれるものを神の如くに敬ひ、その下に在りし者共に秘事と壯嚴なる儀式とを授く。その後益々時ふるに從ひ、この不敬虔なる風習は法(おきて)の如くに保たれ、王侯の命によりて刻まれたる像は拜まれぬ。また王侯の遠く住するが故にその面前にてこれを尊崇する能はざる時、遠方よりその肖像を想像して、尊崇する國王の見ゆべき像を造り、彼が面前に在るが如く熱心にその居らざる所にてこれに阿諛するなり。されど製作者の野心に强ひられ、彼を知らざりし者まで更に禮拜の調子を高む。そは或は治者の喜を得んと思ひて、彼はその技工を盡くして肖像を一層美貌になし、群衆はその工作の巧に惑はされて、前にはたゞ人として敬ひたる者を今はその禮拜の對象とするに至る。かくして人生の隱れたる危險生ず、そは窮厄又は暴虐に拘へられ、人は木石に名くるに口にすべからざる聖名を以てすればなり。

彼等はその後、神を知らずして迷ひ行くのみならず、その無智によりて爭鬪のうちに生を過ごし、惡事の限をつくしてこれを平和と稱す。そは森嚴なる儀式のうちに小兒を殺し、または秘密の祭典を執行し、奇怪なる宗儀の狂的宴會を催し、その生命をもまた結婚の純潔をも忘れ、互に背信して殺戮し或は姦通す。凡ての事混亂し、流血と殺戮、竊盜と詐僞、腐敗、不信、喧騷、僞證、善良なる者の心を亂し、人の恩誼を忘れ、魂を汚辱し性を混亂し、婚姻の紊亂、姦通、淫佚に充つ。そは此等の名なき偶像を拜むは諸惡の初めにして原因また終局なり。その崇拜者は或は狂へる如き宴樂をなし、或は僞りの豫言をなせばなり。或は正しからざる生を送り、或は輕々しく僞誓をなせばなり。生なき偶像に信賴して、彼等は罪深くも僞りの誓を立て而かも害を豫期せざるなり。この兩罪の故に正しき刑罰必ず彼等を追はん。彼等偶像に顧慮して神のことを惡く思ひ、聖きことを嫌ひて不正にも僞りの證明を

なす。そは常に不正者の罪を罰する者は、人が誓をなすに據るものゝ力にあらず、罪を犯す者に對する正義なればなり。

〔一五〕 されど我等の神よ、汝は惠深くして誠實にましまし、長く堪へ忍び、慈悲もて萬事を處置し給ふ。そは假令我等罪を犯すも我等は汝のものにして汝の主權を知る、されど我は汝のものとせらるが故に罪を犯さゞるべし。そは汝を知るは完き正義、然り、汝の主權を知るは永生の根元なり。如何なる人工の惡き考案も我等を惑はさず、畫工の益なき努力も我等を惑はさず、各種の色にて塗れる像も、また愚か者が一目して情欲を起す如きものも我等を惑はさず。彼等は息なき死せる像の形體を獲んとす。惡きものを愛する者は、實にかゝる物を期望するに適する如きものにして、此等のものを作りし者、これを獲んと欲する者、及びこれを拜む者即ちこれなり。

また軟土に脆坐する陶工は骨折りて我等の用のために各種の器を作る。即ち同一の粘土を以て或は清淨なる用をなす器を作り、或はまた然らざるものをも作ること、みな同一樣なり。而かもその各種の器の用途が如何なるべきかは、工作者の決する所とす。尙ほまた惡き目的にて働きては彼は同じ粘土を以て空しき神の型をも作る。而かも彼はたゞ少し前に土にて造られ、また暫時の後、已に貸與せられたる魂を返附せざるべからざる時、自らの造られたる元の土に歸るべきなり。彼の憂慮はともあれ、その力足らざるが故にあらず、またその生涯の短かきが故に非ざるも、彼は金銀工とその技を競ひ、靑銅の鑄型師を模倣して、贋物を作りて以て光榮とす。彼は土ほどの値ひなく、その生涯は粘土ほどの譽れなし。そはかれ已を型造りし者を知らず、彼は灰の如く、その望は土塊の如く思ひ、且に活ける魂を吹き入れ命の靈を吹き込みたる者を知らず、彼は人の生涯を以て競技の如く、商賣の如く思ひ、且つ言ふ、人は爲し得べき所には或は良からざる方法にても利を收めざるべかず、と。そはこの人同じ土塊もて脆

き器具と彫像を造る時既に他の者よりもよく自ら罪を犯すことを知る。されど彼等皆な最も愚かなる者、嬰兒よりも魂の弱き者、汝の民の敵にして彼等を壓迫したる者なり。そは彼等は他國民の偶像を神として認めたり、而かもその眼は物を見るの用をなさず、鼻は息を吸込まず、耳は聞かず、指は物を觸れず、足は歩行の役に立たず。そは彼等を作りたるは人にして、己の靈すら他より借りたる者彼等を作りたるは人にして、彼等は人なるが故に自らの如く神を造るの力なく、自ら記すべきものなるが故にその無法の手にて死せる物を作る、彼自ら己が禮拜する物に優れり。此等兩者のうちにて彼等は生あるも其等の物はこれなければなり。

然り、彼等はまた最も忌むべき物を拜む。意義なきことこれを他に比して何物にも劣り、また他の物と並べてこれを見るに何人もこれを欲する如き美なるものに非ず。彼等は神の嘉賞と祝福より捨てられたるものなり。

〔一一六〕　かるが故に此等の人は彼等の禮拜する如き物を以て罰せられ無數の蟲に責められたるなり。然るに汝は己の民には罰の代りに惠を與へ、鶉を備へて食となし、彼等の食慾を滿たすに稀なる美味を以てし給へり。汝の敵が食を求むる時にこれに與へられし物の醜惡なるため、彼等は必要なる食物をすら嫌忌するに、汝の民にはたゞその敵の如何に苦しめらるかを示さること必要なればなり。

缺乏せるため稀なる美味を分與せられたり。そはそれ等の暴逆者には缺乏の少しも假借すべからざるもの來り、此等の民にはたゞ懲戒のために彼等は少時困苦したるのみにして、汝の律法の誡めを記憶して救はれたるに非ず、萬物の救主たる汝によりて救はれたるなり。

然り、汝は汝が凡ての惡より救ひ給ふことをこれにて我等の敵に證し給へり。そは誠に彼等は蝗に咬まれ飛蟲に咬まれて救拔の徴を得たり。

そはこれに近づきたる者はその見しものによりて救はれたるに非ず、汝の律法の誡めを記憶して救はれたるなり。

かざりき。たゞ汝のみにして、また曲がれる蛇に咬まれて亡びし時と雖、汝の怒は極度まで續

殺され、而かもその命を助くるものなかりき、そは彼等はかゝるものにて罰せらるべきものなりけれど汝の子等は毒蛇のその齒にも克つ能はざりき。汝の慈愛彼等を助け、彼等を癒したればなり。たるは彼等が汝の託宣を記憶せんがためなるも、彼等は全く忘却して汝の恩惠を感ぜざるに至ることも無からんために速かに救はれたり。眞に如何なる草木も効ある膏藥も彼等を治癒したるに非ず、主よ、萬物を治癒するものは汝の言にこそあれ。そは主は生と死の上に力をもち給ひ、汝は人を導きて陰府の門に下り、またこれを導きて昇り給ふ。假令人はその惡にて他を殺し得るも、既に去りたる靈はまたこれを戻すこと能はず、一たび陰府に入りたる魂はこれを取返すこと能はざるなり。されど汝の御手はこれを免るべからず。不信の徒は汝を知ることを拒み、汝の腕の力にて笞たれ、異なる雨と霰と驟雨の容易に寛恕せざるもの、追ふ所となり、火のために全く燒かれたり。更に何事よりも驚くべきは、如何なる物をも消すべき水の中にて火力は更に一層加はりたり。そは世界は正義のために奮鬪すればなり。或時は火焰その威力を失ひ、不信の徒が神罰を受くべきものたることを自覺し得んが爲に、彼等に對して遣はされたる動物を燒き盡さゞるやうにせられ、また或時は水中に在りてすら火力以上に燃え、不義なる地の果を亡ぼすやうにせられたり。然るに汝はこれに代ゆるに天使の食物を汝が民に賜はり、直ちに食し得べき糧を彼等の勞する所なく天より與へ給ひぬ。即ち各種の美味の特性を具へ各人の舌に適する如き食を賜はりぬ。そは汝の賜ふ物は汝の子等に汝の甘美を表現し、これを食する者の需めに應じ各人の好みに適合す。雪と氷も火に堪えて解けず、火は霰のうちに燃え雨のうちに輝きて敵の果を亡ぼすことを示す。この火また正しき人を養はんが爲に自らの力を忘れたり。そは創造は己を造れる汝に奉仕して、惡人はこれを罰せんためその力を強め、また汝に信賴せる者はこれを惠まんとてその力を緩む。この故に彼の時また自らを諸の形に變へ、

祈願をなせる汝の民の望に從ひ、營養豐かなる恩物を彼等に給ひぬ。主よ、これ汝の愛し給ふ汝の子等が、人を養ふものは地より生ずる果にあらずして、汝の言こそ汝に信賴するものを保全することを知り得んがためなり。そは火にて損せられざる物、微かなる日光に暖められたるのみにて融け、我等が汝に感謝を捧げんには日出前に起き、汝に祈願せんには黎明に於てせざるべからざるを知らん爲なり。そは恩惠を感ぜざるものゝ期望は冬の白き霜の如く解け、無用なる水の如くに流るべければなり。

〔一七〕 汝の審判は大にして解し難く、かくて訓練なき魂は迷ひ去りぬ。不法の者が聖き國民を服したりと思ひし時、自ら暗黒の囚人にしてまた長き夜の桎梏に在りし彼等は、その屋根の下に固く閉されて、永久の攝理より逐放されぬと想ひしに、失念の黒き幕にて互に離隔され、怕ろしき恐怖に襲はれ、いたく妖怪に惱まされたり。そは彼等の秘密の罪惡は見られずして彼等の在りし閉居も恐怖に對して彼等を護らず、響き渡る音は彼等の周圍に鳴り、笑顏せざる陰氣なる幽靈出現せり。火は彼等の爲に光明を與ふるの力なく、光り輝く星の焰もその闇黒の夜を照さず、たゞ自然に光る幽かなる火の怕ろしく彼等に現はるのみにして、彼等は正視し得ざるその觀に怖れ、其處に現れたるものを實際よりも惡しく考へぬ。魔術を嘲ふ者屈伏し、その誇れる知識の譴責は恥づべきものと成りぬ。そは病人の恐怖と苦惱を去り得べしと稱したる者、自ら笑ふべき恐怖に病みたり。彼等を驚かす如き何等の煩はしき物なかりしが、尙ほ蟲の動き蛇の爬ふ音に脅かされて何方を向くも避くる能はざる空中をすら視ることを拒み、戰慄のあまり死滅したり。そは惡は自ら臆病なるものにして已の罪科を證言し、良心に迫まられて常にその惡報を豫知す。そは恐怖と理性の提供する援助を放棄することに他ならず。而して心中より豫期の覆へされたる時、苦悶を來たす原因よりもその無智を以て惡しきものとなす。されど實は少しも力なきもの

たる夜、また無力なる陰府の幽所より來れる夜を通して、人皆た等しき眠に就けるに、彼等は俄かに思はざるもの
の來るを恐れて、時には怪しき幻象に惱まされ、時には自らの魂を投出して身體癖痺するに至る。故に各人悉くそ
の處に沈沒して、鐵もて閉さるその獄の監房に押込められたり。或は農夫も或は牧羊者も或は荒野の勞働者も、
皆な襲はれて避くべからざる必然を忍ぶ、即ち何人も悉く一條の暗黑の鎖にて縛かるなり。空に嘯く風、茂れる
樹間に鳴く鳥の美はしき聲、奔流する水の面白く落つる瀧、投げ落されたる岩石の碎くる音、見えざる所を疾走す
る獸の足の音、野獸の咆哮、谷間に響き渡る山彦、凡て此等のものは恐怖を以て彼等を癖痺せしめざるなし。そ
は全世界は明光に照されて何の妨害なく作業に勵みつゝあるに、即ち後に彼等
を迎ふべき暗黑の像なり。而かも彼等自ら暗黑よりも更に陰鬱なり。〔一八〕されど汝の聖者には常に大なる光
明ありて、埃及人はその形體を見ざるその聲を聞きても彼等が苦悶なきを羨み、また彼等は前に聖者を害ひたる
も今はこれに害せられざるを以て感謝し、且つ先きに敵意を有したるを謝罪せり。然るに汝は汝の民に火の燃ゆ
る柱を授けて、その知れざる旅路を導き給ひ、その意氣昂然たる亡命を慰むるの日を與へ給へり。そは埃及人は、
汝の子等、即ちこれによりて律法の滅びざる光明が人類に與へられたる汝の子等を幽閉したる彼等埃及人は、光
明の損失と暗黑の牢獄を値するものなり。彼等聖民の嬰兒捨てられて救はれ、汝は彼等を罰せんがために彼等の兒童を多くとり給ひ、またその軍勢を大水に集めて亡ぼし給へり。我等の
先祖は前よりその夜のことを知り、これによりて彼等の信賴したる誓言にて安んじ居たり。かく汝の民によりて
正しき者は救はれ敵は亡ぼさることを豫期せられぬ。そは汝が敵の仇を報ひ給ひし如く、その同一の業にて我等
に光榮を加へ我等を汝のものと稱へ給ひぬ。そは善き人の聖き兒等密かに犧牲を捧げ、一致して自ら神の律法の

契約を執りて列祖たちの讃美の歌を唱へり、これ聖徒たるものは福にも禍にもその運を共にすべければなり。されど敵の叫は亂調になりて響きわたり、その兒等のために嘆く悲哀の聲そとに聞えぬ。かく正しき罰を受くるに主從の別なく、將軍の苦悶も國王のそれと同じく、然り、如何なる人も死に別あるなく、みな無數の屍を有したりき。そは一擊の下に最も尊き者の兒も亡ぼされ、生きて殘れる者これを葬るに足らざりければなり。そは彼等その魔法の故に凡ての事を信ぜざりしが、長子の亡びしによりてその民が神子たるを告白せり。そは萬物穩かなる靜肅に包まれ、夜は更けて半ばなりし時、汝の全能なる言(ことば)は嚴めしき勇士の如く寶座より跳び出でて天よりこの呪はれたる地の中央に降り、銳き劍(つるぎ)の如く汝の愆らざる戒を擔ひ、立ちて萬物を充たすに死を以てせり、即ち上は天に觸れ下は地を踏みて立ちぬ。かくて幽靈は忽ち恐るべき夢に於て彼等を苦しめ、恐怖は俄かに彼等に臨みぬ。そは夢は彼等を攪亂して、何故に彼等が惱まさるかを知ることなくして滅亡すべきを豫示したり。

されど正義の民もまた曾て死を味ふことゝなり、數多のもの荒野にて擊たれぬ、而かもその神怒は長く續かざりき。そは責むべき所なき一人出でて彼等を代表し、彼が奉仕の武器、即ち祈禱や祈願の燒香より立昇るものを携へ、以て彼等は神怒に對し、自らその僕奴たることを示して、災殃の終を告げしめたり。彼が神怒に勝ちたるは軀體の强健なるが故にあらず、武器の力によるにあらず、たゞ彼は言(ことば)によりて刑罰の使を服し、列祖たちと結びし給ひし誓と契約を思ひ出さすことによりてせり。死者既に續々仆れて互に相重なりし時、彼その間に立ちて來らんとする神怒を阻止し、生者に近づかんとするその進路を斷てり。そは彼の長き祭司長の衣には全世界畫かれ、列祖たちの光榮は彼の四列の寶玉に刻まれ、尙ほ彼が頭上の冠には汝の威嚴を示せり。此等のものに對して亡ぼす者敵する能はず、彼これを畏れたり。そはたゞ神怒のあるを示せば即ち足りぬ。

〔一九〕 されど神の怒は不信の者に對して極度に來れり。そは彼等が何を爲すべきかは彼豫めこれを知り給へばなり。即ち强ひて彼等を行かしめ、その進路に於て彼等を甚しく促して、彼等自ら悔ひて彼等を追求せんとす。そは彼等尙ほその喪中にありて、死者の墓側に慟哭しつゝありしに、彼等は更に愚かなる議をなし、彼等がその去らんことを懇願したる者なるにこれを逃亡者の如く追擊せり。これ彼等の呪はれたる運が彼等をしてこの始末に到らしめたるものにして、彼等は如何なる事の彼等に起りたるかを忘れ、その刑罰の苦悶のまだ足らざる所を補ひしなり。かくて汝の民に驚くべき路を通りて前進し、彼等は前代未聞の死に會したり。

蓋し凡ての造られたる物は今や悉く新たに形づくられ、その諸戒を守りて、汝の僕等は害を受けざるやうに護られぬ。即ち雲來りて陣屋を掩ひ、前きに水なりし所に乾ける陸地露はれ、紅海のうちに何の阻碍なき街道通じ、怒濤の中より草野生じぬ。彼等乃ち全軍を以てこれを過ぎ、汝の御手もて掩ひ給ひしもの此等の驚異を看たり。主よ、彼等は馬の如くに隨意に徘徊し、羊の如くに跳び廻り、彼等を救ひ給ひし汝を讃揚せり。そは彼等はその寄寓の時に起りしことを尙ほ記憶し、地は家畜を生育せずして虱を發生し、河は魚類の代りに無數の蛙を出せしを知る。されどその後ち彼等肉の慾によりて奢れる美食を求めし時また新らしき鳥類をも見たり、そは彼等を慰めんとて海より鶉の群をなして來りぬ。

而して罪人に對しては雷の力にて豫め與へられたる兆を以て刑罰來りぬ。そは彼等自らの甚しき惡事によりて苦しみ、彼等がその客人に對して抱きし嫌惡の念實に甚しきものなり。或者は彼等自らの甚しき惡事によりて苦しみ、彼等に恩惠を施したる客人を捕へて奴隷とせり。加之、神は彼等が在留外人たりし者を敵として受けしが故に、此等の者を他のものと等しく審罰し給ふべし。彼等は初め鑿應を以て歡迎し、後には恐るべき勞働を與へて

既に彼等と等しき權を享有せし者を苦しめたり。彼等また廣がる暗黒に取り捲かれて各自已が戸口を出でんとて通路を探せし時、正しき人の戸口に於ける者等の如く、彼等はその明を失ひたり。そは恰も琴の絃が常に各異りたる音を發しつゝ尚ほ種々なる韻律を生ずる如く、事物の發生を見て知らるが如し。そは乾ける陸の動物變じて水生物となり、水中を泳ぐもの今や地上を歩むにいたりぬ。火は水の中にて尚ほその力を逞うし、水は火を消すの天性を忘却せり。これに反して火焔はその中を歩む肉性の滅ぶべきものを破らず、またその性の溶解すべき神食の氷の如き糧を溶かさず。そは、おゝ主よ、汝は萬物のうちに汝の民を稱揚し給ひ、何時何處にもその側に立ちてこれを護り、これを頌榮して輕く評價し給はざりき。

# トービー

〔一〕アッスリヤ王シャルマネセルの時、ボゴノルの左方に通ずる道路の彼方にある、アセールの上ガリラヤのケデシ、ナフタリの右に位するテスベより囚はれ行きたるトービー即ちナフタリ族、アシエルの末裔ガバエルの子、アヂュエルの子、ハナニエルの子、トービエルの子なるトービーの物語の書。

われトービーは、わが全生涯を通ほして眞理と正義の道を歩み、我と共にアッスリヤ人の地、ニネヴェに行きしわが兄弟等及び國人等に多くの慈善を行へり。われ年なほ若くして、わが國イスラエルの地にありし時、わが父ネフタリの族は先祖ダビデの家より離れ、イスラエルの諸族のため犠牲を献げ、また萬代に亘りて神の住居たるべき宮の潔められて建てられんがため、イスラエルの諸族の中より選ばれたるエルサレムの家より、悉く去り行けり。共に去りし凡ての族はバールに牝犢を献げしが、わが父ネフタリの家も亦しかなせり。されど我のみは祭の時、屢々、全イスラエルに降されたる永への詔に従ひて、わが收穫の初穂と十分の一、及び初剪の羊毛を携へて、エルサレムに行き、これを祭壇に持ち行きてアアロンの子等なる祭司等に渡せり。わが收入の十分の一をエルサレムにて祭事をなすレビ人等に與へ、また更に十分の一をとりてこれを賣りて、年毎にエルサレムに赴き、其處にてこれを費せり。而して第三の十分の一はこれを、わが祖母デボラが我に命ぜし如く、適當なる人々に

與へぬ。そはわが父死して我は孤兒として殘されたればなり。成人の後われわが親族の末裔なるアンナを娶りて妻となし、彼に由りてトービアを擧げたり。われ俘虜としてニネヴェに運び去られし時、わが兄弟等及びわが親族の人々は異國人のパンを食ひぬ。されど我は決してこれを食ふまじと心に定めたり。かくてわれわが全靈を以て神を憶えたれば、至高者（いとたかきもの）シャルマネセルの前にて恩惠と愛顧を我に賜ひ、われ彼の御用商人となり、彼の死するまでメデヤに行きて彼のために物を買へり。而してわれメデヤのラゲスにて、ガブリの兄弟なるガバエールに銀十タラントを預け置きたり。

シャルマネセル死せし時、その子セナケリブ彼に代りて王となりしが、國道物騷となり、われメデヤに赴くことを能はざりき。シャルマネセルの時代にはわれわが兄弟等に多くの慈善を行へり。飢ゑたる者にはわが飯を與へ、裸なる者にはわが衣服を與へ、わが國人の死してニネヴェの城外に投げ出され居るを見てはこれを葬りぬ。セナケリブ王ユダヤより逃れ來りし者を殺せし時も、われ密かにこれを葬れり。そは彼怒りに任せて多くの者を殺したればなり。その屍體王の搜索する所となりしが、見出されざりき、されど一人のニネヴェ人行きて王にわが事を告げ、如何にわれ彼等を葬りて密かにこれを隱せしかを語りたり。而してわれ死刑に處せられんとて搜索され居るを知りしかば、恐れてわが身を隱したり。かくてわが所有物は悉く沒收せられ、わが妻アンナとわが子トービアの他は、何物も殘されざりき。この後四十五日も經ざるに、彼の二人の子等彼を弑してアララテの山に逃れたり。而してその子エサルバドン彼に代りて即位し、その王國の會計と庶務を司らせんとて、わが兄弟アナエールの子アヒカルを任用せり。而してアヒカル我に求めしかば、われニネヴェに來れり。アヒカルはセナケリブ王の時、掌酒官にして、印璽保管者、大膳職、及び主計頭を兼務したりしが、エサルバドン再び彼を任命したり。而して彼はわが兄弟

の子なりき。

〔二〕 さてわれ再び家に歸りて、わが妻アンナ及びわが子トービア再びわがものとなりし時、七週の聖祭なるペンテコステの祭日に、わがために美はしき饗筵備へられたれば、われ山なす肉を見たれば、わが子に言ひぬ、『なんぢ往きて、ニネヴェに俘虜たる我等の同胞の中に主を憶ゆる者にして貧しき人を見出さば、何人にてもこれを伴れ來れ。看よ、われは汝を待たん。』と。彼來りて言ひけるは、『父よ、わが一人絞め殺されて、市場に投げ棄てられあり。』と。されればわれ未だ何物をも味はざりしかど、跳び出でて、日の暮るゝ前に彼を家の中に運び入れたり。而してわれ歸りて、わが身を洗ひ、悲みの中に、わが飯を食へり。われアモスの豫言を想ひ出せり。曰く、

『汝等の節筵を悲傷に變らせ、
汝等の歌を盡く哀哭に變らせん。』

而してわれ泣きぬ。日暮れし時、行きて墓を造り、彼を葬りたり。されどわが隣人等われを嘲りていひぬ、『彼はもはやこの事の爲に死刑にせらるゝを恐れざるか。さきに彼は逃れ去れり。然るに見よ、今彼は再び死人を葬れり。』と。われ彼を葬りて歸りし夜、汚れのために中庭の壁側に眠り、而してわが顔には顔蔽なかりき。われ壁の中に雀の居りしを知らざりしが、われ眼を開きし時、雀わが眼の中に溫き糞を落せしかば、白き膜わが眼の中に生じたり。われ醫師に往きしも、彼等われを助け得ざりき。アヒカルわれを養ひたり。

この頃わが妻アンナ後房にて絲を紡ぎ、その仕揚げし品を主人に持ち行きしに、彼等賃銀を彼に與へ、尚ほそ

のほかに仔山羊をも與へたり。その仔山羊わが許に來りし時、鳴き初めたれば、われ彼にいひぬ、『何處よりか、盜みしにてはあらざるか、持主に返せ、盜まれ物は何にてもこれを食ふは正しからざればなり。』と。彼曰ひぬ、『それは賃銀の外に贈物としてわれに與へられたるなり。』と。われ彼を信ぜざりしかば、これを持主に與せといひて、彼を卑めたり。されど彼答へてわれにいひぬ、『汝の慈善と汝の正義は何處にありや、看よ、汝と汝のすべての業は知らる。』

〔二二〕　われ悲哀に堪えで泣き叫び、嘆きつゝ祈りて曰ひぬ、『主よ、汝は義しくして、汝のすべての業とすべての道は慈愛と眞理なり、汝は永へに眞にして義しき審判をもて審き給ふ。願くは我を憶え、われを見そなはし給へ。わが罪とわが無知の故に、又汝の前に犯したるわが先祖等の罪の故に、我を審き給ふ勿れ。彼等汝の誡に從はざりしかば、汝我等を掠奪と俘囚と死とに付し、我等の散在し居るすべての國人の間に不名譽なる諺となし給へり。今、わが罪とわが先祖等の罪に從ひて我に行ひ給ふ汝の多くの審判は皆眞なり。これ我等は汝の誡を守らず、汝の前にて眞理に歩まざりしが故なり。されば今汝の欲し給ふまゝに我に爲し給へ。願くはわれ解放せられて土に化せんがため、わが靈に我を離れ去れと命じ給へ。生きんよりは寧ろ死なん方我に益なり。われは僞りの非難を聽きて、悲みに堪えず。今われ我惱みより救はれて永遠の場所に入ることを得さしめ給へ。御顏をわれより背向け給ふ勿れ。』

その同じ日に、メデヤのエクバタナなるラグエールの娘サラも、その父の婢等に辱しめられたり。そはかれは、『汝は汝の夫等を絞め殺したるを知らざるか。汝は既に七人の夫を持ちたるに、未だその一人の名をも用ひた

ることなし。汝の夫たち死したればとて何故に我等を鞭打つか。汝も彼等の許に往け、而して我等を息子をも娘をも見ざるべし。』と。かれこれを聴きし時いたく嘆きて、自ら縊れんと思へり、されど彼いひぬ、『われわが父の一人娘なるに、われ若しこれをなさば、父の不名譽となりて、彼は老年を悲しみの中に過して墓に到らん。』と。而してかれ窓際に坐し、祈りて曰ひぬ、『讃むべき哉、主なるわが神よ。汝の聖へに讃むべき哉。すべて汝の御業をして永へに汝を崇めしめ給へ。主よ、われ今、わが眼を汝に向く。願くはわれ地より解放せられて、再び辱しめを聴くこと勿らんことを。主よ、汝は知り給ふ、我は人に對してすべての罪より潔きこと、またわれ未だ曾て、わが父の名をも、わが父の一人娘にして、父は他にその嗣子たるべき子も、近き兄弟も、また我を妻として共に居るべき養子をも持たず。わが七人の夫は既に死したり。いかでわれ生くべけんや。もしわれを憐みて、もはや再び辱しめを聴くことなからしめ給へ。もしわれを殺すこと御心ならずば、われを看そなはし、われを憐みて、もはや再び辱しめを聴くことなからしめ給へ。』と。

二人の祈り大なる者の榮光の前にて聴かれたり。ラファエール二人を醫すために遣はされぬ。即ちトービーはその眼より白き膜を取り除き、ラグエールの娘サラには彼をトービーの子トービアに妻として與へ、且つ惡靈アスモダイオスを縛せんがために遣はされたり。そはトービアは彼を己がものとすべかりしが故なり。その時トービーは歸りて己が家に入り、ラグエールの娘サラはその高樓より下り來りぬ。

〔四〕 その日トービーは、メデアのラゲスなるガバエールの許に託し來れる金子のことを思ひ出して、自らひけるは、『看よ、我は死を求めぬ、されど死する前に我子トービアを呼びて、彼にこの事を告げざらんや。』と。かくて彼その子を呼びて曰ひけるは、

『我子よ、われ死なば我を葬れ。汝の母を辱しむる勿れ。汝の全生涯彼を崇め、彼の心に適ふことをなせ。彼を悲ましむる勿れ。わが子よ、汝の尙ほ胎にある時、かれ汝のために多くの危險を見たり。彼の死せん時は、彼をわが側に、一つ墓に葬れ。我子よ、汝の一生涯我等の主なる神を憶え、汝の心を罪に向けず、彼の誡を犯す勿れ。汝の全生涯の間正義を行ひ、不義の道に歩む勿れ。そは汝もし眞理を行はゞ、汝のなす業は榮ゆべし。すべて正義を行ふ者にはしかあるべし。汝の持物を施せ。而して汝施をなす時、汝の眼にこれを示して貪らしむる勿れ。汝の顏を貧しき人より背けずば、神の御顏も汝より背けられざるべし。汝の持物をば、その量に從ひて施せ。もし汝の持物少くとも、それに從ひて少く施すを恐るゝ勿れ。これ汝は必要あらん日のために善き寶を自ら蓄ふるなり。そは施は死より救ひ、暗きに到らしむることなければなり。施はすべてこれをなす者にとりて、至高者の御前に善き賜物となるなり。我子よ、凡ての淫行に心せよ。先づ汝の先祖の裔より妻を娶れ。汝の父の種族に屬せざる異國の妻を娶る勿れ。我等は豫言者の子等なればなり。ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、古への我等の先祖を記憶せよ、我子よ。彼等は皆、その兄弟等より妻を娶り、その子等によりて祝福せられたり。彼等の裔は地を嗣ぐべし。我子よ、汝の兄弟を愛せよ。汝の心に、汝の兄弟等の中より、汝の民の子等と娘等の中より妻を娶ることを蔑む勿れ。そは輕蔑の中に滅亡と多くの困惑あり、嘲笑の中に減退と大なる缺陷あり。嘲笑は飢餓の母なればなり。汝のために働く人の賃銀を滯らしめず、手づからこれをその人に渡すべし。汝もし神に仕へば、償ひ汝に來らん。わが子よ、汝のすべての業に心し、すべて汝のなす所を愼め。汝の自ら憎むことを人になす勿れ。醉ふ程に葡萄酒を飲まず、醉ひを帶びて汝の道を行く勿れ。汝の飯を飢ゑたる者に、汝の衣を裸なる者に與へよ。すべて汝の豊かなるをもて施しをなせ。而して汝施しをなす時汝の眼に示してこれを貪り見さする勿れ。汝の飯

を正しき者の葬りに投げ與へよ。罪人には何物をも與ふる勿れ。如何なる時にも主なる汝の神を崇め、汝の道の直くせられんことを祈れ。そはすべての國民は計畫を有たず。されど主はすべての善き物を與へ、御心のまゝに己が欲する人を謙(へりくだ)らしめ給ふ。されば我子よ、わが誡律を憶え、これを汝の心より消し去る勿れ。われ今汝に、メデアのラゲスなるガブリアの兄弟ガバエールに託したる十タラントの銀を示す。我子よ、我等貧しくなればとて恐るゝ勿れ。汝もし神を畏れてすべての罪より離れ、彼の御前に御心に適ふことを行はゞ、汝は大なる富を有つなり。』

〔五〕トービア答へて彼に曰ひぬ、『父よ、われ汝が我に命ぜしことは、すべてこれを行はん。されどわれ知らざるに如何にしてその金子を受け取り得べきか。』と。トービー證書を彼に與へていひぬ、『汝と共に行くべき人を捜し來れ、われ汝が歸るまでは彼に賃銀を與ふべし。されば行きてその金子を受け取れ。』と。かれ行きて、とある人を捜し出せしが、その人は天使ラファエールなりき。されど彼これを知らず。彼その人に問ひぬ、『汝我と共にメデアのラゲスに行くを得んか。汝はその場所をよく知れりや。』と。天使彼に曰ひけるは、『われ汝と共に行かん。我よくその道を知る。われは我等の兄弟ガバエールと共に居りしことあり。』と。トービア彼に曰ふ、『待て、われわが父に告げん。』と。その人彼に曰ひぬ、『往け、遲るゝ勿れ。』と。彼入りてその父に曰ひぬ、『看よ、われ我と共に行くべき人を見出せり。』と。されど彼いひぬ、『彼をわが許に呼び來れ。われ彼の何族に屬するか、又汝と共に行き得る信用すべき人なるかを知らん。』と。而して彼その人を呼びしに、彼來りければ、彼等互に挨拶せり。トービー彼にいひぬ、『兄弟よ、汝は何族の何家の人なるか。若くは汝の子と共に行くべき傭人を尋ぬるか。』と。トービー彼にいひぬ、『兄弟よ、われ汝の生

れと汝の名を知らんことを欲す。』彼答へけるは、『我は汝の兄弟、大なるアナニアの子アザリアなり。』と。彼その人に言ひぬ、『よく來れり、兄弟よ。わが汝の族と家を尋ねたるを怒る勿れ。汝は正直にして善き家柄より出でたるわが兄弟なり。そはわれ大なるセメリアの子等なるアナニアとナタンを知れり。我等共にレムに行きて、初子と我等の收入の十分の一を献げたればなり。彼等は我等の同胞等の誤りに迷ひ行かざりき。兄弟よ、汝は實によき家柄より出でたり。されどわれに答へよ。われ汝に幾干の賃銀を與ふべきか。一日一ドラクマと及びわが子に與ふるが如く汝の必要なる物とにてよきか。而して、もし汝安全に歸りなば、我また汝の賃銀を増し加ふべし。』と。かくて彼等同意せり。而して彼トービアに曰ひけるは、『汝自ら旅の準備せよ。神汝を祝福し給はんことを。』と。その子旅に必要なるものを準備せしに、父彼に曰ひぬ、『この人と共に行け。されど願くは、天も彼等と共に居らしめ給はんことを。』と。かくて彼等二人旅立ち、若者の犬も彼等と共に行けり。

されど彼の母アンナ泣きてトービーに曰ひけるは、『トービーよ、如何なれば汝我等の子を送り出せしや。彼は入るにも出づるにも我等の手の杖にはあらざるか。金子に金子を加へんとて貪る勿れ。唯我等の子のために安全を計るべきなり。主が我等の生命のために與へ給ひしものをもて足れりとせよ。』と。トービー彼に答へぬ、『心を勞する勿れ、姉妹よ。彼は安全にて歸らん。汝の眼彼を見るべし。善き天使彼と共に行き、彼の旅路祝せらるべければ、彼は安全にて歸らん。』と。かくて彼泣くことを止めたり。

〔六〕さて彼等その旅路に出で立ちけるが、日暮るゝ頃、ティグリス河に到りて、其處に止まりぬ。若者身を洗はんとて下り行きしに、魚河より跳び出でて若者を呑まんとせり。天使彼に、『魚を捕へよ。』と言ひければ、若者

その魚を捕へて、これを地に投げ出せり。天使彼にいひぬ、『魚を切り開きて、心臓と肝臓及び膽嚢を取り、これを害はざるやうなし置け。』と。若者天使の彼に命ぜし如くなし、且つ彼等魚を焙りてこれを食ひぬ。かくて彼等二人その道を進み行きてエクバタナに近づきぬ。若者天使に、『兄弟アザリアよ、この魚の心臓と肝臓は、もし悪鬼或は悪靈何人かを苦むることあらば、その男或はその女の前にてこれを煙らし、これによりて、その人のもはや苦められざうやうにするなり。されど膽嚢は、眼に白き膜ある人にこれを塗れば、その人醫さるべし。』と。

彼等ラゲスに近づける時天使若者に言ひぬ、『兄弟よ、我等今日ラグエールの許に宿らん。彼は汝の親戚にしてサラといふ一人娘あり。われ彼を汝の妻として汝に與へられんがため、彼について言ひ出でん。彼の財は汝のものとなるべし。汝は彼の唯一の親戚なればなり。その少女は美はしくして賢し。されば今我に聽け、われ彼の父に語らん。我等ラゲスより歸りて後婚姻の式を擧ぐべし。われ、ラグエールはモーセの律法に從ひて、彼を他の人には決して嫁がしめざるを知る。然らされば彼死に渡されん。そは他の何人よりもその財産は汝に歸すべきものなればなり。』と。その時若者天使に言ひぬ、『兄弟アザリアよ、われはこの少女が七人の男に嫁ぎしことと、彼等の皆婚禮の室にて死せしことを聽きたり。我はわが父の一人子なれば、われも行きてわが前の人々の如く死なんことを恐る。その女に來る人々のみを害する悪靈彼を愛す。されば我に悲みて墓に到らしめんことを恐る。彼等は已等を葬る他の子を持たざるなり。』と。されど天使彼に言ひぬ、『汝は、汝の父が汝に命ぜし、汝の親族より妻を娶るべしといへる言を忘れたるか。されば我に聽け、兄弟よ。彼は汝の妻となるべければなり。今宵かれ汝の妻となるべければなり。汝婚禮の室に來る時、

香の灰を取り、その上に彼の魚の心臓と肝臓を置きて、これを煙らすべし。悪靈それを嗅がば逃れ去りてもはや再び來らざるべし。されど汝かの女に近づく時、汝等二人とも起ち上りて、憐みある神を呼び奉れ。さらばかれ汝等を救ひ、汝等に憐みを垂れ給はん。恐るゝ勿れ、かの女は始めより汝のために備へられたり。われ想ふに、汝は彼によりて子を持たん。』と。トービア此等のことを聽きし時、かの女を愛し、かの心は切にかの女を慕ひ求めたり。

〔七〕　彼等エクバタナに來りて、ラグエールの家に到りぬ。サラ彼等に會ひて、挨拶せしかば彼等も彼に挨拶し、サラ彼等を家に伴ひ入りぬ。ラグエールその妻エドナに曰ひけるは、『如何にかの若者はわが從兄弟たちに似通ひ居るぞ。』と。ラグエール彼等に、『兄弟たちよ、汝等は何處より來れるか。』といひければ、彼等、『我等はニネヴェに囚はれたるナフタリの子等なり。』と答へぬ。かれ彼等に、『汝等は我等の兄弟トービーを知るや。』と問ひしかば、『我等は彼を知る。』と答へぬ。而してラグエール彼等に、『兄弟トービーに於てトービアいひぬ、『彼はわが父なり。』ラグエール跳りあがり、彼に接吻して泣き、彼を祝して言ひぬ、『汝は正直にして善き人の子なり。』と。而してかれトービーが盲目となりしを聽きし時、悲みて泣きぬ。彼の妻も、彼の娘サラも泣きぬ。彼等歡びてその人々を迎へ、群の中より牡羊を屠りて、彼等の前に肉を積み重ねたり。

然るにトービア、ラファエールに言ひぬ、『兄弟アザリアよ、汝が道にて語りし彼の事どもを言ひて、これを解決せよ。』と。かくて彼これをラグエールに傳へしに、ラグエール、トービアに言ひける、『食ひ且つ飲みて樂めよ。汝はわが子を娶るべければなり。されどわれ汝に眞實を語らん。われわが子を七人の男に嫁がしめたるに、彼等彼

の許に到るや。すべてその夜の中に死したり。されど今は樂め。』と。トービア言ひぬ、『われは汝が契約をなし、われとの契約を結ぶまでは、こゝにて何物をも食はざるべし。』と。ラグエール言ひけるは、『今より定めに従ひて彼を汝の許に取れ汝は彼の兄弟にして、彼は汝のものなればなり。憐みある神、汝にすべての良き成功を與へ給はん。』と。かくて彼その娘のサラを呼びて、その手を取り、彼を妻としてトービアに與へていひけるは、『看よ、モーセの律法に従ひて汝かれを娶り、彼を汝の父の許に伴ひ行け。』と。かくてかれ彼等を祝福せり。而してかれその妻のエドナを呼びて記錄簿を取り、證言を記して、これに署名し、かくて彼等食ひ初めたり。

さてラグエール、その妻エドナを呼びて言ひけるは、『姉妹よ、他の室を備へて、娘を其處に伴へ。』と。彼その命ぜられし如くなして、かの女をそこに伴ひ入りぬ。彼泣きけるは、『心安かれ、わが子よ。天地の主は汝のこの悲哀の故に汝に恩惠を垂れ給はん、心安かれ、わが娘よ。』と。

〔八〕 彼等その晩餐を終へし時、トービアを彼の女の許に伴ひ來れり。然るに彼到りし時、ラファエールの言を思ひ出し、香の灰を取りて、彼の魚の心臟と肝臟をその上に置きて、これを煙らしたり。惡靈その臭氣を嗅ぎし時、エジプトの端に逃れ、天使彼を縛りぬ。彼等二人ともに室内に閉ぢ籠りし後、トービア床の上に起き上りて曰ひぬ、『姉妹よ、起きよ、主我等の上に憐みを垂れ給はんがため、我等祈らん。』と。而してトービア曰ひ出しぬ、『讃むべき哉、我等の列祖等の神よ、汝の聖にして榮光ある御名は久遠に祝ふべき哉。天もすべての被造物も汝を祝し奉るべし。汝はアダムを造りて、その妻エバを、助手（たすけて）とし支手（ささへて）として彼に與へ給へり。彼等より人類の胤出でたり。汝曰ひ給へり、『人一人居るは善からず、我等彼に等しき助手（たすけて）を造らん。』と。されば、主よ、今われこのわが姉妹を情慾にあらず、眞理によりて娶れり。願くは我を憐みて、年老ゆるまで彼と共に居らしめ給へ。』と。彼の女も彼に和し

て、アーメンといひぬ。かくて彼等二人その夜共に眠りぬ。

ラグーエール起き出て、彼の生き居るやを見せしむべし。若し生き居らずば我等、彼を葬ドナに言ひぬ、『婢等(はしためたち)の中より一人を遣はしりて、何人にもこれを知らしむべからず。』と。婢戸を開きて中に入り、二人とも眠り居るを見、來りて彼等に二人の生き居るを告げければ、ラグエール神を崇めて言へり。

『讃むべき哉、神よ、すべての潔くして聖なる祝福をもて汝を讃め奉らん。汝の聖徒とすべての被造物は汝を崇め、すべての汝の天使と汝の被選者は永へに汝を崇め奉らん。汝は我に喜びを與へ給へり。わが恐れしが如くならしめず、汝は大なる憐みを以て我等に臨み給へり。汝は讃むべき哉。汝は二人の者に憐みを垂れ給ひたればなり。彼等を憐み給へ、あゝ主よ、喜びと憐みを以て彼等の生命を健かに保ち給へ。』と。

彼その僕等に命じて墓を塡めしめぬ。而してかれ彼等のために、十四日の間婚筵を續けたり。婚筵の終る前にラグエール彼に、十四日間の婚筵終る前迄は決して去るべからざることと、終りて後に彼の財産の半ばを携へて安全に父の許に行くべきことを言ひ、更にその殘りをば我とわが妻の死せん時に、といひぬ。

〔九〕トービア、ラファエールを呼びて言ひぬ、『兄弟アザリアよ、一人の僕と二匹の駱駝を携へてメデアのラゲスなるガバエールの許に行き、わがために金子を受け取りて、彼を婚筵に伴ひ來れ。ラグエール我を去らしめざればなり。わが父日を算ふ。若しわれ長引かば彼いたく嘆かん。』と。ラファエール出で行きてガバエールの許に宿り、彼に證書を渡せしに、かれ封印せる嚢を持ち來りて、これをかれに渡しぬ。かくて彼等朝早く起き出で

て共に婚筵に來り、トービアと彼の妻を祝福したり。

〔一〇〕 彼の父トービー日毎に指折り算へ居りしが、旅の日數盡きたるに、彼等歸らざりしかば、彼曰ひぬ、『或はかれ引き留められたるか。さなくばガバエール死して、彼に金子を渡す人なくなりたるならん。』と。かくて彼いたく嘆きぬ。然るにその妻彼に向ひ、かく長引くを見れば子ぱ死したるなりといひ、彼のために泣き悲みて曰ひけるは、『わが子よ、わが眼の光なる汝に先き立たれては、われ何事をなし得んや。』と。トービー彼に、『默せよ、我を欺く勿れ、わが子は死したるにはあらず、夜は夜もすがらその子トービーのために泣き悲しめり。』と。答へ、而して彼日日彼等の行きし道に行きて、晝は何をも食はず、夜は夜もすがらその子トービーのために泣き悲み、ラグエールがトービアに其處に止まれといひし十四日の婚筵の日限盡くるまでしかなせり。

然るにトービア、ラグエールに言ひぬ、『我を去らしめよ、わが父もわが母ももはや我を見んと望まざればなり。』と。されどその舅彼に言ひけるは、『我と共に止まれ、われ汝の父に人を送り、彼に汝の消息を傳ふべし。』と。ラグエール起ちて彼に、彼の妻サラと彼の財産の半ば、僕婢、家畜、及び金子を與へぬ。而してかれ彼等を祝し、天の神わが死する前に汝と汝の子等を榮えしめ給はんことを願ふといひぬ。彼またその娘に向ひ、『汝の舅、姑を尊べ。彼等は今は汝の親なり。汝の善き聞えを我に聞かしめよ。』と言ひて、彼に接吻しぬ。エドナ、トービアにいひぬ、『愛する兄弟よ、願くは天の主、汝に報ひ、われに我娘サラに由りて汝の子等を見ることを得しめ給はんことを。われ主の御前に喜ばん。看よ、われわが娘を篤き信任をもて汝に委ねたれば、彼を憂ますこと勿れ。』と。

〔一一〕 此等の事の後に、神彼の旅路を榮えしめ給ひたれば、トービア神を崇めつゝ出で行きぬ。彼またラグ

エールとその妻エドナを祝したり。彼等その道に行きて、ニネヴェに近づき、ラファエール、トービアに言ひけるは、『兄弟よ、汝は如何なる様にて父の許を去りたるかを知らざるか。我等汝の妻の前に走り行きて、家を備へ道を眺めつゝ、されど汝の手に彼の魚の膽嚢を取れ。』と。彼等その道に行きて、その子の歸るを待ち居たり。而して彼、その子と彼と共に行きし人歸り來る。』と。ラファエールいひぬ。『われ知る、トービアよ、汝の父はその眼を開かん。されば彼の眼に魚の膽汁を塗れ。その刺戟にて眼を摩擦せば、白き膜落ちて、かれ汝を見るを得ん。』と。

アンナ彼の許に走り行きてその首に抱きつゝ、『わが子よ、汝を見たれば、もはやわれ死せん。』といひて、二人ともに泣きぬ。トービー戸の方に行きて、躓きしが、その子彼の許に走り行き、父を抱きかゝへてその眼に膽汁を塗り、『心安かれわが父よ。』といひぬ。彼の眼激しく痛み出したれば、これを擦りしに、白き膜その眼の隅より落ち去りぬ。かれその子を見てその首に抱きつき、彼泣きて言ひけるは、『讃むべき哉、神よ。我の御名は永へに讃むべき哉。汝のすべての聖天使は讃むべき哉。汝われを鞭打ち、我に憐みを垂れ給へり。看よ、我はわが子トービアを見る。』と。而してその子喜びつゝ内に入り、メデアにて彼に起りし大なる事どもを父に告げぬ。

而してトービー喜びて神を祝しつゝ、ニネヴェの門にてその嫁を見んとて出で行きぬ。彼の行くを見し人々、その眼の癒えたるを見て驚けり。神彼に憐みを垂れ給ひたれば、トービー彼等の前にて感謝せり。トービーその子の妻サラの許に來りて彼を祝し、『よくこそ來りぬ、娘よ、汝を我等に伴ひ來らしめ給ひし神は讃むべき哉。汝の父も汝の母も讃むべき哉。』といひぬ。而してニネヴェに在りし彼のすべての兄弟等に喜びありき。アヒカルスと彼の兄弟の子ナダブも來りて、トービアの婚筵は大なる喜びの中に七日間續けられぬ。

〔一一二〕 トービーその子トービアを呼びて言ひけるは、『こゝに汝と共に行きし人の報酬あり。汝はこれに與へざるべからず。』と。彼答へけるは、『父よ、わが携へ來れるもの、半ばを與ふるも、我に損なし。そはかれ安全に我を汝に導き來り、わが妻を醫し、わが金子を携へ來り、且つ汝をも醫したればなり。』と。老人いひぬ、『彼にかくなすは當然なり。』と。かれ天使を呼びていひぬ、『汝の携へ來れるすべてのもの、半ばを取れ。』と。その時かれ私かに二人を呼びて彼等にいひぬ。『神を讃め、神に感謝し、神が汝になし給ひしことの故に、すべての生ける者の前にて神に感謝せよ。神の御業を敬ひ示しつゝ神を讃め、その御名を崇むるは善きことなり。彼に感謝するを怠る勿れ。國王の秘密を守るは善きことなれど、神の御業は榮光の中にこれを現はすべきなり。善をなせ、さらば惡汝を見出さゞるべし。斷食と施しと義とを以てする祈りは善し。少しの義は多くの不義に勝る。黄金を蓄ふるよりは施しをなすは更に善し。施しは人を死より救ひ、すべての罪を潔む。施しと義とを行ふ人々は生に滿たさるべし。されど罪を犯す者は己の生命の敵なり。われ汝に何物をも隱さず。われ言へり、「王の秘密を守るは善きことなれど、神の御業は榮光のうちにこれを現はすべきなり。」と。汝と汝の嫁サラを醫さんがために、われ汝の祈りの願事を聖者の御前に携へ上れりし時に、われは汝と共に在りしたりなり。汝が死人を葬りし時にも、われは汝と共に在りし。汝が行きて死人を蔽はんがために、汝の食事をも中止して遲れずに起ちし時、汝の善行はわれに隱れざりき。われ汝と共に在りたればなり。されば今神汝と汝の嫁サラを醫さんがためにわれを遣はし給へり。我こそは、聖徒等の祈禱を携へて至聖者の榮光の御前に行く、七聖天使の一人なるラファエールなり。』と。

彼等二人共に心惑ひて地に平伏(ひれふ)しぬ。彼等は恐れたるなり。天使彼等に曰ひけるは、『恐るゝ勿れ、平安汝等にあるべし。永へに神を讃めまつれ。わが來れるは我心よりにあらず、汝等の神の御心に由りてなり。されば永へ

に神を讃めまつれ。今までわれ汝等に現はれしが、食ふことも飲むこともせざりき。されど汝等は幻を見たり。されば今神に感謝せよ。われ我を遣はし給へる者の許に上らんとすればなり。すべて此等の出來事を書物にかき記すべし。』と。彼等起ちあがりしに、もはや彼を見ざりき。かくて彼等神の大なる驚くべき御業と如何に主の天使が彼等に現はれたるかを言ひ表はしぬ。

〔一二三〕トービー乃ち大なる喜びをもて祈禱を書き記して曰く、

『永遠に生き給ふ神は讃むべき哉。

その御國は〔讃むべき哉〕、

かれ鞭打ちて憐みを垂れ給ふ。

かれ墓に導き下りて、再び携へ上り給ふ。

彼の御手を逃れ得る者一人だになし。

異邦人の前にて彼に感謝を献げよ、イスラエルの子等。

そは、かれ彼等の間に我等を散らし給ひたればなり。

彼の大なることをその處に宣べよ。

すべての生ける者の前にて彼を讃美せよ。

そは彼は我等の主にして、

神は永へに我等の父なればなり。

彼は我等の罪の故に我等を鞭打ち給へど、再び憐みを垂れ給ひ、

我等を汝等の散らされ居るすべての國民の中より集め給はん。
もし汝、汝の全心、全靈をもて彼に向ひ、
彼の御前に眞理を行はば、
その時、かれ汝に向ひ、
その御顏を汝より隱し給はざるべし。
かれ何を汝になし給ふかを見、
汝の口を全く開きて彼に感謝し、
正義の主を崇め、
永遠の王を讃めまつれ。
われ、俘囚の地に於て、彼に感謝を献げ、
その御力と稜威とを罪人等の國に示したり。
歸れ、汝罪人等、而して彼の御前に正義を行へ。
誰か、かれ汝を受け、汝に憐みを垂れ給ふやと告げ得べき。
われわが神を崇め、
わが靈は天の主を〔讃め奉る〕。
〔わが靈は〕彼の偉大を喜びまつらん。
すべての人をして語らしめ、彼等をしてエルサレムにて彼に感謝を献げしめよ。

あゝエルサレムよ、聖なる都。
かれ汝の子等の業の故に、汝を鞭打ち給はんも、
正義の子等の上には、再び憐みを垂れ給はん。
善きものをもて主に感謝を献げ、
永遠の王を譽めまつれ。
これ彼の幕屋再び喜びをもて、汝の中に建てられ、
かれ、俘囚の人々を汝の中にて喜ばしめ、
永へに汝の中にて不幸の人々を愛せしめんがためなり。
多くの國民遠くより來りて、主なる神の御名に、
その手に携へ來れる献物、即ち天の王への献物を捧ぐ。
代々の人々汝を讃美して、
喜びの歌を歌はん。
呪咀汝を憎む人々に臨み、
祝福汝を愛する人々に永へに在らん。
喜べ、いたく喜べ、正義の子等のために。
そは彼等共に集りて、正義の主を讃むべければなり。
あゝ幸福なる哉、汝を愛する人々、

彼等汝の平和の故に喜ばん。
幸福なる哉、汝のすべての筈(しもニ)の故に悲める人々、
そは彼等、汝のすべての榮光を見る時、
汝のために喜ぶべければなり。
彼等は永へに喜びをなさん。
わが靈をして大王なる神を讃めしめよ。
そはエルサレムは青玉と綠玉及び貴き寶石をもて築かるべし。
汝の城壁と高塔と要塞はすべて純金なるべし。
而してエルサレムの市街は綠玉と紅玉とスフィルの寶石を鋪きつめらるべし。
かくてそのすべての市街はハレルヤを唱へ、讃美を献げていはん、
『永へに汝を高うし給ひし神は讃むべき哉』

〔一四〕 かくてトービーその感謝を終りぬ。彼その視力を失ひしは五十八歳の時なりしが、八年の後再びそれを恢復したりしなり。かれ施しをなし、益々主なる神を畏れて、彼に感謝を献げたり。

さて彼いたく年老いしかばその子と、その子の六人の子等を呼びて、これに言ひぬ。
『わが子よ、汝の子等を伴へ。看よ、我は老いて將にこの世を去らんとす。メデアに行け、わが子よ。そはわれ豫言者ヨナがニネヴェについて語りしことを信ず。ニネヴェは滅ぼされんも、メデアには暫くの間平和あるべし。而して我等の兄弟等彼の良き國より地上に散らされ、エルサレムは荒れ果て、その中なる神の家は燒かれて、暫

くの間は荒廢に委ねられんも、神彼等に憐みを垂れて、再びその國に導き歸り給はん。彼等はその家を建つべけれども、その世の時の滿たさるゝまでは、以前の家の如くにはあらじ。後、彼等その俘囚の地より歸りて、恭しくエルサレムの再建をなし、豫言者等の語りしが如く、神の家は、その中に、永遠に榮光ある建物として建てらるべし。而してすべての國民は來りて眞に主なる神を畏れ、その偶像を葬るべし。かくてすべての國民は主を譽め、その民神に感謝し、主はその民を高うし給はん。すべて眞理と正義に於て主なる神を愛する人々は、我等の兄弟等に憐みを表はしつゝ喜ばん。されば汝わが子よ、今ニネヴェより去れ。そは豫言者ヨナの語りし事ども、眞に起るべければなり。我を禮儀正しく葬れ。汝の母をば我と共に葬れ。汝等もはやニネヴェには止まる勿れ。看よ、わが子よ、ナダブが彼を育てしアヒカルに何をなせしか、如何に光の中より暗の中に彼を携へ行きしか、またすべて如何に彼になせしかを。然るにアヒカルは救はれたれど、ナダブはその返報を受けて暗の中に下り行けり。われ施しをなして、彼そのために据を付けられたる陷穽を逃れたれども、ナダブは死の陷穽に落ちたり。されはわが子よ、施しは遂に何をなすべきか、正義は如何に救ふかを考ふべし。看よ、いま我靈は逝く。」

かれ此等の事を曰ひ居る中に、その床にて靈を付しぬ。されど彼は百五十八歳なりき。トービア、盛大に彼を葬りぬ。而してまたアンナの死せし時、彼、父の側に彼を葬れり。かくてトービア彼の妻及び子等と共に、エクバタナなる舅ラグエールの許に到りぬ。彼老いて尊敬を受け、その舅と姑を盛大に葬り、彼等の遺産及び父トービアの遺産を嗣げり。彼は百二十七歳にて、メデアのエクバタナにて死せり。その死する前にネブカデネザルとアハスエロスの陷れしニネヴェの沒落を聽きてその死の前にニネヴェの敵に喜べり。

# イウデト

〔一〕 大なる町ニネヴェにてアッスリヤ人を治めたるネブカデネザルの治世の第十二年。その頃アルファキサドはエクバタナに在りてメデヤ人を治めエクバタナとその周圍に幅三キュビト長さ六キュビトの切石にて石垣を造りたり。その石垣の高さは七十キュビト厚さは五十キュビト、門には高さ百キュビト、土臺の幅六十キュビトなる望樓を据ゑ付け、それ等の門は高さ七十キュビト幅四十キュビトの大門にして、彼の大軍を進出しまた歩兵の隊伍を整へ得んがためなり。この時ネブカデネザル王はラガウの邊境なる大平原に於てアルファキサド王と戰を交へ、山地のすべての住民、ユウフラテ河とチグリ河、及びフダスペース河のほとりのすべての住民、またアリオクの平原にはエルアイア人の王、彼を迎へ、多くの國民はケレウルの子等の軍に參加せり。

而してアッスリヤ王ネブカデネザルが使をもて招集したるは、ペルシヤに住むすべてのもの、西方に住むすべてのもの、キリキヤ、ダマスコ、リバノン、アンテリバノンに住む人々、及び海岸のすべての住民、カルメル、ギレアデ、ガリラヤの高地、及びエスドレーローンの大平原の諸國民、サマリヤとその町々、ヨルダンの向よりエルサレムまで、ベタネー、ケルス、カデシ、エジプトの河の國境まで、タフナス、ラムセス、及びタニスの上及びメンフィスに到るすべてのゴセンの地に居るすべての人々、及びエテオピヤの境に到るまでエジプトのすべ

ての住民なり。されどそれ等の地に住むすべての人々、アッスリヤ王ネブカデネザルの命令を輕んじ、彼と共に戰ひに行かざりき。そは彼等は彼を恐れず、彼は彼等の前には一人の人に過ぎざりければなり。されば彼等はその使者等を辱しめて、空しく彼等の前より歸り去らしめたり。

さればネブカデネザルこのすべての地に對して甚しく怒り、その王位と王國を指して誓ひぬ、キリキヤとダマスコとスリヤの沿岸のすべてのものに讐ひ、その劍をもてモアブの地のすべての住民、アンモンの子等、すべてのユダヤ人、二つの海の境なるエジプトに居るすべてのものを殺さんと。而して彼第十七年にアルファキサド王に對してその軍勢を整へて、戰爭を開始せしが、彼その戰に勝ちてアルファキサドのすべての町々の支配者となり、エクバタナまで來りて望樓を取り、その町の山にてアルファキサドを捕へ、槍をもて彼を擊ち貫き、全く彼を滅ぼして今日に到れり。而してかれ彼等と共にニネヴェに歸れり。即ち彼と種々なる國民の團體と甚しき大群の軍人となり。かくて彼とその軍勢休息をなし、百二十日に亘る酒宴を張れり。

〔二〕 第十八年の一月二十二日にアッスリヤ王ネブカデネザルの家に、彼の語りし如く、すべての地に復讐すべしとの話起れり。彼そのすべての僕、すべての大官を呼び集めて、彼等と秘密會議を開き、それ等の全ての地を苦しめんと自らの口をもて結論せり。而して彼等、彼の言に從はざる者をばすべて滅ぼすべしとの勅令を發せり。彼その協議を終へし時、アッスリヤ王ネブカデネザル、己が次に位する彼の軍勢の總司令官たるオロフェルネースを召して、これにいひぬ、『全地の主なる大王かく言ふ、看よ、汝、わが前より出發し、その力に自信ある人々、約十二萬人の歩兵と、一萬二千の馬と騎兵を率ゐて、西國全部に對ひて出軍すべし。そは彼等わが口の言に反き

たればなり。汝彼等に地と水とを備へよと命ずべし。われ怒りて彼等に對ひ行き、わが軍勢の足にてその地の全面を蹂み躙り、これを彼等の掠奪に任かすべし。その殺さる者はその谷と溪流を滿たし、河は汎濫する程に死者をもて滿たさるべし。われ彼等を捕へて俘虜となりし地の端にまで伴れ行くべし。されど汝は行きて、わがために前以てその全沿岸を占領せよ。もし彼等汝に降參しなば、わがために、彼等の貢罰の日まで彼等を圍ひ置け。されど不從順なる者をば、これを見逃がす勿れ。汝彼等を殺さるゝままにし、そのすべての地を掠奪さるゝままにせよ。そはわれは活く、われわが王權によりてこれを言ふ。われわが手をもてこれをなさん。且つ汝は汝の主の命令の一つをも犯さず、わが汝に命ぜし如く、必ずこれを成し遂ぐべし。汝これに背く勿れ。』と。

オロフェルネースその主の前より出で行きて、すべての支配者、アッスリヤ軍のすべての將軍と士官等を呼び出したり。而して彼その主の命ぜし如く、戰爭のために選びし兵は凡そ十二萬人、及び騎射兵一萬二千人と數へられたり。彼これを整列せしめ、一大軍團として戰爭のために備へたり。彼なほ軍需品輸送用として甚だ多くの駱駝と騾馬を、糧食用として無數の羊、牡牛、山羊を、またすべての人のために莫大なる糧食、及び王の家より取り出したる甚だ多くの金銀を携へたり。而して彼とその全軍、ネブカデネザル王の先驅として、その兵車、騎兵、選拔せる歩兵をもて西方の地全面を蔽ひ盡さんとて、遠征の途に就きたり。かくて種々なる國民より成る大軍團蝗蟲の如くまた地の砂の如く、彼等と共に行けり。彼等はその數の多きが故に數へらるゝ能はざりき。

かくて彼等ニネヴェより三日行程進み、バイクテライトより上部キリキヤの左手に當る山近くに露營せり。而して彼そのすべての軍勢、歩兵、騎兵、及び兵車を携へて、其處より山地にすゝみ、プト及びルドを滅ぼし、ケライア人の地の南なる荒野に面したるラシスの子等及びイシマエルの子等の地を

悉く掠奪せり。かくて彼ユフラテース河を越え、メソポタミヤを過ぎ、アブローマの溪流に沿へる、高き町々を攻め落したり。而して彼キリキヤの境界線を攻め取りて、彼に對抗せし者を悉く殺し、南方に位しアラビヤに面せるヤフェトの境に進みぬ。彼またミデアンのすべての子等を包圍し、その天幕に火を放ち、その羊の欄を掠奪せり。かくてかれ麥刈の日にダマスコの平原に下りて、その畑に火を放ち、その羊群と牛群を悉く滅ぼし、その町々を掠奪し、その平原を荒廢に歸せしめ、そのすべての若者等を劍の刃にかけて殺せり。

されば彼に對する恐れと戰き、沿海のすべての住民、シドンとツロの人々、スルとオキナの住民、イェムナアンのすべての住民の上に臨みたり。またアゾートス及びアスケローンに住む人々も甚しく彼を恐れたり。

〔三〕かくて彼等、和睦の言をもて使者を彼等に遣はして言はしめけるは、『看よ、我等大王ネブカデネザルの僕どもは汝の前に平伏す。汝の眼によしと見ゆる如く我等になせ。看よ、我等の住居、我等のすべての麥畑、我等の羊、牛の群れ、我等の天幕に屬するすべての羊の欄は汝の前にあり。これ等を汝の心のまゝに用ゐよ。看よ、我等の町々、その中に住む人々も亦皆彼の僕なり。來りて、汝の眼によしと見る如くに彼等になせ。』と。人々オルフェルネースの許に來りて、これ等の言を用ゐて彼に申し出でたり。

而して彼とその軍勢海岸に下り、高き町々に哨兵を置き、條約締結のために彼等の中より人々を選出したり。彼等と彼等の周圍なるすべての國人、花冠と舞踏と鼓をもて彼を迎へたり。彼そのすべての境界線を取り毀ち、その並樹を切り倒したり。それすべての國人がネブカデネザルのみを禮拜し、すべての舌、すべての民族が彼を神と呼ばんがためなり。かくて彼ユダヤの大山脈にアイに近きエスドレーロンに下り、彼ガイバとスクトーンポリスの間に營を張りて全一ケ月その處に對するドタイアに

滞在せり。これその軍隊のすべての輸送物を集めんがためなりき。

〔四〕 茲にユダヤの地に住めるイスラエルの子等は、アッスリヤ王ネブカデネザルの總司令官なるオロフェルネースが國々になしたるすべてのこと、殊に如何なる方法にて彼等の宮々を掠奪し、これを全く毀ちたるかを聴けり。されば彼等、彼の前にいたく恐れ、エルサレムと彼等の神なる主の宮のために心を惱ましたり。そは彼等新しく俘はれの地より歸りて、すべてのユダヤの人々近頃共に集り、聖器と聖壇と聖堂は冒瀆後初めて聖別されたるのみなればなり。

彼等サマリヤの全沿岸、コーナ、バイトーローン、ベルメン、及びエリコに、またコーバとアイソーラ及びサレームの谷に人を遣はし、彼等自ら前以て高き山々のすべての頂きを占領し、その谷々に防備を施して、戦争の準備に糧食を貯へねばなり。その頃エルサレムに在りし大祭司ヨアキムは、ベツルア及びドータイムに近き平原の方なるエスドレーロンに面せるベトメスダイムの住民に書を送りて、山地の坂を占領するやう命じたり。そは其處はユダヤへの入口にして、多くも僅かに二人づつを通ほし得るほどに狭かりしかば、彼等の近づくを食ひ止むるに容易なりければなり。イスラエルの子等大祭司ヨアキム、及びエルサレムのすべての住民の會議が彼等に命ぜし如くなせり。

イスラエルのすべての人は大なる熱心を以て神に向ひて呼はり、大なる熱心を以てその心を謙遜にせり。彼等も、その妻も、その嬰兒も、その家畜も、すべての寄寓者、雇はれ人、金もて買はれたる奴隷も、皆腰に麻布を纏ひぬ。而してイスラエルのすべての男、女、小さき子供等、及びエルサレムの住民、宮の前に平伏し、その頭に灰を蒙り、麻布を主の御前に廣げ、麻布を聖壇の周圍に置きぬ。かくて彼等、その嬰兒等が餌食とせられず、

その妻等が分捕物とせられず、その嗣業の町々が滅亡に委ねられず、その宮の諸國民の喜ぶ冒瀆と侮蔑の的とならざらんがため、心を一にして熱心にイスラエルの神に呼はれり。而して主彼等の聲を聽き、その惱みを見そなはし給へり。ユダヤ全國及びエルサレムに於ては人々、全能の主の聖所の前にて多くの日の間斷食を續けたり。大祭司ヨアキム、主の御前に立てるすべての祭司、及び主に仕へたる人々、その腰の周りに麻布を纏ひ、間斷なき燔祭及び民の誓願と自由の供物を獻げたり。而して彼等その冠物の上に灰をかけ、彼いつまでもイスラエルの全家を見そなはし給はんがために、彼等の全力をもて主に呼はれり。

〔五〕

アッスリヤ軍の總司令官なるオロフェールネースは、イスラエルの子等が戰鬪準備をなして、山地の通路を塞ぎ高丘のすべての頂を固め、平原に防禦物を置きたることを聞きしかば、甚しく怒りて、モアブのすべての首長等、アンモンの大將等、及び沿海のすべての支配者等を呼び招き、彼等に曰ひぬ、『今我に告げよ、カナンの子等よ、山地に住むこの民は誰なるか、彼等の住む町々は何なるか、彼等の軍勢の數は何か、彼等の權力と能力は何にあるか、彼等が西部のすべての住民の如く、我に來り我を迎へんとはぜず、却つて我に背くは何故なるか。』と。

モアブのすべての子等の指導者なるアキオール彼に答へぬ、『わか主、汝の僕の口より一つの言を聽き給へ。汝の住む場所に近きこの民はカルデア人の子孫にして、此處に來る前にはメソポタミヤに漂泊せり。そは彼等カルデヤ人の地にあるこの民はその祖の神々に從ふことを欲せざりし故なり。彼等はその先祖の神々の前より捨てゝメソポタミヤに遁れ、多くの日の間その處にさすらへり。而して彼等の神

彼等に命じて、そのさすらひの場所を離れてカナンの地に行かしめければ、彼等その處に住みて金銀と甚しく多くの家畜とを殖やしたり。然るに飢饉カナンの全地を掩ひしかば彼等エジプトに下り行きて、その處に寄寓し、殖えて大群衆となり、何人もその民を數へ能はぬ程となる迄に到りぬ。こゞに於てエジプトの王彼等に對して起ち、巧みに彼等をあしらひて、彼等を低くし、彼等に瓦造りの勞働をなさしめて、彼等を奴隷となしたり。然るに彼等その神に呼はりければ、彼不治の惡疫をもてエジプトの全地を擊ち、エジプト人は遂に彼等をその見えざる所に追ひやりたり。神は紅海を彼等の前に乾し、彼等をシナイの道及びカデシ、バルネアに導きしかば、彼等は荒野のすべての住民を追ひ出したり。かくて彼等アモリ人の地に住み、その力をもてヘシボンのすべての民を滅ぼし、ヨルダンを渡りて山地全部を占領せり。而して彼等、その前にてカナン人、ペリジ人、エブス人、シケム人、及びすべてのギルガシ人を追ひ出して、永くその國に住みぬ。彼等その神の前に罪を犯さゞりし間は榮えたり。そは神、不義の彼等と共にあるを憎み給ひたればなり。されど彼等、彼の示し給へる道より離れし時、彼等は多くの戰に於て甚だしく打ち敗られ、已が屬せざる國に俘虜として伴れ行かれ、その神の宮は地に倒され、その町々は敵のために占領されたり。而して今彼等はその神に歸り、散らされたる國々より來りて、その聖所のあるエルサレムを占領せしが、その處は荒廢し居りしかば山地に居住せり。さてわが首長、わが主よ、もしこの民に誤あり、彼等その神の前に罪を犯さば、我等こゝに彼等の躓きありと判斷し、上り行きて彼等に打ち勝つべし。されどもしその國民に不法の行なくば、わが主、今は看過し給へ。彼等の主、彼等を守り、彼等の神彼等に味方し、ために我等全地の前に恥辱となるの虞あればなり。』と。

アキオールこれ等の言を語り終りし時、天幕を取り捲きて、その周圍にありしすべての民の間に囁き起れり。

而してオロフェルネースの大官等、沿海の地及びモアブに住む者ども、彼を殺すべしと主張せり。そは「彼等いひぬ」、『我等はイスラエルの子等を恐れざるべし。そは、看よ、こは何の權力もなく、軍隊を強くする能力もなき民なり。されば汝オロフェルネース閣下よ、今我等上り行かん。彼等は汝の全軍に飲まるべき餌食となるべし。』と。

〔六〕會議に參列せる人々の喧騒止みし時、アッスリヤ軍總司令官オロフェルネース、聯盟國のすべての民の前にて、アキオールとモアブのすべての子等に言ひぬ。

『アキオールよ、エフライムの被傭者よ、汝誰なればとて今日の如く、我等の間に豫言して、彼等の神が彼等を守るが故にイスラエルの人民と戰爭すべからずといふや。ネブカデネザルの他に何者か神あらんや。彼その軍勢を送りて彼等を地の面より滅ぼすべければ、彼等の神は彼等を救はざるべし。我等、彼の僕どもは、一人の人の如くに彼等を擊たん。彼等は我等の馬の力を支ふる能はざるべし。彼等をば我等燒き盡さん。彼等の山々は彼等の血に醉ひ、その平野は彼等の屍體をもて滿たされたず、必ず消え失すべしと。全地の主なるネブカデネザル王いひ給ふ。そは彼いひぬ、「わが語りし言は空しくならざるべし。」と。されど汝アキオール、汝の不法の日にこれ等の言を語りしアンモンの被傭者は、わがそれ等のエジプトより出で來りし民族に讐ゆるまでは、今日より決してわが顏を見ざるべし。その時、わが軍の劍と我に事へし者等の群團が汝の側を過ぎ、わが歸る時、汝はその殺されたる者どもの中に仆れ居らん。而してわが僕等汝を山地の國に携へ歸り、汝の坂の町々の一つに置かん。汝は彼等と共に滅ぼさるゝまでは滅びざるべし。汝もし已が心に彼等の捕はれざることを望むとも、汝の顏面を伏する勿れ。我これをいへり。我が言は、その一つだに地に落ちざるべし。』と。

オロフェルネース、その天幕に侍する者に命じて、アキオールをベツルアに伴ひ歸らしめ、イスラエルの子等の

手に彼を渡さしめたり。その僕等彼をとりて天幕の中より平野に伴れ出し、平野の國の眞中なるペツルアの下なる泉に來れり。その町の人々丘の上に彼等を見たる時、武器を取りて町を出で、彼等に對せんとて丘の頂に到りぬ。石投を用うる者は皆、それを持ちて上り來り、彼等に向ひて石を投げぬ。彼等密かに丘を下り、アキオールを縛りて投げ出し、これを丘の麓に殘して、その主の許に去り行けり。されどイスラエルの子等、その町より下り、彼の許に來りて彼を釋き、これをペツルアに歸らしめ、その町の有司等に彼を渡せり。その町の有司等はシメオン族なるミカの子オジアスとゴトニエールの子アブリス及びメルキエールの子カルミスなりき。彼等町のすべての長老等を呼び集めたるに、青年等も婦等も共にその會議に集れり。彼等アキオールをそのすべての民の眞中に立たしめたり。而してオジアス、その起りしことどもを彼に尋ねたるに、彼答へて、オロフェルネースの會議の決議と彼がアッスリヤの子等の首長等の前にて述べたるすべての言、及びオロフェルネースがイスラエルの家に向ひて語りしすべての大言を告げぬ。人々平伏して神を禮拜し、且つ叫びて言ひけるは、『あゝ天の神なる主よ、彼等の不遜を見給へ。わが民の卑しきを憐み、この日、汝のために聖別さるゝ者どもの顏を見そなはし給へ。』と。かくて彼等アキオールを慰め、甚しくかれを稱讃したり。而してオジアス彼を會議よりその家に伴ひ、長老等のために饗筵を開き、且つその夜、夜もすがらイスラエルの神に助けを乞ひぬ。

〔七〕 然るにその翌日オロフェルネースその全軍と、彼の聯盟に加はりしすべての民に令を下して、ベツルアの方にその營を移し、前以て山地の坂を占領し、イスラエルの子等に對して開戰すべしと命じたり。而して彼等の中、力ある人は皆その日の中に營を移したり。彼等の軍の總兵力は歩兵十七萬及び騎兵一萬二千にしてその外に軍需品と、彼等と共に徒歩にて進みし人々は、甚しく多數なりき。彼等はベツルアに近き谷間にて、泉の傍に

營を張りしが、彼等の廣がりは、トータイムよりベルテムまでの幅にて、ベツルアトるキアモーンに到るまでの長さに及びぬ。

然るにイスラエルの子等は、その大軍團を見し時、いたく憂へて、各々その隣人に言ひぬ、今これ等の人々全地の面を舐め盡さば、高き山々も諸々の谷も丘もその重さに堪へ得ざるべしと。而して各々の者その武器をとり、その物見櫓の上にて火を燃やし、その夜、夜もすがら止まりて見張りたり。

されど二日目にオロフェルネース、ベツルアに在りしイスラエルの子等の眼前に、そのすべての馬をつれ出し、彼等の町に到る坂を檢し、水源地を探りてこれを確め、その處に軍兵の哨線を張りて、已はその民の許に歸れり。

而してエサウの子等のすべての首長と、モアブの民のすべての指揮者、及び海岸の將軍等、彼の許に來りていひぬ、『我等の主、聽き給へ、汝の軍勢には破れあらさるべし。彼等の住む山々の頂に登るは容易ならざればなり。されば今、わが主よ、戰ひに加はる人々の戰ふが如くに、彼等に對して戰ふ勿れ。さらば汝の一人だに滅びざるべし。汝の營に止まりて汝の軍勢のすべての人を安全に保ち、汝の僕等をして山の麓に流れ出づる水源を占領せしめよ。そはベツルアのすべての住民はその處より彼等の水を得ればなり。渴きは彼等を殺し、彼等はその町を見棄てん。而して我等と我等の民は近き山の頂に登りて、その處に營を張り、一人も町の外に出でざるやうに監視すべし。而して彼等は、彼等も、その妻等も、その子等も飢渴に迫られて、劍彼等に向ひて來る前に、その住む街上に仆れ臥さん。かくて汝、彼等に惡をもて報ゆるを得ん。彼等背きて汝の顏を平和をもて迎へざればなり。』と。

彼等の言オロフェルネースの眼前とそのすべての僕等の眼前によしと見えければ、かれ彼等の語りしが如くな

さんと定めたり。かくてアンモンの子等の軍勢、アッスリヤの子等の水と水源とを占領せり。エサウの子等アンモンの子等と共に上りて、ドータイムに對する山地に營を列ね、南方と東方に、モクムルの溪流の上なるクスに近きエクレベールを越えて、人を送りぬ。而してその他のアッスリヤ軍は平原に營を列ね地の全面を蔽へり。彼等の天幕と軍需品は密集して、大なる群をなし、甚し き多數に達したり。

而してイスラエルの子等、その魂、力失せしかば、彼等の神なる主に呼はりぬ。そは彼等の敵悉く彼等を包圍して、その中より逃れ出づる道なかりしが故なり。アッスリヤの全軍、その歩兵、その兵車、及びその騎兵、三十四日の間、彼等を取り卷きて止まりたれば、ベツルアのすべての住民の水瓶皆空しくなりぬ。水溜空虚となりて、彼等一日にその欲するほどの水を有たず、彼等人々に計量に由りて飲ましめたり。若き子等は心を失ひ、婦等と青年等は渇きのために弱りはて、町の街上や、門の通路に仆れて、彼等の中にはもはや何の力もなかりき。さればすべての民、オジアスと町の有司等に對して共に集合し、青年等も婦等も子供等も皆高聲に叫びて、すべての長老等の前にいひぬ、『神汝等と我等の間の審判者となり給はん。そは汝等アッスリヤの子等と和睦せずして、我等に大なる惡をなしたればなり。今や我等何の援助をも持たず。却つて渇きと大なる滅びの故に彼等の前に仆れ臥すやう、神我等を彼等の手に賣り渡し給ひぬ。されば今彼等を汝等の許に招き、全市をオロフェルネースの民とその全軍に餌食として渡せ。そは彼等の分捕物となさるゝ方我等にとりて善ければなり。我等僕とせらるべし、されど我等の魂は生きん。且つ我等已が嬰兒等の我等の眼前にて死し、又我等の妻等と子等の弱りつゝ死するを見さるべし。我等、天と地、及び我等の罪と我等の先祖等の罪に從ひて我等を罰し給ふ我等の神、我等の先祖等

の主を、今日かれ我等のいひしが如くなし給はざるやう、汝等に對して證となす。』と。

かくて集會の中にて、すべての人々の一つとなれる大なる慟哭起れり。彼等聲高く主なる神に向ひて呼はりぬ。而してオジアス彼等にいひぬ、『兄弟達よ、心を勵ませ。我等なほ五日間堪え忍ばん。この日限の間に主なる我等の神、その憐みを我等を全く捨て給はざるべければなり。されどもしこれ等の日過ぐるも、なほ助け我等に來らずば、われ汝等の言の如くなさん。』と。かくてかれ、民を各々その天幕に散り歸らしめ、彼等は石垣と町の望樓に行きぬ。また彼婦等と子供等をばその家に歸らしめたり。彼等町の中にありて、意氣甚しく沮喪せり。

〔八〕その頃、イスラエルの子、サラミエルの子、ナタナエルの子、エリアブの子、アヒトブの子、ラファイムの子、オジェルの子、アナニアの子、エルキアの子、ギデオンの子、メラリの娘なるイウデト、これを聽きぬ。彼の夫はマナセとて、彼と同支族にしてまた親族のものたりしが、大麥の刈入の頃に死せり。かれ畑にて麥束を造る人々を監督しつゝありしに、暑熱その頭上に迫りて、遂に臥床の身となり、その町ベツルアに於て死せり。彼等ドータイムとバラモンの間にある野にその先祖等と共に彼を葬りぬ。かくてイウデトはその家にありて、三年四ケ月の間寡婦なりき。彼その家の屋根の上に己がために天幕を張り、麻布を腰に纏ひ、寡婦の喪服を身に著けぬ。彼その寡居の間、安息日前日と安息日、新月祭の前日と新月祭、及びイスラエルの家の祭日と喜びの日を除きては、毎日斷食をなしたり。而かも彼は善き顏を持ち、見るにいと美しかりき。且つその夫マナセ、金銀、僕婢、家畜、土地を彼に遺せり。彼はそれ等のものを以て暮らしぬ。而して何人も彼を惡口するものなかりき。そはかれ甚しく神を畏れたれば

なり。

彼、人々が、水の缺乏にて弱りはてしより有司に對して發せる惡言を聽けり。またイウヂト、オジアスが彼等に語りしすべての言、その彼等に誓ひて、五日後に到らば町をアッスリヤ人に渡すべしといへるを聽けり。かれ、已がすべての所有物を管理する侍女に遺はして、その町の長老なるオジアスとガブリス、及びカルミスを招きぬ。彼等彼の許に來りしかば、かれ彼等にいひぬ。『今汝等、我に聽け、ベツルアの民の有司等よ。汝等が今日この町の民の前に語りし言は正しからず。汝等は神と汝等との間にて宣言したる誓を立てゝ、これ等の日限の間に主汝等を助け給はずば、町を我等の敵に渡さんと約束せり。汝等誰なればとて今日神を試みて、人の子等の前に神の代理として立つや。今全能の主を試みば汝等は必ず何事をも知らざるに到らん。そは汝等は人の心の底を見る能はず、その考ふることを認むる能はざるに、いかでこれ等の物を造り給ひし神を探りてその心を知り、その目的を悟るを得んや。否、わが兄弟達よ、我等の主なる神を怒らしむる勿れ。そは彼これ等の五日の中に我等を助けんと欲し給はずとするも、その御心に適ふ時に我等を守り、若くは敵の面前にて我等を滅ぼすの力を持ち給ふなり。されど汝等、我等の神なる主の御心を保証する勿れ。そは神は人の如く、脅されず、人の子の如く約定によりて變へらるべきものにあらざればなり。されば我等彼より來る救ひを待ち望みて、我等を助け給はんことを彼に呼はるべし。もし御心ならばかれ我等の聲を聽き給はん。そはこの我等の代には、今日我等の間に支族としても、家族としても、また町としても、先きの日の如く、手にて造れる神々を禮拜する者、一人だになければなり。されば我等敵の前に甚しき大敗北をなせり。捕虜とせられ、我等敵の前に甚しき大敗北をなせり。されど我等は彼のほか他の神を知らざれば、我等は、彼の我等と我等の民族の何者をも辱しめ給はざらんことを望む。

そは若し我等かく取られなば、ユダヤ全國は地に坐し、我等の聖所は荒され、かれ我等の口よりその冒瀆を求め給ふべし。我等の兄弟等の殺戮と、その地の俘はれと、我等の嗣業の荒廢とを、かれ、我等の間にて、我等を捕ふる人々の前にて躓きとなり物笑ひとならん。そは我等の捕縛は恩惠に導かれず、我等の神なる主、却つてこれを恥辱に變へ給ふべければなり。されば今、兄弟等よ、我等、我等の兄弟等に模範を示さん。そは彼等の魂我等の上にかゝり、その聖所も、その家も、その聖壇も我等の上に置かれたればなり。且つ我等、我等の先祖になし給ひし如く我等を試み給ふ我等の神なる主に感謝を献げん。彼のアブラハムになし給ひしすべての事と、イサクを試み給ひしすべての事、及びスリヤのメソポタミヤにてその母の兄弟ラバンの羊を飼ひ居りし時、ヤコブに起りしすべての事を憶えよ。そは彼、その心を探らんがため彼等になし給はず、又我等に復讐をもなし給はざればなり。されど主はかれの御許に近づき來る人々を誡めんがためこれを鞭打ち給ふなり。』と。こゝに於てオジアス彼にいひぬ、『汝の語りしすべてのことは善心にて語りしなれば、何人も汝の言を打ち消さゝるべし。そはこれ汝の智慧の表はされたる最初の日にあらざればなり。汝の日の始めより、汝の心の傾向善かりければ、すべての人々汝の悟りを知れり。されど民は甚しく渇きて我等が彼等に語りし如くなすやう我等を強い、我等の破るべからざる誓を、我等の上に持ち來らしめたるなり。されば今、汝我等のために祈れ。そは汝は信心深き婦なれば、主我等に雨を降らして我等の水槽を滿たし、我等もはや弱らざるに到らん。』と。イウデト彼等にいひぬ。『我に聽け、われ我等の民族の子等の間後々の代までも語り傳へらるべき事をなさん。汝等今宵、門に立て。われわが侍女と共に行かん。而して汝等が町を我等の敵に渡すべしといひし日限の間に、主はわが手に由りてイスラエルに臨み給はん。されど汝等は

わがなすわざを尋ぬる勿れ。そはわれわがなす事の終るまでは、そを汝等に告げざるべければなり。』と。而してオジアスと有司等彼にいひけるは、『安全に行け。主なる神我等の敵に讐ひんがため、汝に先き立ち給はん。』と。かくて彼等天幕より歸りて、その屯所に行きぬ。

〔九〕 さて、イウデトはひれ伏して、その頭に灰を蒙り、その纏へる麻布を脱ぎたり。而してその時エルサレムの神の宮にてタベの香の献げらるゝ時なりければ、イウデト聲高く主に呼はりて言ひぬ、『わが父シメオンの神なる主よ。汝は彼の手に劍を與へ、彼の處女の帶を解きてこれを犯し、その腿を露出せしめてこれを辱しめ、その胎を汚してこれに恥を與へ、異國人に讐はしめ給へり。そはしかなすべからずと汝言ひ給ひしに、彼等それをなしたればなり。されば汝、彼等の有司等を殺さるゝまゝにし、欺かれたる彼女を辱めたる寢床をば血にて染め、その僕等をば主人等と共に、その主人等をば臺座の上にて擊ち給へり。而して汝、彼等の妻を餌食とし、彼等の娘を捕虜となし、その分捕物をば、汝に對する熱心をもて動かされ、彼等の血の汚辱を憎みて、汝に助けを呼び求めたりし汝の愛する子等に分け與へ給へり。神よ、あゝわが神よ、寡婦なる我に聽き給へ。汝はこれ等の事のみならず、これ等に先き立ち來りし事、またそれに續き來りし事を行ひ給へり。又汝は今在る事と、後に來らん事をもくろみ給ふに、汝のもくろみ給ふものは皆出で來るなり。然り、汝の定め、且つ言ひ給ひし事は、汝の御前に立てり。看よ、我等こゝにあり。そは汝のすべての道は備はり、汝の審判は豫め知らるればなり。看よ、アッスリヤ人はその力を增され、その馬と騎兵との故に喜び、その歩兵の力を光榮とせりされど彼等は汝が戰ひを破り給ふ主にて在ますを知らざるなり。主は汝の御名なり。彼等の力を汝の御力にて碎き、彼等の兵力を汝の御怒にて倒し給へり。彼等は楯と槍、弓と石投に信賴す。されど彼等は汝が戰ひを破り給ふ主にて在ますを知らざるなり。主は汝の御名なり。そは彼等は汝の聖所を瀆し、汝の榮光ある御名の止まる

幕屋を犯し、劍をもて汝の聖壇の角を斬り倒さんとすればなり。彼等の誇りを見、汝の御怒を彼等の頭上に降し給へ。寡婦なるわが手に　わが思ふ力を與へ給へ。わが脣の欺きをもてその僕をばその君と共に、その君をばその僕と共にあらず、又汝の御力は强者の中にあらずして、汝は惱める者の神にて在まし給ふ。汝は虐げらるゝ者の助け主、弱き者の支へ主、さすらひ人の守り主、望なき人々の救ひ主にて在まし給ふ。さなり、わが父の神、イスラエルの嗣業の神、天地の主、水の創造者、あらゆる被造物の王よ。わが祈禱を聽き給へ。わが言と欺きを、汝の契約と、シオンの頂と、汝の子等の所有の家に對して、殘虐をたくらむ彼等の傷となし、窄となし給へ。而してすべての國民と汝の民族をして、汝の神にて在ますこと、全能全力の神にて在まし、汝の他に何者もイスラエルの民を守るものなきことを知らしめ給へ。』

〔一〇〕彼イスラエルの神に呼ばることを止め、これ等の言を終りたる時、そのひれ伏したる所より起ちながら、その侍女を呼びて、彼が安息日及び祝日の居所とせる家に歸り、その纏へる麻布を取り外し、寡婦服を脫ぎ、水をもて全身を洗ひ、香り高き油を身に塗り、その頭髮を編みて髮飾りをつけ、その夫マナセの生きてありし時用ゐたりし喜びの衣服を身に著けたり。その足には雪駄を穿き、鎖と腕輪、指輪と耳輪、及びあらゆる飾りを身につけ、彼を見るすべての人々を欺かんと、大膽にその身に化粧せり。而して彼その侍女に葡萄酒の革壺と油の瓶を渡し、燒麥と無花果の菓子、及び純良のパンをもて嚢を滿たし、その凡ての器を包みてこれを彼に負はしめたり。かくて彼等ベツルアの町の門に行き、オジアスと町の長老、ガバリス及びカルミスのその側に立ち居るを見出しぬ。然るに彼等かの女を見し時、その顏變り、その形改まりてありしかば、その美しさに甚しく驚きて彼

にいひぬ、『わが先祖等の神汝に恩寵を垂れて、汝がイスラエルの子等のため、エルサレムの高められんがためになさんとする汝の目的を遂げさせ給はんことを。』と。かれ神を拜して、彼等にいひけるは、『わがために町の門を開くやう命せよ。われ汝等の我と共に語りし律を成し遂ぐるために行かんとす。』と。彼等彼のいひし如く、若者等に、彼のために開くべしと、命ぜしかば、彼等しかなせり。

かくてイウデト、その侍女と共に出で行きぬ。町の人々、彼が山を降り、谷を過ぎて、もはや見えざるまで、彼を見送りぬ。彼等谷間を眞直に歩み行きしかば、アッスリヤ人の見張人彼に出會ひぬ。彼等彼を捕へて、彼等の前より逃れ出でたる者ぞ、何處より來り、何處へ往かんとするか。』と。彼曰ひぬ、『われはヘブル人の娘にして、彼等の狀況を告げんがため、汝等の軍の總司令官オロフェルネースの面前に出でんとて來れるなり。われ彼に、何處より行きて山地の國を占領すべきか、その道を示さん。彼の兵の一人をも、一つの生命をも失はざらしめんがためなり。』と。人々彼の言を聽きつゝその顏を見し時、その美しさ彼等の眼にいと驚くばかりなりしかば、ひぬ、『汝は我等の主の面前に急ぎ下り來りしが故に、汝の生命を救へり。されば今彼の天幕に來れ。誰か我等の中より汝を案内すべし。されど汝彼の前に立つ時、汝の心に恐るゝことなく、汝の言に從ひて彼に述べよ。さらばかれ汝をよくあしらふべし。』と。かくて彼等已等の中より百人の兵を選抜して、彼とその侍女の護衛を命ぜしかば、彼等、二人をオロフェルネースの天幕に伴ひ行きぬ。

こゝに於てその全軍營を通じて會合起れり。かの女の來りしこと營の中に噂されたればなり。彼等がオロフェルネースに已のことを告ぐるまで、彼はその天幕の外に立ちたりしに、人々彼に來りて彼を取り捲きたり。彼等その美

しさに驚き、彼の故に由りてイスラエルの子等に驚きぬ。かくて各々その隣人にいひぬ、『誰か、かゝる婦人を有することの民を蔑むか。彼等の一人にても取り殘さるゝに良からず、そのまゝになし置かば、彼等は全地を欺き得べし。』と。かくてオロフェルネースの側近く侍する者及び彼のすべての僕等、行きてかの女をその天幕に伴ひ來りぬ。オロフェルネースは、紫と黄金、綠玉と寶石にて編まれたる天蓋もて蔽はれたる寢臺の上に休み居たり。彼等かの女のことを彼に告げしかば、彼出でて、銀のランプを先き立て、天幕の前の空地に到れり。然るにイウデトの彼とその僕等の前に來りし時、彼等皆その顔の美しさに驚きたり。而して彼ひれ伏して彼に敬禮せしかば、その僕等彼を扶け起したり。

〔一一〕オロフェルネース彼にいひけるは、『婦よ、安んぜよ、汝の心に恐れを懷く勿れ。そはわれ決して全地の王なるネブカデネザルに仕へんことを欲する者を害せざればなり。されば、山地に住む汝の民我を輕ぜざりしならば、我わが槍を彼等に對して揚げざりしならん。されど彼等は自らこれ等のことをなせり。されば今、何故汝彼等より逃れて我等に來りしかを我等に語れ。そは汝は已れを救はんがために來りたればなり。心を安んぜよ、今宵よりいつまでも汝は生きん。そは何人も汝を害はず、わが主ネブカデネザル王の僕等になすが如く、すべての者汝に良き取扱をなさん。』と。この時イウデト彼にいひぬ、『汝の僕の言を受け、彼の婢に汝の面前にて語らしめ給へ。われわが主に今宵一つの僞りをも述べざるべし。若し汝、汝の婢の言に從はゞ、神汝のなさんとすることを完全に遂げしめ給はん。わが主はその目的に失敗せざるべし。全地の王ネブカデネザルの生くるが如く、而して彼の力の生くるが如くーかれ汝をあらゆる生物の守護者として遣はし給ひたれば常に人々が汝によりて彼に仕ふるのみならず、野の獸も、家畜も、空の鳥も、汝の力に由りて、ネブカデネザルとその全家に向ひて生きん。そ

は我等、汝の智慧と、汝の魂の賢こきたくらみを聽けり。而して汝のみ全王國に於て勇氣あり、知識に秀で、驚くべき戰爭の伎倆を有すること全地に言ひ傳へらる。さてアキオールが汝の會議に於て語りしことについては、我等彼の言を聽けり。そはベツルアの人々彼を救ひ、かれ彼等に、汝の前にて語りしすべてのことを告げたればなり。されば、能はざる所なき主よ。彼の言を輕く見ず、それを眞として汝の心に留め給へ。そはベツルアの人々彼を救ひ、かれ彼等に、汝の前にて語りしすべてのことを告げたればその神に對して罪を犯すにあらされば、罰せらるゝことともなく、また劍彼等に勝たざるべければなり。されど今、わが主、敗られず、かつその目的を挫かるゝことなくして、死彼等の上に落ちんがため、彼等の罪彼等に打ち勝ちぬ。これを犯して惡を行ふ時は、いつにても彼等、神の怒りを招くなり。彼等の糧食少くなり、彼等の水皆乏しくなりたれば、彼等議りてその家畜に手をつけ、神がその律法に由り、彼等に食ふべからずと命じ給ひしすべてのものを食はんと決したり。また彼等その聖別して、エルサレムにて我等の神の御前に立つ祭司等のために貯へ置ける穀物の初穗、及び一什の葡萄酒と油をも用ゐんと心を定めたり。これ等のものは民の何人にても手だに觸るゝにふさはしからざるものなり。かくて彼等人をエルサレムに遣はして、議會の認可を受けしめんとせり。そは其處に住む者もこれをなしたればなり。されば誰か彼等に言を傳へ、彼等これをなさばとて、彼等その日の中に汝に渡されて滅びはつべし。さればわれ、汝の僕はすべてこれを知るが故に、彼等の面前より逃れ去りぬ。而して神われを汝と共にわざをなさんがために遣はし給へり。全地に渡りて、これを聽かん程のものは皆驚かさるべし。そは汝の僕は信心深くして、日夜、天の神に仕ふ。されば今、わが主よ、われ汝と共に止まらん。而して汝の僕は夜、谷に行きて、神に祈らん。かれわれに何時彼等その罪を犯したるかを告げ給はん。さらばわれ來りて汝に是を告げん。而して汝、その全軍を率ゐて進み行かば、彼等の中一人だに汝を却け得るものなかるべし。かく

てわれ、ユダヤの中を通りて、エルサレムに到るまで汝を導かん。而してその處に汝の座を据ゑ付くべければ、汝は彼等を、牧者なき羊の如くに追ひ廻さん。犬は汝の前にその口を開く能はさるべし。これ等の事はわが豫知に從ひて我に語られ、我に告げられ、而してわれ汝にこれを語らんがために遣はされたるなり。』

彼の言はオロフェルネース及びそのすべての僕等の眼によしと見えたり。彼等その智慧に驚きていひぬ、『顏の美しさより見るも、言の智慧より見るも、地の端より端に到るまで、かゝる婦はなし。』と。而してオロフェルネース彼にいひぬ、『神よく、わが手に落つべき民、わが主を輕んじたる者どもの間に滅びの來らん前に、汝を遣はし給へり。汝はその顏美しく、その言賢し。若し汝、汝の語りし如くなさば、汝の神はわが神となるべし。且つ汝はネブカデネザル王の家に住み、全地にその名を知らるゝに到らん。』と。

〔一一二〕而して彼、かの女を己が銀の器の置かれし所に伴れ來らしめ、己が食物を彼のために備へ、己が葡萄酒を彼に飲ましむべしと、彼等に命じたり。イウデト言ひぬ、『躓きの機會となる處あれば、われそれを食ふまじ。されどわが食物はわが自ら持ち來れるものに堪て造らるべし。』と。オロフェルネース彼にいひけるは、『汝の持ち來れるもの乏しくならん時、我等何處より得て、その同じ物を汝に與ふるを得んや。我等の間には汝の民一人も居らざるなり。』と。イウデト彼にいひけるは、『汝の僕は、主わが手に由りてなさんと定め給ひし事を行ひ給ふまでは、その持ち來れるものを費さゞるべし。』と。而してオロフェルネースの僕等彼を天幕に伴ひ來れり。彼眞夜中まで眠り、夜明の鐘の前に起き出で、オロフェルネースに使ひを送りて言はしめけるは、『わが主よ、今汝の婢が祈禱のために行くを許せと命じ給へ。』と。さればオロフェルネースその衞兵に、彼を止むる勿れと命じたり。かくて彼三日の間營に止まり、夜毎にベツルアの谷に到りて、陣營の中なる泉水にて

その身を洗ひ、あがりし時、イスラエルの神なる主に、その民の子等の高うせられんがため、その道を示し給へと求めたり。かれ潔まりて出で来り、その夕餉を取るまで、天幕の中に止まりぬ。

四日目に到りて、オロフェルネースその僕等のみのために饗筵を催し、その役人等をば一人もその筵に招かざりき。而して彼、その所有物を監理する宦官バゴーアスにいひけるは、『今行きて汝と共に在るこのヘブルの婦を説き、我等に来りて、我等と共に飲食せしめよ。そは看よ、もし我等かゝる婦を我等の友とせずして去らしめば、これ我等の顔にとりての恥辱なり。我等もし彼を近づかしめずば、彼、我等を嘲らん。』と。バゴーアス、オロフェルネースの前を出で、彼の許に来りていひぬ、『この美はしき乙女よ、恐るゝ勿れ、わが主の御前に譽れを得、葡萄酒を飲みて我等と共に楽み、今日、ネブカデネザルの家に侍するアッスリヤの子等の娘等のごとくなれば。』と。イウデト彼にいひけるは、『われ誰なればとてわが主に逆はんや。彼の眼の前に良しと見ゆることは、何にても速かになさん。これわが死する日までわが喜びたるべし。』と。かくて彼起ちあがり、その衣服と、婦の飾を悉く用ゐて身を装へり。その僕行きて、かの、日毎の用にとて、バゴーアスより受けたる羊毛を、オロフェルネースの向ひの座に敷きたり。イウデト入りて坐せしに、オロフェルネースの心彼のために蕩け、その魂動かされて、彼甚しくその同席を欲したり。かれかの女を見たる日より彼を欺く時を待ち居たりしなり。オロフェルネース彼にいひけるは、『飲みて我等と共に喜べ。』と。イウデト言ひぬ、『われ今飲まん、わが主よ、わが生命わが生れてよりのすべての日に勝りて、今日わが中に崇められるればなり。』と。彼その僕の備へしものを、彼の前にて、とりて飲食せり。オロフェルネース彼に由りて大に喜び、生れて以来、如何なる一日に飲みたるよりも甚しく多くの葡萄酒を飲みぬ。

〔一三〕

る人々を去らしめたり。彼等行きてその床に入れり。そはイウデトは一人天幕に殘され、オロフェルネースはその床の上に横はれり。而してイウデトその婢に、彼が日毎になすが如く、その寢室の外に立ちて、彼の來るを待つべしといひぬ。そは彼祈禱のために行くべければなりといひたるなり。彼バゴーアスにも同じ言を告げぬ。かくて大なるも、小なるも、すべてのもの皆彼の面前を出で行きて、一人だにその寢室に殘されざりき。イウデトかの床の側に立ちてその心に念じけるは、『全能の神なる主よ、今この時、エルサレムの高うせられんがため、わが手のなす業を見そなはし給へ。そは今は汝の嗣業を助くべきの時、我等に逆ひて起れる敵の滅びのため、わが企てしわざをなすべきの時至りたればなり。』と。かくて彼、オロフェルネースの頭のありし寢臺の欄干に到り、その處より彼の劍を取り、寢臺に近づき、彼の頭髪を捕へていひぬ、『我を強め給へ、今、この時、あゝ主なるイスラエルの神よ。』と。而して、彼その全力を以て二度、彼の首を擊ちしかば、その頭彼より取り去られ、その身體寢臺より轉び倒れて、柱より天蓋を落したり。暫くの後彼出で行きてオロフェルネースの首をその婢に渡しぬ。而して彼これをその糧食の嚢に入れ、彼等二人にて、常の慣はしに從ひ、共に祈りのために出で行きぬ。彼等その谷を取り圍める陣營を過ぎ、ベツルアの山に登りてその門に來りぬ。

かくてイウデト遠くより、その門の見張人等に言ひぬ、『開け、今門を開け。神我等と共に在ます。我等の神は、この日なし給ひしことによりて、今イスラエルの中にその御力を、敵に向ひてその强さを示し給へり。』と。その町の人々彼の聲を聽きし時、彼等急ぎてその町の門に下り行き、町の長老等を呼び集めたり。彼等皆、小なるも、

大なるも、共に走りぬ。そは彼の歸り來れるは思ひ設けぬことなればなり。彼等門を開きて彼等を迎へ、その周圍をとり捲きぬ。而して彼大聲に彼等にいひけるは、『神を讃めよ、彼を讃めよ、イスラエルの家よりその憐みを取り去り給はずして、今宵わが手に由りて我等の敵を滅ぼし給ひし神を讃めよ。』と。かくて彼、その嚢より彼の首を取り出し、これを示して彼等にいひぬ、『看よ、アッスリヤ軍の總司令官オロフェルネースの首を。看よ、彼が醉ひ臥したる天蓋を。主、一人の婦の手を以て彼を擊ち給へり。わが行きしわが道にてわれを守り給ひし主は生き給ふ。わが顏彼を欺きて死に到らしめたり。かれ我に對して罪を犯かさず、我を汚し辱しむることをせざりき。』と。而してすべての人々甚しく懼れ、その身を屈めて神を拜し、一つとなりていひぬ、『讃むべき哉、讃むべき哉、我等の神よ。汝は今日、汝の民のイスラエルの敵を空しくし給へり。』と。而してオジアス彼にいひぬ、『讃むべき哉、娘よ、至高き神の御前にて、汝は地上のあらゆる婦の上に汝を導きて我等の敵の首長の頭を擊たしめ給ひし、天地の創造者、我等の主なる神。そは汝の望みは、永へに神の御力を憶ゆる人々の心より離れざるべし。神これ等の事を絶えざる讃美として汝に歸し、諸々の善きものをもて汝に來り給ふ。そは汝われ等の民の苦難の故に汝の生命をも惜まず、我等の神の御前に眞直なる道を歩みつゝ我等の敗北に對して復讐したればなり。』と。而して『すべて人々、しかあれ、しかあれ。』といひぬ。

〔一四〕 イウデト彼等にいひけるは、『聽け、わが兄弟等よ、この首を取りて、これを汝の城壁の防禦臺の上に高くかゝげよ。夜明けて太陽地上に臨むや否や、汝等は各々武器をとり、汝の中の勇氣あるものはみな町を出でよ。而して汝等、彼等の上に隊長を立て、アッスリヤの子等の哨線に向ひ平原に下り行くばかりになして、下り行かずに居れ。これ等のもの、その甲冑を取りて陣營に至り、アッスリヤの軍勢の隊長等を起すべし。彼等共に走り

てオロフェルネースの天幕に到らんに、彼をその處に見出し得ざるべければ、恐れ彼等の上に臨み、彼等は汝等の面前より逃るべし。而して此時汝等イスラエルの全沿岸に住むものは皆彼等を追撃して、彼等の逃ぐるを仆すべし。されど汝等これ等のことをなす前にアンモン人アキオールをわが許に招け。イスラエルの家を輕蔑したる者、また彼が案内して而かもかく死に到らしめたる者を彼に見知らせんがためなり。』

彼等オジアスの家よりアキオールを呼び出したり。然るに彼來りて、民の集會の中にて一人の人の手に在るオロフェルネースの首を見し時、その面を伏せて喪心せり。されど彼等、彼を恢復せしめし時、彼イウデトの足許に平伏し、彼に敬禮して言ひぬ、『汝はユダのすべての天幕の中にて、又汝の名を聽きて惑ふすべての國にて、讃められん。今われにこれ等の日に汝のなしたるすべての事を語れ。』と。而してイウデト、民の眞中にて、彼に向ひ、その出で行きし時より彼等に語りし時までに、己れのなしたるすべての事を告げぬ。然るに彼語り終へし時に、人々大なる聲を擧げて叫び、彼等の町に喜びの響起りぬ。かくてアキオール、イスラエルの神のなし給ひしすべての事を見しかば、篤く神を信じてその陽皮に割禮を受け、イスラエルの家に加はりて今日に到れり。

朝となるや否や彼等オロフェルネースの首を石垣の上にかゝげ、各々その武器をとり、隊をなして山の坂に到れり。然るにアッスリヤの子等彼等を見し時、彼等其處此處にと彼等の指揮官等に使を送りぬ。而して彼等その將軍と參謀等、及びその各の上官に到り、彼等オロフェルネースの天幕に來りて、全軍の總督者なる彼にいひぬ、『起き給へ、我等の主よ。奴輩等全滅せられんとて、我等に對し戰ひを挑みて攻め下りたり。』と。バゴーアス行きて天幕の外の戸を叩きたり。そは彼イウデトと共に寢ねつゝありと想ひたればなり。されど何人も彼に答へざりしかば、彼それを開きて寢室に入り、彼の死して戸口に投げ出され、その首の彼より斬り取られ居るを見たり。

而して彼大聲を以て呼はり、嘆き、悲み、甚しく泣きて、その衣を裂きぬ。かくて彼イウデトの宿りたりし天幕に到りしに、彼を見ざりしかば、民に向ひて跳びあがり、大聲に叫びぬ、『奴輩等奸計を用ゐたり。ヘブル人の一人の婦ネブカデネザル王の家に恥を來たしたり。そは看よ、オロフェルネーズ地に仆れて、その首彼になし。』と。アッスリヤ軍の將校等この言を聽きし時、その衣を裂き、その魂いたく憂へたり。かくて陣營の中には泣き叫びと大なる喧騒起りぬ。

〔一五〕天幕にありし人々これを聽きし時、その起りしことを驚けり。而して恐れと慄き彼等の上に臨みしかば、何人ももはやその隣人の面前に止り得ず、同時に駈け出して、平原と山地のすべての路に逃れ、ベツルアの周圍なる山地に營を張りたる者どもゝまた逃れ去りぬ。その時イスラエルの子等、彼等の間にて軍人たりし者は悉く、彼等に向ひて突進したり。オジアスはバイトマスタイムとコーバイとコーラ、及びイスラエルの各沿岸に使を遣はして、そのなし遂げられたることゝ、彼等皆その敵を滅ぼさんがために突撃すべきことゝを告げぬ。イスラエルの子等これを聽きし時、一齊に彼等の上に迫り、コーバイに到るまで彼等を擊ちたり。然り、エルサレムの人々及びすべて山地の人々も同じく來れり。そは人々その敵の陣營にて起りしことを彼等に告げたればなり。ギリアデ及びガリラヤの人々も彼等の側面に突擊して大なる殺戮を行ひ、ダマスコとその境を過ぐるまで到れり。ベツルアに住へる殘りの人々はアッスリヤの陣營に突擊し、彼等を掠奪して甚しく豐かになれり。かくてイスラエルの人々殺戮より歸りて、殘りの物を得、山地及び平野の村々も町々も、多くの分捕物を得たり。甚しく大なる蓄へありければなり。

大祭司ヨアキム及びエルサレムに住へるイスラエルの子等の議員等、主がイスラエルに示し給へる善きことを

見、またイウデトを見て彼に挨拶せんとて來れり。然るに彼等彼の許に來りし時、彼等皆一つとなり、彼を讃めていひぬ、『汝はエルサレムの大なる光榮なり。汝はイスラエルの大なる喜びなり。汝は汝の手にてすべてこれ等のことをなせり。汝はイスラエルに善きことをなせり。神これに由りて喜び給ふ。全能の主と共に永遠に汝に讃まれあれ。』と。すべての民これに和して、しかあれと曰へり。

民三十日に亘りて陣營を掠奪したり。彼等オロフェルネースの天幕とその銀杯、その寢臺と器物及びそのすべての家具をイウデトに與へたり。彼それ等のものをとりて已が騾馬に乘せ、又荷車を準備してその上にこれを積みたり。

而してイスラエルのすべての婦等彼を見んとて共に走り出でて彼を讃め、彼のために彼等の間にて舞踊せり。彼その手に樹の枝をとりて、これを彼と共に在る婦等に與へぬ。而して彼等、彼も彼と共に在りしものも、皆橄欖の冠を造り、彼はすべての婦等を導きて、舞踊する人々の先頭に立ちて進みぬ。又すべてのイスラエルの男等は武裝し、冠をいただき、その口に歌うたひつゝ從へり。

〔一六〕而してイウデトはすべてのイスラエルの中にてこの感謝の歌を歌ひ出し、すべての民はこれに和して大聲にこの讃詠を歌ひぬ。イウデトいひぬ、

『わが神に向ひ鼓をもて初め、
わが主に向ひねうはちをもて歌ひ、
彼に向ひ詩と讃美をもて調べをなし、
彼を崇め、その御名を呼びまつれ。

主は戰ひを破り給ふ神なり。
その軍の中にて、その民の眞中にて、
彼は我を救ひ、我を迫害する者の手より出し給へり。
アッスリヤは山を出でて北より來りぬ。
かれ十萬の軍を率ゐて來り、その群團は急流を堰き止め、
その騎兵は丘を蔽ひぬ。
かれ揚言すらく、わが境土を燒き盡し、
劍をもてわが青年を殺し、
乳飲兒を地に投げつけ、
幼兒を鳥獸の餌食とし、
わが乙女を分捕物とせんと。
しかるに全能の主は彼等を一人の婦の手にて空しくし給へり。
彼等の力ある者は青年に由りて仆されず、
タイタンの子等彼を擊ちたるにあらず、
また高き巨人彼に臨みしにもあらざりき。
されどメラリの娘なるイウデト、その顏の美しさをもて彼を弱くしたるなり。
彼その寡婦服を脫ぎ、

## イ　ウ　デ　ト

イスラエルの惱めるを高めんがため、
その顏に油を塗り、
その髮に飾りつけ、
彼を欺かんとて薄き麻の衣を著けぬ。
その履物彼の眼を蕩かし、
その美しさ彼の魂を捕虜となし、
而して劍彼の首を刺し通せり。
ペルシヤ人はその勇氣に震へあがり、
メデヤ人はその膽力に戰きぬ。
その時わが卑しき者ども聲高く叫び、
わが弱きものども驚き恐れて蹲まり、
彼等その聲を揚げて逃げ廻りぬ。
乙女の子等彼等を刺し貫き、
背敎者の子等彼等を傷けぬ。
彼等はわが主の軍によりて敗れたるなり。
「あゝ主よ、汝は大にして榮光あり、
その力驚くべく、勝ち難し。
われ我神に向ひて新しき歌を歌はんかな。

汝のすべての被造物をして汝に仕へしめよ。
そは汝言ひ給へば、彼等造られ、汝その靈を送り給へば、彼等は建てられたり。
汝の御聲を拒む者一人だにあるなし。
山々は水のためにその基より動かされ、
岩は汝の御前に蠟の如く鎔けん。
されど汝は汝を畏るゝ者に對ひて憐みあり。
すべての犧牲も甘き香とするに足らず、
あらゆる肥えたる者も汝に献ぐる全き燔祭とするに足らず。
されど主を畏るゝ者は永へに大なり。
禍なる哉、わが民に逆ひて立つ國人等。
全能の主審判の日に彼等に讐ひ、
火と蟲をその肉體に加へ給はん。
かくて彼等は永久に泣き、苦まんとす」。」
さて彼等エルサレムに來りし時、彼等神を禮拜せり。人々潔められし時、その全き燔祭と自由の献物とを供へたり。而してイウデトは人々が彼に與へしオロフェルネースのすべての物を献げ、自ら彼の寢臺より取り來れる天蓋をも主への供物として捧げたり。
而して民はエルサレムにて、聖所の前にて、三月の間祝祭を續け、イウデトは彼等と共に止まりぬ。これ等の

日の後各々己が嗣業の地に歸り、イウデトもベツルアに到りてその財産にて暮し、その時代に、全國にて崇められたり。而して多くの人、かれを欲せしも、その夫マナセ死してその民に加はりし日より後、全生涯の間彼を知れる男一人もなかりき。而して彼益々大なるものとなりしが、その夫の家にて老年を過ぎて百五歳となり、その侍女に暇をやりぬ。彼ベツルアにて死し、人々彼をその夫マナセの洞窟に葬り、イスラエルの家彼のために七日間の喪を守りたり。彼死する前にその持物を、その夫マナセの近親のものと己が生家の近親のものに分ちぬ。イウデトの時代にも、その死後にも、かくイスラエルを驚かしたるもの一人もあらざりき。

# バールーク書

〔一一〕これ等は、ヘルキヤの子、アサデアの子、マアシアの子、ネーヲアの子、バールークが、カルデヤ人エルサレムを取りてこれに火を放ちたるより第五年のその月の七日に、バビロンにて記したる書の言なり。バールークこの書の言を、ユダの王ヨアキムの子エコニヤの耳と、この書を聽かんとて來れるすべての民の耳に、又力ある人々と王の子等の耳に、長老等の耳に、又小より大に到るすべての民、即ちバビド河のほとりに住めるすべての民の耳に告げぬ。彼等泣きて斷食し、主の御前に祈れり。彼等又各人の力に從ひて義捐金を集め、これをシヴの月の十日に、先きに宮より運び出されたる主の家の聖器、即ちユダの王、ヨシヤの子、セデキヤの造りたる銀の器を取りて、ユダの地に返へさんとせし時、サロームの子のヘルキヤの子なる祭司長ヨアキムと祭司たち、及びその時エルサレムに彼と共に在りしすべての人々に送れり。この後にバビロン王ネブカデネザル、エコニヤと君等、捕虜、力ある人々、及び土地の民をエルサレムよりバビロンにつれ去りたるなり。

彼等言ひぬ、看よ、我等汝等に金を送る。されば汝等この金をもて燔祭と罪祭、及び香を買ひて祭禮を調へ、これを我等の神なる主の聖壇に献ぐべし。而して汝等、バビロンの王ネブカデネザルの生命のために、又その子バルタサルの生命のために、彼等の日が地の上なる天の日の如くあらんことを祈れ。さらば主我等に力を與へ、我

等の眼を輝かし給はん。而して我等パビロン王ネブカデネザルの影の下に、又その子、
ん。我等多くの日の間彼等に仕へ、彼等の面前にて寵を受けん。我等のためにも我等の
我等の主なる神に對して罪を犯し、今日に到るまで主の御怒と御憤り我等より離れざる
の送るこの書を、祭りの日と聖會の日に、主の家に於てこれを讀み、而して懺悔すべし。
汝等いふべし。正義は我等の神なる主に屬す。されど顏の恥は、今日の如く我等ユダの人々に、エルサレム
住民に、又我等の王等に、我等の君等に、我等の祭司等に、我等の豫言者等に、我等の
罪を犯し、彼に背きて我等の神なる主の御聲に聽き從はず、主が我等の前に置き給ひし誡律に歩まざりき。主が
我等の先祖等をエジプトの地より導き出せし日よりこの日に到るまで、我等、われ等の
その御聲を聽かず、輕々しくこれをあしらひたり。されば、今日の如く我等の中に禍ひと呪ひ食ひ入りたるなり。
この呪は、主がその僕モーセが我等に、乳と蜜との流るゝ地を與へんとて、我等の先祖等をエジプトの地より導
き上りし日に、彼に命じて宣言せしめ給ひしものなり。されど我等は、我等の主なる神が我等に遣はし給へる豫
言者等のすべての言によりてその御聲に聽くことをせず、各々己が心の想像に歩み、あだし神々に仕へて、我等
の神なる主の御前に惡を行へり。〔二〕されば主、我等に對して、我等の君等に對し、又ユダ及びイスラエルの人々に對して、宣言し給ひしその御言をよし
我等の王等に對して、イスラエルを審く我等の判官等に對して、全天下に未だ曾て起りしことなき、かゝる禍を下し給へり。即ち我等各々己が子の肉を食ひ、又各々己が娘の肉を食はざるべからざる程
とし、我等の上に、モーセの律法に記せる所に從ひて、エルサレムに起りしが如き、全天下に未だ曾て起りしこ
なり。加之、かれ彼等を、我等の周圍なるすべての王國に隷屬せしめ、主が彼等を散らし給ひし處の地に於て、

すべての人々の間に、物笑となし、滅びとなし給へり。かく彼等投げ倒されて、高うせられず。
の神なる主の御聲に聽き從はずして、彼に對して罪を犯したればなり。正義は我等の神なる主に屬す。されど顏
の恥は、今日の如く、我等と我等の父等に對して宣言し給ひしこれ等の禍ひは我等の上に臨めり。
しかも我等は主に乞ひて、すべての人をその惡しき心の思ひより歸さんとはせざりき。されば主はその我等に命じ給ひしすべての業に於て正
をなし、これを我等の上に臨ましめ給へるなり。主はそ
然るに我等は主の御聲に聽かず、その我等の前に置き給へる誠に歩まんとせざりき。
されば今、あゝ主よ、力ある御手を以て、驚きのわざを以て、大なる能力を以て、
汝の民をエジプトの地より導き出し、今日の如く、自ら名を得給ひしイスラエルの神よ。我等不敬を行へり。我等汝のすべて
等罪を犯したり。我等は汝が我等を散らし給へる地に於て、異國人の間に殘されたる少數の者なればなり。主よ、我
り轉じ給へ。我等の祈禱、我等の願望をきこしめし給へ。汝のために我等を救ひ、我等を俘虜として伴ひ去れる彼等の眼前に於
て我等に恩寵を施し給へ。これイスラエルとその子孫が汝の御名に由りて呼ばるゝが故に、全地は汝が我等の神な
る主にて在ますことを知らんがためなり。主よ、汝の聖なる家より見下して、我等を思ひ給へ。主よ、汝の耳を
傾けて聽き給へ。汝の眼を開きて見給へ。その氣息を取り去られて墓にある死人は、主に向ひて榮光をも正義を
も歸する能はざればなり。されど主よ、屈み弱りて徐行する、いたく惱める魂と、衰へたる眼と、飢ゑたる魂と
は、汝に榮光と正義とを歸することを得ん。我等の祖等及び主等の正義の故に、汝
の御前に祈願を獻ぐるにはあらず。そは汝の僕なる豫言者に由りて語り給ひし如く、我等の上に御怒りと御憤り

を送り給へり。〔彼等いへり。〕主かく言ひ給ふ。汝の肩を低うしてバビロンの王に仕へ、わが汝の先祖等に與へし地に止まれ。されどもし汝主の御聲を聽きてバビロンの王に仕へずば、われユダの町々より、エルサレムの外より、樂みの聲と喜びの聲、新郎の聲と新婦の聲を斷たしむべし。而して地の全面は荒廢して住民なきに到らんと。されど我等は汝の御聲に聽き從ひてバビロンの王に仕へんとせざりき。されば汝は汝の豫言者に由りて語られたる、我等の王等の骨と我等の先祖等の骨は、その場所より取り去らるべしとの、汝の御言を善しとし給へり。而して視よ、彼等は晝は暑熱に、夜は霜に曝されて、大なる災の中に、飢饉により、劍により、惡疫によりて死せり。主の御名によりて呼ばれたる家をば、イスラエルの家とユダの家の惡の故に、今日の如く荒れはてしめ給へり。されど我等の神なる主よ、汝はそのすべての恩惠親切に從ひ、又そのすべての大なる哀に從ひて我等をあしらひ給へり。汝の僕モーセに由りて、汝がイスラエルの子等の前にて汝の律法を書き記せと彼に命じ給ひし日に、語り給ひしが如し。曰く、汝もしわが言を聽かずば、慥かにこの甚しき大群衆はわが彼等を散さんとする所の國々の中にて、小さきものに變へらるべし。そは我は、彼等の我に聽かざることを知る。こはうなじの頑き民なればなり。されど彼等その俘はれの地に於てこれを心に留めん。而して彼等、わが彼等の神なる主たることを知らん。われ彼等に、心と聽く耳を與ふべし。而して彼等その俘はれの地にて我を讃美し、わが名について考へん。かくて彼等その頑きうなじより又その惡しき行より歸らん。そは彼等、主の御前に罪を犯したればなり。而してわれ彼等を、わが彼等の先祖等に、アブラハムに、イサクに、ヤコブに誓ひし地に再び伴はん。而してわれ彼等を增すべければ、彼等決して減らさるべし。かくてわれ彼等の神として彼等と永遠の契約を結ばん。彼等わが民となるべし。われまたイスラエルの民をわが彼等に與へし地より移さるべし。

〔三〕 全能の主、イスラエルの神よ、苦難の魂、惱める靈、汝に向ひて呼はん。主よ、聽き給へ。汝は憐みの神にて在ましし給ふ。然り、我等に憐みを垂れ給へ。我等汝の御前に罪を犯したればなり。汝は永遠の玉座に坐し給ふ。されど我等は永遠に滅びん。全能の主、イスラエルの神よ。今、死せるイスラエル人と、彼等の神なる汝の御聲に聽かずして汝の御前に罪を犯したる彼等の子等の祈禱を聽き給へ。これ等の禍ひ我等の中に食ひ入りたるはこの罪のためなり。我等の先祖等の不義を思はず、今、この時、汝の御力と汝の御名とを思ひ給へ。そは汝は我等の神なる主なり。あゝ主よ、われ等汝を讃め奉らん。汝は我等に汝の畏れを我等の心に置き給へり。我等は孑はれの中にて汝の御名を呼ばせんとの御心にて、汝の先祖等のすべての不義を思ひ出したればなり。看よ、我等は今日なほ汝が、我等の神なる主より離れたる我等の先祖等のすべての不義に從ひて、恥とせられ、咀とせられ、又苦罰に處せられしめんとて、我等を散らし給へる所の、我等の孑はれの中にあり。

聽け、イスラエルよ、生命の誡律を。智慧を悟らんがために汝の耳を傾けよ。如何なればかくあるか、イスラエルよ、汝は汝の敵の地にあり、汝は異國にて老ひ行き、汝は死人と共に汚され、汝は墓に降り行く者と共に數へらるゝにあらずや。汝は智慧の泉を捨てたり。もし汝、神の道に歩みたらんには、汝は永へに平和の中に住むべかりしを。智慧何處にあるか、力何處にあるか、悟り何處にあるか、日と生命の長さ何處にあるかを學べ。これ汝、日と生命の長さ何處にあるか、眼の光と平和は何處にあるかを知らんがためなり。誰かその場所を見出せしぞ。誰かその寶庫に來りたるか。異國人の君等、地上の獸を支配するもの、何處にかある。空の鳥によりてその歡樂をとるもの、何處にかある。銀のため勞して心を盡し、際限なき慾をもてこれを獲んとする、金銀を蓄ふる者何處にかある。銀のため勞して心

を用ゐし人々も、そのわざ見えず、彼等消えて墓に降り行き、他の人々そのあとに來る。若き人々は光を見て地上に住みぬ。されど彼等は知識の道を知らざりき。又彼等はその小路をも悟らざりき。彼等の子等はそを捕へ得ず、彼等は遠くその道より離れ去るなり。これはカナンにても聽かれず、テマンにても見られず。〔地にある〕悟りを求むるアガルの子等も、メルラン及びテマンの商人等も、物語の記者等も、悟道の探索者も、これ等の中一人だに智慧の道を知れるものなく、又その小路をも憶ゆるものなし。イスラエルよ、神の家は如何に大なる哉。その所有の場所は如何に大なる哉。大にして終りなく、高くして計り難し。古へ有名なる巨人等生れ、その身長大きく、戰ひには熟練したりき。これ等のもの神を選ばざりしかば、かれ彼等に知識の道を與へ給はざりき。されば彼等滅びたり。彼等智慧を持たざりしかば、己が愚によりて滅びたるなり。誰か天に登りてこれを取り、雲よりこれを携へ降れる者ぞ、誰か海の彼方に行きてこれを見出し、精選の金を與ふれば、これを携へ來るか。一人だにその道を知るものなく、その小路を悟るものなし。されどすべての事を知るものはこれを知る。彼その悟をもてこれを見出しぬ。永へに地を備へ給ひし者、四足の獸をもてこれを滿たし給へり。彼は光を遣はし給ひしに、出で行きぬ。これを呼びしに、懼れをもてこれに從ひぬ。而して星はその見張りに輝きて喜びぬ。彼これを呼び給ひしに、彼等、われこゝにありといひて、その造主に向ひ喜びをもて輝きぬ。こはわが神なり、他の何ものも彼に較べては數ふるに足らざるなり。彼知識のすべての道を見出して、これをその僕ヤコブとその愛するイスラエルに與へ給へり。この智慧のちに地上に現はれ、人々と交りぬ。

〔四〕こは神の誡（いましめ）と永へに續く律法（おきて）の書にして、確くこれを握るものは生命に到るべけれど、これを離る者は死すべし。ヤコブよ、歸りてこれを握れ。この光の前にて、その輝きに歩め。汝の光榮を他の人に與へ、又汝に

益あるものを異國に與ふる勿れ。イスラエルよ、我等いかに幸福なるかな。そは神の喜び給ふものみな我等に知られたればなり。

心を安んぜよ、イスラエルの記念なるわが民。汝等は諸國に賣られたれど、滅亡には到らざりき。汝等は神の御怒りに觸れて敵に渡されしのみ。そは汝等犧牲を惡魔に献げて神に献げず、汝等の造主を憤らしめたり。汝等は汝等を導き上りし永遠の神を忘れ、汝等をはぐゝみしエルサレムを悲ましめたり。汝等の上に臨みし神の怒を見てエルサレムはいへり。聽け、シオンに住む汝等婦等よ、神我に大なる哀悼を臨ましめたり。そはわれ永遠者が彼等の上に來らしめたるわが息子等と娘等の俘はれを見たればなり。われ歡喜をもて彼等をはぐゝみたりしに、嘆きと悲みを以て送り出しぬ。寡婦にして多くの人に見捨てられたるわがために何人も喜ぶこと勿れ。わが子等の罪の故にわれ荒れ果つるまゝにされたり。そは彼等神の律法より背き、その教に心をとめず、神の誡の道に歩まず、又その正義の訓練の路をも踏まざりしが故なり。シオンの周圍に住む人々來りて、永遠者が彼等の上に來らし給ひしわが息子息女等の捕はれを記憶せよ。そは彼遠くより、老人を敬はず、幼兒を愛せず、恥を知らざる、あやしき言葉の民を、彼等の上に導き來り給へばなり。彼等は寡婦の愛せる息子等を運び去り、その息女等を奪ひ去りて、彼を一人殘せり。されどわれ、何によりて、汝等を助け得んか。これ等の禍ひを汝等の上に來らしめ給ひし彼、汝等をその敵の手より救ひ出し給ふべし。汝の道に行け、わが子等よ、汝の道に行け。われ荒れはつるまゝにて殘されたればなり。われ平和の衣を脱ぎて、わが嘆願の麻布を纏ひぬ。われ生きん限り永遠者に呼はらん。心を勵ませ、我子等よ、神に向ひて叫べ。彼汝等を敵の力と手より救ひ出し給はん。かれ汝を救ひ給はんことは、われ永遠者に信賴せり。喜悦は聖き者より我に來る。即ち憐愛は汝等の救主なる永遠者より速かに來らん

としつゝあるなり。われ嘆きと悲みもて汝等を送りたれど神は樂みと喜びをもて永へに汝等をわれに歸へし給ん。シオンの周圍に住む人々今汝等の俘はれを見し如く、彼等やがて、永遠者の大なる榮光と輝きをもて汝等に來る神よりの救ひを見るべし。わが子等よ、神より汝等に來りし御怒りを忍びて受けよ、汝の敵汝を迫害したればなり。されどやがて汝は彼の滅亡を見、彼等の首を踏み躙るべし。わがかよわき者等は荒れたる道を往けり、彼等は羊の群の如く敵につれ出されたり。心を勵ませ、わが子等よ、神に向ひて叫べ。そは汝等、此等の事を來らしめ給ひし彼に憶えらるべければなり。神よりさまよひ出でしは汝等の心によりしものなれば、いま歸りて更に十倍にも彼を求めよ。そはこれ等の禍ひを汝等の上に臨ましめ給ひし者は、汝等の救ひと共に永へへの喜びを再び汝等にもたらし給ふべし。安んぜよ、エルサレム、汝の名を呼びしもの、汝を慰め給はん。禍なる哉、汝の子等が奉仕苦役せし町。禍なる哉、汝の子等を受けたる町。そは汝の沒落を喜び、汝の荒廢を樂みしが如く、己が町も衰頽の故に悲まるべければなり。我その大なる群衆の高ぶりを取り去り、その誇りは嘆きに變るべし。火は永へに永遠者よりその上に降り、其處はいつまでも惡魔の住居とならん。あゝエルサレムよ、汝の東を望み、神より汝に來る喜びを看よ。看よ、汝の送り出せし汝の子等來る。彼等は共に、神の榮光を喜びつゝ、「聖き者の言にて、」東より西に來るたり。

〔五〕エルサレムよ、汝の喪と苦みの衣を脫ぎ、永へに、神よりの榮光の美はしきを身に纏ひ、汝の頭には永遠者の榮光の冠を戴け。そは神汝の輝きを天が下なるすべての地に示し給はん。汝の名は、神によりて、永へに、正義の平和また敬神の望み、「彼等を憶え給ひし神を喜びつゝ、「聖者の言にて」日の入る所より日の出づる所まで集められゝ汝の子等を

見よ。

彼等その敵につれ出され、徒歩にて汝の許より去りしが、神は彼等が玉座に上りしが如く、榮光もて高きに上らしめて汝に伴ひ來らん。そは神、イスラエルが神の榮光の中に安全に行き得んがため、もろ〳〵の高き山と永久の丘を低くし、谷を塡めて平地となさんと定め給ひたればなり。且つ林とすべての香ばしき樹は「神の命によりて」イスラエルを蔽へり。そは神、彼より來る憐愛と正義をもて、その榮光の中に、喜びを以てイスラエルを導き給ふべければなり。

# エレミヤの書簡

バビロン人の王によりバビロンへ囚はれて行かんとする者に、神に命ぜられし如く、彼等に證(あかし)せん爲め贈れるエレミヤの書の寫。

汝等が神の前に犯せる罪の故に、汝等はバビロン人の王ネブカデネザルのためにバビロン國へ囚はれて送らるべし。故に汝等バビロンに來らん時、汝等彼處に多年間長時期に亘り七代に至るまでも留まるべし、かくて後ち我かしこより穩かに汝等を連れ出だすべし。されど今汝等バビロンにて、人々の肩に擔はれ國民の畏るゝ金銀また木にて造れる神々を見るべし。この故に汝等心して如何なることありとも異人共の如く成るべからず、汝等多くの人その前後にこれを拜むを看るとも、その故にこれを畏る勿れ。汝等はたゞ心のうちにて、主よ我等は汝を拜むべきなり、と曰へ。そはわが天使汝等と倶に在り、我また自ら汝等の魂を護らん。彼等の舌は職人が研ぎたるもの、彼等また金と銀とをもて被せられど、眞物ならず、言(ものい)ふこと能はざるなり。恰も乙女が化粧を好むが如く、彼等は金もてその神の頭に冠を作り、また時には祭司等その神より金銀を取りて自らこれを用ひ、或は屋上の娼婦に與ふ。彼等は人に衣を被せるが如く、銀の神、金の神、木の神を作るなり。而かも此等の神々は紫の衣裝を纏へるも、已の鏽と蠹を止むること能はず。宮の塵埃その上に厚く積るが故に人は彼等の顏を拭ふ、已に對して逆ふ者を死せしむに處すること能はざるもの、恰もその國の判官たる如くに笏を持てり。彼また右(めて)手に劍を

持ち、また斧を持てり、されど戰爭と盜賊より自らを救ふ能はざるなり。これにて彼等の神々もまたかくのべし、故に畏るゝ勿れ。そは人の用ゆる土器の如く、これを破壞すれば何等の値なし、彼等もまた王に逆ふ者が閉如し。而してその宮の中に安置せらるゝや、その眼は內に來る者の足より起る塵にて充つ。門せられて死に付さるが如く、祭司もまた彼等が盜まれざるやう鎖と閂とにて宮の戶を閉すなり。ためよりも多く燈明を點ずるも、その神はこれを見ること能はざるなり。彼等は宮の梁の如く、地より出づる煙にてその面の黑くなるもこれを感ぜず、その體と頭に蝙蝠、燕、諸鳥きたりてとまり、猫もまた戲るなり。これによりても汝等彼等が神にあらざるを知るべし。故に畏る勿れ。これを美はしくせんために黃金を被せらるとも、その錆を拭ふ者あるに非ざれば彼等は自ら輝かず、否、彼等はその鑄らる時すら何事も感ぜざるなり。人は息もなき物を購ふに萬金を拂ふ。足なきが故に人の肩に擔がれてその無價値なるを示す。これに仕ふる者すら恥づるなり。そはもし彼等地に倒るるも自ら立つ能はず、或はこれを立つるものあるとも、彼等は自ら動く能はず、彼等一たび歪めば直ほる能はず。而してこれに獻じたる物は、祭司これを取りて死人に供するが如くこれが前に供物捧げらる。而かもこれに獻じたる物は、用ひ、その妻女またこれを醢にして貯藏し、決して貧民病者等に賑はすことなし。月經中の女また產蓐にあるものその奉物に觸れ、彼等は此等のことにより神にあらざるを知りて、畏る所なし。彼等如何で神と稱すべけんや。蓋し女人これらの金銀木製の神に肉を供ふなり。その宮には祭司等裂けたる衣を纏ひ、頭髮と鬚髯を剃りて頭に何物も戴かずして坐す。彼等は葬式の時になす如く、その神々の前に呻き叫ぶ。祭司は彼等の衣裝を取り、以てその妻子の衣を調製す。それらの事の善にあれ、また惡にあれ、彼等はこれに酬ゆる能はず、彼等は王を立つる

ことも廢することも爲すを得ず。また彼等は財寶金錢を與ふるを得ず、人彼等に誓ひて後これを破ることあるもこれを罰する能はず。死より人を救ふこと能はず、强き者の手より弱き者を助くること能はず。彼等は盲者の目を開くこと能はず、また惱める者を扶くること能はず。彼等は寡婦に憐みを施す能はず、また孤兒に何等の善きものをも與ふこと能はず。彼等は山より斫り出せる石の如く、此等木製の神はこれに金銀箔を置きたるもの、これに仕ふる者は呪はるべきものなり。されば人如何にして此等のものを神なりと思ひ又は言ふべけんや、カルデヤ人自らこれを侮辱するに非ずや。彼等啞にして言ふ能はざるを見るや、彼を連れ來りてベル神の名を叫ばしめ、恰もその領會し得る如くす。而かも彼等は自らこれを解せずして彼等を棄つ、これ彼等に領會なければなり。紐を締め、糠を燒きて薫物となし、路に坐す女また、もしその傍を通る者に引かれ、その男と臥ねたる時は、己の如くに男に思はれず、またその紐の切られざるを以て他の女を責む。彼等の爲す所みな僞りなり、如何で此等のものを神と思ひ、またかく呼ぶことを得んや。此等のものは木工と金工の作れるものにして、此等職人の欲するがまゝに製作するに外ならず。而してこれを作る者も永くは活きず、況んや彼等に作られたるものをや。かくて彼等は詐りと責めをその子孫に遺すなり。そは戰爭または疫病の來らん時、祭司等は互に相謀りて彼等と共に何處に匿るべきやを議す。然るに人は如何にして此等のものが神にあらずして、戰爭また疫病より彼等を救ふ能はざるものたるかを悟らざるか。彼等はたゞ木にて造り、金と銀を被せたるものに過ぎざるを見ば、此等は僞りなるを知るべし。彼等が神にあらず、人の手にて作り、神の御業一もこれにあらざることは、諸國諸王の目に瞭然たり。されば何人か彼等が神にあらざるを知らざる者あらん。そは彼等は國に王を立つること能はず、また人のために雨ふらすこと能はず、彼等は無能にして、自ら事を裁決き或は非理を正すこと能はず。彼等は天地の間に

漂ふ雲の如し。そは火もし木造にして或は金銀を被せたる神の宮につくことあらば、祭司は直ちに逃走すべく、彼等はあとに豆の如くに燒かるべし。且つ彼等は如何なる王にもまた敵にも對抗する能はず、然るに人如何にして彼等の神たるを考へ或は認むべけんや。此等木製にして金銀を被せたる神は盜賊の手を逃る能はざるなり。その被たる金銀また衣裝は强き者易くこれを取去るべし、而かも彼等自らは如何とも爲す能はず。故にかくの如き僞りの神たらんよりも、寧ろその男性を示し得る王たるに若かず、或はその持主の必要に應じて益ある家道具たるも尙ほ可なり、かくの如き僞りの神たらんよりも宮殿の木の柱たるもまた可なり。かくの如き安全に諸物を藏する家の戸たるも尙ほ可なり。これに反し、日月星辰は光り輝き、各自その分を盡くし て服從す。稻妻もその煌めくや、看て美はしく、風もまた等しく國々に吹く。神また雲に命に服す。上より遣されたる火もまた山と森を燒き盡せと命ぜられなばかくすべし。事を裁決し、或は人に善きことを爲し得ざる彼等を見て、そを神なりと考へまた言ふべからず。彼等が神にあらざるを見ては、これを畏るゝ勿れ。そは彼等は王を祝福し又は呪咀する能はず。彼等は諸國民間に天上に徵兆を示し、或は日の如く輝き、月の如く光ること能はず。獸物と雖彼等に優れり、そは彼等は隱蔽物の下に入りて自ら護ることを得るなり。彼等が神たるの理決してあることなし、故にこれを畏るゝ勿れ。そは恰も胡瓜畠の案山子の如く、此等木製金銀被の神は何の威しにもならざるなり。此等木製金銀被の神は果樹園の鼠李の如く、鳥來りてその上に停るなり。なほまた暗中に投棄せられたる死屍の如し。汝等その輝ける紫の衣の故に彼等を神と なすべからず。その衣は朽ち、後ちにはそれ等の神々も朽ちはて、遂には國中の誹り草と成るべし。

有せざる義人たるに若かず。また人に誹らるゝこともあらざるべし。

# マナセの祈禱

〔天に在ます〕全能の主よ、我等の列祖、アブラハム、イサク、ヤコブ、またその正しき裔の神よ。汝は天と地と及びその萬物を造り給ひ、汝の命令にて海を境限し、汝の怖るべき榮光ある御名によりて深淵を閉してこれを封じ給ひ、萬物は汝を恐れ汝の力を見て戰慄す、そは汝の榮光の威嚴は堪へ難く、汝の罪人に對する怒の脅威は耐ゆべからず。而かも汝の憐ある約束は限りなく計り難し、そは汝は最高き主にましまして大慈大悲あり、永く忍びて愛憐に富み給ひ、人の惡業のために悔ひ給ふによりて汝に罪を犯したる者に悔悛と赦免を約し給ひ、汝の多大の哀憐にて罪人の救はれんがためにその悔改を立てさせ給ひぬ〕故に、主よ、汝は正しき者の神に在しまし、汝に對して罪を犯さゞる正しき者アブラハム、イサク、ヤコブには悔改を要し給はざりき。されど罪人なる我には悔悛を索め給ふ、そはわが犯したる罪は海の砂よりも多ければなり。そはわが愆は增せり。主よ、わが愆は增加し、わが不義の增加せるがために我は仰ぎて天の高所を看るの値なき者なり。〔而して主よ、今われ正しく罰せられ當然受くべき苦痛を得たり、看よわれ俘囚に在り〕われ多くの鐵鎖に縛られて屈し、わが罪の故に頭を擡ぐることを得ず、我また一の憩をも得ず、そはわれ汝の怒を招き、汝の眼に惡しきことを爲せり。〔われ汝の聖旨を行はず、また汝の誡を守らず〕、われ忌むべきことを行ひ憎むべきことを增せり。

されど今や我わが心の膝を屈し、汝の恩寵のために懇願す。われ罪を犯せり、主よ、罪を犯せり、われ我が不義を認む。仰ぎ冀くは、主よ、我を赦し給へ。我を赦し給ふて、わが不義と共に我を亡ぼし給ふ勿れ。我に對する汝の忿を續けて我に惡を積み給ふこと勿れ。われ地の最低所に在る時に汝の判決を宣し給ふこと勿れ。汝は主よ、汝は悔改る者の神にましまし、我に汝の恩惠を示し給ふべし、そはわれ足らざる者なれど、汝は大なる慈愛によりて我を救ひ給ふべければなり。かくてわれ我生涯の終りまで限なく汝を讃揚へん、そは天の萬軍みな汝の讃美を歌ひ、榮光は世々久遠に汝のものなればなり。アーメーン。」

# アザリアの祈禱並に三童兒の詠歌

おくて彼等神を讃美し主を祝揚つゝ火の中を歩みけるが、アザリアその伴と立ちて下の如く禱れり。彼、火の中にて口を開き曰ひけるは、『頌榮むべきかな、主よ、汝は列祖たちの神に在しまして讃揚ふべく、汝の名は永久に頌榮すべし、そは汝は汝の爲し給へる總ての事に正しく、汝の御業は眞にして汝の路は正し。列祖たちの聖都エルサレムと我等の上に爲し給ひし總ての事に於て、汝は眞の裁決を行ひ給ひぬ。そは汝は眞理と正義に從ひて我等の罪の故に總て此等の事を來らせ給ひたり。我等は汝より離れて不義を行ひ罪を犯したり、我等は萬事に大罪を犯し、汝の誡を聞かずまたこれを守らず、我等の安全のために汝の命じ給ひしことを爲さゞりき。故に汝の我等に來らせ給ひしことまた汝の我等に爲し給ひし所は凡て眞の裁決を行ひ給ひしなり。かくて汝は我等を律法なき敵、最も忌むべき背神者の手に委ね、全世界にて最惡無道の王に付し給へり。而して我等今口を開くこと能はず、恥辱と非難は汝の僕と汝を拜む者に下りぬ。願くは汝の聖名のために永久に我等を交付し給ふ勿れ。汝が、その裔の天の星の如くまた濱邊の砂の如くに增殖しめんと約し給ひし、汝の愛し給ふアブラハム、汝の僕イサク、また汝の聖者イスラエルのために、汝の恩惠を全く我等より取り去り給ふこと勿れ。そは主よ、我等は全ての國民よりも卑しくせられ、我等の罪の故に今日全世界にて低くせられたり。今や君なく、豫言者なく、指導者なく、

燔祭なく、犠牲なく、奉献なく、薫物なく、汝に捧げ、また慈悲を見るべき所なし。されど願くは、
と砕けたる魂の我等を受けさせ給ふて、羔と若き牡牛の燔祭の如く、また肥へたる羊の一萬頭の如く
かくて今日我等の贄を汝の御前にあらしめ給ふて、願くは我等をして全く汝の御後に従はさせ給へ、
汝に信頼するを恥とせざるなり。而して今我等全心を以て汝に従ひ、汝を畏れ、汝の面を索む。願くは
しめ給ふことなく、汝の忍耐によりまた汝の大なる慈悲によりて我等に臨み給へ。主よ、汝の奇しき業
我等を救ひ、汝の御名に榮光を歸せしめ給へ。汝の僕等に害をなす者を罰し、彼等に恥あらしめ、
ひ、その權力を挫き、而して汝は全世界に唯一の榮光ある主たる神なることを彼等に知らしめ給へ。』

さる程に、彼等を入れたる王の僕等は尚ほ罷まず、石油と瀝青と麻稭と木片とを以て竈を焚き、その
も高く四十九尺に達し、外に擴がりて竈の圍にありしカルデヤ人を焼きたり。されど竈の中には主の天使降り來
りてアザリア及びその朋と共に在りて、竈の內より火焔を追ひ出し、その內部には露を含める風の嘯くが如く、
火は少しも彼等に觸れず、或は彼等を傷めまた煩はすことなかりき。

ここに於て三人異口同音に、竈の中にて神を讃美し頌榮し祝揚して曰へり。

祝ふべき哉、主よ、汝は列祖たちの神に在す。

いたく讃めまつり、世々たかく崇むべきなり。

祝ふべき哉、汝の榮光ある聖き御名。

いたく讃めまつり、世々たかく崇むべきなり。

祝ふべき哉、汝の榮光ある聖殿に在す汝。

アザリアの新禱並に三童兒の詠歌

祝ふべき哉、深淵に臨み、ケラブに坐し給ふ者。
祝ふべき哉、汝が王國の寶座に坐し給ふ汝。
祝ふべき哉、天の蒼穹にまします汝。
主の萬物よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
もろ〳〵の天よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
主の天使よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
蒼穹の上の水よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
日と月よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
主の萬軍よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
空の星よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
雨と露よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
諸の風よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
火と熱よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。

いたく歌ひ、世々たかく頌むべきなり。
いたく歌ひ、世々たかく頌むべきなり。
いたく讃めまつり、世々たかく崇むべきなり。
いたく歌ひ、世々たかく崇むべきなり。

夜と晝よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
明と暗よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
寒と暑よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
霜と雪よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
電と雲よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
地よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
山と丘よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
地に生ふるものみな、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
海と河よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
泉よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
鯨と水に游ぐものみな、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
空の鳥よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
野獣と家畜よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
人の子等、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
イスラエルよ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
主の祭司よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
主の僕よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。

アザリアの祈禱並に三童兒の詠歌

義人の靈魂よ、主を祝ひ、世々歌ひ崇めまつれ。
聖者(きよいじや)と謙遜者(へりくだるもの)よ、アナニヤとアザリアとミサエル、主を祝ひ、
主に感謝せよ、彼我等を陰府より救ひ、死の權力(ちから)より助け給ひ、
主を拜む者よ、神々の神を祝ひ世々歌ひ崇めまつれ。
その慈悲世々絶ゆることなければなり。

# スサンナ物語

昔時バビロンにヨアキムと云ふ者あり。彼スサンナと名くる、ケルキアの娘にして、容姿甚だ美はしく且つ主を畏るゝ女を娶りぬ。その父母もまた正しき人にて、モーセの律法に從ひて娘を育てたり。ヨアキムは富豪にして、その邸に好き庭あり。また ユダヤ人等彼の所に集まれり、そは彼凡て他の者よりも名ありければなり。この年民の長老中より二人の審判者を選びて審判者を立てぬ。即ち民を支配すべきものとせられたる年長のバビロンより惡事きたると主の曰ひ給ひしものこれなりき。此等の者は多くヨアキムの家に居り、訴訟をなす者みなこゝに來れり。さる程に、晝になりて民みな去り、スサンナは出でてその夫の庭園を散歩せしが、二人の長老は毎日内に入りまた散歩するその女を看て、遂にこれを戀愛するに至れり。彼等の心は邪路に入り、その眼を轉じて天を眺めず、また公正なる裁判をも忘れぬ。彼等はその戀の傷あるも、敢て互に己の苦悶を外に現はさず。そは彼等はその女を獲んと欲するの劣情を口外することを恥ぢたればなり。而かも彼等毎日女を看んとて機を窺へり。かくて一人のもの他に曰ひけるは、『我等各自宅に歸らん、そは食事時なればなり。』と。而して彼等出で行き、互に途に別れたる後ち、また直ちに前の所に歸り行きぬ。兩人互にその故を尋ねて、共にその劣情を告白し、茲に彼等共に彼女の獨り居るを見得るの時を約したり。かくて彼等好機の至るを待ちけるに、或日彼たゞ二人の

侍女を連れて前の如く入り來り、その日暑かりしが故に園内にて浴せんとしたり。この時他に在る者なく、たゞかの二人の長老たち物の蔭に隠れて窺ひ居たり。れ、而して園の門を締め置くべし、我浴せんとす。』侍女たちはその命ぜられたる如くし、園の門を締められたる物を得んとて、側門より出で行きしが、彼等は長老たちが隠れ居たるが故にこれを見ざりき。二人の侍女の去りし時、二人の長老立上り、彼のもとに走りよりて曰ひけるは、『看よ、庭園の門は閉じ、誰も我等を見る者なし。我等は汝に戀せり。故に我等に聽きて我等と寢ねよ。もし汝聽かずば、我等は汝に不利の證言をなし、汝は若き男と倶に在りて、そのため汝の侍女たちを他へ遣せりと曰はん。』と。スサンナ嘆息して曰ひけるは、『我は板挟となりぬ。我もしこを爲さば、これ死なり。もし爲さざれば汝等の手を免ること能はず。若かず、われ主の前に罪を犯さんよりも、寧ろこの事を爲さずして汝等の手に陷らんには。』と。かく曰ひて、スサンナ大聲に呼ばりければ、二人の長老も彼に對して叫び、その一人走りゆきて園の戸を開きぬ。家の從僕等庭園に人の叫を聞き、何事の主人に起りたるかを見んとて側門より走り入りぬ。されど長老たちその話をなせるを聞きて彼等は大に面目を失へり、そはスサンナに關して未だ曾てかくの如き風評あらざればなり。かくてその翌日人々彼が夫ヨアキムのもとに集りし時、二人の長老は必ずスサンナを死に處せんとの惡意を以て來り、人民の前にて曰ひけるは『ケルキヤの娘、ヨアキムの妻、スサンナを呼べ。』と。彼等かれを迎へ、彼はその父母と兒女及びその親族のものと共に來りぬ。スサンナは元來纖麗にして容貌美なり。而して今此等の惡人はその美貌に醉はんと欲して彼が覆面を除くを命じぬ、そは彼覆面し居たればなり。こゝに於てかの知人及び彼を見し者みな嘆きぬ。この時二人の長老は人々のうちに立あがり、その手を彼の頭上におけり。スサンナは涙を流しつゝ天を望めり、そは彼の心

は主に信頼すればなり。長老たち曰ひけるは、『我等園内を歩みけるに、この女二人の侍女と來り、て侍女たちを他に遣せり、その時彼處に隱れゐたる一人の若き男出でて彼にゆき、彼と寢ねたり、の一隅に在りしが、この惡事を見、其處に走り寄りぬ、能はざりき、そは彼我等よりも力強く、門を開きて跳び出でたればなり、されどこの女を捕へしが故に、かの若者の何人なるかを尋ねたれど、この女は我等にこれを告げざるなり、我等以上の事を證言す。』と。かくて會衆は證人が民の長老にして且つ判官なるの故に、その言ふ所を信じ、彼を死罪に宣告せり。その時スサンナ大聲に呼はり曰ひけるは、『久遠の神よ、汝は人の秘密を知り、また事の起らざる前にこれを知り給ふ。して僞りの證をなせるを知り給ふ、而して、看よ、われ死せざるべからざるも、我は決して是等の者が我に對し惡意を以て計りしかの如き事を爲さゞるなり。』と。而して主その聲を聞き給へり。この故に、彼處刑せられんとてひき行かる時、神ダニエルと名くる若き青年の聖き精神を喚起し給ひぬ。彼大聲に叫びて曰ひけるは、『我はこの女の血より潔し。』と。その時人々みな顧みて彼に向ひ曰ひけるは、『汝の言ふこの事は何ぞや。』と。彼人々の中に立ちて曰ひけるは、『汝等イスラエルの子等、汝等は審問をなさず、また事の眞相を知らずして、イスラエルの女を罪す如くしかく愚かなりや、汝等再び審判所に歸れ、そは是等の者はこの女に對して僞證したればなり。』と。こゝに於て人々またく急ぎ歸り、長老たちも彼に曰ひけるは、『來りて我等と倶に坐れ、而して神汝に長老の名譽を授け給ひしを見たれば、我等にこの事を示すべし。』と。ダニエル彼等に曰ひけるは、『證人等を互に離隔せよ、而して我彼等を吟味せん。』と。かくて彼等の離隔されたる時、彼一人に曰ひけるは、『汝は惡事に年を經、汝が前に犯したる罪業今汝に來り、不正の裁決を宣して罪なき者を罰し、罪ある者を逃れしむ、されど主曰ひ給ふ、「罪なき者と義しき者とを殺すなかれ」と。

き者と正しき者は汝これを殺すべからず。」と。さればもし汝かの女を見たるは何れの木の下なりしや。』と。その人答へけるは、『乳香樹の下なり。』と。ダニエル曰ひけるは、『汝は正さに汝の頭に對して僞れり、そは神の使現に今神の宣告を受けて汝を二つに切らん。』と。かくて彼を他にやり、他の一人に命じ來らしめて曰ひけるは、『汝カナンの子にしてユダの子ならざるもの、美貌汝を欺き劣情汝の心を邪まにせり、汝もしイスラエルの女に交渉したらんには、彼等或は恐れて汝に從ひしならんも、ユダの女は汝の惡業を認容せざるなり。されば汝いま我に告げよ、汝は何れの木の下にて彼等の倶なるを捕へたりや。』と。その人答へけるは、『櫸の樹の下なり。』と。ダニエル彼に曰ひけるは、『汝もまた正さに汝の頭に對して僞りを言へり、そは神の使汝を亡さんがために汝を二つに切らんとて劍を撫して待てり。』と。こゝに於て集會のもの皆大聲に呼はり、望を神におく者を救ひ給へる神を祝したり。彼等は、ダニエルが二人の長老自らの口にてその僞證罪を決せしめたるにより、彼等に對して立ちあがり、モーセの律法に從ひて、悪意を以てその隣人に對し事を企てたる者に相當する條項を適用し、彼等を死刑に處し、無辜の血は同時に救はれぬ。ベルキアとその妻は彼等の娘スサンナのために、彼の夫ヨアキム及び凡ての親族と共に神を讃揚せり、そは彼女に何等の不義もなかりしが故なり。而してダニエルはその日より人々の前に大なる名をなしぬ。

# ベルと龍

アスツアゲスその列祖たちに加へられて、ペルシヤ人クロスその國を襲ぎ、ダニエルは國王と倶に在りて、すべてその友よりも高くあがめられぬ。時に、バビロニヤ人間にベルと呼ばれたる偶像ありて、毎日小麥粉十二斗と羊四十頭と酒六樽を供へられたり。國王もこれを崇めて毎日參詣せしが、ダニエルは己の神を拜みぬ。國王彼に曰ひけるは、『汝何故にベルを拜まざるや。』と。彼曰、『我は天地を造りて凡て肉あるものを治め給ふ活ける神なりと思はざるや、汝は毎日彼が如何に多大に飲食するかを見ざるや。』と。王彼に曰ひけるは、『王よ、欺かれ給ふ勿れ、このもの内部は粘土にして外部は眞鍮に過ぎず、決して如何なるものをも飲食せざるなり。』と。ここに於て、王怒り、その祭司等を召し、彼等に曰ひけるは、『汝等何人が此等のものを啖ふかを白狀せざれば汝等を死に處すべし、されどもし果してベルがこれを啖ふことを我に示し得ば、ダニエルを死に處せん、そは彼ベルを冒瀆したればなり。』と。ダニエル王に曰ひけるは、『汝の曰ひ給ふ如くす可し。』と。ベルの祭司は、その妻子を除き、七十人あるなり。而して國王はダニエルを伴ひてベルの社に行けり。ベルの祭司曰ひけるは、『看よ、我等出で行かん、而して王よ、汝肉を供へ、酒を混ぜてこれを捧げ、堅く戸を締めて汝の印を以てこれを封ぜらるべし、かくて汝明朝來りて、

もしベルが凡てこれを食し給はざりしを見ば、我等死刑を受くべし、然らざれば、我等に僞を曰ひしダニエル死すべし。』と。而して彼等少しも恐るゝ色なかりき、そは彼等は卓の下に秘かなる入口を作り居り、常にそれより出入してそれ等の供物を盜み居たるなり。かくて彼等の去りたる後ち、王はベルの前に肉を供へたり。さる程にダニエル、僕に命じて灰を持ち來らしめ、たゞ王のみ居る所にて、殿中にこれを散布し、然る後ち出でて戸を閉じ、王の印を以てこれに封し、而して去れり。夜になりて、祭司等その妻子と共に、彼等が常になせし如く入りきぬ。王曰ひけるは、『ダニエルよ、封印は完きや。』と。彼曰ふ、『然り、王よ、封印は完し。』と。彼戸を開くや、王は直ちに神卓の上を眺め、大聲に叫びて曰ふ、『偉なるかな、ベル、汝に何の詐りはなし。』と。ダニエル哄ひ、内に入らざるやう王を遏めて曰ふ、『われ男女小兒の足跡を看る。』と。かくて王大に怒り、祭司等とその妻子を引出し、彼等はその入りて卓上の物を食ひたる秘密戸を示せしかば、王は遂に彼等を殺し、ベルをダニエルの手に交付しぬ。こゝに於てダニエルはベルとその社を破壞したり。

こゝにまた同じ所に一匹の龍ありて、バビロンの人々これを拜みぬ。王ダニエルに曰ひけるは、『汝はこれもまた眞鍮なりと言ふや、看よ、彼は活きて飲み食ひす、汝これは活ける神にあらずと言ふを得ざるべし、故に汝かれを拜せよ。』と。ダニエル曰ひけるは、『我はたゞ我神なる主を拜まん、そは彼は活ける神なればなり、されど王よ、汝我に許し給へばわれ劍または棒を用ひずしてこの龍を殺すべし。』と。王の曰ふ、『我これを許す。』と。こゝ

に於てダニエル青瀝と脂と毛髪とをとり、混じて湯にてこれを煮、以て團子を作り、これを龍の口に入れしが、龍これを食して破裂したり。ダニエル王に曰ひけるは、『汝等の拜む神々はみなかくの如し。』と。バビロンの民これを聞しとき大に憤り、王に反してこれに語りて曰ひけるは、『王は猶太教徒になり、ベル神を引き下ろし、龍を屠り、また劍にて祭司等を殺せり。』と。かくて彼等王のもとに來りて曰ひけるは、『我等にダニエルを付せよ、然らされば我等汝と汝の家を亡ぼさん。』と。王は彼等が甚く逼るを見て、已むなくダニエルを彼等に付せしが、彼等彼を獅子の穴に投げ入れ、彼は其處に六日ありき。穴には七頭の獅子ありて、毎日二個の死體と二頭の羊與へられしが、この時ダニエルを喰はしめんとて何も與へざりき。こゝに猶太人のうちにハバクークと云ふ豫言者あり。彼羹をつくり餅を割りて椀に入れ、將にこれを畑にて收穫に働ける者の所へ携へんとしけるが、その時主の天使ハバクークに曰ひけるは、『汝の持てるその飯をバビロンに携へ行き獅子の穴にあるダニエルのもとへ運べよ。』と。ハバクーク曰ひけるは、『主よ、我未だバビロンを見たることなし、我その穴の何處にあるやも知らざるなり。』と。こゝに於て、主の天使、頂もて彼を捕へ、その頭髪にて彼を揚げ、一吹氣にて彼をバビロンなる穴の邊に下ろせり。ハバクーク呼びて曰ひけるは、『ダニエルよ、ダニエルよ、神より汝に送り給ひし食事をとれ。』と。ダニエル曰ひけるは、『神よ、汝は我を憶え給ひ、また汝を愛する者を捨て給はざるなり。』と。かく曰ひて、ダニエル起きて食し、神の天使また直ちにハバクークを元の町へ歸しぬ。七日目にいたり、王ダニエルのために哭かんとて來りしに、かれ穴へ來り、その中を見しに、看よ、ダニエル其處に坐せり。王乃ち大聲に叫び曰ひけるは、『大なる哉、主よ、汝ダニエルの神、汝のほかに神あることなし。』と。かくて彼ダニエルを引き出し、而して定めさんと計りし者共を投げ入れたるに、獅子は直ちに王の目前にて彼等を喰ひつくせり。

# 以士帖書追加

## 一

アルタシャスタ大王治世の第二年、ニサンの朔（ついたち）、ベンヤミンの族にて、キシの子シメイの子ヤイルの子なる、モルデカイ一つの夢を見たり。彼は猶太人にしてスサの市に住し、國王の官廷に奉仕する偉なる者、バビロン王ネブカデネザルがユデヤ王エコニアとともにエルサレムより擄へゆきし俘囚のうちの者なりき。その見たる夢は下の如し、看よ、その音と騒ぎ、雷鳴と地震、地上の混亂を。而して看よ、二頭の大龍出で來りて鬪はんとし、その聲大なり。その聲に應じて各國民戰爭の準備をなし、正しき人の國に對して戰を挑まんとす。而して看よ、暗黒と悲哀の日、苦難と悶惱、悲痛と地上の大混亂を。凡て正しき人の國は難（なや）み、彼等を脅威する災禍を怖れ、滅亡の準備をなせり。彼等神に叫び而してその叫絶より、恰も小さき泉の如く大河出で、多くの水逆れり。その時、光明と日輪昇り、卑きは揚げられ、榮ある者を盡くせり。モルデカイはこの夢を見、神が爲さんと決し給へる所を認め、覺めて後ちこれをその心に秘して夜にいたるまで必ずこれを解し得んと力めたり。

モルデカイ、平常なす如く、宮廷を守る王の二人の侍從ビグタン及びテレシと共に宮廷にて休息せしが、かれ彼等の話を聞き、その相談を探りて、彼等がアルタシャスタ王に手を掛けんと備へつゝありしことを知り、その

事を王に告げぬ。王は二人の侍從を審問し、彼等白狀しければ、これを引き出して死刑に處せり。而して王此等の事を忘れざるやうに記錄にとゞめ、モルデカイもまた此等を記錄し置けり。かくて王モルデカイをして宮廷に奉仕せしめ、此等の事に報ゆる恩物を賜りぬ。さる程に、ブガイ人なるハンメダタの子ハマンは王の前に尊ばれ、王の二人の侍從の故にモルデカイとその同族に災を來らせんと機を窺ひぬ。

## 二

手紙の寫は下の如し、アルタシャスタ大王此等の事を、印度よりエチオピヤに至るまで一百二十有七州の侯伯及びその下にある知事たちに書き送る。われが多國民の主となり全世界を統治するに至れるは、敢て權力を偕せるにあらず、たゞ自ら持するに節制と溫和を以てしてこゝに至れるものなるが故に、我臣民永く平安に生活し、また我領土安泰にしてその邊境にいたるまで通路安全に、以て萬人の冀ふ平和を回復せんことを期す。されど如何にして我望を實現せらるべきやをわが顧問に質したるに、我等のうちにて智慧に優れ、且つその變らざる善意と堅き誠實とを認められてこの國の第二の地位に昇れるハマン、世界の總ての國々のうちに惡意を抱ける者若干散在し、法律によりて各國に反抗し、常にその國王の命を守らざるが故に、我等の正しく企圖する國の統一は容易に實現すべからざることを我等に示せり。故に、その法律に關して生活の異風を邪まに守り我政府に對して惡き障碍となるを以て、この國は斷へず單獨に全人類と對抗する如き位置にあることを悟り、こゝに我等は左の宣言をなすものなり、即ち、我等の國務を總統し、我等の第二の父たるハマンの書中に汝等に指示されたる者は、全てその妻子と共に、本年十二月即ちアダルの月の十四日、何等の慈悲も情(なさけ)もなくその敵の劍にて根も枝もみな亡ぼさるべきものなり。而して過去に於てまた現在害惡あるものは、一日にして猛烈に陰府に下り、我等の國は今後安

全にしてまた何等の脅威を受くることなきに至るべし。

## 三

モルデカイ主を崇め、主の御業を憶ひ起して曰ひけるは、『主よ、主よ、萬物を治め給ふ王よ、全世界は汝の權内にありて、汝は天と地と、天の下の全ての驚くべき物を造り給ひぬ。汝は萬物の主にして、主たる汝に反抗し得るものあることなし。汝はイスラエルを救はんとし給ふ時何者も汝に逆ふものなく、汝がイスラエルを救はんとし給ふ時何者も汝に逆ふものなく、汝は天と地と、天の下の全ての主よ、わがこの事を爲せしは、即ちわが高慢なるハマンに屈せざりしは、決して我倨傲若くは自尊若くは虚榮のためならざるを汝は知り給ふ。そは我イスラエルの救の爲には甘んじて彼の足の蹠をも接吻したればなり。されどわれ人の榮光を神の榮光の上に置かざらんためにこれを爲せり、而して主よ、我は我主たる汝の前のほか何人の前にも頭を下げざるべし、而かもこれわが高慢なるが故にあらず。仰ぎ冀くは主よ、神にして王、アブラハムの神よ、汝の民を救し給へ、そは我敵の眼、我等を亡ぼさんとして我等に向けられ、彼等は世の太初より汝のものなる産業を亡ぼさんとす。汝自ら埃及の地より救出し給ひし汝の分を賤め給ふことなかれ。願くは我禱を聽き、汝の産業に恩惠を下し給ふて、我等の悲哀を歡樂に變へ、我等活きて汝の御名を歌ふことを得せしめ給へ。願くは汝を讃美する者の口を亡ぼし給ふこと勿れ。』と。かくて全イスラエル力をこめて叫絕せり、そは彼等の死その眼前に迫り居たればなり。

死の怒に捕へられたる王后エステルは祈禱に於て主に逃れたり。彼輝ける衣裝を脱ぎ去り、苦悶と悲哀の衣を著け、良き香油に代ゆるに、その頭には灰と糞を以てし、その體は斷食を以て賤しくし、その喜悦の飾の箇所はその縺れたる髮を以て充したり。かれ主たるイスラエルの神を索めて曰ひけるは、『我主、我等の王よ、汝唯一

の神に在ます。たゞ一人立ちて汝のほかに援助者なき我を助け給へ、そは我危險近ければなり。われに生れてより、主たる汝は永久の嗣業のために凡ての國よりイスラエルを選出し、我等の列祖たちをその祖先より採り給ひ、また總て汝の約し給ひし事を彼等のために爲し給へるを聞けり。然るに我等いま汝の前に罪を犯し、彼等の神々に榮を歸したるが故に、汝は我等を敵の手に付し給ひぬ。主よ、汝は正し。而して今彼等は我等が傷たるその苦痛を以て滿足せず、彼等はその偶像と手を打ちあひて、汝が口の命を捨て、汝が嗣業を亡ぼし、汝を讃揚するものゝ口を緘し、汝の家と汝の祭壇の榮光を消し、無益なる偶像を讃美すべく國民の口を開かしめ、また肉の國王を世々崇めしめたり。主よ、願くは汝の主權を神ならざるものに與へ、また我等の敵をして我等の墜落を嘲笑はしめ給ふことなく、その計謀を彼等自らに向けしめ、我等にこの事を爲し初めたる彼を殷鑑となし給へ。主よ我等を憶え給ふて、患難の日に自らを我等に示し給へ、神々の王にして萬國を治め給ふ主よ、我に勇氣を授け給へ。獅子の前にて我口の辯を爽かならしめ給へ、その心をして彼等に對して戰ふ彼を憎ましめ、今より彼また彼者なからしめ給へ。されど願くは主よ、汝の御手にて我等を救ひ、汝のほかに何をも有たず唯獨り立つ我等を扶け給へ。汝は全てのことを知り給ふ、汝はわが必要を知り給ふ、即ち公けに自らを現はす時に我頭に戴く誇りの階級を示すものを嫌ふことを知り給ふ。我はこれを月經の布片の如くに嫌ひ、我閑居の日には決してこれを戴かざるたり。汝の婢はハマンの卓にて食せず、また王の宴に出でず、祭奠の神酒を飲みたることなし。アブラハムの神なる主よ、汝の婢は、此處に來りてより今日に至るまで、汝に奉仕ふるほか、何等の樂みをも知らざるなり。神よ、汝の力は萬物の上に在り、願くは望なき者の聲を聞き給ふて、我等を無道に遇するものの手より救ひ、我を我恐怖より救出し給はらんことを。』

かれ禱り終りて後ち三日目に、その白遜の衣を脱ぎて華美なる衣裝を纏ひ、威嚴に充てる裝束にて、萬事を視たまふ神なる救主（すくひぬし）に呼び求め、尚ほその侍女二人を連れたり。彼は一人の侍女にもたれて嫋かに歩を運び、他の一人は裾を捧げてその後に從へり。彼遺憾なくその美貌を發揮し、その顏色爽快にまた愛嬌にみてり、されどそ の心は恐怖に擊たれ居れり。かれ諸門を過ぎ行きて、遂に王の前に立ちぬ。この時王は、黄金と寶石にて飾れる威めしき裝束にて玉座に在りき。彼また甚だ怕るべきなり。彼榮光に輝ける面をあげ、恐るべき忿怒を以て眺めぬ。王后倒（さきき）れ、顏色を變へ、失心せり。かれその前に進める侍女の首に倚りかゝれり。この時神王の心を和らげ給ひければ、彼駭き玉座より立ちあがり、手づから后を抱きあげ、その回復するに迨び、優さしき言葉にてこれを慰めて曰ひけるは、『エステルよ、如何にせしぞ、我は汝の兄なり、心安くせよ、汝は死せざるべし、そは我勅令は たゞ臣民に關するのみ。近く寄れ。』と。かくて彼その金圭を后の頸にあて、かれを抱きて、『我に語れ。』と曰ひぬ。后彼に曰ひけるは、『我主よ、我汝を見て神の天使と思ひ、我心は汝の榮光を怖れて驚倒せり、主よ、汝は實に驚くべく、汝の相貌は美德に輝けり。』と。されど彼はかく語りつゝも失神して倒れければ、王は大に憂ひ、從者みな后を慰めんと努めたり。

## 五

この詔書の寫は下の如し。アルタシャスタ大王、印度よりエチオピヤに至る一百二十七州にある國々の方伯（つかさ）及び我政治に感化せる者に安（やすき）を問ふ。多くの者、その恩人の過大の好意により て屢々尊敬を受くるに從ひ益々傲り、啻に我臣民を害せんと計るのみならず、與へられたる多大のものに耐へ得ずして遂にその恩に叛きて謀をめぐら

すに至る。且つ曾に人の謝恩の念を奪ふのみならず、愚かなる虚榮心に驅られて、萬事を見給ふ神の惡事を憎み給ふその正義を逃れ得べしと思へり。然り、最高權威の地位に昇りたる多くの者は屢々行政を委ねられたるそれ等の友の好辭に動かされて無辜の血に與らんとし、挽回すべからざる不祥事に關與するに至る、而も彼等は何等知る所なきその主人の善意を以て自己の猛惡なる策略に利用するなり。而してその不當の權力を惡用する者の毒惡によりて惹起せる事件は、古來傳へられたる昔時の記錄を閲せんよりも、寧ろ現代の事を看て明かなり。必ず將來のために注意して人の報告によらず、目前に示されたる證據を丁寧親切に審査して判斷し、以て萬民のために安穩安泰を來さゞるべからず。

蓋し、マケドニヤ人なるハンメダタの子ハマン（ペルシヤ人の血統なる眞の外人にして遠く我等の寵愛を離たる者）は、我等のうちに客たりしが、我等が各國民に對する好意にあづかりて我等の父と呼ばれ、王位に亞ぐ第二者たるの總ての尊敬を受け居たり。然るに彼、その高き地位を忘れ、我等の國を奪はんと謀り、曾に曾て我等を救ひ我等に恩を與へたるモデルカイの命を取らんと企てたるのみならず、また我王國の少しも罪なき共享者エステル並に彼等の同民族を全部多くの詭計と欺瞞を弄して滅亡に導かんとせり。そは彼かくの如くして我等を孤立せしめ、以てこの國をペルシヤ人の手より マケドニヤ人の手に移し得べしと信じたり。されどこの三色惡漢が亡ぼさんとしたる猶太人は少しも惡心あるものに非ずして、最も正しき法律を守り、我等と我等の祖先のためにこの國に優秀なる統治を與ふる最と高き最と力ある活ける神の子等なりとす。かるが故に汝等嚮きにハンメダタの子ハマンが送れる書簡を顧慮する勿れ、そは此等の事を起せる彼とその全家のものは既に殺されてスサの門に梟せられたり。そは萬事を支配し給ふ神は速かに彼の受くべき正義の酬を彼に下し給ひければなり。

以士帖書追加

故に今この書を各所に公示して、猶太人をして各その律法に從はしめ、尙ほ十二月アダルの月十三日即ち彼等の患難の時に彼等を攻撃したる者に對して防衛するやう彼等を援助すべし。そはこの日に萬事を治め給ふ神はその選民のために滅亡の日を變じて喜悦の日とし給ひければなり。汝等また歡喜を以てこの日を汝等の記念日の一に加へ、今より後ち、我等と我等に好意あるペルシャ人には救拯の日、また我等に叛逆を企てたる者には滅亡の記念たらしむべし。而してこの命を守らざる各市各州は我等の忿に觸れて火と劍を以て亡ぼさるべく、人も通らず、鳥獣と雖永久に嫌ふ如き地と成るべし。

## 六

モルデカイ曰ひけるは、此等の事は神より來る。そはわれ此等の事に就て見たる夢を記憶するに、一として應はざるはなし。一小泉の大河となり、光明と日輪と多くの水ありき。この河はエステルなり、王かれを娶りて后とせり。二頭の龍はわれとハマン、諸國民は猶太人の名を亡ぼさんとて集まれる者なり。イスラエルなる我國民は神を叫びて救はれたり。主その民を救ひ、主總て此等の災より我等を救ひ給へり。主は大なる徴兆と驚異の未だ曾て諸國の間に見られざりし如きものをなし給へり。故に主二本の籤を作り、一は神民のため、他は全他國民のために審判の日、その時その瞬間に來りぬ。かくて神その民を憶え、その嗣業を義とし給へり。而して此等の日は彼等にアダルの月にして、その月の十四日と十五日、神の前に集會と喜悦と歡樂とありて、その民イスラエルのうちに世々限あらざるべし。

プトレマイとクレオパトラの第二年に、自ら祭司にしてレビ人と稱せしドシテオスとその子プトレマイオ、此處に記せるフルライの書を埃及に持ち來り、これ眞の物なりと言へり。またエルサレムの住人プトレマイオの子

ルシマコスこれが解釋を施せり

# 舊約外典 終

以士帖書追加

# 附錄

# 舊約外典概論

## 總論

外典と云ふ語は、希臘語の、Ἀπόκρυφα に當てゝ、我輩が用ゆるものである。原語では「秘せられたる」と云ふ形容詞から出た、中性複數の名詞で少し縁が遠くなつた語であるが、聖書文學に於ては、基督教及び猶太教の神聖文學のうちで、その著者若くはその尊崇者が、これを教會が公認する聖經のうちへ加へられんことを冀ふたが、しかし遂にかくせられなかつた若干の文書を指すのである。故に我輩は、公認聖經と成つて居るものを「正典」と稱しそれから除外されて居るこれ等の書を「外典」と稱するのである。原語の意義から云へば、寧ろ「奥義書」とでも名けた方が適譯であるが、それでは或は誤解を生ずる恐があるから、語源よりも事實上の名稱に從つて、Extra-canon の意味にしたのである。而して、これに對する「正典」と名くるのは Canon のことで、即ち正しき信仰の標準として教會が公認せる聖經を指すのである。カノンの字義は「眞直の棒」とのことで、即ち規準と云ふことを意味す

るのである。

猶太教の聖書は基督教の舊約聖書のことで、外典はその内へ入らなかつたものである。然るに、基督教神聖文書を、特に新約外典と云ふ。この新約聖書に入らなかつた初代の基督教の著作と僞稱して居る。その僞名の動機は全く惡意ではないが、兎に角僞稱は僞稱である。而して我輩はこれを「僞典」と呼ばんとするのである。これ等もやはり外典たることに相違はないが、しかしその内容に於て、多くは餘程低級なものたると、及びその著作者として古聖の名を借りて居ることとにより、此等は外典と全く差別されてあるのが常である。原名 Pseud-epigrapha もまた僞れる文書の義である。

舊約外典としては數へらるものは、エスドラス第一書と第二書、トービー、イウデト、以士帖書の追加、ソロモンの智慧、ベン-シラーの智慧、バールーク書、エレミヤの書簡、三童兒の歌、スサンナ物語、ベルと龍、マナセの祈禱、第一マカビー書、第二マカビー書である。此等の十五書は羅馬教會に於て用ゆる所の拉甸語の聖書ヴルガート中にはあるが、希伯來語の舊約聖書中には見えないもので、基督教の新教諸派に於ても認めて居ないものである。而して尙ほ希臘語の聖書を見ると、矢張り是等のものはあるが、たゞエスドラス第二書だけは欠けて居る。それで我輩は、本書に於ても、この希伯來語聖書にも希臘語聖書にも見えぬエスドラス第二書は除いて置い

た。蓋し本書は七十士譯の希臘語聖書に基いて翻譯したからである。

外典諸書を分類することは困難であるが、その內容によりてこれをなせば、下の如くである。

歷史書　第一・第二マカビー書、エスドラス第一書。

智慧文學　ベン・シラーの智慧、ソロモンの智慧。

宗教小說　トービー、イウデト、バールーク書。

正典補遺　エレミヤの書簡、マナセの祈禱、但以理書追加（即ちアザリヤの祈禱と三童兒の詠歌、スサンナ物語、ベルと龍）、以士帖書追加。

外典に關する知識の新約學者に必要なことは、特に言ふまでもないが、要するに、近代の新約批判學は外典の研究によつて根本的に改革を來たした位のものである。一例を擧ぐれば、パウロの書簡に見ゆる思想でも、その幾許が猶太教から基督教へ取入れられたものであるか、彼の所謂基督教は如何程までパリサイ宗義の反影であるか、その基督觀や贖罪說の源は何處、その他種々なる問題は、外典を知らずして科學的に答へ得べきものではない。外典を見たこともない者は、原始基督教など論ずる權能のない者である。それからまた史學の方面に於ても、舊約と新約の兩時代の間には約百五十年の隔があるが、これを充たすものは外典である。この百五十年間に猶太亞の國民には政治上にも宗教上にも大變化が起つて居るのであるが、これに關する知識は外典以外には得られない。而かもその大變化は初代教會に絕大の影響を與へて居るのである。たゞこれだけでも、我等は外

典を研究する必要がある。尙ほ人々の建徳修養の書として外典を見る時は、ベン・シラーの典中の或ものに勝る數等なるものがあるのを見るのである。而して更に是等外典諸書が基督教聖典の一部として、僅少なる新教徒を除きて、歐米の宗教界に二千年間讀まれて居たことを思ふと、これもまた我等の興感を促すに足る重大な事實である。我輩はかくの如きものが今日まで我國語に譯せられて居ないのを大に遺憾とし、また新教徒に向つても彼等の食はず嫌ひの愚なることを注意したいと思ふ。

舊約聖書の正典が何時如何にして成立したか、希伯來語の聖書と希臘本及拉甸本との間に何故にその内容に十數卷の差が存して居るか、また、「外典」と云ふ語が今日の如き術語と成つたのは何時からであるか、これらのことに關しては、新約外典附錄の新約外典概論に一と通り説明して置いたから、此處にはこれを略す。

Ἀπόκρυφος と云ふ語は古來種々なる意義に用ひられて來たが、最初は稱讃の意味で、その書が俗人には秘せられて居て、その意を領會する能はざる如き、神聖なる奥義書を謂ふのである。紀元第一世紀頃の本で『モーセの神聖奥義書』（アポクルフォス）と題するものがある。又た智宗のプロデコの弟子たちは、『ゾロアスターの奥義書』（アポクルフォス）なるものを有すと稱して居た。またエスドラス第二書（エズラ默示書）はその著者の意では俗人の解すべからざるもので、正典聖書以上のものとせられて居るのである。（其一四四五以下を見よ）。グレゴリーも新約書を以てアポクルフォイの内へ數へて居る位であるが、最初は秘義書であつても、その道の奥義を錄した書と云ふものは多くは眞物でなく、後世の人の手に成れるものである。こゝに於て、漸次この語が悪い意味を含有するやうになり、遂に異端の書をもアポクルフォイと稱するやうになつて、オリゲヌやユーセビウスなどは、教會で公衆の禮拜に讀まない經典を、正典との區別とするやうになつたのである。

外典原書は、その研究に第一に、必要なことであるが、希臘語を以てする、最も一般的に使用に便なるものは、英國の劍橋本で The Old Testament in Greek, edited by H. B. Swete と云ふ三册のもので、その第四版が目下準備中である。

外典に關する研究書で良いのは kautzsch の Doi Apokryphen und Pseudepigraphen des Alten Testaments であるが、

R. H. Charles の The Apocrypha and Pseudpeigrapha of the Old Testament は最近の最良のものである。その他、外典全部としても、またそのうちの各卷に就ても、その研究書は無數で、到底此處に掲げることは出來ぬ。

# 各論

## 一 エスドラス第一書

エスドラス又はエズラと稱する書が、希臘語や拉甸語の聖書に二三あつて、それが皆な内容が違つて居る。そこで尙ほよく閲ると、一方に第一エスドラスと名けてあるのが他にこれを第二書と稱し、ふのが彼方には二つに分けて第一と第二と云ふやうにしてあつたりして、誠に間違ひ易いのである。其處で近世の聖書學者は、この卷に收めたるこの書を、『希臘エスドラス』と稱ふるのであるが、七十士譯の希臘本中ではこれを『エスドラス第一書』と名け、舊約正典中の『エズラ書』と『ネヘミヤ書』を合本して『エスドラス第二書』と名けてある。古拉甸本、叙利亞本などでも同樣の名を付してあるのである。所がルキヤンの希臘譯本では、エズラとネヘミヤが第一書になつて、この書が第二書となつて居る。更にまたゼローム以後の拉甸本を見ると、この書が第三エズラ書と名けてある、即ちその第一と第二のエズラ書は正典のエズラ書とネヘミヤ書で、而してその他に尙ほ第四エズラ書と云ふのがあるのである。それで今日では、正典のエズラとネヘミヤは、共に各その名稱を以て通り、この書を『エスドラス第一書』とし、拉甸本にしかない、かの第四エズラ書を『エスドラス第二書』と云ふて、拉甸本にしかない方のものと明かに區別をするのである。

この書の内容は、その第三章以下第五章第六節までを除けば、歴代志略下と以士喇(エズラ)書と尼希米(ネヘミヤ)亞書の或部を對照すると左の如くになる。

| | | | |
|---|---|---|---|
| エスドラス | 一 | 、代下三五 | 一―一 |
| 同 | 二 | 一―一五 | 喇一 |
| 同 | 二 | 一六―三〇 | 喇四 七―二四 |
| 同 | 三 | 一―一 五六 | 創作 |
| 同 | 五 | 七―七三 | 喇二 一―四 五 |
| 同 | 六 | と七 | 喇五 と六 |
| 同 | 八 | 一―九 三六 | 喇七 一―一〇 |
| 同 | 九 | 三七―五五 | 尼七 一三―八 一三 |

この書の記事の中心は神殿の再建であるが、記錄事項の年代順は甚だ亂れて居る。第二章にクロス王の宣言を記して、その直きあとに八十年も飛び離れたアルタクセルケスの反對のあつたことを記し、創作部の中にダリウス王の第二年のことを云ふかと思ふと、第六章と第七章で再たびダリウス王の朝に歸り、最後にまたアルタクセルケスの治世となつて居る。要するにこの書の二二五―二五と、五七―七〇とを今あるまゝにして置いては到底此等記事の年代順を整理することは出來ぬ。しかしこの書の創作部即ち三―五六の内容は中々面白い。ダリウスの朝廷で三人の侍從が、世界中で何物が一番強いかと云ふ問題に懸賞論文を作るのである。第一の者はこれ酒なりと論じ、第二の者は國王こそ最も強いと書いたが、第三の者は猶太人の青年であつたが、世の中に女ほど強い者はないと論じ、而も最後に勝利を得るものは眞理なりと結んだ。其處でダリウス王はこの第三の猶太青年に賞を與へ、エレサレムの神殿を再建するの許可を與へたと云ふので

ある。

この書の希臘文は上乘のもので、極めて自然的に書かれ、他の國語を直譯したやうな箇所はない。エズラやネヘミヤ書を用ひた所でも、現存の希伯來語マソラ本を用ひたのでもなく、また七十士譯の希臘本をも用ひて居ない。或は此等兩者を折衷したものか、それとも或は更に古い希伯來原本を用ひたものであらうと思はれる。而してこの書の希臘本には二種あつて、一は紀元三百年頃に出來たルキヤンのもので、これはマソラ本の文句に合はせやうと力めた形跡がある。今一つは歷山寫本やワチカン寫本の類である。尙ほ他に譯本も色々あるが、第一、拉甸本では、これにも古いものと、及び後に紀元四百年頃に出來たヴルガートの二種あり、叙利亞本は七十士譯希臘から譯したものがあるし、またアラビヤ本や、エチオピヤ本や、アルメニヤ本などの古いものもあるが、しかし此等は餘り價値のあるものではない。

この書の著作者また著作の時に關しては精確なことを言ふことは出來ぬ。第一その著作年代に就て考へると、ヨセフスがこれをその著書に引用して居るから、紀元第一世紀の初めには世に出て居たものである。而してその行文はダニエル書の希臘文によく似たものがあるから、蓋し紀元前百六十八年より古いものではなからう。またその中に書いてあることから考へても、波斯時代はとくに過ぎ、希臘時代も大分に後のことである。故に大凡紀元前百五六十年頃から一年までの間に書かれたと云ふより精確なことは少しも明かでない。著者の何人なるかは、全然不明である。しかしこの書のうちに用ひられて居る材料に埃及ものが少からぬやうであるから、恐らく歷山市あたりの人ではなからうか。しかしまたこの書はパレスチナで書かれたと主張する學者も一二ある。兎に角この書は眞理を維持して自ら慰め、クロスやダリウスを稱揚してその當時の政府にあてつけた如きものがあるから、

猶太人が迫害された頃に書かれたのであらう。而してこの書の内容の史的價値に就ては學者の說が一定して居ない。勿論、その事實の年代順を無視して居る如きはこの書の價値を低くするものであるが、しかし歷史のことに一隻眼を有するヨセフスがこれを使用して居ること、七十士譯本が正典のエズラ書ネヘミヤ書よりもこれを重く視て居ること、またその內容が正典の歷代志略とエズラとネヘミヤの分離しなかつた前の著作であるを示すこと、それから古代の教會に一般にこれを用ひて居たこと、此等のことを考へると、若干の訂正を加へるならばこの書のうちに用ひられて居る材料は必ずしも無價値のものではないことが明かになるであらう。

## 二　第一マカビー書

この書は外典歷史書のうちで最も重要なるもので、アンチオカス・エピファネスの即位即ち紀元前百七十五年から百三十五年シモンの死まで四十年間の猶太亞に於ける政治宗教獨立運動史とも稱すべきものである。つまり、マカビー一族を中心とした彼國の獨立戰史であつて、全篇を五部に分つことが出來る。(一)第一章には亞歷山大王の死とその後の分裂から、マカビー戰爭の起る原因を叙し、記者は、ユダヤに於ける親希臘派の、猶太の宗教を撲滅して異教を盛んにせんとする事どもを述べて、その當時を觀るが如き感あらしめ、聖京エルサレムに希臘式の學校や遊戲場を建て、神殿に於ては偶像を祭りてこれに供物を捧げ、また宗教糺問所を設けて猶太人にして改宗せざる者を極刑に處するやうな事をしたアンチオカス・エピファネスの無道なる政治を記して居る。(二)第二章に於ては、志士マッタチアとその五子が遂に兵を集め、百六十七年アンチオカスの要求に應ぜず、モディンに於て反旗を翻すに至る。而してその翌年マッタチアは後事をその子等に託して死す。(三)第三章から第九章の二二節

までは、五子の一人マッカバイオと稱するユダを主將として戰つた猶太民の奮鬪史である。記者は先づ百六十六年から百六十一年に至る五年間の彼が苦戰の事を叙して居るが、戰爭は獨立に有利で、最初アポロニアスに勝ち、次にセロンを破り、而して此等の復讐のためにニカノルとゴルギアスを將としてアンテオケより送られたる大軍を破つたのである。その翌年ユダは復たルシアスが率ゆる叙利亞の大軍と戰つて利あり、聖京の神殿を回復しこれを淨め、ヤーエーの禮拜のためにこれを聖別し直ほした。所がアンチオカスはこの頃叙利亞で死したるため、ユダはこれを以て滿足せず、更に政治上の自由をも得んと欲し、遂にその晩年を終るに至つた。(四)第九章二三節から第一二章五三節まではヨナタンの治世、一六一年から一四三年までの歷史である。この間の戰爭は露國のパルチザンの如き不規律な戰鬪で、ヨナタンにも若干の利はあつたが、同時に叙利亞に內訌起り、遂に彼は百五十三年に祭司長に任ぜられ、尙ほその後も外國と巧みに國際關係を作りて十年間その地位を保つことが出來た。(五)第一三、四章はシモンの治世、百四十三年から百三十五年まで八年間の記事である。シモンは戰爭と外交とによりてその位置を强固にし、遂に猶太國民の政治的獨立を完成した。彼は國中に多くの改革を行つたのであつたが、在位僅に八年で、その義子プトレマイオの弑する所となつたのである。

この書の著者が何人であるかは明かでないが、その著作の材料に、祭司長の公記錄は勿論、その他重要な外交文書を手に入れることの出來た地位にあつた人で、またこの書の內容から判斷して、彼が宗教上には嚴格な正統的の信仰を有し、且つ聖日を守ることに寬大であり、一般律法に關しても比較的自由な見解を有し、また死後のことに就て言ふ所のないのを見れば、恐らくはサドカイ宗の人であらうと思はれる。而して彼は非常な愛國者で

あり、またパレスチナの地理と地形に正確な智識をもつて居るのを見ると、決して國外に住して居た猶太人ではないであらう。それでこの著者が内地居住のサドカイ宗であるとすれば、この書は原とヘブル語で書かれたものとの想像が自然に起るのである。而してゼロームはこの書の原書はヘブル語であると曰ふて居る。其處でそのゼロームの曰ふヘブル語とはアラム語のことではないかとの疑問も起るのであるが、また原書はアラム語であつたらうと考へる學者もあるが、しかし、この書の用語や文體を舊約正典に成るべく準據して居ることや、希臘語に譯されて而かも誤謬の箇處を檢査するとよくわかるが、それが必ずヘブル語を誤解して居るのであると云ふ點が多いこと、尚ほまたヘブル語特有の言ひ廻しを直譯して居るやうな所もあること、此等のことを綜合して見ると、原書はヘブル語で書かれたものゝやうである。しかしこのヘブル語の原書は早く失せたやうで、ヨセフスはそれを用ひて居ないし、また他の譯本にも希臘本の誤謬を訂正して居る所がないのである。兎に角、原書の寫本が多く出來ないうちに無くなつて、その代りに希臘語の譯本の方が廣く天下に行はれたものゝやうである。而してこの希臘語への飜譯は一人の手で爲されたと思はれる。

著作に關する今一つの問題はその時である。この書の第一三章に、シモン・マッカバイオ親子兄弟の墓がヨナタンの死後に間もなく建立されたと記してある、而してシモンの弑せられたのは紀元前百三十五年であるから、この書は祭司長ヨハネの書の書かれたのは百二十年頃より前ではなからう。而してまたその第一六章を讀むと、この書の著作も紀元前百年公記錄完成の後に著作されたもので、而してこのヨハネは百〇五年に死んで居るから、この書は一〇〇年後の何年頃までに書かれたかと云ふに、この書の頃よりは前のものでない事がわかる。さればこの書は、紀元前六十三年にポムペイが神殿の至聖所に亂入した重大事件が記されてないのみならず、羅馬を同盟國と

して取扱つて居るのを見れば、この書は七十年頃以後の作ではない。故に我輩はこの書の著作年代を以て、紀元前一〇〇―七〇年とする。而してこれ以上に正確なることを斷言する材料を發見しない。しかしエルハウゼンなどの如く、紀元前第二世紀後半の作として、尙ほ五十年前へ繰上げる學者もある。

*Maccabaeorum Liber A.* となつて居る。原本に何とあつたかは知るよしがないが、マッカバイオーンとはマッタチアの子ユダの異名マッカバイオから出た名稱で、初めはこの人一名の固有名詞であつたものが、後にはこの家族全體の姓の如くに用ひられ、而してその一族を中心とする歷史であるから、この書の名として冠せられるやうになつたのである。

二七八

この書の價値は、猶太史の上に於て偉大なるものである。舊約正典に記されたる時代以後の猶太亞國民に關しては、他に何等信賴するに足る史料はないのである。而かもその時猶太亞が短年月でも波斯、叙利亞、希臘、埃及の間に立ちて獨立國の體面を保ち得た歷史と云へば、益々この書の價値を高くする所以である。而していづれの國にありても、古代の歷史は極めて不精確のものであるが、この書の如きは、絕對に誤謬がないとは云へないが、希臘、羅馬、その他如何なる國の古代史に比しても、少しも遜色ない精確なものである。況んやこの書に於ける其等若干の誤謬は、この國の歷史の要點に少しも關係ないやうな事である。尙ほ更に一つ喜ぶべきことは、この書には、他の古代國民史の如く神話的空事の書いてないことである。元來この書は高調された宗教的氣分に充ちて居るにも關はらず、記事は嚴格な事實の陳列に外ならぬ。史上の事件に天からの超自然的干渉があつたやうなことは一つも記してない。それが猶太人の信教の自由に關する舊鬪の歷史であるのに、而かもその誘惑に陷つて居ないのである。僅かの迷信から、事を超自然的に見るのは未開人の常で、本朝でも鎌倉時代の元寇のやう

な事の記事は他に數多あることである。この點に於て、この書は二千年の昔に書かれた古代歴史書中で無双のものである。

この書の原書は前に言ふた如く、早くからなくなつて居て、我等は今日その希臘本でこれを讀むのであるが、その原本は、露京の西乃本、英京の歴山本、羅馬のワチカン本、及び同地のエネッス本などが主なる原寫本である。譯書では、叙利亞語のものに二種あるが、此等四種のもの皆な希臘語からの重譯である。

## 三、第二マカビー書

この書は、マカビー史の第二卷ではない、第二のマカビー史である。クレネのヤソンなるものが書いた五卷ある大著作を抄略して、通俗的にまた信仰的に高調して、書き直ほしたものである。

この書の記事は、紀元前七十六年から百六十一年ニカノルの死まで、十五年間のことであつて第一マカビー書の前半と同時代の事を記して居るのであるが、最初の七章には新らしい材料を用ひて居る。しかしその第八章から第一五章までは第一マカビー書の第一章から第七章までと似たやうな事で、文章も並行して居るものが少くない。今その新材料の所を云ふと、(一)第一章の初から第二章の一八節までは、パレスチナの猶太人からエヂプトの同胞に送つた手紙二通であるが、この部は後人が附け足したものゝやうで、原著作には無かつたものと思はれる。(二)それから第二章の終りまでは著者の序文で、その著作の目的と編輯資源を明示して居るのは此處である。(三)第三章に於てヘリオドルスが神殿を掠奪せんとしたことを述べ、第四章では祭司長等の間に陰謀があつた

ことを記し、第五章にアンチリオカス・エピファネスの神殿攻撃の事、而して第六章と第七章に於てエレアザルと七人の兄弟の殉教の事を語り、(四)第八章以下は第一マカビー書の初め七章と似たものである。而してこの部に於て兩書を比較すると、第二書の方は記事の年代に多くの錯誤があり、また記事に事を大きく書く惡い風があつて、これに比べると第一書の方は餘程うぶな純なるもので、從つて第二書の方は信頼すべからざる如き感を與へるのである。それでこの書の目的とする所は、埃及あたりに存住する猶太人に、彼等もまた猶太民族の一部であつて、マカビー朝の榮光に與かるべきものたるを教へ、該民族の統一をはかつて居るのである。故に事の年代順の如きはこの目的のためには易く犧牲に供せられ、史實の大小輕重を顧慮することなく、或は時に超自然的現象のあつたやうなことを錄し、この書の史的正確は保證することが出來なくなつて居る。兎に角、第二書の第一書に於ける關係は舊約正典の歷代志略の列王記に於ける如きものである。

この書の著者は歷山市派の猶太人であらうと云ふ一般的の想像以上に、これと言ふ推理する材料がない。たゞその書に現れたる宗教思想から判斷すると、律法を嚴しく言ふたり、神殿の儀式や、安息日の事や、天使、また死者の復活を言ふのを見れば、彼はパリサイ宗人でなければならぬ。著作の年代に就ては、この書が新約の希伯來書や第四マカビー書のみならずフィローの書にも引用されて居ることは注目に値すると同時に、其處用材料としてニカノルの死の年、即ち紀元前百六十一年は最初時限と成るであらう。尤も、もし一五三六を以てエステル書九二一に關する言と解すれば、この書の資源たるヤソンの著作は百三十年以前に出來たものではなく、この書も從つて百二十五年以後のものとなる譯けである、或は第一世系に入つて居るであらう。この書の內的證査は至つて少ないので、それから何も推論することは出來ぬ。

この書の價値は歴史としては大きくないけれども、後世に與へた影響は小さくないものである。その神學としては、死者のための祈禱の如き、聖徒への祈願の如き、その他殉教物語や、奇蹟的事件など、後の羅馬教會の教義支持に大に便宜なるものあるが故に、永く同教會で愛讀されて來たのである。また昔の書物に引用されたものを擧げると、フィローや、第四マカビー書を初め、それから初代基督教會では、八月一日を以てマッカバイオ一族の殉教記念日と定めてあつた故でもあらうが、希伯來書以下、歴山クレメント、ヒポリツス、オリゲン、クリソストム、ゼローム等のものに散見して居る。而して原本として今日存するものは、倫敦の歴山原本やエネツス原本などもあるが、古拉甸及びヴルガートの寫本はまだ數多く殘つて居るから、原文の査定は主として拉甸譯に依るのである。

## 四　ベンシラーの智慧

豫言者にあらずまた祭司にあらず、世界觀と人生觀を有する一種の哲學者を、猶太亞では智慧（ハカム）の人と云ふ。神より智慧（ホクマー）を受けた人と云ふわけで、この書の著者もその人で、この書はその智慧の發露である。抑もイスラエルの民は神の律法を離るべからざるもので、而して此等の神の律法や訓誡はその智慧から出たのであるから、凡そ宗教の人はこの智慧なるものに與からなければならぬ。こゝに於て、神を畏るゝは智慧の初なりと云ふわけになるのである。この書と「ソロモン」の智慧の二書であるが、外典中では、この書は空理を談ずる道義哲學書ではない。右のやうな本義の上に立ちて、人民建徳の道を教へた、實踐的修身書と稱する方が適當である。而して、聖書はみな教會で用ゆる經典であるが、その內でも特にこれを人民に讀み聞かせるべきものとの意味から、拉甸語の聖書にはこの書を「教會用の書」（エクレシアスチクス）と名けてある程

である。原書の希伯來語の本の第一頁は今はないから不明であるが、最初に飜譯された希臘語の本には『セィラクの子イエスの智慧』と題してあるのを見れば、矢張り同樣の意味で「ハクマー・イエシュア・ベン・シラ」と云ふことであつたらうと思ふ。但し叙利亞の終尾には「バルーシラの智慧」とのみ記して、イエスの名が落ちて居る。

この書は近年までは希臘語と叙利亞語で研究せざるを得なかつたもので、原希伯來語本は、これが典外に出されてから段々無くなつて居たのである。しかしゼロームの時代には尙ほ存して居たと云ふことであるし、更に後も第十一世紀頃まではこの書の希伯來語文を引用した著作もある。所が幸にして、一八九六年に、ルヰスとギブソンと云ふ兩婦人がカイロでこの書の斷片一葉を發見したのを初めとして、セイス教授も同所で數葉發見してこれを牛津大學圖書館へ寄納し、尙ほその後ちも時々一葉一葉づつ發見されて、餘程出たのであるが、その二重また三重に成る箇所を差引いて、全卷の約三分の二は今日原書で見ることが出來るのである。原本批判によれば恐らくは著者ベンーシラーの原文のまゝである。我輩が本書の本文に譯出したものは、一千年來慣用し來つた希臘本よりしたのではあるが、文意の適せざる所、その他往々、右の希伯來原書の文意に從つたものがあるから、普通現今行はれて居る英獨佛等の譯文と異なる箇所のあるのを讀者は必ず氣付かるゝであらう。

この書の著者は、その末尾に見る所によれば、シラの子なるエリザルのそのまた子のイエシュアと云ふ者である。この書を第一に希臘語に譯したその孫が、祖父の名はイエス（希臘發音）であると明かに曰ふて居る。私塾の如き學堂を有して、中流以上の子弟を集めて教へて居た。職業から云へば學校教師と云ふ如き者で、歷山大王及びプトレマイオ第四世に仕へて、廣く世界を旅行をもなし、宗教には熱心で、多分猶太教內パリサイ派とサドカイ派の分裂以前の人であらう。聖都エルサレムの人で、多少財產もあり、兎に角熱烈なチヤキ〳〵のイスラエ

ル兒である。其處でその人がいづれの時代の者で、またこの書が何年に書かれたかと云ふのが問題であるが、希臘本の序文によれば、著者の孫が、ユーエルゲテース王の第三十八年に埃及へ行つて數年の後にこれを翻譯したとあるのが研究の手懸りである。所がプトレマイオ朝に同名の國王が二人あつて、その第二世は初め紀元前百七十年から百四十五年まで攝政であつた後ちそれから百十六年まで王位に在つたから、その第三十八年を數へると紀元百三十二年に當たる。即ちこの年に彼の孫が埃及へ行つたわけで、今假にその翻譯を百二十五年頃とすれば、その祖父の原著作はそれから四五十年前の百七十年前後としなければならぬ。而してこの書の內にマカビー時代の騷亂を暗示するやうなことが一言もないのを見ると、著作は紀元百七十五年以後のことではないであらう。以上の理由によつて、我輩はこの書を以て凡そ紀元前百八十年から百七十五年までの著作と判定するのである。尙ほこの書の第五〇章に祭司長シメオンの頌榮文がある。或はこの章は後人の追加であると考へる學者もあるから、必ずしもこれに論據を置く要もないけれど、猶太亞の祭司長にこの名の者が二人あつて、一人はその在職紀元前三百年から二百七十年まで、他は同二百十九年から百九十九年までであるから、こゝには第二のシメオンを頌德せるものたること明かである。即ちその死後數年の後ちに書かれたのであると思はれ、從つて右の結論と丁度一致するやうである。尙ほまたこの書の著作年代を以てユーエルゲテース第一世の時の方へ關係を附けて論ずる學者もあるが、矢張りその在位年數を數へるに餘程附會な議論があつて、我等を首肯せしむるに足らぬ。また文學批判の上から見ても、この書の用語はその時代のものよりも矢張り後の時代に相當するものである。この書の後世に與へたる感化は大なるもので、新約正典中でも雅名書や希伯來書には屢々この書を引用してあるし、馬太や路加の福音書中にもこの書の言句が見へる。その他典外の新約時代若くはその後

の文献に至つては實に枚擧するに堪へぬ。蓋しこの書は立派に歷山聖書に編入してあつたもので、また紀元三百九十三年のヒッポの教會會議ではこれを正典中に加へ、カルタゴの會議も兩度ともこれを認め、アウグスチヌス（四三〇年）もこれを聖書として引用して居る位である。然り而して、今日と雖人々の建德の資として益ある好き讀物であるが、特に我等がこの書を貴重に視るのは、その紀元前第二世紀頃の宗教思想と道德狀態を示すものがあるからである。この點に於て他にこれに比すべきものはない。今この書に表れた宗教思想を一言すると、第一、神は世界の支配者で人間の主であり、その人に對する忍耐と慈愛は量り難しとあり、當時の原子論の思想はない。また天使や惡靈のことを語らず、神人間の仲保者として神の智慧なるものを擬人格して立てゝ居る。實踐宗教では、犧牲や供物を神に捧ぐるの功德少きを說き、寧ろ人に慈善を施すことを教へて居るのである。故に倫理思想は、彼が謂ふ所の神の智慧なるものは、ソクラテースの智慧（ソフイア）と同じで、善人は賢者、惡人は愚者としてある。またその道義の根底は功利主義的で、彼は畏神を以て主なる道德的動機とするが、何をか善と云へば、つまり人に有益と云ふことが、その標準となり、道德の終局は人の幸福に在るのである。尙ほ著者は善の外形を說いて、少しもその動機や理想などのことを言はず、道德の事は現世に限られ、彼は來世を說かない。而して彼の功利主義も主我的であつて、社會や國家を顧みないものである。

この書の古い譯本では、前に云ふた著者の孫が埃及でした希臘譯で、これは敎會が受けたものである。その箇處によりては現存原書よりも純なる所もある。第二の希臘譯は紀元前第一世紀からあつたやうで、その寫本も草書體で澤山殘つて居る。希臘本に次ぐものは敘利亞譯である。今あるのは六世紀頃の寫本であるが、無論その以前に譯せられたもので、希臘本を參考としつゝ原書から譯せられたものである。その他、拉甸を初めとして古代東

方諸國の語に譯せられて居ないものはない位であるが、それ等は皆な希臘本からの重譯である。しかし、兎に角廣く世界中に讀まれた本である。

## 五　ソロモンの智慧

この書はベン・シラーと並むで、外典中の智慧文献である。無論、昔時からゼロームの曰ふて居た如く、ソロモン王が書いたりまた言ふたりしたものではないが、ムラトルの聖典中にはたゞ『智慧の書』とのみ記して、ソロモンの名を見ないけれど、初代教會の文書にはみなその名を冠し、現存最古寫本にもまたそれを見るのである。而してその著者は兎もあれ、その内容、特にその初めの十章程は、甚だ強固な宗教的精神を發揮し、用語も力強く、思想も健實で、而かも必ずしも古い考へに囚はれず、これを讀む者に何かの印象を與へなければ止まない底のものである。この書を分析すると自然に三部に分れるかるが故に古來外典諸書中で感興あり、人々に愛讀せられた本である。

が、(一)第一は初から第六章の八節までゝ、善人と惡人の運命の歸する所を語り、來世の賞罰を說いて、人の生がこの世限りでないことを主張して居るなどは、舊約正典中に多く見ざる新說である。(二)次は第一一章の一節まで、神の智慧なるものを叙說して、用語も美はしく、智慧は神より善人に賜はるもので、ソロモン自身も大にこれを賜はつて居たが、その他古來の聖賢みなこれを賜はつて居り、今人も祈禱によりてこれを求めば賜はると云ふことである。而してこの書の名前に因つて起るのも此處にあるのである。(三)最後の部は一一章の二節以下であるが、此處は餘程内容が違つて來るが、大體に於て、埃及に於けるイスラエルの歴史を回顧して、人はその罪を犯す所のものにより罰せられ、而して善人はその敵の罰せらるゝ所のものによりて利益を受くることを實證せ

んと力めて居る。たゞその途中で一三章から一五章までは偶像禮拜のことを非常に攻撃して居るが、かやうなことは、この書が數篇のものを寄せ集めたもので、一人の手に成るものでないことを暴露するものである。

この書の著者は不明であるが、恐らくは歷山市邊の猶太人であらうと思はれる。或はその第一部は聖地の猶太人であると思ふ學者もあるが、その用語を檢査すると、著書は七十士譯希臘語聖書を用ひて、希伯來語のものを用ひて居ないらしい。またその使用する希臘語も歷山市的の複成語が非常に多いのみならず、著者はその素養に於て希臘哲學に明かるいのと、且つその思想上に於てこれを看るに、著者は神の超越性と人の永生を主張するなど、これ全くその歷山市の出たることを示すものであつて、決して猶太亞の內地から出たものでない。ゼロームは、この書の第一部は多分フィローの作であらうと曰ふたが、その學說に於て、またその用語に於て、それとは大なる差があるとは、一般近世學者の定論である。或はアポロが著者であるとも曰ひ、また希伯來書の著者と同人であるとの說もあるが、みな要するに一の臆說であつて、何等確乎たる論據のあるものではない。而して第二部や第三部の著者とても、矢張り見當が付くものではない。皆な著者が、初めから萬古に賢明の名あるソロモン王の名義を假りて著作して居るのであるから、眞著者がしかも二千年後の今日、一寸鑑定できるわけのものでない。たゞこの書の著者が一人でないことだけは確かである。

この書の著者が一人であると云ふ說は、この書全部を通じてこの書特有の用語があると云ふこと、また文體が全部韻文であると云ふこと、などのことにその根據を置くのである。これに對して、この書が二篇若くは三篇の元來異なる著者の作を合したものであるとする說の論據は、書中の前後に於てその文致、文體、論調、構成法の異なること、第一一章二節以下に於て全く忘れた

る如く智慧に言及せざること、神の超越性と人の未來に關して前後思想の異なること、而して言語上の前後の差違は如何にすると も他に說明の途なき程に大なること、などである。勿論双方共に一流の學者が主張する所で敬意を表すべきであるが、而かも双方共にその主張を弱くするだけの反駁もあるのである。たゞ我輩が後者に左袒する所以のものは、第一一章以下はその前の部に比すると、前置詞や接續詞などの慣用語に大なる相違があることである。故に、この書の第一部と第二部との著者に關しては、暫くこれを疑問とするも、第三部に至つては、到底それより前の部と同一著者であるとすることは出來ぬと考へる。

この書が何時書かれたかと云ふ問題に關しては、これに七十士譯舊約書を用ひてあること、及びパウロがその羅馬書その他の書簡に之を引用して居ることが、著作年代の前後の限定である。即ち、紀元前二百十年以後に書かれ、而して紀元五十年頃には既に世に流布して居たものである。而して、此等の前後の二限定以内に於て色々違つた諸學者の說が出て居るのである。しかし第一エノク書の五章の七節がこの書の三章の九節に引用してあつて、而して彼書の希臘譯は紀元前七十年より五十年までのものとすれば、前限定はその邊まで降ることに成る。而してこの書がフィローのロゴス說を知らないことは、後限定を繰上げねばならぬことになるが、しかしそれは第一部と第二部に關して有力なる議論であつて、第三部はその第一四章一七節に明なる如く羅馬帝政時代に屬するものである。故に、この書の第一〇章までは紀元前五十年から三十年頃まで、而して第一一章以下は紀元前三十年頃から紀元後十年頃までの著作であるやうに思はれる。而して此等を一卷の書の如くにして出版したのは紀元後二三十年のことであつたらう。

この書に現れて居る思想を云へば、著者は大に神の全智と全能を高調すると同時にまたその大慈愛を說いて居

る。神の智慧を擬人格したものを教へて居ることはこの書の特色とする所で、この概念が後に基督教に於て基督に關する觀念を發達せしめるに大に與つて力あつたことは申すまでもない。希伯來書の如きはこの書に於て智慧に關して言ふ所の文句を借り來つて、直ちに基督に適用して居る位である。しかしこの書の新らしい猶太亞前代未聞の說と云ふてもよい思想は、人とその未來に關するもので、彼は人の魂が肉體生前から存在して居り、また永久に存在すべく造られたとする。殊にその來世に關する確信は大なるものである。而して其處に來世に於ける人の賞罰と云ふことが說かれて居るのである。要するに、この書は猶太亞の宗教と希臘の哲學とを以て現れた、歷山神學の尤なるものである。而してこの書出版の直接の目的は、善人が必ず榮ゆることを、自己の經歷と國民の歷史に徵し、また人生の永久不死に基いて、論證すると同時に、一方に於ては、未來を否定し、極めて現世的の、エピキュラス哲學化した、幸福主義の、當時のサドカイ派の宗義を攻擊するにあつたやうに見える。

以上述べた如き性質の書であるから、その後に及ぼした影響も大なるものである。使徒パウロの如きも少なからざる感化を受け、羅九一二三の如き、この書の一二一二以下を承知して居なければ解すべからざるのみならず、其處にもまた他にも兩者の間に並行文を見ること少くない。その他加拉太書、哥林多後書、以弗所書などにもこの書の感化が現れて居るし、第四福音書にもあり、雅各書などにも十二箇所もあると認める學者あり、希伯來書に至つてはその著作が同一人であると論ずる者がある位である。而して既に新約記者がかくの如き狀態であるから、その後の文書に及ぼせる影響も想像するに難くはない。尙ほ最後に、この書の現存原本、ヴチカン原本の三者には完全に保存されて居るし、草書字體本では第二四八號寫本が最も研究材料として重きをなすものである。飜譯本では最も古いのが拉甸譯で、第二世紀に既に存して居た。これは希臘本

に忠實な翻譯である。叙利亞譯は誤謬が多い。その他アルメニヤ語や、コプト語のものも古いが、アラビヤ譯は十二世紀頃のものである。

## 六　トービー

この書は舊約外典中の宗教小説の一で、昔譚を利用して猶太教の奨勵をしたものである。著者がこの書を書くのに資料となつたもの、うちで、最も重大なるものは「アヒカル物語」である。矢張りそれが少からずトービーの著作にプ物語やアラビヤ夜話にも用ひられ、遠く昔から廣く讀まれたもので、今日學界の確認する所である。その他直接間接輕重多少の差はあるが、舊約聖書は申すまでもなく、埃及のコーン神教宣傳に用ひられた小冊子などに刺激されまたこれに做ふた所もあらうし、凡て當時俗間に行はれて居た昔物語や神話や童話や妖談など、みなこれに貢献する所があつたやうである。

この書の原作はアラム語であるが、それは今日は無くなつて居る。紀元前二百二三十年頃、埃及在住の正統派猶太人の手に成つたもので、その公けに成るや、直に廣く弘まり、遂に近世までも愛讀せられて來たのである。それが紀元百五十年頃に、猶太人間に於て改訂せられて今日現存する如き形になり、その後間もなく、最初の希臘語からアラム語に譯せられ、その後へブル語に譯せられ、而してその後また希臘本に改訂を加へ、また諸國語にも追々翻譯せられて、東はエデッサ邊までも、南はエチオピヤ邊までも歡迎せられたものである。この書の名前は、原本によりて異なり、或はトーベイス、或はトービトと稱し、拉甸語ではトビアと云ふ。しかし原著はアラム語との確認から、我輩はこれを本書に題する如く、日本字で、トービーとすることにした。

この書が原とアラム語で著作されたと云ふことは、オリゲンやゼロームの言にも依るが、第一、この書の如き通俗的のものはアラム語で書かれたであらうと思はれる。しかし希臘語も當時隨分用ひられたものであるので、茲に確定的な斷定は誰しも差控へるのであるが、その文章の構成の上から見て、原文がセム語族のものであつたやうに考へられる所が若干あるのと、希臘本のうちに異樣の本があることは、それは寫本の相違と云ふよりも飜譯の相違を語るもので、希臘語が原書でないことを證するのではなからうか。而して原書が果してセム語族に屬し、問題はヘブル語かアラム語かと云ふことになると、通俗本ならばアラム語と云ふ先天的判斷のほかに、書中に用ひられた固有名詞の綴字の上に於て原書がアラム語であつたやうに思はれるものがあるのである。

この書の著者は少しも知る由がない。たゞその著作の場所から考へると、ペルシヤにあらず、アッシリヤに非ず、バビロンに非ず、ミデヤに非ず、パレスチナに非ず、どうしても此等の假定では書中の內容を完全に說明することは出來ぬ。たゞ埃及と云ふ假定が凡ての事を滿足に解決し去るやうで、それが今日最も多くの贊成者を有するやうである。しかしてその著作時代を定める與料として見ると、著者は埃及在住の猶太人であつたとしなければならぬ。次にその著作時代に關しては、ボリカープが紀元百十二年にこの書の言を引用して居ることゝ、この書一四五と六にある言は著者がヘロデの神殿建築開始前にあることゝ、書中埋葬のことを必要とする如き口吻あるはそのマカビー時代を示すものなるのと、此等の理由で、多くの近世學者はこの書を以て紀元前二世紀に屬するものとし、多分その後半のものであらうとするのである。併しまた、埋葬のことは左程決定的要件ではなく、寧ろこの書はマカビー時代のあの國事を少しも知らぬ如くであるから、紀元前百七十年以前のものと考へる學者も少くない。我輩はこの書と他の文書との關係及びこの物語全體の調子から見て、寧ろ後者に贊

成である。併し第二世紀より餘り古いと考へたくない。

この書は猶太人間に古今を通じて非常に愛讀されたもので、但以理書や後期詩篇、その他僞典中にその感化がある。新約に於ても、惡き僕の喩や無花果の樹及び、紀元前二百年頃以後の猶太文學にその影響の大なるものがある。新約に於ても、惡き僕の喩や無花果の樹の喩などこの影響である如く、その他、馬太や路加にも用語の似たものが少くないし、パウロのものでも、大なる感化を與へて居る。併しこの書に表現せる思哥前などに多く引用せられ、その後の基督教會内に於ても、大なる感化を與へて居る。併しこの書に表現せる思想を檢すると、その天使に關するものは極めて幼稚であるし、終末觀も未だ一向發達して居ないし、死後の來世を少しも語らないし、たゞ唯一神を認めて居るのみである。この書は實踐宗教に強いので、宗教上の儀式を重んじ、慈善を施し、親に孝を盡くし、また結婚の神聖なることを教へて居る。

この書の現在原本は西乃原本、歷山原本、ヴチカン原本とが最古のものであるが、その第三は第一に比べると異なる箇所がある。而して草書字體寫本の第四號、第一〇六號、第一〇七號は、更にまた異なる本文を示すのである。つまり、原書が三度譯せられて、それ等の譯本が右三種の寫本に殘つて居るのではなからうか。その他の譯本では、叙利亞譯が最も古く、また希臘本よりも原書に近い最も純なるものであるとする學者もある。拉甸譯本は二種あり、拉甸譯本は研究の參考とすべきものである。叙利亞語やエチオピヤ語は希臘本からの重譯であり、希伯來語も研究に重きをなすものではない。

## 七　イウデト

イウデトは宗教小説の女主人公の名前で、それを直ちに書物の名にした譯けである、希伯來語で云へば、猶太婦

人と云ふ意味であるが、創二六三四にあるエサウの妻もこの名であるから、固有名詞でないことはないであらう。必ずしも猶太婦人の精神を理想的に描寫した小說であると、或學者のやうに謂ふ要もないであらう。兎に角、この小說の中には、イウデトと名くる婦人が出て來て國難を救ふと云ふ節である。その第一章から七章までは序說で、亞叙利亞王ネブカデネザルがメデヤを破つた後ち、その戰役に己に援助しなかつたものを懲膺することになつて、猶太亞もその攻擊を受け、遂に攻圍されて、三十四日の後に飲料水が無くなつて、終に愈々開城しなければならぬと云ふことになる。それから先き、即ち第八章以下終尾までがイウデト物語で、イウデトと云ふ非常な美人が敵將の處へ行つて、己の美貌を種に油斷させ、酒を飲ませて寢かせて置いてその寢首をかくと云ふことになつて居るのである。それで敵は潰走し、猶太亞は助かり、人民は大喜び、イウデトは神を讃美するので終つて居る。この書の目的は、云ふ迄もなく、人は如何なる困難の時期に際しても、たゞ神のみに信賴し、祈禱と斷食によりて、ひたすら神に願ふならば、神は必ず救助の道を開き給ふことを教へたものである。トービーと等しく、アラム語らしく一寸思はれるが、現存希臘文を檢査すると、それは希伯來語の殆ど直譯とも云ふてよい程のもので、これを希伯來に復文するのは極めて容易なるのみならず、復文して初めてその意味が明瞭になるやうな所が少くない。その他、現存希臘本は決して原作ではなく、何かの飜譯であると云ふ跡の瞭然たるものがあり、而してそれは希伯來語からであると云ふ證據は澤山あるのである。とは云へ、現今その希伯來本は失せてないから、我等は希臘本を讀まなければならぬ。しかし希臘本は殆ど直譯のやうなものであるから、原書を讀むのと大した差はない。希臘譯本では、例の西乃本、歷山本、ヴチカン本のほか、十九號、五十八號、百八號などがこの書の主要なる寫本である。

著者は不明であるが、禮拜をやかましく云ひ、神宮を大切にし、それから殊に潔からざる食物をとることを禁じ、斷食に重きを置くなど、パリサイ宗旨の者たることは明かで、且つこの書を希伯來語で書いたり、パレスチナの地理に非常に明かるかつたりする所を見ると、彼は必ず聖地在住のものである。物語の書振りも立派で、著者はまた國民の文學に通曉し、著者自身に博識多才の文士である。而してその著作の時代を考へると、それは宗教的にも政治的にも大困難の迫つて居る時で、著者はたゞ神にのみ信賴すべしと教へて居る。何處までも敵に降伏すべからずと說いて居ることや、その時國には王なく、祭司長の下に招集する聖議會によつて支配されて居たことや、著者の思想が既に確乎たるパリサイ宗の神學に成つて居ることや、それらの事を思ふと、丁度紀元前第二世紀の半に相當するやうである。しかしまた或學者はこの時を以て羅馬入寇の直後として、紀元前六十年頃の著作と見るのもある。その孰れとも斷言は出來ぬと我輩は思ふ。

この書の希臘譯は、最も古い所で羅馬のクレメンスの書簡に言及して居る所があるから、遲くも紀元九十年後のことではないと見るのが相當であらう。その他の譯本には、敘利亞譯もあるし、古拉甸もあるが、皆な希臘からの譯である。ヴルガートは餘り立派な譯ではない。しかしこの書は猶太人間によく讀まれたのみならず、基督教會でも、羅馬のクレメンス、歷山市のクレメント、オリゲヌ、以下の教父たちも皆これを用ひ、アウグスチヌの如きでも矢張りこれを準聖書として取扱ふて居たものである。

## 八　バールーク書

この書は一種豫言書的のもので、殊に耶利米亞記に似たるものがあり、また七十士譯ではこれと密接の關係を

與へてある。今その内容を云ふと、實は三篇の文書が一つのもの、如くに合卷にしてあるもので、(一)第一部は一―二一節は序文で、バビロンでエホイアキンの前でバールークがこれを讀むだとある。しかし恰も木に竹を接いだやうな序で、以下の本文と少しも辻褄が合はぬ。一五節以下には、二つの懺悔文と一の祈禱文がある。即ち二一五―三八が俘囚の祈禱である。此等懺悔文や祈禱文は申命記や耶利米亞記によく似た文で書いてある。(二)第二部は三九―四四で、詩體になつて居る。而し、智慧文學的で、「智慧」と律法を同一視してこれを讃美し、「智慧」を敘説して、他の智慧文學に見る特色をこゝにも發揮して居るのである。而して或學者は、禱の序文一―一四はそれとこの第二部の序文であつたのであらうと思ふのである。或はさうかも知れぬ。さもなくば、あの序は全く無關係のもので、遣り所がなくなるものである。(三)第三部は四五―五九で矢張り詩體で、在外猶太人に對する訓誡と慰安の文であつて、申命記や以賽亞書や約百記の中の詩體になつて居る部によく似た所がある。

この書の原書が何の國語で書かれたかと云ふことは、現代の學者が殆ど全部一致した說である。第一部が希伯來語であつたらうと云ふことは、而して第三部は希臘語が原文であるとは、また學者間に強く主張さるゝ說である。第一部は多分希伯來語と云ふだけで、これには反對論者もある。しかしこの語學問題は餘り讀者の興感を催さないであらうから、此處に(他處にも)論ずることを止めるが、この書の著作時代は興味ある問題である。而してそれは三部に就て別々に論じなければならぬ。(一)先づ第一部は但九七―一九に酷似するものがあるので、その孰れが　きに書かれたらうかと云ふに、その内に書いてある史的事實はバビロン時代のことに合致せぬ、その用語とによりて、無論この書の方が但以書よりも後のものと判斷

されるのである。つまりこの第一部は紀元六七十年頃よりも古くはないやうである。此處にネブカデネザルとバルタサルの名を附して謂ふ所の人物はベスパシアヌスとチツスを意味するのであるとして、これを羅馬時代に解する方が、その時の猶太人の遭難や、神殿破壊の狀など、最もよく適合するのである。(二)次に第二部を檢するに、此處には史的狀況の明示するものがないが、たゞ患難の下にある國民を慰むるだけとのもので、或はヨカナン・ベン・ザカイの門から出たものであらうと言ふ學者もあるが、その部も前部と共に紀元七十年以後のもので、その出所も聖地か歷山市か斷言は出來ぬ。しかし恐らくはこの部も前部と共に紀元七十年以後のもので、或はヨカナン・ベン・ザカイの門から出たものであらうと言ふ學者もある。(三)第三部に至つては、その羅馬に對する態度が全く違つて居るが、矢張り聖京陷落後の國民の感情を背景として見ればよいであらう。即ち紀元七八十年頃のものであらう。或學者は四言を以て、ボムペイ市の燒けた七十九年の火山の爆發を指すものであるとする者もある。

この書大體を通じて、その思想は似たものであつて、神を以て絶對にイスラエルの運命を左右するものとなし、また正義と權力の泉源として居り、また罪惡は懲膺さるべく、父の罪はその子に及ぶとして居るが、天使、メシヤ、善人の甦生などに關して言ふ所はない。而して第二部は智慧に就て說く所があるのがその特色である。そこで、是等三部を一卷とした編纂者が如何なる人であつたかと云へば、つまり、第一世紀末の篤信な猶太人で、新約書と同時代のその國の思想を表示して、神とその約束に信賴し、その宗教を誇りとし、異邦人に對しては反感ある偏見を有つて居り、その律法を神の智慧の表現として大切に守るなど、此等の點に於て少しも豫言書時代以上に進歩して居ない、全體として後のイザヤ、またエレミヤの世界に住する者である。

この書の著者は何人か不明であるが、これをエレミヤの秘書たるバールークと信じ、從つてこの書にエレミヤの言があるものとせられたがために、歷山市のクレメント、ヒポリツス等がこれを尊重し、西方教會では外典を認め

ざるもこの書だけはその限にあらずとし、一般に猶太亞文學より以上に基督文學に多大の感化を與へたのである。而して古代の譯本では、紀元百年頃に第一部と第二部が希臘譯になつて居て、歷山本、ヴチカン本などには入つて居るが、しかし西乃原本とエフライム原本にはこの書は見へぬ。その他の譯本では、エチオピヤ、コプト、アルメニヤ等、希臘本から重譯したものである。

## 九 エレミヤの書簡

これは希臘本には別になつて居るが、拉甸本にはバールーク書の第六章となつて彼書の中へ入つて居る。蓋し、かの書は耶利米亞記の續篇の如くに考へられて居たからである。而してこの書は、バビロンに移住して居るイスラエルの俘囚に對し、その異境に於てその地の偶像禮拜に感染し、遂に改宗する者あるに至るを戒めた、エレミヤの書簡の積りである。無論何人が書いたものであるか不明であるが、第二マカビー書の第二章の初めの言が果してこの書簡を意味するものとせば、この書簡は紀元前第一世紀になつてからのものでなければならぬ。また本文中に、移囚が七代に及ぶであらうと曰ふ如きは、それもこの文の決して古くないことを示すものであるやうに思はれる。而してその文やその思想に至つては決して豫言者エレミヤの崇高なるものに比すべきものではない。その書簡の原文が希臘語であつたか或は希伯來語であつたかは問題である。或學者は、これは中々流暢な希臘文であつて、それに希伯來語の根跡はないと斷言して居るが、また或學者は、しかしその希臘文に時々無意味の所があるから、それを希伯來語にして見るとその意が通ずるから、必ず原文は希伯來語であつたらうと言ふ。その何れにしても、かくの如き短篇では論據とすべき證據が少なくて困るのである。

## 一〇　マナセの祈禱

この文には、ヴルガート聖書では、『猶太亞の王マナセバビロンへ俘囚となれる時の禱』と題してある。希臘文で三十七句あり、フリッツェはこれを別つて十五節として居る。その初めの七節が序禱で、次の三節が懺悔で、終りの五節は赦罪を祈る本禱である。蓋し歴代志略下三三ノ一八にマナセが神に祈禱したその祈禱は豫言者の記錄に殘つて居るとあるのが抑もの起りで、本文はこれを想像して書いたもので、決して眞物ではない。原文も希伯來語やアラム語でなく、初めから希臘語で書かれたものであらうとは學者間に於ける語學上から來る判斷である。この文は通常七十士譯の希臘語聖書には入つて居ない。而して著者はヘレネ派の猶太人であらう。原本は歴山本とツーリヒ本の二寫本である。拉甸譯が何時頃なされたかは不明で、ゼロームの譯にはない、彼はこれを知らなかつたのである。

## 一一　アザリヤの祈禱並に三童兒の詠歌

これは六十八節よりなる文で、セオドーション及び七十士譯の希臘本、及びヴルガート、その他七十士譯本に基く他の譯本に於て、但以理書三三のあとに挿入されて居るのを見るが、しかしアラム語の本には缺けて居るのである。而して元來但以理書の中へ挿入されたものであるから、特にこの一篇に與へられた名はないのであるが、しかし歴山譯本には「アザリヤの祈禱」と云ふ小題目が冠してある。今この書を分折すると、(一)其一と二が序文で、(二)三一二三童兒の一人なるアザリヤの祈禱、(三)二四―二七は、但三三の話の續きで、籠は熱を加へる釜煎

の有様を叙し、其處へ天使の出現することなどで、(四)二八―六八は三童兒の唱詠歌である。而してこの原語が希臘であるかまた希伯來であつたかに關しては、學者間兩方の支持者があり、且つ双方共有力であるが、希伯來説の方が少し强いやうである。而して譯本は、古拉匈とヴルガート拉匈のほかに、叙利亞語にも二三種、埃及語にもで、而して七十士譯は紀元第一世紀の初めには既に存して居たのであるから、この文は紀元前第一世紀に屬するものとせなければならぬ。しかし此等の各部分は別々の作であつたのを、一所にして但以理に入れたのかも知れぬ。その内容から考へると祈禱は暗黑時代を示すもの、如く、或は紀元前百六十八年から百七十年の頃を聯想せしむるものがあるし、歌は寧ろマカビー時代の繁榮を想はしむるものがある。而してこの篇は教會の禮拜用としてかの詠歌が採用されて居るほか、新約時代にも、またその後にも餘り影響する所はなかつた。

## 一二 スサンナ物語

この物語は猶太の二人の長老が美人に戀して成功せず、却つてこれを殺さんと謀つたのを、再審に於てその僞計を看破せられて、遂に自分達が死刑に處せらるると云ふ筋のもので、裁判に於ける證人の反對訊問をなすことの必要を示すもので、アレキサンダー・ヤンナイウスの時代即ち紀元前九十五―八十年間に於ける、サドカイ派との爭論に自派の主張を實例的に示したパリサイ派の著作である。後ちこの賢明なる裁判を以てダニエルの爲したことに作り、遂にこれを但以理書の中に挿入するに至つたのである。セオドーションの本と七十士譯の本とに隨分の違ひのあるのは、この後の作り直ほしが有るが故である。この物語は、或は單獨になつて居たり、或はハバク

ークに關連して傳布し、而して七十士譯本でも基督紀元前は但以理書に附錄となつて居たが、はこれをその卷頭に持つて來たのである。それで、著者は右に曰ふ如くパリサイ宗の人で、ン-セタクを辯護する目的で書いた。而してその用語が希伯來であつたことは、現存希臘文が希伯來からの飜譯でなければならぬ狀態にあることがこれを證するのである。しかし現存の希伯來本は決してその原書ではない後世希臘本から譯し返したものである。

## 一三　ベルと龍

これは全く別々の二篇の古譚で、一―三がベルと云ふ偶像の禮拜に關するもの、三三―四二が大蛇禮拜に關するものである。ダニエルがバビロンに於て、此等のものを拜することを拒むだと云ふ譚で、普通希臘本には但以理の卷尾に追加としてあるが、或本には彼の第一二異象としてあるし、また拉甸本には但一四とし、七十士譯にはハバクークの一部としてある。

ベルとはバアルから轉化した名で異邦人の神の一般的名稱であるが、また狹義にはバビロンの至高神マルヅクを指すのである。龍は希臘語でドラコーンと云ひ、ホーマーでは犬蛇を意味するのであるが、かの國ではニナ神を蛇の形で現れることのあるやうなものである。

此等の譯の原著作は希伯來語であつたか果たまた希臘語であつたか、名ある學者が多く後者を支持して居るのであるが、もつと現代の新進學者は大抵希來伯說に傾いて居る。著者の何人たるかは無論不明であるが、多分一人で、著作は但以理書（百六十年）の後、恐らくはアンテオカス二世（一三八―一二八年）の宗教迫害時代の作で

はなからうか。或は今少し後で、第一世紀に入つてからのものとする學者もある。場所はパレスチナであらう。而して原作がその頃とすれば、希臘譯は紀元百年頃歷山市あたりでせられたものであらう。しかしセオドーションの譯したのは第二世紀の末つ方で、エペソでしたものである。尙ほその他の譯本では、叙利亞譯本二種、拉甸譯本二種、及びアラム本がある。アラビヤ語は第十六世紀頃のもので、無價値のものである。

以上三篇が但以理書追加である。

## 一四　以士帖書追加

希臘語の以士帖書には、六ケ所に於て原書の希伯來語の聖書に見へぬものが入つて居る。これを拉甸本では第一〇章以下に集めてある。それを一目に示すと左の如くである。

| 要目 | 七十士譯希臘本 | ヴルガート拉甸本 |
|---|---|---|
| 一、モルデカイの夢と侍從の叛逆 | 二二一—二三 の重複 | 一一二—一二六 |
| 二、猶太人を全滅する勅令 | 三一三 の后に入る | 一三一—七 |
| 三、モルデカイとエステルの禱 | 四一三 の后に入る | 一三八—一四一九 |
| 四、王の前に於けるエステル | 五一—二の引延し | 一五四—一九 |
| 五、猶太人に有利の勅令 | 八一二 の后に入る | 一六一—二四 |
| 六、モルデカイの夢の解釋 | 一〇三 の后に入る | 一〇四—一三 |

此等のものは皆原と拉甸語で書かれたるものゝ如く、希伯來語若くはアラム語から譯された跡は餘り見へぬのである所から、恐らくは歷山市あたりの猶太人の手になれるものと推せられる。殊に右の第二と第五の二つの勅令は慥かに埃及の產のやうに思はれる。元來、以士帖書は餘り宗教的氣分に缺くる所があるから、實際全書を通じ

# 舊約外典附錄終



て神とか主とか云ふ語の一つも見へぬ位のものであるから、この缺點を補ふべく、また一つには、エステル王后の事蹟に關して、以士帖書に記してあるだけでは物足りぬ感があるのを足すべく、此等のものが書かれた如くに思はれる。要するに歷山市邊の猶太人の宗教上の墮落を挽回せん爲めにものせられたのである。而して內容は實踐宗教の方面に在つて、歷山哲學思想は少しも見へぬものである。著作の時代は、これがヨセーフスに用ひられたのを見ると、また以士帖書の翻譯後のものたるべきことを考へると、多分基督紀元より餘り前でも後でもないやうに思はれるのである。現存の原本は、西乃本、歷山本、ヴチカン本、バシリオ・ヴチカン本、古拉甸、ヴルガート拉甸、叙利亞語等で、譯本は、

昭和五年九月一日印刷
昭和五年九月三日發行

世界聖典全集
舊約外典全

編輯者　世界聖典全集刊行會

編輯代表兼發行者　山本三生　東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地

印刷者　椎名昇　東京市芝區田村町八十一番地

發兌　改造社　東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地　振替東京八四〇二番　電話芝(43)一一一

# 世界聖典全集

幽玄の哲理！熱烈の信仰!!古聖哲、諸民族の大思想・大感情・大經驗の記錄!!!
當代諸權威の努力はこの至難の飜譯に成功し、前後の兩輯日月竝び天に懸るが
如く、吾等の眼前に展開し來る。

## 前輯

1 日本書紀神代卷 全加藤文學博士纂註
2 四書集註 上宇野文學博士譯
3 四書集註 下宇野文學博士譯
4 聖徳太子三經義疏 上高楠、佐伯、菅原譯
5 聖徳太子三經義疏 下境野、菅原、藤譯
6 印度古聖歌 全高楠文學博士譯
7 耆那教聖典 全鈴木重信譯
8 アヱスタ經 上木村鷹太郎譯
9 アヱスタ經 下木村鷹太郎譯
10 埃及死者之書 上田中達譯
11 埃及死者之書 下田中達譯
12 新約全書解題 全高木神學博士譯
13 新約外典 全杉浦哲學博士譯
14 コーラン經 上坂本文學士譯
15 コーラン經 下坂本文學士譯

## 後輯

1 古事記神代卷 全加藤文學博士纂註
2 道教聖典 全小柳文學博士 飯島學習院教授譯
3 ウパニシヤツト 一高楠博士外三氏譯
4 ウパニシヤツト 二木村博士外十一氏譯
5 ウパニシヤツト 三宇井博士外二氏譯
6 ウパニシヤツト 四高楠博士外十氏譯
7 ウパニシヤツト 五長井博士外十氏譯
8 ウパニシヤツト 六宇井博士外八氏譯
9 ウパニシヤツト 七木村博士外十一氏譯
10 ウパニシヤツト 八高楠博士外十氏譯
11 ウパニシヤツト 九高楠博士外八氏譯
12 舊約全書解題 全石橋文學博士譯
13 舊約外典 全杉浦哲學博士譯
14 アイヌ聖典 全金田一文學士譯
15 世界聖典外纂 全諸大家著